
彷徨いし者達

小春十三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彷徨いし者達

【Nコード】

N1676X

【作者名】

小春十三

【あらすじ】

ドラゴンクエストの二次創作です。

PIPII掲載分を修正して投稿しております。

18禁表現部分はノクターンにて掲載します。

魔法、世界観はオリジナル要素が強くなっております。

原作の雰囲気壊されるのが嫌な方はお控えください。

1 船旅

幼年編 その一 オラクルベリーの草原で……。

地平線の向こうまで続く青い海。果てしなく、どこまでも続く海。サントフィリップ号は今日も行く。

昨日の日の入りの頃に微かに見え始めた大地がその存在感を示し、旅の終わりをかもす。

「……島？ 陸が見えた。父さんに知らせなきゃ！」

甲板で一人絵を描いていた少年 リョカ・ハイヴァニアは父の居る部屋を目指す。

まだ遠くに見えた陸。目的地であるオラクルベリーの港へは、もう二日はかかるだろう。けれど、代わり映えのしない海岸を見続けていたリョカは、それを誰かに伝えたくてしようがなかった。

「しーま、しーま！」

夢中で走るリョカは、船室へ向かうドアを開けようとしたとき、不意にそれが開き、逆に転んでしまう。

「あら、そんなところで寝てると風邪ひくわよ？」

ドアを開けて立っていたのはデボラ・エド・ゴルドスミス。

つり気味の目は眼前で寝そべるリョカをつまらないモノと見下しており、形の良い鼻はフンと不機嫌に鳴る。アップさせている赤みがかったブラウンの髪が風になびき、それが彼女の瞳をくすぐると、それを煩そうに手で払う。

リョカより二つ上の彼女は、彼にとって苦手な存在だ。この一ヶ月にわたる船旅において、最初こそ互いにぎこちない間柄であったが、今では小間使いのようにこき使われている。

「リョカ、暇だったら厨房からレモンティーをもらってきて頂戴。こっ暑いと喉が渴いてしょうがないわ……」

「う、うん。わかったよ、デボラさん……、でも水は貴重だから、

あんまり……」

船において水分は貴重なもの。今回の船旅では時化に遭うことこそなかったのだが、これまでのリヨカの経験からすれば考えられず、それを差し引いても気分次第で嗜好品を求める彼女はワガママといえる。

「聞こえなかった？ あたしはレモンティーを持ってきてと言ったんだけど？」

「は、はい……」

しかし、なぜか彼女に逆らうことが出来ないリヨカは、それに頷いてしまう。

そのことを父、パパスに相談したことのだが、笑って「男の子は女の子に優しくするものだ」と取り合っぶくれなかった。

もう、デボラさんって本当にワガママなんだから……。

リヨカはそんなことを思いながらも忠実に厨房へと向かう。

「あら、リヨカさん。ごきげんよう」

すると今度は別の声に呼びとめられる。

「あ、フローラさん……」

振り返ると丁度客室から出てきたらしく、リヨカと同年の女の子がいた。

リヨカを見るとにつこり微笑む彼女はフローラ・レイク・ゴルドスミス。デボラの妹だ。だが、妹というにはこの二人、似ても似つかない。

一番最初に目に付くのは髪だろう。デボラが赤なら、彼女は青。青みがかった黒髪は腰まで届き、一体この船旅でどう手入れをしているのかわからないほどさらさら具合を保っている。

そして瞳。二重の瞼は優しそうなカーブを描いており、笑うたびに何かふんわりしたものが溢れてきそうで、とても暖かな気持ちにさせてくれる。

「今デボラさんにレモンティーをもらってくるように頼まれて、急いでるからまた後でね！」

「まあ、姉さんたらまた……。それなら、私もまいりますわ。ちょうど喉が渴いていましたし……」

やはり二人は姉妹とわかるのが、こういつところ。おおよそ世間とずれている感覚だろう。

「う、うん。けど、あんまり船では無駄にお水を……」

無駄とわかっていながらも船で気にすべき項目を告げようとするリヨカ。

「お水を……。なんですか？」

にこりと微笑むフローラの可愛らしさに負け、リヨカは彼女の先にたつて厨房を目指した。

既にこのとき、リヨカは陸地が見えたことなど忘れていて……。

* *

「ちよつと！ どうして言わないのよ！ 陸が見えたらすぐに教えなさいって言ったでしょ？ もう、小魚みたいな顔して全然役に立たないんだから！」

甲板に戻ったリヨカを出迎えるデボラの第一声はそれだった。

彼女はリヨカの持ってきたレモンティーを奪うと、遠慮なく喉を潤す。

「うふふふ……」

フローラはそれを見て何か思い気に笑っている。最初の頃はフローラも仲裁に入ってくれたのだが、最近はリヨカとデボラのやり取りを見て笑うことが多い。

リヨカとしては優しそうな彼女にまで笑われるという屈辱に耐えなければならず、不満ばかり募っていく。

「陸が見えたの！ どこどこ！？」

背後では他の乗船客がそろそろとやってくる。リヨカ達が陸の見えたほうを指差すと、皆「おお……」と感慨深いため息をついていた。

上品なスーツ、ドレスに身を包んだ紳士淑女坦は皆、これまでの船旅の不自由などを口々に笑い合っていた。

サントフィリップ号は世界でも有数の豪華客船。

これまでリヨカが父と旅をしてきたときに乗った船の二倍から三倍近くあり、積載量も乗数的に増えていた。そのおかげで普段は我慢しているリヨカも今回の船旅ばかりも、それほど遠慮なく乾きを潤せた。

当然客室にも違いがある。今までは木のベッドに薄い布団か寝袋で寝ていたわけだが、この船ではスプリング付きのベッドであり、布団もふわふわで重さを感じられないもの。

あまりの豪華な造りに、二人はわざわざ乗組員室と換えてもらったほどだ。

それに船員も荒くれ者ばかりではなく、教育がされた者のみ。これまででは厨房に行けばコックに「つまみ食いをするな」とお玉をもつて追い掛け回されたのに、この船では味見をさせてもらえるほどだ。

実のところをいうと、異質なのはリヨカとパパスの方。では、何故彼らがサントフィリップ号に乗れたかといえば、それは気まぐれな大富豪のせい。

「おお、ようやく陸地が見えたか！」

遅れてやってきた額の禿げ上がった大柄な男性も明るい声を上げる。窮屈なパンツと金系の刺繍の施された燕尾服、ごつごつとした指輪をいくつも付け、いかにをお金持ちという存在だった。

「父さん、見て！ もう直ぐオラクルベリーよ」

「うんうん、もうすぐだな」

デボラの嬉しそうな声に彼　ルドマン・ゴルドスミスは頷く。

「こいつが見つけたのよ。なのに全然教えてくれないんだから、この小魚」

デボラは畏まっているリヨカの肩をトンと押す。

「そうか、リヨカ君か。絵を描いていたのかい？」

ルドマンは笑顔でリヨカの頭を撫でるので、彼もうんと頷く。

「そうだ、君のお父さんにも知らせてあげたらどうだい？ ああ、そうか、今も調べ物の最中か……。邪魔してはいけないし、後にしてあげなさい」

「そう……」

ルドマンの言葉にリヨカは少し残念そうに頷く。

このところ父は部屋で本を読んではかりいる。旅の合間、少しでも暇があると本を読む父は真剣そのもので、幼いリヨカにもそれを邪魔してはいけないとわかっていた。

ただ、唯一の話し相手でもある父が自分の相手をしてくれないということは、やはり彼にとっても寂しいことではある。本当は陸地を見つけたとき、一番に報告したかったのだから。

「騒がしいと思ったら陸地が見えましたか……」

「父さん！」

沈んでいたリヨカの顔がぱつと明るくなる。人ごみを遠巻きにしながらパパスがやってきたからだ。

普通の旅人というには大柄な男。特注の旅人の服で見えないが、引き締まった体躯は歴戦の戦士。船の中ということもあり帯刀していないが、普段は長さ一メートルを超える両刃の剣を自在に操る。そして、今も野暮つたいだぶだぶしたズボンの内側に小剣を隠しており、この船旅の中、獲物を求めてやってきた中空の魔物を数匹しとめている。

油断怠りなき者。それがパパスなのだ。

「これはパパス殿。調べ物はよいのですか？」

「はい、船室に閉じこもっていても腕に黴が生えてしまいますから……」

「はっはっは……、貴方におかれて、それはないでしょうが……」
ルドマンはパパスの冗句を愉快そうに笑うが、直ぐに冷静な目に戻る。

「して、パパス殿は今後どちらに？」

「ええ、まずは例の物をサンタローズから……」

「ふむ、例の封印も伝承通りならば、近いうちに……」

神妙な顔つきで話し込む二人にリヨカと姉妹はそつと聞き耳を立てていたが……。

「うおっほん……。ルドマン殿、この話はまたのちほど……」

わざとらしい咳払いのあと、二人はそそくさと船室へと戻っていく。袖にされたりヨカ達は顎に指を当てて思案気な慾子。

「なんか怪しいのよね、父さんもパパスさんも……」「そう？ 大人なんだし、子供にいけない話ぐらいあるんじゃない？」

「違うのよ。だってこういつちゃんんだけど、あんたの父さん、絶対普通の人じゃないでしょ？」

「それを言うならデボラさんのお父さんだって……」

「そうよ。父さんはすごいんだから！ サラボナから世界を股に掛ける商人！ ルドマン・ゴルドスミスその人あり！」

普段はそうそう笑わない彼女だが、父のことを話するときだけは決まって笑顔になる。それだけ父を尊敬し、また愛しているのだろう。

「で、その人がどうしてあんななんかの父さんと知り合いなわけ？」

そしてリヨカに向ける視線の冷たさ。それは胡散臭さ半分、彼女の言う小魚顔の男の子の父が同等に肩を並べることへの不満があった。

「僕もわかんないよ……。けど、多分そういうんじゃないと思う」

「そういつって、なによ？」

「えと、デボラさんの言うすごいとみ違う、別の何かがあるんだよ」

「そりゃ……。そうでしょうね……」

デボラが軽視しているのはあくまでもリヨカに対してのみ。一見すれば用心棒風情なパパスだが、彼女は彼に対し、身構えるような礼儀正しさを示している。

「でも、それが気になるのよ！」

デボラは急にリヨカに向き直ると、その首ねっこを掴み、コメカミにごぶしをあててぐりぐりとしだす。

「わわわ、痛いよデボラさん。やめてよ、ごめんよ！」

そしてその言い知れない圧力の正体がわからない鬱憤が、こうしてリヨカにぶつけられるのであった。

「ねえ、姉さん……。この船には私達以外に子供はのっておりましてっけ？」

するとフローラが首を傾げながら口を挟む。

「？ いないと思うわよ？ 居たら見るはずだし……」

「でも、さっき声が聞こえたのよ。とつても子供っぽい言い方だったけど、私達じゃない、知らない声で……」

「ちよつとやめてよ。あたしお化けとか苦手なんだから……」

ぶるつと震えるデボラ。その瞬間だけ責め苦が弱まり、リヨカはすつと腕から抜ける。

「あ、こら！ リヨカ！ 待ちなさい、この小魚男！」

「もう、姉さんたら……」

そしてくすくすと笑うフローラだった。

2 真夜中の食いしん坊

それから一日後の午後、船はオラクルベリーの港へ着いた。

日も沈みかけていたこともあり、ルドマンの誘いでオラクルベリーの宿へ泊まることとなった。やはりルドマンはパパスに用があるらしく、リヨカが布団を深く被った頃に部屋を出て行った。

そしてリヨカも久しぶりの陸地での夜を満喫するため、イエティの数を数え始めるのだが……。

「……起きて、ねえ、リヨカ……」

ドアがノックされると同時に開く。そこには例のブラウンの髪の毛の子がおり、さらに青髪の女の子もいた。

「どうしたの？ おしっこ？」

「ちが！ どうしてあたしがおしっこにいくのにあんたを呼ぶのよ！」

「だって、船ではよく……」

「まあ、姉さまだったらようやく一人で行けるようになったと思ったら、リヨカ君を……」

なるほどと頷くフローラに、デボラは真っ赤になってしまった。

「うっさい！ ばかばか！ もう、フローラに知られちゃったじゃないの！」

手近にあった枕でしばし叩かれるリヨカ。痛みはさほどではないが、毛羽立つ埃で目が痛い。

「う、ごめんなさい。で、それで何のよう？」

「あ、それで……あのさ、昨日フローラが言ってたこと覚えてる？ 誰かが居るって……」

「誰か？ どこに？」

「船に誰かが居たのよ。私達と同じくらいの子がさ！」

「そうなの？」

「見たわけじゃないんだけど、その、あたしにも聞こえたのよ。こ

「こがオラクルベリーかって……」

「大人じゃなくて？」

「違う。あれは子供……っていうほどじゃないけど、ぜったい大人じゃないの……」

「ん〜。そうなんだ……でももう船を下りちゃったし、探すにしても無理じゃないかな？」

サントフィリップ号が港に来てすでに数時間経っていることを考えればリヨカの言い分は正しい。それに関してはデボラも否定するつもりはないらしい。だが……、

「それがさ、あたしの部屋。まだ使っていないコップが濡れてたり、お菓子が一人分なかつたりして……多分誰がいるのよ……」

「？ つまみ食いじゃなくて？」

「あんたじゃないの！」

ガツンとこぶしが降り注ぐ。

「ぐごご……。で、でもそれでも逃げちゃってるとか……」

「それがね、そいつはすごい間抜けみたいで、お菓子をぼろぼろ零しながら逃げてるのよ……だからそれを辿れば……」

「ふうん。なるほど」

「いまからソイツを捕まえてぎゃふんて言わせるの。来るわよね」
「……うん」

一瞬思案するリヨカは二人を外に出してか 普段着に着替え、そして道具袋の中から……。

点々とこぼれているお菓子のカス。それは街の外へと続いており、塀の外へと出て行ったらしい。

「この塀を越えたのかしら？」

「多分ね……。どうする？ 遠回りする？」

「そうね……。早くしないと逃げられちゃうわ」「でも姉さま、私

達子供だけで外に出してもらえるかしら？ 街の外は魔物がいるの
でしょう？」

「うん。だから急いだほうがいいかもしれない」

思案気なフローラに対し、リヨカは生真面目な様子で言う。

「なぜ？」

「もしその子が本当に子供だったら危険じゃないか。デボラさんと
フローラさんは父さんを呼んできてよ。僕がその子を追う」

「アンター人で？ ふざけないでよ。そんなこと……」

「大丈夫。危ないって思ったらすぐに逃げるから……。それにぐず
ぐずしてたら多分その子もお菓子を食べ終えちゃう。そしたら追
かける方法がなくなるよ」

「そ……そうね……それじゃあ任せる……わ。行きましょ、フロ
ーラ……」 「でも姉さま……」

「いいから……」

デボラに急かされフローラは元来た道に戻る。その背後では扉を
ひらりと乗り越えるリヨカの姿が見えた……。

++

このあたしがなんで小魚の言うことを聞いているの？

宿に戻る途中、デボラは先ほどのやり取りを反芻していた。

これまでいいようにあしらっていたはずの年下の男の子。それが
急に怖い……とは違う、畏れとも違う、抗うことの出来ない圧力を
持っていた。

冷静になればなるほどそれが信じられず、また悔しくなる。

それが彼女の足を止めた。

「姉さん!？」

後ろを走っているはずの姉の足音が途切れたことにフローラも立
ち止まる。

「フローラ、貴女だけ行きなさい。あたしはリヨカを追うわ!」

「けど姉さん」

「いいから！」

そして姉の号令に、フローラはただ従ってしまふ。

待つてなさい。あんたなんかの言うことなんか絶対に聞いてあげないんだから！

デボラは踵を返し、街のはずれへと走った。

「……………ここら辺かな？」

食べかすを辿ってきたリヨカは辺りを見回す。オラクルベリーの周辺に森はなく、あるのは見渡しのよい平原とブッシュだけ。リヨカは携えてきた道具袋からブーメランを取り出し、瓶に入っていた聖水を自身に掛ける。ハツカのような香りが身体を包み、服がびしよりと濡れて不快感を出す。

「そこ！」

ブッシュに紛れて何かが走った。それを目視するや否や、リヨカは手にしていたブーメランを低い軌道で投げる。

「ピギー」

何かやわらかいものに当たると、それははじけて草原から飛び跳ねて消える。おそらくゲルの状生命体　スライムだろう。それらは草原のブッシュ近くに集まっており、何かを執拗に攻撃しているように見えた。

「スライムだけならいいけど……………」

これまでの父との旅はけして安全なものとはいえない。百戦錬磨の父の背中に居たりヨカだが、見よう見まねで魔物との戦い方を覚えてきた。

最近では下級モンスターならば、父の手を借りることなく倒すなり追い払うことができるようになっていた。それが今回の一人での追走劇をさせた。もし誰かが危機にあるのならそれを助けたい。そ

れは表向きであり、本当は父に自分の姿を見てもらいたいという子供ながらのプライドからだ。

「なにすん。おれをなんだとおもってるんだ！ てか、なんだろうな？ つか、やめいや！」

そして聞こえてきた声。それは確かに子供の声だった。

「その人、伏せて！」

リヨカは魔物の集まっているブッシュにブーメランを放つ。そしてさらに道具袋の中から銅製の剣を取り出し、切り込む！

「うあああああ！」 誰かを襲っている魔物どもはスライムと木槌を持った毛むくじやらの小人 ブラウニーのみ。リヨカでも対処できるモノだった。

「ぎい！ ぎぎい！」

木槌を持ったブラウニーは突然の攻撃に防戦一方であり、戻ってきたブーメランが後頭部にぶつかったのをきっかけに逃げていく。

スライムどもはリーダー格であろうブラウニーの逃走に劣勢を読み取り、そのまま逃走する。

「ふう、追い払えたか……。さ、君大丈夫？」

一息つく暇もなくリヨカはブッシュに倒れているであろう誰かに声をかける。しかし、そこに居たのは一匹の赤い羽根トカゲ、前にメラリザードと呼ばれた魔物を見たことがあるが、それによく似た魔物であった。

「モンスター？」

「だ、だ、だれがモンスターじゃい！ だれが……。俺がモンスターに見えるん！？」

リヨカの疑問符にそのトカゲはきつと顔を上げ、早口で捲くし旅てる。

「見える……。けど……。しゃべった！？」

3 赤い羽トカゲ

「おう、しゃべっっちゃ悪いか！」

「いや、いいけど、でも魔物がしゃべるなんて……」

「おうおうアホかい坊主。いいか？ 言葉しゃべる魔物なんてこの世界いくらでもおるで？ ま、上級の魔物じゃないとむりやけどな……。つまり俺様は上級の魔物……って、俺は魔物じゃないわい！」

「でも、君はメラリザード」

「アホ！ 俺をそんなちんけな火トカゲと一緒にすんな！ 俺は……」

「えっと……なんだっけ？」

「だから、メラリザード」

「ちがわいどあほ！」

「けど、魔物なら……」

言葉がしゃべられることに気を許していたリョカだが、ソレが魔物である以上、楽しくおしゃべりしているわけにもいかない。彼はブーメランを拾い、銅の剣を構える。

「いやいやいや、だから……そうだな……そうだ！ 俺はドラゴンだ！」

「ドラゴンならやっぱり魔物……」

「違う。そうじゃない……もっと高級というか、存在自体が別の何か……」

「けど……」

警戒を怠らないリョカは剣を握る手に力をこめる。

「リョカー！」

するとそこにデボラの声が届く。だが、彼女一人。父の姿が見えない。

「デボラさん。父さんは？」

「アンタが心配だから来てあげたのよ。もつ……それで、どれがお菓子泥棒？」

デボラはとりあえず一発リョカを小突くと、首を傾げている赤い羽根トカゲを見つめる。

「どれってあんた……!? そうだ、思い出した! 俺はシドレーだ! ドレだけにシドレーなんつって……」
「ぶつくく……」

何かを思い出したらしい赤い羽根トカゲの駄洒落にデボラは堪えきれずに嘔出してしまふ。

「あの、別に気をつかわんでもええで?」

思った以上に笑い上戸な彼女に赤い羽根トカゲとリョカはまじまじとデボラを見つめてしまふ。

「こほん……、ええと、貴方はシドレーっていうの? 聞いたことの無い魔物だけど、やっぱり……」

「違う、違う、俺の名前だ。シドレー……下の名前は忘れたけど……俺は魔物じゃない。けど、お前らのような人間とも違うんだ……」

「人間じゃないのは見てわかるけど、一体なんなの?」

「だから、シ・ド・レー!」

「シドレー? よくわからないけど、魔物じゃない証拠にはならないよ」

「そうね」

シドレーを睨む二人の顔が険しくなる。対しシドレーは両手をぶんぶん振りながら弁解しようと必死。

「おいおい、魔物がなんで魔物の襲われるんだよ! そんなことありえんでしょ?」

「でも、人間だって時と場合によっては人間を襲うわ。悲しいけど……」

「いやいや、ほら、人間の言葉しゃべるし……」

「つまり、シドレーっていう種族は高級な魔物ってわけでしょ? ならやつぱり……」

「おいおい、俺が高級な魔物に見えます? ほら、そこいらの雑貨

屋で値引きされて三百ゴールドくらいやて……」

シドレーを名乗る羽トカゲはポンと自分の頭を叩きながら、くるくる空を飛ぶ。今のところそれほど敵意のないことからリョカも警戒を解く。

道具袋から薬草を取り出し、シドレーに勧めた。

「使い方はわかるよね？ それはあげるけど、これからはお菓子泥棒なんかしちやだめだよ？」

「お菓子泥棒って、俺はそんなこともぐもぐ……」

差し出された薬草の一部を頬張りながら「まずい」と呟くシドレー。

「そつえばコイツにお菓子を盗まれたのよね……？ けど、コイツならここまで逃げる必要があるかしら？ だって飛べるんでしょ？」

屋根の上なら誰も……」

ふと気付くデボラにリョカもはつとなる。そして一瞬シドレーが頬を膨らませたと思うと、燃え盛る火炎を二人に向かって吐き出す。

「デボラ！ 危ない！」

リョカは咄嗟にプボラの頭を抱きしめながら草原にダイブする。

その間もシドレーは炎を吐く。

4 約束

「やっぱりコイツ危険な魔物だわ！」

リヨカに抱きしめられながら叫ぶデボラ。だが、炎は彼らではなく、より遠くへと向けられている。

「違う。囲まれてるんだ。山賊ウルフだ」

リヨカがそう言うのでデボラも目を凝らす。すると四足の群れが、いつのまにか彼らを囲んでおり、リーダー格の一匹 眼帯をしているものが立ち上がるのを合図に皆、二足になる。

そして金属の滑る音と月明かりに浮かぶ半月の剣。

「まずいで坊主。こいつらかなり強い。さっきの雑魚とじゃ比べものにならない」

シドレーは彼らを敵とみなしており、続く炎を吐こうと再び頬を張る。

「シドレー、君は空を飛べるんじゃないの？ 逃げれば……」

「アホ言うな。坊主には薬草の借りがあるし、それにそんなに力ないっての……」

リヨカはデボラを背後に庇いながら剣を構える。

次の瞬間、一匹目が走ってきた。

「コオオオオオッ！」

唸り声を上げて走ってくる山賊ウルフ。リヨカはブーメランを投げつけるも弾かれる。

「断！」

「きゃあー！」

そして強い一撃が振り下ろされる……も、なんとか受けきるリヨカ。

「そりゃ不用意ってやつだろ！ カアアッ！」

リヨカをしとめそこなつた一匹に、シドレーが近距離で炎を浴びせる。見る見るうちに火達磨になるも、囲う魔物達は怯む様子を見

せない。

「坊主、正直なところ、俺もそんなに炎を出せそうにないで」

「坊主じゃない、リヨカだ……リヨカ・ハイヴァニア……」

「そうか、リヨカか。けどな、とっておきがあるんだって……ソレ使えばなんとかなるはずだ。いいか？ 俺が合図したら目瞑れよ……」

「わかった」

リヨカは頷くと、剣を握りなおす。

「走」

口笛のようなものが聞こえた後、ウルフたちが駆け出す。最初の一撃で複数の攻撃を防げないということを見切ったの攻勢だろう。

「目つぶれ！ 行くぞ、ジゴフラッシュュ……」

合図を共に目を瞑るリヨカとデボラ。シドレーの方が急に眩しくなり、それは瞼越しにもわかるほどだ。

「よし、ええぞ、反撃だ！」

「え、逃げないの!？」

「無理言うな。今のはただの目くらまし。逃げたところでこいつらの回復と足のほうが速いわ！ ボスだけでも倒せば、後は烏合の衆やで！」

「うん、大丈夫、いける！」

リヨカは駆け出すと打ち落とされたブーメランを拾い、まごつく群れに向かって投げる。一匹に当たるとそいつはよろめき別の一匹と共倒れ。その隙に銅の剣が孤立しているものをなぐり倒す。

シドレーも残る炎を最大限に活かし、あれよあれよと状況を一転させる。

「活」

だが、リーダー格は一味違うらしく、眼帯を外して片目で剣を振るう。

「おいおい、おしやれ眼帯かよ！」

「そんなのあるの!？」

不意を突くはずが、まさかの反撃に遭う。ただ、片目のせいであり、リーダーは距離感がつかめないらしく、リヨカもなんとか捌ききる。「く、強い、だけど！」

善戦するも所詮は銅。鋼と思しき半月の剣に適うはずもなく、刃こぼれしだす。

「ちよつとアンタ、炎は？ 何か出せないの!？」

「無理ゆうな。俺だってもうガス欠だったの……てか、おじょうちやんこそなんか魔法はないんかい！」

「魔法……魔法……そうだ……！ えつと……火の精霊よ、古の契約より命ずる、我の敵を打ち崩せ、メラ！」

最近練習を始めた初級火炎魔法の印を組むデボラ。彼女の示す指先からは勢い良く炎の塊が飛び出し、山賊の後頭部を焦がす。

しかし、リーダーはそれほど意に返すことなくリヨカに襲い掛かる。

「なんじやい、あんだけやつといてメラかい……！」

「しょうがないでしょ、これしか出来ないんだから！」

普段危険と関わりあいの無い生活してきたデボラにとって、メラを唱えるのが精一杯。彼女がかるうじて気を失わないのは、小ばかにしてきたリヨカが奮闘しているが故だ。

「けど、このまんまじゃ……、どうしよう、父さん……パパさん……！」

無力に打ちひしがれるデボラは父の穏やかな顔とパパスの険しい顔を思い出すのみ。しかしそれが現状を打破するはずもなく……、

「ヒヤダルコ！」

女性の声だった。中級氷結魔法と同時に突如降り注ぐ氷の雨。それらはまごつく山賊ウルフを打ちのめす。

「え！ え!？」

一瞬の出来事に息を飲むデボラ。

「伏せる、リヨカさん！」

続く男性の声。

言われるまでもなく体力の限界であったリヨカは沈み、その上を

誰かが越えていく。

「ぐう！」

獣の低い声と何かが砕ける音は同時だった。

「だ、誰……！？」

パパスではない誰か。青年と呼べる年頃の男女が窮地を救ってくれたのだからとわかるが、突然すぎて状況がわからない。

「まったく、いつ来てもピンチなんだから……」

「だからこそ記憶に残るのかもね……」

二人は倒れたリヨカを起こすと、簡単な回復魔法　ホイミを唱える。

「あ、ありがとうございます。えと、お兄さんとお姉さんは……」

「お姉さんだって！　この子可愛い！」

リヨカがお礼を言うと、女性のほうが彼をぎゅっと抱きしめる。

「何が可愛いだよ。お前は……」

呆れ顔の男性は短髪を掻きながらふうとため息をつく。

「今は私がお姉さん。っていうか、ホントアンタは可愛くないわ」

女性はリヨカを抱きしめながら男を睨む。

「はいはい……、姉さん姉さん姉さん姉さん姉さん。これで満足？　えと……デボラさんって呼べばいいかな？　怪我はありませんか？」

面倒臭いとばかりに男は「姉」を無視してデボラに手をかざし、初級治癒魔法のホイミをかける。

目立つほどではないが草で切ったらしき傷が癒えるのがわかる。

「あ……はい……ありがとうございます」

「そうですね、よかったです……。でも、あまり無茶をしないでください。フレッドさんも心配していますから」

「え？　貴方は父さんの知り合い？　フレッドって……」

「あ？　えと、フレンドです、フレンド、友達も心配しますよ」

男は心配ついでに出てしまった言葉に、視線をそらしていた。

長身で短髪、端正な顔つきの男。太い眉毛と誠実そうなまっすぐ

な瞳。デボラの好みに近い小魚を連想させる顔なのだが、不思議と憧れを抱いても、誰かに対する思いと同一のものを抱くこともなかった。

「あ、あの、苦しいです……」

一方、女性に抱きしめられていたリヨカ。その豊満な胸元は彼に窮屈さを覚える。

「ああ、ごめんね……。貴方があんまり可愛いから……つい……」

そういうとようやく彼女はリヨカを開放する。ただ、その表情は隙あらばスキンシップをとばかりに獲物を見つめている気がする。

その女性、月明かりの下、金色の髪が良く風になびく。長くしなやかでしっとりとした髪。髪留めも意味がなく、前髪が何度も瞼を過ぎる。彼女はそれをかき分けながら、リヨカの視線にしゃがんでおでこをつける。

「リヨカ君……でいいかな？ あんまり危ないことをしちゃいけないよ」

「はい、ごめんなさい」

言い終えた後、足が竦む。先ほど剣を振り下ろされたときもそこまで酷くなかったというのに、今こうして無事だというのに、その恐怖を実感し始める。

「震えてるね……怖い？」

「はい……けど……」

「けど？」

「男ま子は女の子を守らないといけないから……、次は負けない」

「そう……」

彼女は少し悲しそうにした後、リヨカをもう一度抱きしめる。

「お姉さん？」

「ごめんね……さつきから……」

「いえ……」

「君にお願いがあるんだけど、いいかな？」

「え？ なんてでしょうか」

「君、絵を描くのが好きだよな？ 君の絵を欲しがる子が居るのよ。青い髪のとつても可愛い子なんだけど……」

「ファザコンで、怒りっぽくて、何かと年上ぶりたがる……ね？」
「うっさい！ そこ！」

女は無詠唱で氷の矢を放つも、男はソレを足で軽くいなす。

「その子にも描いて欲しいの。そうね。今日のこととかも描いてくれるかな？」

「うん。わかった」

「うふふ。素直で本当に可愛い……」

笑顔になる女だが、舌なめずりをした後……。

「あつ……んつ……」

リヨカの顎にひとさし指を沿え、少しだけ顔を上げさせ、唇を重ねた……。

「あああ……！！！」

「えええ……！！！」

「ちよ、まー！」

三者三様、驚きかたは様々だが、それはリヨカも同じ。

初めて触れる唇。その柔らかさ。甘い香り。緊張が混乱と相成って動悸が酷い。呼吸も困難なくらい酸素が足りない。

「んふ……」

うつへりとした様子で両頬に手をあてる女。彼女は「甘酸っぱい」と小声で言い、その余韻を楽しむかのように唇を舐める。

デボラと男は女に詰め寄り、

「姉さん！」

「貴女！」

シドレーは呆然とするリヨカの肩に乗る。

「大人の階段上ったな！」

「ぼ、ぼく……」

子供ながらにキスという言葉は知っている。旧知の親交を表すために頬でするのも知っている。そして唇同士でそれをする意味も……

…。
「ちよつとりヨカ、聖水はないの!? ほら、あつた! あたしの貸してあげるから早く口ゆすぎなさい! 三分以内ならノーカンだからね!」

「う、うん……」

言われるままに嗽を始めるリヨカ。

「ちよつと! 人を感冒みたいに言わないでくれる!？」

女性はデボラに対しては強い口調で言う。

「なに言ってるのよ! いくら命の恩人でもいきなりキスするなんて非常識だわ! 恥知らずもいいところ!」

しかしデボラも負けていない。

「まあまあ、デボラさん、姉さんも……」

それを執り成す男だが……。

「あんたは黙ってて!」

二人声を揃えていなされる。

「はい……」

そして縮こまる男。

暫く言い合いは続くわけで……。

「もう、キスぐらいいいじゃない。どうせファーストキスは私なんだから」

「だから! あんたが今しっかりファーストキスを奪ったんでしょうが!」

「こつるさいおばさんね」

「誰がおばさんよ! 誰が! 私がおばさんなら貴女はババアでしょうが!」

ふてくされる女にデボラは食って掛かる。まるで自分のファーストキスが奪われたかのように叫ぶが、シドレーの「ええやん、坊主

のことなんだし。それとも何か許せない理由とかあるのか？」という声に収まった。

「リヨカー！」

そうこうしているうちにパパスの声が聞こえてきた。そしてフローラとそれに続く衛兵達。

「あ、まずい……。ほ、ほら、行こうか……」

「はいはい……。それじゃありヨカ君。気をつけて……」

「あ、はい……。あの、お二人のお名前は……」

何か魔法を唱え始める女に、リヨカが声を掛けると、二人は少し考えた後、

「俺はボルカノ・エバ……」

「私は、そうね……。アニス・レイクニアかしら？」

「ボルカノさんとアニスさんだね。ありがとうございました。本当に助かりました」

「ん……。んーん……」

リヨカのお礼にも二人は難しい顔。そして光が凝縮されたあと、二人の姿は空へと消えた。「あの魔法!？」

「ルーラだろ？ 空間転移魔法の……」

シドレーはさも当然という様子で答えるが、デボラは首を振る。

「そんな、だって、空間転移魔法は印から精霊との使役契約法も封印されてるって……」

「そんなん復活させればいいじゃん」

「あんたね。さつきから簡単に言うけど、魔法の契約つてすごい大変なのよ！ ものすごいお金が掛かるか、勉強するか、修行するか、その苦労がわかって言ってるの!？」

デボラはシドレーの首を掴むとぶんぶんと前後に降り始める。

「んなこと言われても、俺も習ったし……、ぐるじゅ、たしけて〜」

「きい！ なんなのあの女！ 悔しい！」

ぶつける先の無い怒りに、デボラはただシドレーを苛めるわけだが……。

5 旅立ちの朝

「リヨカ！ 無事だったか……！」

「父さん！」

ようやくやってきたパパスにリヨカは走り出す。

自分の奮闘ぶり。シドレーと共に山賊と切り結んだことを話そうと。そして、それを褒めてもらおうと……。

「馬鹿者！」

頬に走る衝撃と、夜空に消える音。

「とう……さん？」

頬を叩かれたまでは理解している。そして父が悲しそうな顔をしていることも……。

「お前に何かあったら……私は、私はなんていえばいいんだ？ 私はお前に強くなってもらいたい。勇敢になってもらいたい。けれど、それは無謀になれと言っているわけではなご。お前の決断がお前どころかデボラちゃんまで危険な目に遭わせたんだぞ？ わかっているのか！」

「う、ごめんなさい……父さん……」

そして沸き起こる後悔の念。そう。もしボルカノ、アニスが来なければ二人と一匹は今頃……。

「そうだな。坊主もガキにしては強いけど、まだまだじゃからな……」

……

ようやくデボラから開放されたシドレーはリヨカの肩に止まると、小刻みに震える彼の頭をぼんぼんと叩く。

「んだけど、コイツもコイツなりにがんばってくれたんだ。俺が魔物に襲われてるところ、助けてくれたしな……」

「う？ うむ？ まも……の？」

陽気に話すシドレーにパパスは目をしばたかせる。長い旅の中、上級の魔物、言葉をしゃべる魔物と対峙すること数回、しかしこの

ようなあまり威厳の無い上級な魔物というのは記憶に無い。

「ちがうちがう。俺にはシドレーっていう立派な名前があるんだわ。ま、とりあえず、坊主も反省してるみたいだし、ここは俺の顔に免じて……」

「何が免じぶよ！　そもそもアンタがあたしのお菓子を食べなければこんなことにならなかつたんでしょ！」

そういつて再びシドレーを掴むデボラだが……。

「姉さん」

軽く肩を叩かれたデボラ。

「なによ、後にしてよ……」

無意識にソレを振り払う。

「ね・え・さ・ん？」

再び肩を捕まれる……。

「だから！」

またしても振り払おうとするけれど、振り返ったデボラの前には笑顔と怒りの四つ筋を額につけた妹が居り……。

「とーっても心配したんだからね……」

「ふ、ふるーら……ご、ごめんなさい……」

「今日はしっかり絞らせてもらうからね……」

「ご、ゴメンって言ってるじゃない！　ねえリョカ、助けて！」

何かにおびえるデボラはリョカに助けを求める。しかし、彼は父の腕の中で自身の弱さ、軽率さを恥じ、ただ泣きじゃくるのみ。父はその頭を優しく撫でるくらい。

「そうだ。父さん……。ね。父さんもあたしのこと怒ってるでしょ？　ね……。ほら、フローラ……。父さんがあたしに話あるみたいだし……」

心配そうにしているルドマンを見るデボラ。きっと父もお小言の一つ言いたいのだろうことは察している。それはそれで面倒なことなのだが、笑顔の妹に比べればあるいは《……》。

「すまんなデボラ。ワシの言いたいことはおそらくフローラが言っ

てくれると思う。今はただ、お前の無事を安堵させてくれ」
「そんな、父さん、父さんってば！ ふるーら、許してよ」
デボラの後悔の叫びがむなしく空に消えていった……。

* *

「それではルドマンさん。世話になりました」

次の日の朝、旅に戻るパパスはルドマンに別れを告げていた。

「いえいえ。パパス殿のおかげで今回の船旅も滞りなく……」

「ですがお嬢さんのことは……本当に申し訳ない」

「ルドマンさん。デボラさん、フローラさん、本当にごめんなさい
……」

頭を下げるパパスに続き、リヨカもまた深く頭を下げる。

「いやいや。今回のことはデボラにとつて良い薬でしょう。無事だ
つただし、なに、そんなに神妙になる必要ありません」

ルドマンは鷹揚に頷くと高らかに笑っていた。

「ねえデボラさん、本当にゴメンなさい」

リヨカはもう一度デボラにそう告げるが、彼女はどんよりとした
顔でうなだれていた。

「うっ……フローラ、怖い……」

一体なにがあったのか？ とこのフローラはこれといって何もな
いのだが、デボラは妙に彼女を遠巻きにしていた。

「……ねえ、あのトカゲは？」

「さあ。今日は見てないよ？ どこかへ行ったんじゃない？ でも
一体何者なんだろう……」

「さあね。たく、あいつがお菓子を食べるのがいけないんじゃない
の」

ちつと舌打ちするデボラはちらっとリヨカを見たあと、いいにく
そうに口を開く。

「それはそうと……」

「なあに？ デボラさん……」

「昨日のリヨカ……」

「昨日の僕？」

「ちよっぴり……」

「ちよっぴり？」

「……んゝ小魚っばい！」

「あはは……またそれが……」

肩透かしを食らったリヨカだが、昨日のふがいなさは身に沁みている。これからはもつと強くなるう。そう決意するリヨカだった。

そして、その二人のやり取りを見てくすりと笑うのはやはりフロラであり……。

「それでは私達は旅に戻ります。ゴルドスミス家に良い明日を……」
「ええ、グ……ハイヴアニア家に良い明日を……」

ルドマンは何かを言い直しながら二人が小さくなるまで見送っていた……。

++

旅を続けるリヨカ。その道具袋からひょっこり顔を出す赤いトカゲ。

周りをキョロキョロ見渡した後、再び中にもぐりこみ、寝息を立てた……。

++

「んゝ……合格ラインかしら……。けど、もう少し見たほうが良かかしら？ あの金髪の子のほうが魔法も使えるし、足手まといになると困るしねえ……」

もう一人、小高い丘から二人の背中を見つめるものが居た。

その者は口の周りに昨日紛失されたとされるお菓子のチョコレー

トがしつしめし……。

6 幼なじみ

オラクルベリーの北西にある町、サントローズ。遠方より来た旅人を見て、町の入り口に立つ衛兵は身構える。

旅人が彼に手を振り親しげに「おい」と呼びかけるのを聞いて、衛兵は目を擦り、もう一度見る。

「やあー、パパスさんじゃないか！ 戻ってきたのか！」

衛兵は職分も忘れて槍を投げ捨てると、旅人のほうへと駆けて行く。

「やあ、守衛殿、お勤めご苦労様。予定より大分遅れたな。本当は南の港への船だったのが、時化で出航できなくてね。代わりにオラクルベリー行き船に乗せてもらったんだ」

「いやいや、無事で何より。といってもパパスさんほどの腕前の人に心配はいらないわな。ささ、サンチョさんも皆も待ってるだろうし、急いであげて……」

「ああ、すまないな……」

パパスは衛兵に軽く会釈をすると、入り口のアーチをくぐる。

「あー、パパスさんだ！」

「本当！？」

すると村のあちこちから歓声があがる。

実は、パパスはこの村でちょっとしたヒーローなのだ。

数年前のことだ。村の北にある洞窟の奥に魔物が現れた。

それはけっして強くはないが、その存在を知る者からすれば、人、魔物、妖精、ホビットを問わず脅威を感じる存在だった。

強いだけの魔物ならば強い傭兵を用いればよい。だが、その魔物の名前を聞いただけで皆震え上がり、誰も名乗り出無い。村人達

は、ただただその脅威におびえて毎日を過ごしていた。

そこへふらりとやってきた旅人がいた。従者を一人と幼子を連れ
た男、パパスだ。

彼は何かを探していた様子だが、村人のほとんどがサンタローズ
を出したこともなく、また書物を集めるような知的好奇心もなく、た
いした情報を与えることも無かった。

そんな中、ホビット族のドルトン親方が、彼の探すモノについて
思い至る。

前に仕事場で使っていた部屋に、パパスの話す特徴に似たものが
描かれた本があったと記憶しており、それを知らせたのだ。

パパスは即座に洞窟へと走り出した。村人達が止めるのも聞かず、
ただ一目散に。

そして一時間と経たず、あの恐ろしい魔物達が洞窟を出てくるの
が見えた。

村人達は何事かと物陰に隠れてそれを見守ったが、最後にパパス
が五体満足な様子で出てきたところで駆け寄った。

パパスの言うところによると、彼らは主食となる硫黄岩を探して
旅をしていたそうだ。サンタローズの洞窟にもそこそこあったわけ
だが、最近は枯渴し始め困っていたらしい。そこでパパスは硫黄岩
の多い地方を教えてあげたというわけだ。

村人達はパパスが魔物と意思疎通ができることを驚き、また脅威
が去ったことにもろ手を挙げて喜んだ。

「旦那様、ご無事のお帰り、何よりです……」

サンタローズのパパスの借家にて、従者のサンチヨが紅茶の準備
をしていた。

「あいにくバニア産は切らしておりますが……」

代わりに差し出されるのはキャラメルの香りのするお茶。飲むと
苦味のほかにほんのり甘味があり、リヨカは大好きだった。

「いい匂い！」

すると匂いをかぎつけたのか、二階からどたどたと女の子がやってくる。

「ああ、ビアンカちゃんもいたのか……。久しぶりだね」

「お久しぶりです、おじ様！ リヨカもね！」

そう言っただけ微笑むのはリヨカの一つ上の女の子、ビアンカ・ルード。

金色の髪を二つに結んで乱暴に縛ったもま。彼女の性格らしい大雑把なもの。くりつとした瞳はリヨカを見つけるとニヒツと笑窪を作る。

ビアンカはずいずいと彼の前にやってくると、自分の頭と彼の頭の高さを手で比べ、そして不機嫌になる。

「むゝ負けた……」

少し前までは三センチ以上差があったというのに、いつの間にか抜かれていることになりがち。リヨカはたじろぎ、彼女にぺこっと頭を下げる。

「まあいいわ。リヨカがあたしの年下であることには変わりないし、ちよつと背が高くなつたぐらいでいい気にならないですよ？」

いい気になつたつもりはないのだが、どうしても年上というだけで逆らえないのがこの年頃の子の心理。

「ねえ、リヨカはまだ絵を描いてるんでしょ？ 見せてよ」

「うん。いいよ。そういえば、今度の旅では不思議なものを見たよ。あのね、僕オラクルベリーで人間の言葉を話すメラリザードを見たんだ！ その絵を見せてあげるよ」

「人間の言葉を話すメラリザード？ そんな嘘ばかり！」

「嘘じゃないよ！ほんとだよ。ね、父さん！」

疑われたことにムキになるリヨカは、父に同意を求める。パパスもふむと首を傾げる。

「あれはリヨカを叱ろうとしたときなんだが、私も面食らって話し半分になつてしまった。いったいあれはなんだろうな？ メラリザ

ードに似ているのだが……」

パパスの同意にビアンカは「おじ様が言うのなら」と頷く。

「ね、それより二階に行きましょ？ おじ様もサンチヨさんと話したいことがあるだろうし、あたし達が居たら邪魔だよ。ね」

「うん」

場の雰囲気のはわかるのは彼女が商売人の娘だからだろう。リヨカもそういうビアンカの気が利くところが好きだった。例のワガママばかり言うお姉さんや、笑顔の割りに押し強い女の子よりも……。

「へえ……これは海の絵？ この白いの……鳥？ 何？」

「これはね、海猫だって。かもめみたいんだけど、にゃーにゃー鳴くんだ。そして猫みたいにお魚さんを食べるんだ」

「へえ〜」

「でね、こつちがオラクルベリーの街。すごいんだ。とっても眩しくて、人が多くてさ……」

「いいわねえ。リヨカはいろんなところを旅できて……。私もどこか冒険に行つてみたい」

リヨカの絵を見ながら感心した様子で呟くビアンカ。アルパカの村の宿屋の娘である彼女にとって、冒険者を見ることはあっても冒険をすることはない。それはこれから先も変わらないことなのだろう。

けれど、自分より幼いはずのリヨカが会うたびにそういう経験を重ね、認めたくはないものの、たくましく、りりしくなっていくのが羨ましかった。

「でも、冒険は大変だよ。昨日なんて僕、デボラさんを危険な目に遭わせてしまったし……」

「デボラ？ 誰？」

「デボラさんは船で一緒だった女の子だよ」

「女!？」

女という言葉にビアンカが怪訝そうな声を出す。

「うん。とつてもワガママで怖い人だった。でも僕、何がなんでもデボラさんだけは守らないとつて、必死だったんだ」

けれど、リヨカはそんな彼女の声色に気付かず、手振りを踏まえ
て語りだす。

「ふうん。もしかしてリヨカはその人のことが好きなの?」

「え!？」

飛躍する話にどきつとするリヨカ。

彼はここ数週間の出来事を思い出す。

朝。彼女の部屋に朝食を届け、食器の片付けをする。

昼。彼女にレモンティーを届け、絵を描きながら話相手。

夜。彼女がお風呂から上がるまでずっと外で彼女に話しかける。

深夜。彼女がトイレに行くのを送り迎えする。

「ないない、それは無い」

ぶんぶんと首を振るリヨカ。それでもビアンカは訝しんでいる様
子。

「それに、僕が好きなのは……」

もじもじしながら口を噤むリヨカ。

好きと言える女性。リヨカの知る女性など数えるほどしかない
わけだが、その中でそれを選ぶとなれば、およそビアンカしか考え
られない。

「ビアンカちゃんだけだもん」

「ふ、ふ、ふーん。そうよね。そうなのよね……うんうん」

言ってしまったという様子のリヨカに対し、ビアンカはさも当然
という様子で胸を張る。ただ、しきりに眉が小刻みに震えているの
が印象的であり……。

「アッ……」

ふと思いつくこと。

好きとキス。

不意打ちとはいえ、リヨカは見知らぬ女性、アニスからキスをされた。

片思いするビアンカにすらされたことも、したこともないというのに、アニスとは……。

大丈夫だよ。聖水で三分以内に口を濯いだし、それはキスじゃないはず……。

デボラの言葉を反芻するリヨカだが、それは詭弁に過ぎないことを唇が知っている。

あのやわらかく、甘く、少ししょっぱい、ぬるっとした、気持ち熱くなる行為。リヨカの中であれは忘れられないことであり……。

「どうしたの？ リヨカ……。」

彼が神妙な顔付きであることにビアンカが声を掛ける。

「ビアンカちゃん！」

「はい！」

突然の声にビアンカはまるで驚いた猫のように背筋をきゅっとさせる。

「……キス……してもいい？」

7 魔物の潜む洞窟

「え？　なんで、突然そんなこと言われても……」
「駄目？」

真剣な表情で迫るリヨカにビアンカは後ずさりをする。けれど、すぐに背後の壁に捕まり、拒もうと伸ばした手は優しく取られ、不自然に身体から力が抜ける。

「僕、ビアンカちゃんが、ビアンカが好きだから……」
彼のひとさし指が彼女の顎をそっと上向かせる。

「けど……んっ……」
逃げる力も拒む気持ちも無いビアンカは覚悟を決め、そっと目を瞑る。

彼の荒い鼻息が彼女をくすぐり、高鳴る胸が外に漏れるのではないかとというぐらい鼓動を強める。

「ビアンカ、好き……」

その言葉と一緒に右手が強く握られる。そして……。

「リヨカ、父さんちよつと出かけてくるから、お留守番頼むぞ？」

「え！　あ、はい！」

キス寸前といったところで突然の中断。二人とも目をぱちくりさせながらささっと身体を離す。

「ご、ごめん……」

「ばか……」

互いにソレを言うだけが精一杯。暫く二人はそのまま視線をそらしていた……。

* *

「ねえ、どうしてビアンカちゃん、サントローズに居たの？」

「パパのクスリをもらいにね……」

「そうなんだ……」

「うん。けどさ、なんかドルトン親方がこの前から戻ってこなくてさ。ずっといるんだ……」

「へえ、おばさんは？」

「ママは食堂のお手伝いしてる。私は他に行くところないし、ここの二階で遊ばせてもらったの」

「そう」

「……」

「……」

先ほどのキス未遂が尾を引いているらしく、未だ二人は視線をそらせたままだ。たまに相手を見ようとしても直ぐに顔を赤くさせてしまい、やはりうつむいてしまう。

「ん？ 親方はどこに行ったの？」

「えと、薬草を取りに村の北の洞窟……」

「あそこってまだ魔物がでるんじゃないかった？」

「そうね。でもスライムとかグリーンワームでしょ？ 平気よ……」

「そうかな……。だってあそこって前にとっても恐ろしい魔物がいたって父さんが言ってた」

「でもそんな……。え、でも……」

険しい表情のリョカに気おされ、ピアンカにもその不安が伝染しだす。

「父さんに知らせよう」

リョカはすくつと立ち上げると、階下目指して飛んでいく。

「あ、ちよつと待ってよ。あたしも行くってば！」

それを後からピアンカも追いかけて、二人仲良く階段を転げ落ちるわけで……。

旦那様は北の洞窟に行くといっていました……。

サンチヨの言葉に二人は意を決して洞窟へと向かっていた。
洞窟近くの衛兵の話によると二日前にドルトン親方が向かった
きりで、今久しぶりにパパスが入っていったとのことだ。
二人は衛兵の制止も聞かず、洞窟へと入っていく。

前に魔物が積みついたとき、洞窟の天井に大きな穴を開けたら
いい。そのおかげで洞窟の中は明るい。

もつともそれほど力強い魔物が潜んでいたというのは、この片田
舎にとつて恐るべきことなのだが。

「いけ！ ブーメラン！」

探検を妨げる魔物目掛けてブーメランを放るリヨカ。致命傷を与
えることなく追い払い、そのまま奥へと進行する。

「へえ、リヨカ、前よりブーメランの扱いがた上手くなったね。前
はへろへろって感じだったのに……」

「うん。練習したし」

確実に強くなっているリヨカに素直に驚くビアンカ。彼女はとい
うと、台所にあつたおなべのふたで襲い掛かるスライムを叩き落し
たりと、そ　　なりの奮闘ぶりだった。

「ね、もしかしたら親方、例の魔物に襲われてたりして……」

「父さんはちゃんと人里はなれたところに行くように説得したって

……」

「でももしかしたら……」

息を飲む二人。

ビアンカの想像通りなら、既にドルトン親方は……。

そもそも二人が対処できる程度の魔物ならば大人であるドルトン
が不覚を取るはずが無い。例えば大きな怪我をしていたり、動くこ
とも出来ない状況ならともかく……。

「ギヒャー！」

何かの叫び声が聞こえた。そして不自然に明るい洞窟の奥。何か大きな、複数の灯し火が見えるが、それらの一つが二人へと近づいてくる。

「あれは？ ろうそくのお化け!？」

子供ぐらいあるろうそくに手足が生えたもの。さらに目と口、頭に火を灯し、好戦的な様子でやってくる。

「いけ、ブーメラン！」

リョカはその頭の灯火目掛けてブーメランを放つ。火はふっと消え、ろうそくの魔物は突然の暗闇にあたふたしながら壁に激突し、動かなくなる。

「あんな魔物、ここら辺で見たことがないわ！」

「けど、そんなに強くないよ。急ごう！」

「うん」

二人は急いで洞窟の奥の灯火の群れへと走った……。

「こつちくん！ くそ！ コイツに火がついたら、わしもお前らも全員ドカンだぞ！」

洞窟の奥でろうそくのお化けに囲まれていたのは、岩を背負ったドルトン親方。

「おやかたー！ 無事ですか！」

リョカはブーメランを投げながら、ビアンカもおなべのフタで火消しをしながら急ぐ。

「おお、パパスさんの倅か……！ って、いやいやいや、危ないから逃げなさい！」

「大丈夫、こいつらを倒せば！」

火の消えたろうそくの魔物は一時停止するが、まだ火の残る者が再点火することで復活する。もし倒すのならば、それは一度に「全部をやっつける」ことが重要だろう。

「それよりもドルトン親方こそ逃げてよ。そんな岩抱えてないで……!? それ、もしかして!」

ドルトン親方の背負う岩。そこにはぎろりと二つの目があり、なにが楽しいのかニヒルな笑顔が見えた。

「爆弾岩!」

かつてサンタローズの村を脅威に晒した魔物。それは爆弾岩だ。

普段は大人しい魔物であり、唯一使える究極自己犠牲魔法も使うこともそうそう無い魔物だが、もし強い衝撃や炎を浴びたら強制的にそれが発動するという、まさに爆弾だ。

リヨカもビアンカもその恐怖にたじろいでしまつう。

「そんなの置いて逃げて……」

源たところこのロウソクのお化けはそれほど強い火力があるわけではない。もし爆弾岩を起爆させるにしても、十数分の余裕があるだろう。

この洞窟もきつと崩落するだろうけれど、爆発の方向を出口の方に固定できるので、村への被害も小さくできるはず。

リヨカはそう考えていたが、それはドルトン親方も同じだろう。

だが、よくよく目を凝らしてみると、周りには親方の抱えるよりずっと小ぶりの爆弾岩が複数いるのが見える。

「まさか、親子?」

「そうなんじゃ……」

苦々しく呟くドルトン親方。彼がこの状況で逃げないのはそれが原因。もしこの親子が連鎖爆発を起こせば、村にまったく被害が出ないとは言い切れない。

「ねえ何か方法はないの? そうだ。ブーメランでそいつら全員一度に倒せたりしない?」

「無理だよ。せいぜい二、三匹だ……いや、あるぞ……!」

リヨカはブーメランを腰のホルダーにしまつと、両手で印を組み始める。

「大地を駆ける風の精霊よ、今、我は汝の力を欲する時なり……」

唸れ真空刃！ バギ！」

リヨカがロウソクのお化けに向かって両手を向けると、彼が大気中から集めた風の精霊の力が集い、軽やかな轟音と共に空間のひずみが見える。

「ギヒコ！！」

「グヘエ！」

魔物達の悲鳴が上がり、灯火がどんどん消えていく。

「すごいすごい！」

だがそのうちの一匹は物陰に隠れ、彼の真空魔法をやり過ごそうとする。

「ビアンカ、お願い……」

魔法が終ると同時にビアンカもその炎を絶やすべく、フタを持って駆け出す。だが、

「メラ！」

「きやつ！」

突然の反撃とさらに味方への援護。ビアンカは何とかそいつの炎を消すも、近くに倒れていたろうそくの一体に炎が向かう。

「くっ！」

もう一度唱えるべきか迷うリヨカ。だが、霧散した風の精霊を再び集めるには、洞窟という無風に近い場所では困難を極める。

「もう、ヒヤド！」

すると女の子の声が出た。これまた簡易詠唱の氷結魔法。いくら初等とはいえ、そうそう使いこなすことができるものではなく、ある程度の実力の裏づけが見える。

リヨカは一瞬昨日の女性、アニスを思い出すが、声質からそれが年相応の女の子だと推察する。

「ギョヘイ！」

炎を託されたロウソクだが、それは突然の氷結魔法により潰えた。洞窟の中は差し込む弱い光のみとなるが、一同、ほっとしていた

……。

*
*

8 セカンドキス

「まったく！ 爆弾岩がこんなに居たら危ないじゃないの。どうしてすぐに逃げないのよ……」

洞窟を出たところで、窮地を救ってくれた子がリヨカに向き直り、その頬を突く。

「だって、子供が居たから」

「そうね。ここに二人もね」

小ばかにした態度の女の子にピアンカはむっとして突っかかる。

「何よ、貴女だって子供でしょ？」

「なによ。おばさんは今いくつ？」

「十三よ！ 貴女は！」

「うっ……十二……だけど、もう直ぐ十三だもん！」

どうやら彼女も年功序列には逆らえないらしく、たかが数ヶ月という年齢差にややしおらしくなる。

「十二なら僕と一緒にだね。ありがとう。僕はリヨカ。君は？」

とはいえ助けてもらったことも事実。リヨカが礼儀正しく挨拶をすると、彼女も上機嫌になる。

「ふふん、感謝なさいよね！ もし私が来なかったら今頃みんなどうなっていたんだかね！」

「そんなことないわ！ きつとリヨカのブーメランで倒せたもん！」

「なによ。そしたらまたメラで復活させられてたんじゃないの!？」

「そしたらまたあたしが……」

たれらばの堂々巡りになりそうなところで互いに視線をぶいっつとさせる。

どうもデジャブを感じるリヨカだが、余計なことはいつまいと決める。

「あれ？」

よく見ると彼女の髪は青だった。天然色というにはやや強い青だが、ボルカノが言う「怒りっぱい」ところやアニスの言う「とても可愛い」も当てはまる。

「ねえ、もしかして君、アニスさんの知り合い？」

「アニス？ 聞いたこと無い名前ね……」

しかし、彼女は知らないと言い、リヨカは見間違いかと首を傾げる。

「ねえ、それよりあなたの絵をくれないかしら？」

「絵？ やっぱりアニスさんの知り合いじゃ……」

「だから知らないってば……。それより早く頂戴ってば！」

「う、うん。わかったよ……」

「ちよつとリヨカ、なんでこの子にあげるのよ！ 必要ないってば、こんな生意気な子！」

「うんでも、約束したんだ。アニスさんって人と……。その人僕のことを助けてくれて……」

「だからアニスって誰よ！」

二人の声が重なり、面食らう ヨカ。

「アニスってのは昨日坊主とちゅーしたシヨタコン女だよ……」

突然の声に皆辺りを見回す。まだ爆弾岩を背負っているドルトン親方は岩と目を合わせるが、お互い知らないと言いつつ首を振る。

「ここじゃここ……つと……、はあ、苦しかったわ……」

リヨカの道具袋が動いたかと思ったら、例の赤い羽根トカゲが顔を出す。

リヨカの眼前で滞空するシドレーに皆きよとんとする。

「シドレーじゃない。もう、アンタが居るなら急ぐ必要なかったわ。

氷の息でいちころでしょ？」

「え！？」

その膠着を破ったのは女の子。名前を呼ばれたシドレーも、目を丸くさせ、羽ばたくのも忘れてリヨカの服にしがみつく。

「なんでお前、俺ん名前知つとるの？ てか、氷なんて吐けないで

「？」

「え？ だっけ？ あ、ほんとだ、色が違う。赤いシドレーだ……」

「赤ってお前、俺の色違いがいるわけ？ てか、まず自分誰よ？」

「あはは……まあ、そうね。正義の味方？」

「生意気な……ね」

得意になる女の子に対し、ピアンカは半眼で囁く。

「なによー！」

「そっちこそ！」

「ふんだ！」

どうしてか仲の悪い二人。それもこうして無事だからこそなのだろうけれど……。

「そうだ。僕今日のこと絵に描くね。それをあげればいい？」

「ん……そうね。今日のはいいわ。これまでのを貰える？」

「じゃあオラクルベリーの絵をあげるよ。一緒に来て！」

「う、うん……」

リヨカが手を引くと、その子は不意を突かれた様子で顔を赤くして、彼を追いかけた。

それをつまらなそうに見つめるピアンカだが、ふとあることを思い出す。

「ん？ ねえ、メラリザードのシドレーだっけ？ リヨカがちゅうしたってどういうことかしら？」

「ああ、坊主がね。昨日助けてくれた綺麗な金髪のねえちゃんにぶちゅうってされたん。いやあ、坊主ってばモテルのね……てか、何人これいるの？ 両手両足で足りなくなね？」

空中で器用に両手両足の小指を立てるシドレーは「つり目、垂れ目、金髪、青髪、金ジャリ」と数えだす。

「ちよつと、金じやりって何よ！ 金じやりって……」

「え？ そな自分のこと決まってるでしょ。自分、昨日の姉ちゃんと同じ、金髪だで？ んだけど、まだまだシヨンベン臭いじやりじやし、せやから金ジャリな。我ながら名案じゃろ？」

ふふんと胸を張るシドレーに対し、ピアンカはその首を絞める。
「きー、くやしい！ なんなのよ！ もう~~~~!!」
「ぐへえ、くるじい、坊主、たしけてえ~~~~!!」
例の夜のことを思い出すのは、何もリヨカだけではなく、ドルトン親方はその様子にほっほっほと笑っていた。

「待ってるよ。もう少しで出来るからな……」

作業場に戻ったドルトン親方は弟子のモートンと一緒にすぐに作業に取り掛かった。

ダンカンのクスリを処方しながら、片手で爆弾岩の手当ても行う手際はなかなかのものであった。

「……なるほどな。子供産むんで里帰りしてたんな……。そこでアイツラに囲まれてってわけか……。まったくお化けキャンドルどもも迷惑な話だな……」

魔物の言葉がわかるシドレーは爆弾岩と何か会話をしており、三人はその翻訳に「へえ」と相槌を打っていた。

「で、これから死の火山に戻るのな？ まあきいつけて行けな。といてもお前らに挑むバカも居ないだろうけどな！」

「笑いごとじゃないわよね……」

「そうね……」

爆弾岩という存在はやはり気分の良いものではなく、ピアンカと女の子の表情は硬い。

「この絵でいい？」

リヨカは部屋から持ってきたスケッチブックから、異国のお城の絵を出す。

「これは？」

「わかんない。前に父さんに連れられて行った場所なんだ。サンパヨおじさんも居るよ」

「あ、ほんとだ」

リヨカが指差すところには中年小太りの男性が子供を抱えて立っている。

「君、サンチヨおじさんを知ってるの？」

「え？ ああ、さっきあなたのことを探しに行ったとき、サンチヨさんに聞いたのよ」

「ああ、それで……」

「うん。それじゃあこれでお仕事完了かな……。この絵、大事にするからね……」

「お願いね。そうだ、君の名前は……」

「私は……アン……。そうね。アンよ」

「アンさん？ そう。よろしくね、アンさん！」

「ん、なんか変ね……。まあいいわ。また会いましょ」

アンはそう言つと青い髪を煩そうに掻き揚げ、立ち上がるつとす。すると……。

「んなあほな！ 自分、怖い顔して、大概にしなさいな！」

爆弾岩と盛り上がったいたらしいシドレーが空中でくるくる回りながらアンにぶつかり……。

「きゃっ！」

「危ない」

リヨカがそれを支えようとしたとき……。

チュツ！

互いの唇がまるで引力でも発しているかのように近づき、重なってしまふ。

「え……！！」

最初に反応したのはピアンカだが、その間実に八秒。みるみるうちに二人の顔が赤くなり、アンはリヨカを突き飛ばして、腰につけた道具袋せら聖水を取り出し、勢い良く嗽を始める。

「ちよつとリヨカ、ほら、ここに聖水あるから、直ぐに嗽して！」

ほら、はやくしないと！ 三十秒以内ならノーカンにできるから！」

地方によってキスのリセットまでの猶予時間に違いがあるらしい。リヨカは言われるままに嗽をはじめ、外へと走る。

「んもう！ これならさつきちゃんとしとけば良かった！ リヨカの意気地なし！」

ビアンカは作業場を走り出る二人の後姿を見つめながら、天に向かって叫んでいた……。

「べっ、べっ、べっ……」

「はあはあはあ……」

外にでて濯いだ水を吐き出す二人。リヨカは笑顔だが、アンは怒ったまま。

「ちよつと、なんでアンタまで濯いでるのよ……。この変態！」

「変態つて、僕はただ、ビアンカに言われて……」

「んもう！ 人のファーストキス奪っておいて！ この変態！ 口

リコン！ 近親相姦！ 極悪人！ 鬼畜！ スケコマシ！」

「そんなに言われるほどかな……」

理不尽な気持ちになりながら頭を掻くリヨカ。だがアンにしてみればそれは大層なことらしく、嗽を終えた後も唇を拭う。

「ふんだ！ 人のファーストキス奪っておいて！ だいつきらい！」

そう叫ぶと、彼女はべこかへと走りさっていった。

どうやら聖水で濯ぐだけでキスの記憶をリセットできないのは、彼女も同じらしい。問題は好きと告白した相手。ビアンカがどう思うかということであり、リヨカは後ろを振り返るのが怖かった……。

ダンカンの風邪薬を処方してもらった翌日、ビアンカ母子はアルパカへと帰ることになった。

とはいえ、いくら凶悪な魔物が居ないとしても女子供の二人旅が

危険であることに代わりはなく、パパスが送ることとなる。

「すみませんねえ。アルパカなんて目と鼻の先なのに……」

「いえいえ、何か間違いがありましたらこのパパス、一生の深くですから……。それにまだリヨカもビアンカちゃんとお別れをしたくないように見えますし……」

リヨカはビアンカの外套の裾を掴み、必死で何かを弁解している様子だが、当のビアンカは取り付く島もない。

「ふふふ……そうですね……。うちの娘もリヨカ君とケンカ別れになつたら後悔すると思いますし……」

ビアンカの母　ジルバ・ルードはそういうと口元を抑えておほほと笑う。

「それでは参りますか」

「ええ……」

パパスが先立つて歩くと、ジルバ、それに続いてビアンカも村を出る。リヨカはただ情けなく「あれは事故だってば」と言い、その肩ではシドレーがつまらなそうに欠伸をしていた……。

* *

もの影からそれを見つめる女の子が居た。

「間違いないわ。あの子はきつと強い戦士！　あの青い髪の子も欲しいけど、どこかに消えちゃったし……。でも、あのアンディって子も誘って三人なら……。よし、急いで報告しないと！」

紫の髪をなびかせる彼女。人とは違う、長く尖った耳が特徴的で……。

9 アルパカの宿屋

「リヨカ、行ったぞ！」

「はい、父さん！」

草原を走る赤いねずみ。それは普段台所をちよるちよるするものなどではなく、人間の赤ん坊くらいの大きさがあつた。

孤立したリヨカなら御しやすいとみたのか、彼に駆け出し、鋭い牙を剥く。

リヨカは今回の旅の前に新調してもらつたカシの杖を地面に突きつけると、ソレを足場に大きく飛ぶ。

目標を失つたお化けねずみはきよるきよると辺りを見るが、上空からの影が大きくなり、銅製の剣の腹で頭を強烈に打ち込まれる。

「ギピー〜」

お化けねずみは頭を抱えて逃げる。すると劣勢を感じ始めたほかのねずみも逃走を始めた。

「ふむ……。なかなかやるようになったな。リヨカ」

「はい、父さん」

自身の成長を認めてもらい、リヨカはとても嬉しそうだった。

パパスは剣に残る油と血、毛を拭くと、大柄な両刃の剣をしまつ。「何故命を助けた？」

「え？ それは……。可愛そうだから……」

「そうか……。そうだな」

父はグリーンワームを二体、スライムに触手の生えた亜種であるホイミスライムを一体屠つていた。

その亡骸は弔われることもなく、餌を待つカラスがわさわさと集まってくる。

リヨカは自分が「かわいそうだから命を奪わない」ということが、暗にパパスを責めているかのようで、それが心苦しかった。

「リヨカ。今はそれでいい。お前が心優しい子に育ってくれて、父

は誇りに思うぞ」

そう言っ頭をクシャクシャとしてくれる父。力強く、優しさを持ち、また厳しさを併せ持つ父のそれが嬉しかった。リヨカは笑顔に戻ると、父を真似て折れた剣をしまう。

最近、パパスはリヨカを積極的に戦闘に参加させていた。特別強い魔物がいないことのもそうだが、リヨカの成長をパパスは見誤っていたと認識していたからだ。

息子は強い、いや強くなれる素質がある。

呪文も簡易とは言え治癒魔法、真空魔法を使えるようになっていく。

そして、己を守り、さらには敵すら守ろうとする戦い方。

先ほどのお化けねずみもそうだ。闇雲な突進など、カシの杖でやわらかい腹を突けば手間も掛からずに絶命させられたであろう。けれど、彼は空中から壊れかけた銅の剣の平たい部分で一番堅いであろう頭蓋を殴った。哀れな剣は折れたが、ねずみは一目散に逃げていったわけだ。

アクロバティックな戦い方などサーカスに任せておけばよい。重要なのは「そうすれば命を奪わずに済む」という戦い方を即座に実行できること。

「よし、先を急ごう……」

そして、心配なのは、これから先彼が守るべきもの背負いながらもその戦い方で生き延びられるかということ。リヨカが生き残ったとして、悲劇を背負うのならば、それは父と同じ苦しみを持つことになる……。

パパスはそのことが心配だった……。

* *

アルパカの村へとたどり着いたのは出発してから次の日のお昼過ぎ。途中魔物に襲われること数回、その対処に手をかけたのだ。

「本当にありがとうございます。パパスさんが居てくれて本当に心強かったですわ！」

ジルバは宿の奥の応接間で二人を労っていた。

「コイツなら魔物だって近所のおしゃべりでなんとでもできるもんですかね……」

病床にあつたダンカン・ルードもゴホゴホと咳こみながらやつてきて頭を下げる。

「何言ってるのよ、お前さん！ ほら、ドルトン親方特製のクスリをもらってきたから、さっさと飲んで寝てしまえばいいよ」

「ああ、だが……」

ダンカンも亭主として妻のボディガードをしてくれたパパスに感謝を示したく、無理をしているのが見える。

「まあま、ダンカン殿もクスリを飲んで、すっかり風邪を治してくれ……それでは私はこれで……」

そう言つて立ち上がるパパスだが、ジルバはそれを慌てて制止する。

「お待ちください。今村に着いたばかりだということにもう戻るといふのですか？ せめて一日ぐらいおもてなしをさせていただきますたく……」

「そうですね……」

パパスはリヨカのほうをチラリと見る。彼はまだビアンカと仲直りが出来ていないらしく、先ほどからビアンカを見ている。それは彼女も同じらしく、何かを訴えかけてくる視線にパパスが折れた。

「それではお言葉に甘えて……」

その言葉にリヨカ、ビアンカの顔がぱっと明るくなる。

「ささ、それでは二階の特別室へどうぞ……」

「いやいや、私達はそういう豪華な部屋だとかえって寝付きが悪くなります。どうか普通の部屋で……」

「はいはい只今！」

ジルバこそ休む暇なく駆け出すと、シーツ片手に宿を闊歩した。

「ママ、私リヨカと遊んでくるね！」

「ええ、ええ、仲良だね……」

「行こ、リヨカ！」

「うん……」

二人の中のもどかしさが、少し薄れていたような……。

村の中を探索内されるリヨカ。道具屋で旅の必需品を買おうとしたらシドレーがリュックから顔を出してしまい、ビアンカが慌ててそれを追いかける。

リヨカとしてはシドレーよりも二人きりで居たかったので、非常に不機嫌な様子。そんな折、店内を見回すと赤いヘアバンドが目に入った。

「これいくらですか？」

「ん？ これは十二ゴールドだね。まあ、もう古いものだし七ゴールドにしてあげるよ」

「本当ですか！」

リヨカは先ほど買った薬草と交換でヘアバンドを手にする。

これをビアンカにプレゼントしてあげたら、きつと仲直りが出来る。今も仲直りの最中ではあるが、きつともっと深い仲になれるのではないか？ そんな甘い期待を持ちながら、リヨカは揚々と店を出る。

10 ネコとイジメと好きな人

「ちょっと、やめなさいよ！ 可哀想でしょ！」

町の中にある公園に人だかりが出来ていた。その中心で聞き覚えのある声が聞こえる。

リヨカは騒ぎの中心にビアンカが居ると知り、子供達の合間を縫って向かう。

「ビアンカちゃん！」

「あ、リヨカ！ 聞いてよ！ こいつら、猫を苛めてるのよ！」

「猫！？ え？ あれが……？」

ビアンカの指差すほうを見ると、黄色の毛並みに茶色いまだら模様のある、猫といえば猫なものがいた。頭は真っ赤な毛がふさつと生えており、ぼろぼろになりながらも懸命にいじめっ子を威嚇していた。

「ほら、男でしょ！ がつんと言ってやって！」

肩を押すビアンカに無理やり騒ぎの中心に出されるリヨカ。この数ヶ月で確かにたくましくなっていたリヨカだが、それはあくまでも魔物相手。単純な力なら彼らに負ける道理も無いが、力で解決する気にもなれない。

「あの、そういうのはやめたほうがいいよ」

「なんだようっせーな！ よそもんはひっこんでろ！」

いじめっ子の片割れがリヨカを突き飛ばす。不意を突かれたリヨカはそのまましりもちを着き、その様子に周りから笑いが起きる。

同い年の子に囲まれ、笑われる経験の無いリヨカはどうしていいかわからず、ただ照れ隠しに苦笑い。

「もう、リヨカだったらだらしないわね！ ほら、いつものようにブーメランでも魔法でも使えばいいでしょ！」

魔法という言葉に一瞬どよめきが走る。

子供でも魔法を使える者はある。だが、それは極めて一部であり、

富裕層や職業軍人、魔法使いの子供がほとんどだ。たまに独力で覚えるものもいるが、それもせいぜいホイミや照明魔法のレミールなどの「使えたら便利」という程度のものしかない。

攻撃に使う魔法が使えるとなると、それは脅威の対象だ。

「おい、まじかよ…… 本当に使えるの？」

「いや、そんな危ないことはしません……」

リヨカとしてもあまり目立つことをするのは好きではなく、また大勢の居る中で真空魔法などを放てば、たとえ微弱であろうと良い結果を招かないことを知っている。だから隠そうとしていた。

「リヨセはねえ。お化けキャンデルに囲まれたとき、あたしを守るためにバギを使ってみせたのよ！ まあ、一匹は逃がしちゃったけど、でも本気になったら怖いんだから！」

だが、彼女は得意気に胸を張り、るでで自分のことのように言う。そのそばでリヨカはどんどん小さくなっていく。

「へえ…… 真空魔法ねえ……。お化けキャンデルねえ……」
いじめっ子の片割れは面白そうに二人を見る。それを見ていない者からすればにわかには信じがたいことであり、それは周りも同じこと。

ひそひそ声が高まり、やがて「うそつき」と囁かれ始めるのも自然なこと。

「な！ 本当だってばー！」

「ビアンカちゃん、うそつきだ！ うーそーつーき！」

そして始まるうそつきコール。ビアンカはすぐに顔を真っ赤にさせ、「本当だもん」と声を裏返す。その瞳には涙が浮かんでおり、それをみたりリヨカは心が痛んだ。

「よーし、そんじゃあさ、嘘じゃないんならお前らちょっと頼まれてくれよ。この村の北にレヌール城ってあるだろ？ あのお化け城だ。あそこに最近お化けキャンデルが住み着いてるんだ。それを根こそぎ退治してきたら信じてやるよ」

「本当？」

「ああ。そうさ。たとえ真空魔法が使えなくても、あんだけの数を倒せたらそれ以上だしな！ どうだ？ やれっか？」

「ねえリヨカ……」

「僕は……」

思い出されるのはここ最近の冒険劇。自身を過信し、デボラやビアンカを危険な目に遭わせたという事実。彼は首を縦に振ることに躊躇してしまう。

「もし退治したらこの猫を苛めるのやめてやるよ！」

「ねえリヨカ！」

「だって……」

「だがリヨカは……」。

「もういい！ あたしがやる！ あたしが一人で行ってお化けを退治してくれるわ！ そんなの簡単よ！」

「ビアンカちゃん、危ないよ」

「うるさい！ 意気地なしは宿で布団被って寝てなさい！」

ずんずんと遠ざかるビアンカにリヨカが慌てて追いかける。しかし、心無い子の足にかかり、転んでしまう。その拍子に例の赤いヘアバンドがこぼれる。

「あつ……」

「リヨカ！？」

物音に振り返るビアンカは駆け寄るべきか逡巡する。

「なんだ？ これ……。うわ、古くっさ……。だっせー！」

一人がソレを拾い、しげしげと見つめたあと、それをブーメランのように放り投げる。

「返してよ、それ、ビアンカちゃんにプレゼントするつもりなんだから！」

リヨカはそれを追うが、無常にも空を舞い別の子に……。

「そんな古臭いの似合うの、うそつきビアンカくらいだな！」

その言葉とリヨカのだらしない態度に、ビアンカはプイとそっぽを向き、歩を急がせる。

すると、ちょうど道を塞ぐように立っていた子を突き飛ばしてしまおう。

突き飛ばされた子は膝をすりむいたらしく泣き出してしまった。

「あ、大丈夫!？」

リヨカはヘアバンドを忘れて転んだ男の子に駆け寄り、その傷を見る。

傷口に尖った釘が刺さっており、赤錆が血にまみれていた。傷口こそ浅いが、破傷風の可能性も心配される。

「痛いよう! 痛いよう!」

「ちよつと我慢してて」

リヨカがソレを引き抜くと男の子は苦痛に顔を歪める。

「大丈夫。待つてて……」

両手で印を組み、船旅の合間に一通り読んで覚えた呪文を詠唱する。

「浄化の風よ、この者を蝕む壞痕の呪いから開放せよ……キアリー……」

静かにゆっくりと風が集まり、傷口から黒いモヤが出て、そのまま霧散する。

「あとは……ホイミ……」

簡単な印を結んだあと、詠唱を省略して治癒魔法を唱えた。

膝をすりむいた程度の傷口は直ぐに回復を始め、薄いピンクの皮膚が塞ぐ。

「あとでちゃんとルビス教会の神父さんに見せてね……」

「あ、ありがと……」

二種類の魔法を即座に詠唱するリヨカに向けられるのは感謝の瞳と奇異の目が多数。

「それと、ビアンカちゃん、怒りっぽいところあるけど、本当は優しい子だし、嘘なんて言わない。信じてほしい」

「うん。信じる……」

呆然とする男の子だが、リヨカのその実力が本物であることはわ

かる。きっとこの旅の男の子は初等真空魔法を使えるだろうと……。

その日の夜、ビアンカは一言も口をきいてくれなかった。

ただ寝る前に一言だけ、「あの子は大丈夫だった？」と聞いてきたので、「うん」と答えた。

彼女は「明日、謝るから心配しないで」と言い、それっきり。

「ねえねえ、起きてよ……、旅人さん、起きてっば……」

誰かが窓を叩いていた。誰だろう？ 男の子とはわかるけれど、それ以外はわからない。

「ん〜、だあれ？ デボラさん、またおしっこ？」

寝ぼけ眼を擦りながら起き上がるリヨカ。窓を開けると、そこにはお昼に助けた男の子がいた。

「君か。もう足は平気？」

「うん。けど、そうじゃなくて……」

男の子はおずおずと赤いヘアバンドを差し出してくれた。それは土汚れこそ落ちているものの、どこか朽ちかけた箇所のある惨めな様相をしていた。

「ゴメン。探して洗ってきたんだけど、汚れちゃったんだ……」

すまなそうに言う男の子にリヨカは笑顔で「ありがとう」という。この古臭いヘアバンドをビアンカは受け取ってくれるだろうか？
ダサイ、汚い、壊れかけ……。

「ビアンカちゃんに酷いことしちゃったし……」

そういう次元ではない失態を犯していることぐらい、リヨカにもわかる。

「そのビアンカさんのことなんだけど、一人で行っちゃったんだ！」

「どこに？」

「レヌール城に……。僕がこれを探してたら、ビアンカさんがこっそり衛兵の脇をすり抜けていくのが見えたんだ」

「な！」

リヨカは心底驚いた。今日の夕飯をまだ日が沈む前に済ませたビアンカ。彼女はお風呂に入ると、そのまま布団に入ったはず。それは、こうして夜に町を抜け出すための準備だったのではないか？

「どど、どうしょー！」

パパスに報告すべきか？ だが、父は調べ物があるらしく、夕飯後から外している。アルパカの町並みに詳しくないリヨカが探すのは困難というものだ。

「ねえ旅人さんは強いんでしょ？ お願いだよ。きつとビアンカさん、キンタとサンタの言うこと真に受けて行ったんだよ！ だから

……」

「う、うん。でもお城の場所が……」

「僕が近くまで案内するから……だから！」

男の子はぶるぶる震えながら懸命に言う。女の子を一人、お化けの巣窟に行かせたことを後悔しているらしく、その責任で奮い立っているのだろう。

「そう、お願いするよー！」

リヨカは道具袋を取ると、寝ていたシドレーごと宿を出た……。

11 レヌール城

「なあ坊主。あのな、あの猫なんじゃけど……」

道具袋で揺られるシドレーは、腕で枕を作りながらリヨカに言う。
「ねえ、どつちのほう？」

だが、リヨカはそれどころではなく、後からついてくる男の子を
いらいらしながら待っていた。

「うんと、あの一本杉を目指したところなんだ」

平均的な体力しかない男の子にリヨカを先導するのは無理という
もの。おおよその場所を聞いたリヨカはシドレーを袋から取り出す。
「わかった。ねえ、シドレー、この子をアルパカにまで連れて行っ
て！」

「ええけど、んでも、あの猫は……って話は最後まできけー！」
走り去るリヨカの後ろにむなしくシドレーの声が響いた……。

+ +

かつてはアルパカ方面を統治していたレヌール国。

東国と西国を結ぶ中継点として栄えていたが、巨大にして凶悪な
魔物により壊滅的な被害を受けた。

その後、魔物は封じられたが、領地はぼろぼろ。

当時の王は「城ありて国無しなど滑稽」と言い、これまでに蓄え
た王家の私財を投げ出し、港の整備を行った。

そのおかげで現在も港街レヌールとしてアルパカの西に存在する。
ただ、王には子供が居らず、王家はそのまま断絶してしまった……。

紅茶の好きな王様だったという。

+ +

暗い……というよりは黒い場所。一筋の明かりも見えない。城が見えるころは月明かりが見えた。しかし、正門をくぐったところで突然の雷がなり、激しい雨音がし始めた。

そのまま逃げるように城へ入ったピアノカを待つのは浮遊する幽霊。

人の姿を模したそれはどういう理屈か黒の場所でもよく見えた。それは彼女の頭を掠めるように飛び交い、ある場所へと誘導していった。

その場所とは……おそらく「箱」の中だろう。

「よい夢を……ラリホー」

暫く喚いたところで息苦しくなり、次第に……眠くなった……。

リヨカがたどり着いたとき、月明かりは群雲に隠れていた。

朽ちかけた城は外壁がところどころはがれ、たまに骨格がむき出しになっているながらも、今もなおそこにいた。

ここにピアノカが！

今のリヨカの畏れるものはない。彼は正門へと走り、そのドアを蹴る。しかし、それはびくともせず、まるで魔法による封印でもされているかのようで、彼の侵入を妨げた。

く！

リヨカは心の中で毒づく、周囲を伺いだす。

どこかに別の入り口がないかと歩き回ること数秒、裏手に螺旋階段を見つけた。

ここを登ることで活路があるかは定かではないが、それでも焦る気持ちの後押しし、リヨカを急がせた。

飛び飛びの階段を超え、リヨカは走る。そこに何が待ち受けているのかなど恐れもせずに……。

螺旋階段を上りきると、内側に入れそうなドアを見つけた。リヨカは遠慮なくそのドアを蹴破り、中へと向かう。

その時、かすかな物音がした。

「魔物だろうか？ 違う。こちらに対する敵意が無い。言うなれば好奇心が近いだろう。」

リヨカはその気配を無視し、さらに奥へと抜ける。するとバルコニーに出た。

注意深く見ると通路があり、リヨカは進む。

もしかしたら誘われるまま、誘いに乗っているのではないか？

そんな焦りが出始めた頃、何かが視界を横切った。

「誰だ！」

それはリヨカに気付かれたことに慌てて走り出す。通路を走り、角を抜ける。この先がどうなっているのかはわからないが、それほど逃げ足が速いようにも見えない。

どんどんと距離が縮まり、次の角を抜けたところで追いつきそうになる。

リヨカは角を曲がろうとしたそれに手を伸ばす。

「捕まえた！」

しかし、それは不自然にすり抜け、薄ら寒い感覚を残す。

「え！？ 魔物じゃない！？」

リヨカの知るこの世の存在といえば人、ホビット、魔物に動物など、生きているものが基本。

幽霊というのは大概無数の発光体の魔物が集まって出来ているものと認識しており、そこに手ごたえは薄いながらも必ずあると思っている。

だが、今こうしてすり抜けたそれは、かすかな手ごたえさえない存在だった。

抵抗の無い冷たい空間。そんな印象だった。

「ここまで来るとはなかなか度胸のある小童じやの」

よく見ると、その存在は老人であり、貴族が着ている豪華な服に身を包んでいた。

「あなたは……？」

「ワシはレヌール城の王様……。元じゃけどな……」

「レヌールの王様？ となると、あなたがお化けキャンドル達を！？」

リヨカはカシの杖を構える。正直なところ、この存在とまともに戦えるかといえばそれはわからない。悪意の集合体を浄化する魔法の存在は聞いたことはあるが、詠唱方法も使役方法も知らない。

「いやいや違う！ ワシじゃない！ ワシじゃない！ ワシはただ、后とのんびりここにいたんじゃないよ。そしたら親分ゴーストとか言う魔物が現れてな、この城を乗っ取ったのじゃ。ワシはただ、あいつを何とかしてもらいたいなあと思っただけで……」

「そうですか……。でも僕はビアンカを探しに来ただけで……」

ドンゴロガツシャーン！

激しい稲光がして、リヨカは一瞬言葉を失う。

「はて、アイツをなんとかしてもらいたいなあと思っていただけなんだが、おぬしなら……」

「お〜い坊主！ 送り届けてきたで。まったく、えろう探したぞい！ ほら、はようあの金ジャリ探しに行くで！ ……なんやこの小汚いおっさん。浮浪者かい？ ごつついパジヤマきおってからに……、一体どこのおのぼりさん？ オマケに透けてるわでキモイし……。ほらほら、こんなんええからはようはよう……」

ドンゴロガツシャーン！

再び激しい稲光がして、それはシドレーを焦がす。

「ぎひゃー！ あちち！ なななんじゃい今の！ やべ、目え飛び出るかと思っただわ！」

「勇気ある少年よ……。ワシの願い、聞いてもらえるかな？」

「は……はあ……。ビアンカを探すついでにきつと……」

「うむ、ありがとう！ きつとそう言ってくれらると思っっていたわい！」

嬉しそうに笑う王様は、透けていながらも自分を触ることは出来るらしく、あごひげを梳いていた。

「なんじゃ、この爺さん、俺らが首縦振るまでこの茶番続けるつもりやったんじゃないか？」

「多分ね……」

毒づくシドレーだが、これ以上雷に打たれるのは辛いと、リョカの袋の中に隠れる。

「さて、こつちへ来てもらおうか……」

王様はそう言うつとリョカに向かって指を鳴らす。すると彼の身体がふわふわと浮き上がり、三階にあたるテラスへと運ばれる。

「おっおっなんじゃ？ これ、俺も知らん魔法だど？ コイツ、ほんまはすごい奴なんじゃないんか？ つか、さっきいうつた親分何とかなんてコイツ一人で倒せると違うか？」

「ん〜、さっきの雷撃といい、僕もそう思う……」

奇妙な浮遊感にむずむずした不安を感じつつ、リョカはシドレーに同意する。

「む〜ん。すまんがワシ、暗いところ苦手……。せつかくの力があつてもあの親分ゴーストのところにいけないんじゃよ……」

「そうなんだ……はは……」

「なんじゃい、その中途半端な能力は……」

悪態をつくシドレーだが、半眼で睨む視線に気付き、そそくさと袋に隠れる。

「で、その親分ゴーストはどこに？」

「うむ、わしが手を出せないことをいいことに、城の中心部に居るわい。まあ、奴らの手勢が外に出ようとしたら、ワシの雷でいちこるじゃがな」

「力関係は拮抗してるみたいだね」

「そうじゃな。じゃが、ワシも人間であったときの癖で転寝をする

ことがあるんじゃないよ。すると、その隙をついてお化けキャンドル達が外へ出るわけだ」

「ああ、それでサンタローズにも……」

リヨカは田舎の村に突然沸いたお化けキャンドルに頷く。

「それじゃあ行ってきます。そうだ王様、ピアノカの居場所とかわかりませんか？」

「さっき入ってきたおじょうちゃんかな？ 金色の髪の毛……」

「うん！ そのこ！」

「そうじゃな、直ぐには殺されることはないだろうけれど、急がないと危険だけは言っておこう」

「どあほ！ それを先言わんかい！ ほれ、リヨカ急ぐぞ！」

「うん！」

シドレーは袋から出ると、闇を切り裂くべく小さな炎を吐いた……。

12 箱の中

朽ちかけた城はあちこちに穴があった。リヨカはそれを利用しつつ、城の中心部であるう方へと向かう。

その途中、シドレーの炎に誘われるかのように次々と魔物がやってくる。

海蛇の骨に人の頭骨をすげられ、そこに悪意が集まって動体をなすスカルサーペント。

発光物質を集め、それを悪意が指揮をとるウィルオウイスプ。

イタズラな生命体のゴースト。

これまで見たことが無い魔物を前に、一人と一匹は怯むことなく突き進む。

炎が闇を切り裂き、真空魔法が敵を霧散させる。

最初闇雲に進んでいたリヨカ達だが、徐々に攻勢が激しくなる場所こそめぼしいと見抜き、先を急ぐ。

その推測は正しかったらしく、一際大きな扉を開けた時、一人異質といえる雰囲気をもしている魔物を見つけた。

「お前がこのボスか！」

「ち、違います。違います。あたしやただの魔法使いです。ここに座っているだけでいいって言われて……、親分ゴーストならもう逃げていまして……」

リヨカが問うとボスはもろ手を挙げて平謝りをする。

「なんじゃい、気が抜けるな！ ま、俺ら無敵のコンビにや、たかが幽霊のボスなんざ尻尾巻いて逃げるほかあらへんしな！」

豪快に笑うシドレーだが、リヨカは違う。

「でも、もし外へ逃げたのなら王様の雷が落ちるよね？ そっじゃないってことはコイツが嘘をついてるんじゃない……」

「あゝ、かもな」

一人と一匹は、暗がりには隠れる魔物に武器や牙を構え、じりじりと距離を詰める。

「ビアンカちゃんを出せ！」

「ち、だまされていけばよいものを！」

魔法使いを名乗っていた魔物はどこから杖を取り出し、炎の塊を中空に作る。

「メラミレベル……というには、まだ弱いな……。危ないど、坊主には」

「はっは！ 死ぬ！ メラミ！」

魔法使いの放つ炎の塊にリョカはさつと身をかわす。だが、シドレーは微動だにしない。

「シドレー危ない！」

「ん〜ん。全然……！」

シドレーは大きく口を開くと、カツと閃光を走らせる。それは魔法使いのメラミを飲み込み、逆に押し返した。

「な！ なんじゃって〜！」

突然のことに驚く魔法使い。だが、容赦なく炎が彼を襲う。

「きひい！」

寸前で何とか避けるも今のが最高の魔法だったらしく、油汗をか

く。
「おうおうリョカ。俺のこと散々メラリザードとか言ってくれたな？ どや。俺のメラは！ すごい威力だろ？」

ニヤニヤと笑うシドレーにリョカは「はいはい」と返すのみ。

「けどま、今のが全力なら、坊主が下がるだけで完封やど？ どうする？ 自分」

「く、つくつくく……。だが、あの女の子はどうする？」

「金ジャリか？ まあそれ言われると辛いな。んでも、それ切り札になると思うん？ もし金ジャリ死んだら俺も坊主も手加減なしやで？ 外も爺さん居るしな」

「なっ！」

「金ジャリ生きてる限りお前も生きてられる。けど、もしそうならならなあ……」

シドレーは親分ゴーストの惑わしに乗っかるつもりは無いらしく、ふんと火の息をだす。

「シドレー、あんまり刺激しないで……」

対し、ビアンカの生死がかかる状況にリヨカは、シドレーを諷める。

王様の話によればビアンカの生殺与奪があちらにあるのがネック。リヨカとしては難しい状況だった。

「わ、わかった……。それじゃあこうしよう。その子の元へと案内する。その代わりに、俺を見逃してくれ」

「わかった」

即答するリヨカにほっとする魔法使い。彼は壁伝いに立ち上がり、暗がりにある紐を引っ張る。すると突然リヨカの足元が開き、そのまま真つ逆さま。

「わー!!!」

「おいリヨカ！ おまえ、嘘言つたな！」

再び炎を溜め込むシドレー。けれど、

「ラリホー！」

睡眠魔法を唱えられたシドレーは目をしばたかせ、そのままふらふらと奈落へと消えた……。

「へっへっへ……これでお前らは餌だ……」

ほっと一息つく魔法使い。ではなく親分ゴーストは再び漆黒の闇に隠れた……。

何か無数の手で押される感覚だった。そして狭い何かに突っ込まれる。

一つ一つが弱いにも関わらず抵抗ができない。

いつの間にか服をはがされ、冷たいものが肘や膝、太腿に当たる。箱のようなものに閉じ込められているようだった。

それもすごく狭い。それに何かある。ちよっぴり温かく、やわらかいものだ……。

なんだろう……。

暗がりの中、手を伸ばす。やわらかいものに触れると、それはびくつと動いた。

魔物だろうか？ いや、それなら身動きが出来る状態で一緒に閉じ込めるようなことはしないだろう。

さらに手で弄ること数回、やわらかく、しっとりとしたそれは、甘酸っぱい香りを放つ不思議な存在だった。

「何？ これ……」

リヨカは正体を探るべく、両手で弄る。すると、そのモノが不意に意識を持ったらしく動き始める。

「誰！ 人のお尻を触るのは！」

それはビアンカの声だった。

「僕だよ！ ビアンカ！ 僕だよ！」

リヨカは驚きと安堵の声を上げるが、

「このスケベ！」

ビアンカの手がリヨカの太腿を思い切り抓っていた……。

暗闇の中を過ごした二人。荒かった呼吸も収まり始める。

「ビアンカちゃん……」

「なに？」

「なんでもない……」

「そ……」

先ほどから何度も繰り返される問いかけ。本当は何か言いたいのだが、何を言えばよいのか見当がつかない。

本来、今逼迫しているのはこのがんじがらめの状況なのだが、今のこの箱の中は青臭く、快樂の残滓と倦怠感がだけが充満していた。二人はもうただの友達ではない。いけないイタズラを共有した間、「どうしようね……」

「さあ？ でも、また……」

ビアンカの言う「また」の意味はリヨカもわかっている。そして、もう一度それをされたいのか、身体が熱を持っていた。

たまにビアンカはその存在を遊び、くすぐり、彼を挑発する。リヨカは彼女の太腿にキスをしてそれを諷めていた。

「……なんだ？ なんかこの箱、煩えぞ!？」

外から何か声がした。人、魔物というにはなにか不思議な感覚の声。男のような女のような……それが同時に一人の口で放たれたような不思議な声だ。

「ここには人間の子供をしまっていたはずだぞ？ もう起きちまつたか？」

どうやら二人は調理を待つ状況だったらしい。

「ちよつと見てみる。久しぶりのつがいだし、暴れられたらめんどつくせえ。もう締めちまおうか？」

笑い声のあと、箱の上のほうがぎぎぎと開き、暗い中でも何かが覗き込むのがわかった。

「メラ!」

その隙間から初級火炎魔法を放つビアンカ。覗きこんでいた魔物は驚き、二人を閉じ込めていた箱を放り投げる。

「くそ、このガキども！ 料理の前に血祭りにしてやる!」

放り投げられたとき、箱が壊れ、リヨカが裸のまま飛び出す。再び放たれた火炎による一瞬の明かりの下、武器となりそうな棒を見つけ、料理長らしき魔物に切りかかる。

「だああああ!!!」

人間の骸骨にしては大きすぎる存在だが、その分、密度が薄いらしく、リヨカの一撃で粉々に砕ける。

「ぐわああ!!」

「やばいぞ！ 料理長がやられた！ 逃げるぞ！」

あまり統制の取れた魔物ではないらしく、それほど劣勢というほどでもないのに、一体が派手に碎かれたことで散り散りになる。そして聞こえる雷鳴の音。どうやら王様が雷で、出てくる魔物を滅しているらしい。

12 箱の中（後書き）

この話には削除された箇所があります。

13 光る玉

「ふう……なんとかなった……」

「みたいね……」

ほっとしたのかその場にしりもちを着く二人。

リヨカは月明かりの差し込む中、ビアンカの無事を確認しようとして振りかえる。

「こつち見ない！」

「あわわ、ごめんなさい」

振り返ったリヨカにビアンカの声が響く。料理されかけた二人は素っ裸であり、いくら暗いとはいえ、黒が薄れた今、目を凝らせば体のラインが見える程度になっている。

リヨカは慌てて周囲を探り、古びたドレスや礼服を見つけると、ビアンカに投げる。

「なんか、ほこりっぽい……」

「そうだね……でも、裸でいるよりはいいよ……」

「まね……」

リヨカにも彼女の裸を見たい気持ちがあつたのだが、それを言えばどうなるかわかっているので口を紡ぐ。

なれない燕尾服の袖を通し、武器になりそうな麵棒を手にする。

「あの親分ゴースト、絶対に許さない！」

自分どころかビアンカまでこんな目に遭わせたことに強い憤りを感じるリヨカは、螺旋階段を駆け上る。

「待ってよ、リヨカ！」

ビアンカも駆け出そうとしたが、ふと違和感を感じ、スカートを捲る。

何かが股間を伝うのを感じたあと、彼女は火炎魔法で明かりを取り、それが消えると同時にペタンと座り込んだ。

再び親分ゴーストのいるであろう部屋へやってきたリョカ。彼は手近な窓から全て開け、月明かりを部屋に入れる。

「さあもう逃げられないぞ！ 僕らを食べようとした魔物は既に王様に討たれた！ 残るのはお前だけだ、覚悟しろ！」

威勢よく乗り込んだリョカを突然の業火が襲う。おそらく親分ゴーストの中級火炎魔法、メラミだろう。

「くっ！」

シドレーがいるのならまだしも、今は一人。咄嗟にマントで庇うがそれが果たしてどれだけの防御力を誇るのか？

「ああもう！ ヒヤド！」

突然女の子の声と氷結魔法が飛んできた。それは空中で中級火炎魔法と相殺するどころか、放たれたほうへと氷の矢が向かう。おそらく詠唱主の実力は親分ゴースト以上なのだろう。

再び氷の矢に救われたリョカは辺りを見る。

「アン？ それともアニスさん？」

だが先ほどの声はどちらでもなく、知らない女の子の声だった。

「おーい、坊主！」

すると階下からシドレーが飛んでくる。

「あ、シドレー無事だったんだね」

「ああ、金髪娘に出してもらったわ。まあなんだ、俺もまだまだ甘いな……」

てれたように笑うシドレーは、リョカの肩に乗ると、大きく炎を吐く。しばらく灯された炎で部屋の隅々まで見たが、やはりいいない。「逃げよったか。まあそうだろうな……。けど……」

ドガツシャーン！

テラスのほうで音がしたのが聞こえた。おそらく雷が落ちたのだろう。

そして落ちた相手はきつと……。

「ま、爺さんが積年の恨みを晴らしたってことで、一件落着だな……」
「……」
シドレーはそう言うトリヨカの道具袋の中にもぐりこんだ……。

テラスに出ると親分ゴーストが着ていたと思しきグレーの布が、半分以上黒こげになってそこにあった。

王様はリヨカに気付くと、にっこり笑顔で迎えてくれる。遅れてやってきたビアンカは、まだ魔物がいるのかと身構えたが、二人が事情説明することで誤解も解ける。

「ふう……これでレヌール城もお化けのお城といわれずにすむわい……。これもおぼっちゃん、おじょうちゃんのおかげじゃな……」
「おいおい、俺のことを忘れるなよ？」

シドレーはひょこつと首を出しながらそう言うが、王様はとぼけた様子で意に返さない。

「でも、どうしてあの魔物はこのお城に？」

「さあて……。やっぱり誰も居ないから拠点に使えと思ったんじゃない？」

王様は特に感慨もなく、しれつと答える。

「なのかな……。なんかひっかかるんだ……」

「そうじゃなあ……。そう言えばこの城には後の愛用していた銀のテイセットがあつたが……。あれはそこまで重要じゃないかの？」

「え？ ティーセットがあるの？」

「ああそうじゃな。おじょうちゃんには世話になつたし、見つけたら持って行ってもいいぞ？」

「本当？」

「ああ。ただし、銀はしつかり磨かないと黒くくすむからな？ 手入れをしてくれんと、枕元に后が立つぞ？」

「それはやだな……。でもいいや。ね、シドレーだっけ？ ちよっ

と来てよ。探すの手伝って！」

「なんでや。そんな坊主とやれや。金髪娘」

「いいから！」

ピアンカはシドレーを引っ張ると、そのまま駆け出していく。

「それじゃあ僕らはこれで……。王様、さようなら……」

「うむ……。いや、待てよ……。坊やにも何かお礼がしたいな……」

「え？ うわうわわ！」

再び例の浮遊感が袋を包む。

「ちよつと、お礼なんていいから、降ろしてくださいよ！ なんか

この浮遊感！ すごく苦手なんですつてば！」

リヨカは泣き叫ぶが、王様は「いいからいいから遠慮しない」と聞く耳を持たない。

「うわあああ！……」

リヨカの本日何度目なのか、情けない声がレヌールの上空に響いた。

「これは？」

リヨカが案内されたのは正門にあった墓石の前。王様が指を刺す先には金色に光る不思議な玉があった。

「これなんじゃが……。宝石というわけでもなし、なんじゃるな？」

「へえ……」

「もしかしたらこれが魔物を呼び寄せたのかもしれない」

「でもまがましいとかそういう感じはしません。なんかこう、力に溢れるような、素直な感じが……」

「ふむ。幽霊のワシにはよくわからんが、できればこれを持って行って欲しい。お礼といっておきながらもう一つ頼みごとをするようで気が引けるが……。まあ、その過ぎた力なんじゃないかと思ってな……」

「過ぎたる力？」

「うむ……。ワシもよく知らんのだが、かつてこの世界に竜の神様がいた頃の話だと、進化の秘法というものを聞いた魔物が、その過ぎたる力によって暴走して破滅したという……」

「暴走……ですか……」

「うむ。おとぎ話みたいなもんじゃが、それと同じなのかもな……」

この王様はあまり深く物を考えるのが苦手らしく、自分なりの推測を告げると、ひげをいじって遊んでいた。

「よいしょつと……ねえリヨカ！ 見てよ！ このティーセット、なんかすごい綺麗だつてば！」

「ほほ、よく后が磨いておったからの……」

ビアンカが輝くティーセットを抱えて戻ってくるので、リヨカはそれを代わりに持つ。

「銀って本当に綺麗だね……」

「えへへ、これ宝物にしようつと！ リヨカと冒険に出た記念と、それと、あたしが……まま、そういうことの記念ね！」

リヨカはビアンカの意味深な物言いにやや顔を赤らめる。だが、ビアンカには別にもう一つあるらしく、もじもじと股間を気にしている様子。

「ん？ 坊主も何かもらつたん？ そんな、俺かてがんばつたんだから、なんかくれよ！ このけちんぼ」

シドレーはリヨカの持つ金色の玉に止まる。

「え……！？」

すると雷に打たれたかのようにシドレーは体を硬直させ、そのままふらふらと落ちる。

「え？ え？ 何？ どうしたの？ 嘘でしょ？ 冗談はやめてよ！」

「わ、ワシは何もしとらんぞ？ このメラリザード、この玉に乗った瞬間……」

「と、とにかくホイミ！」

リヨカは簡易治癒魔法を唱えたが、シドレーは動かない。恐る恐る彼の心臓近くに降れると、心臓の音、呼吸は聞こえてきた。

どうやら死んでいるわけではなく、昏睡しているのだろう。ただ、その表情は安らかであった……。

14 お別れ

まだ夜深いころ、リヨカとビアンカは眠るシドレーを袋に入れながらアルパカの町に戻った。

原因不明のまま眠る彼だが、寝息、心音ともにしており、ビアンカが鼻をつまんだとき、苦しそうに手で払いのけた。

ひとまず様子を見ることにして、もしそれでも目が覚めないようならルビス教会へ相談しに行こうと約束した。

相変わらず寝ぼけている衛兵の脇をすり抜け、二人は何事もなかったかのように宿屋に戻る。その途中、二人を心配していたのである男の子が駆け寄ってきて、安堵のため息を着く。

男の子は銀のティーセットを見て驚きながら、明日は二人がお化け退治に向かったことを証言すると約束してくれた。

「よかった。これであの猫ちゃんも助けることができるわ……」
宿に戻ったところでビアンカがほっと息をつく。

「そうだね。でもビアンカ。一人で行くななんて無茶しちゃだめだよ……」

「ごめんなさい。でも、リヨカが来てくれて嬉しかった……」
ビアンカはリヨカの胸にそっと額を当てる。

「ね……ヘアバンド……くれないの？」
「でもこれダサイし、壊れちゃったから……」

「いいの。リヨカからのプレゼントなんだもん。ダサイはずないよ……」

「うん……」
リヨカは道具袋からはげかけた赤いヘアバンドを出すと、ビアンカにつけてあげた。

「んふふ……この髪型だと合わないね……。けど嬉しい……」
そう言いながら彼女は離れようとしなない。

「ね、リヨカ……、少しだけ、背伸びして？」

「え？ ころっ？」

リヨカはつま先立ちになるが、ビアンカは違うと首を振る。

「そうじゃなくて、ころっ……んっ……」

ビアンカは爪先立ちになると、彼の唇に青臭さの残る唇を押し付ける。

柔らかく、苦く、青臭いキス。けれど、リヨカはそれを愛おしく感じた。

「リヨカ……オヤスミ……。またね……」

「うん……またね……」

二人は挨拶を交わすと、互いの寝室へと戻った……。

ベッドにもぐりこむ途中、寝返りを打ったパパスは、

「長いトイレだな」

と笑っていた……。

「いつまで寝てるんじやい、ボケナス！」

あくる朝、というよりは昼前、リヨカはシドレーに起こされた。

「え？ シドレー？ 大丈夫だった？」

「何が大丈夫だ、ドアホ。お前こそ寝すぎで脳みそ溶けてんじやないか？ ほらほら、さっさと顔洗ってくる」

「はい」

何かなんだかわからぬまま、リヨカは洗面所へ急いだ。

昨日の夜遊びの件、パパスは不思議と何も言わなかった。

同じくお寝坊だったビアンカとは洗面所であった。彼女はストリートに髪を下ろしており、珍しくスカートを穿いていた。そして頭には例の赤いヘアバンド。リヨカはそれを見るだけで嬉しくなった。

「お、金髪娘、今日はいつになく乙女チックだな」

「なによ。私だっけいつまでもジャリじゃないのよ。わかる?」
「おうおう、わかるで。今日の昼飯はトマトリゾットやな!」
「うっさい! このセクハラトカゲ!」
「?」

一人やり取りのわからないリヨカは疑問符を浮かべていた
二人はお昼を取ると例の約束を思い出し、急いで公園を目指す。
ピアンカは例のティーセットを持って……。

* *

公園の広場には子供達が集まっていた。そして例の男の子も居り、
リヨカ達を見てぱつと顔を輝かせる。

「どうせ嘘だろ? お前らがお化け退治なんてさ!」

「そんなことないわ! これが証拠よ!」

ピアンカは銀のティーセットを掲げる。その一品は子供でも値戴
ち物だとわかるのだが、だがソレがお化け退治とどう関係するかと
いえば疑問。

「これはレヌールのお后様が愛用していたティーセットよ! これ
をお化けの王様からもらってきたんだから!」

「……ねえピアンカちゃん。それだと、まだお化けの王様がいるっ
てことにならない? 多分まだいるだろうし……」

「あ……」

しまったという顔になるピアンカだが、キンタとサンタはそうで
はないらしい。年代物のティーセットには「……ボン・レヌール」
と刻まれており、冷たい冷気が漂う雰囲気、皆呑まれていた。

「キンタ、サンタ、みんなも聞いてよ。昨日ね、ピアンカさんは本
当にお城に行ったんだ。僕見たんだ。で、怖くなって旅人さんに話
して……案内した。でも僕は怖くなって逃げたんだ。それなのにこ
の二人はしっかりと、レヌール城に行つて、このティーセットをも
らってきたんだ。それに昨日はお城を抜け出るお化けキャンドルの

明かりも見えなかった。多分二人がやつつけたんだよ！ それに魔法だつてそうだよ。キアリーにホイミ。皆も見たる？ 僕の傷を一瞬で治したんだ。だから、だから……」

早口で捲くし立てる男の子に、皆そうかもと頷き始める。そして劣勢に立たされつつあるキンタとサンタはたじろぎ、仕方なしに例の猫を差し出す。

「わかったよ。お前らは嘘ついてない。なら俺らも約束守つてやるよ。おら、こんな猫やるよ！」

二人は首輪につながれた猫を差し出し、ビアンカがそれを受け取る。

「よかったね。猫ちゃん」

「よ、よおし、そんじゃ俺らもカクレンボすつど！ おら、皆隠れろやー！」

どうにも居心地の悪いキンタとサンタは急にそんなことを言い、集まっていた子供達を蹴散らす。

年長組はその様子をにやにや見ていたが、年少の子供達が木々に紛れるに連れ、それにあわせて散っていった……。

残されたのはビアンカとリョカと猫だけだった……。

「ねえ、この猫の名前なんにする？」

ビアンカの腕の中で眠そうに顔を擦る猫。たまに欠伸をしたりするが、どうやら落ち着いているらしい。

「そうだね。僕考えたこともなかったよ」

「そうねゲレゲレなんてどうかしら？」

「金髪娘、ネーミングセンス最悪だな」

「うっさい！ ー、もつとカツコイイのがいいな。そうね、ガロンなんてどう？」

「ガロン？ そうだね。それはかっこいいや！ これからよろしく

ね。ガロン！」

リヨカがそう言うとガロンは「にゃあ」と答えた。

「おい、リヨカ……もうサンタローズに戻るぞ？　したくはよいか？」

宿の前で旅支度を終えたパパスが手を振っているのが見えた。

「あ、父さん！　ちよつと待って……」

リヨカは声を張り上げたあと、一度ビアンカに向き直る。

「ビアンカちゃん。僕ね、今は父さんと旅をしてるけど、もう少し大人になったらきつとビアンカちゃんを迎えに行く。僕、その時は……」

「その時は、そうね、続きを聞かせて……」

精一杯大人びたつもりだったリヨカだが、彼女の不思議とぞくぞくさせる微笑と、唇に当てられた人差し指の弱い力に続きが言えなくなった。

リヨカは力強く首を振り、父の元へと駆けていく。するとビアンカの腕の中で眠っていたはずのガロンもぱちつと目をさまし、それを急いで追いかけていった……。

「なあ坊主。俺な、昨日夢見たんよ。あの金玉触った……なんかやだな。あれに触ったらな、なんかごつつでかい竜がいてな、そいつ赤くてやたらめったら威圧感半端無いのさ……。皆も……誰か知らんが、慌て逃げろっていうてたな。どうもそれ、俺の知り合いみたいなんな……。んで、今の俺はまだ一番ひよっこみたいなんなんだって……。ああ、そうそう……。あの猫な……。やつば危ないで……。今は可愛いかもしれんが……。って、まあ今の段階でかなり危険なんだけどな、コイツの顔みてつとそういう気がしないんだけど……。

おっ、おっ、おい、やめろよ……。こらじゃれんかって……。もうかなわんわ……。まあ、そのうちでええか……」

リヨカの道具袋の中では、シドレーにガロンが甘えたいらしく爪を隠して肉きゅうでぶにぶにとその顔を踏みつける。その柔らかな感触に何を言っべきなのか忘れたシドレーは転寝を始めた……。

++

「うそ……。あの猫……。ベビーパンサーでしょ？ どうして人間に懐いているの？ いくら子供だからってそんなの無理！ やっぱりあの子、只者じゃない。うん！ あたしの目に狂いはないわ！ あの子こそ、妖精の国の窮地を救ってくれるはずだわ！」

紫の髪の子はそう言っていると彼が向かうであろうサンタローズの村へと先回りを始めた……。

15 不思議な出来事

サンタローズに戻ってきたリヨカの日々は、平穏としたものだった。

パパスはアルパカの酒場の店主から借りた本に掛かりきりであり、リヨカもアニスとの約束を果たすため、レヌール城やサンタローズの日常を描いていた。

そんな折、村で不思議なことが起こった。

ドルトン親方の作業場で薬莖がなくなったり、道具屋と武器屋の品揃えが入れ替わったり……。

酒場のお煮しめをつまみ食いされたりと、どれも他愛の無いことばかりで、特にそう、気に留める人も居なかった。

「お茶が入りましたよ」

「はい！」

居間でサンチヨの呼ぶ声がしたので、リヨカは筆を止めて急ぐ。テーブルにはキャラメル匂いのする紅茶が三人分用意されており、一足先にパパスはスコーンをつまみながら啜っていた。

「ふむ、最近はバニアティではないんだな」

「それが、バニア産が行方不明でして……」

「うむ……。おかしいな。前に買ったばかりなのに……。リヨカ、イタズラしてないよな？」

「え？ 僕じゃないよ……」

疑われたことにむっとしながらも、前にお茶の缶をひっくり返して黙っていたことを思い出し、それも仕方が無いと思うリヨカ。ただ、先日パパスが買いい物から戻ってきた時には確かにあったわけで、それがこの狭い家でなくなるとなるとそれは不思議なことである。

「おい、なんか臭い葉っぱの缶があったぞ」

すると地下室からシドレーがガロンを連れてやってくる。シドレーが抱えているのは、行方不明のバニア産の紅茶だった。

「なんで地下室に？ …… やっぱりぼっちゃんですか？」

サンチヨはそれを受け取ると、リヨカをぎろりと睨む。普段優しいサンチヨなのだが、イタズラ、特に厨房周りをいじくると、とても怖いのだ。

「ぼ、僕じゃないよ。だって僕、最近はずっと絵を描いてたし、ほほ、本当だよ！」

リヨカは慌てて否定するが、サンチヨは聞く耳を持たない。

「あー、坊主じゃないと思うぞ？ これあったの坊主の手の届きそうにない筆筒の上じゃったし」

「じゃあシドレーさんということになりますな」

すると今度はシドレーほ視線が向かう。

「違う違う。俺が隠したならわざわざ持ってこないって……」

慌てて弁解するシドレーに、サンチヨもそれもそうかと頷き、では犯人は誰なのかと首を傾げる。

「もしかしたら、イタズラ好きなエルフの仕業かもな……」

その様子を見ていたパパスは紅茶を啜りながら笑って言う。

「エルフ？」

「ああ、普段は人里離れたところにいるらしいが、たまに人間の住みかに来てきては他愛の無いいたずらをするらしい。最近この村でもそういうイタズラめいたことが多いし、もしかしたらな……」

「じゃあそのエルフを捕まえてイタズラしないように言わないと！」

リヨカは疑われたことを根に持っているらしく、憤慨気味だった。「そうですね。でも、私としては焼きたてのパンが、ミニだけ残して行方不明なほうが不思議なんですけどね」

「え？ あ…… それもきつとイタズラエルフが！」

しれつと言うサンチヨの言葉にリヨカはそう叫ぶと、こっそりと出ようとする。

「坊ちゃん、コンテを消すのに使っていませんよね？」
「うう、ごめんなさ〜い！」

リヨカは捕まるまいとばかりに脱兎のごとく飛び出した。
ハイヴ家のイタズラ坊主はまだまだやんちゃの盛　　なのかもしれない……。

＊＊

「あーあ、帰ったらサンチヨに怒られるのかな……」

コンテを書き直すのにパンを使ったことを後悔するリヨカ。普段なら少しの書損じぐらいは無視するのだが、今回の作品は人にあるもの。会心の出来を差し出したいというプライドが彼にもあった。それに受け取り主が何時くるのかわからないのもあり、出来るだけ完成を早めたい一身で、焼きたてのしっとりふわふわのパンを使ったわけだ。

「なあ坊主、最近感じとったんだけど、お前の周りに誰がいるぞ？」
「え？」

「さっきのパパさんの話聞いて眉唾思ったけど、本当にいるかもな、イタズラエルフ……」

「そんな、シドレーまで……」

普段は実利的というか、自分の見たものくらいしか信じようとしてないシドレーだが、今回は妙にエルフの存在を信じているらしい。

「まあなんだ。俺、多分エルフとか見たことあるからなんだろうけど、それにしても今回はちょいわざとらしすぎるな」

「そう？　でもちょっと会ってみたいな。そのイタズラエルフに……」

「イタズラじゃない！」

リヨカがくすつと笑うと、背後で女の子の声が響いた。驚いて辺りを見回すが、誰も居ない……かに見えた。

「誰？　どこにいるの？」

リヨカはキヨロキヨロしながらも武器を構える。

「危ないな……。武器なんてしまいなさいよ」

「でも、姿が見えないし……」

「もつと目を凝らして、感覚の目で見るの……」

「感覚の目って……」

「うふふ、嘘よ……。アンチレムオル……」

リヨカの前で光が人の形に散りばめられたと思ったら、知らない、紫の髪の女の子が立っていた。

イタズラっぽい二重の瞼と気の強そうな釣り目。鼻が高く、上唇のふっくらした感じの唇。なにか楽しそうで笑窪が出来ている。

彼女は腕組みをしたままりヨカに歩みよる。

「私はエルフのベラ。ベラ・ローサ。急で悪いんだけど君にお願いがあるの」

「僕にお願い？ いいけど……。そうだ、君がこの村でイタズラをしていたの？」

「ええ……。みんな気付かないから楽しくってね……。でも焼きたてのパンを消しゴム代わりにしたのは私じゃないけどね……」

「うっ……」

「坊主の悪さはしつかり筒抜けだわな。しゃーない、サンチヨにはこつてり油絞られて来い」

くくつと笑うシドレーと憂鬱になるリヨカ。ガロンは健気にも主人を元氣付けようと周りを走る。

「あのね、早速だけど実は妖精の村が大変なことになっているのよ。世界に春を呼ぶための春風のフルートが盗まれちゃって……」

「春を呼ぶための？ もしかして最近がまだ寒いのが……」

「そう。それが原因なのよ。で、なんとかしてそれを取替えさなきゃいけないんだけど、あたし達エルフ……。エメラルドエルフって言うんだけど、魔法とか好きだけど、戦いとか苦手なのよ。だから、人間の戦士に協力を求めているの」

「協力ってあんた……。そんなん坊主に頼まないで、坊主のパパさ

んやらもつと強い人誘えばいいんでないの？」

もつともな疑問を口にするシドレー。確かに子供にしては強いリヨカだが、戦士を生業としている者のほうが適任と言えるだろう。ベラはその問いに、難しい顔で頷く。

「それがね、エルフの里があるんだけど、そこが人間の……特に欲望に塗れた大人に知られると困るのよ。だから里に案内できるのはまだ欲の少ない子供に限られるの」

「なんじゃそりゃ……。そんな言うてる暇があるのかいな……」
「そうなのよ。でも、おえらいさんの方だと、まだ逼迫した状況じゃない、ルビーエルフの戦士を呼べばとかのんびりしたことばかり。もし春が来なかつたら植物は育たないし、人間の世界は大変なことになるわ……」

深刻そうな話なのだが、せこいイタズラをして回っていたベラを見てみると、それが伝わってこないところがある。ただ、彼女が必死であることは理解でき、最近の寒さにはリヨカも不思議だと思っていた節がある。

それに加えて自分を頼りにしてくれることが誇らしく見え、寝る前に読む「巡る世界のアルベルト」の主人公になったような気分だった。

「わかった。それじゃあ僕らはどうすればいいの？」

「うん。まずはエルフの里に案内する。捉まってる」

リヨカは差し出された手を掴む。ベラは片手で器用に印を組むと、大気中から時の精霊が集まりだし、二人と二匹は光に包まれる。

「ルーラー！」

そして、空へと消えた……。

16 妖精の里

リヨカが目を開けると、最初に飛び込んできたのは雪一色の世界。

「雪だ……、こんなに積もってるなんて見たことないや……」

「ぼつず〜！」

「なに？ シドレー……うわっぷ！」

リヨカが振り向くと小さい雪の玉が投げつけられる。鼻先で、もふつとはじけて冷たさを残す雪球に、リヨカも負けじと足元の雪で玉を作り、投げ返す。

「ふふん！ 当たるか、そんなひよろだま！」

シドレーはひよいとかわすも、続く玉がバスンと顔面に命中。

「やったな、坊主！ うりゃ、うりゃ！」

シドレーは雪の上に降り立つと、小さな手で雪をほいほい投げ始める。

「お、やるか！ どうだ！」

リヨカも同じくやり返すが……。

「きゃっ！」

その玉はベラにぶつかり、彼女は怒りにふるふると震えだす。

「このアホガキ共！」

ベラはそう言うつと足元の雪で玉を作り、リヨカに投げつける。

「はは、ベラさん、こちら！」

こうして始まった雪合戦。ガロンは雪の冷たさで震えながら、休める場所を探していた。

すると、そっとガロンを抱きかかえてくれる手があった。

ガロンは嬉しそうにその手の中で丸くなり、ごろごろと喉を鳴らす。

「あらら、可愛い猫さんね……」

青い髪の少女はガロンを撫でながら、未だに雪合戦を続ける二人と一匹のほうへと歩み出る。

「三人とも、子猫ちゃんが寒がっていますわよ。早く村に参りましょう……」

その呼びかけに、夢中で走りまわる彼らは気付かない。

「どうしたどうしたー！」

「きー！ まちなさい！ このバカとかけー！」

「ねえ、ベラさーん」

間延びした声は興奮した彼らを冷やすことはなく……。

「ほらほら、リヨカさんも」

シドレーに向けられた雪球が、少女のほうへと向かい……。

「きゃっ！」

顔面にぶつかった……。

ガロンは驚いて彼女のほうを見るが、その表情にぶるっと身震いすると、無理やりにもその腕の中を逃げようとした。だが、彼女はそれを許さず、なれた手つきで背中を撫でる。ガロンは寒さとは別の理由で震えていたが……。

「あ、ごめんなさい……」

「ご、ごめん！」

「いやな、このアホエルフがいけないんやで……」

二人と一匹は青いロングヘアーの少女に気付いたらしく、口々に謝りだす。

「リヨカさーん、ベラさーん、それにメラリザードさん？ ちよつといいですか？ お話しがありますんで……」

ぱらぱらと雪を払う少女はにっこりと微笑んでいるものの、額には怒りの四つ筋が浮かんでおり……。

「まったく、妖精の国が大ピンチというから来たというのに、ベラさんは雪合戦のお相手を探していたというのですか？ リヨカさんもメラリザードさんもそうです。春風のフルートが無いと人間界に

も春が来ないんですよ？　今はまだ肌寒いで済むでしょうけれど、季節はずれの雪が降った日には農作物に甚大な影響が出ます。飼料がなければ町と町、村を結ぶキャラバン隊にも影響が出るんです。そうしたら世界中で子供達がおなかを空かせることになるんですよ？　私達はその事態を解決すべきためにここに呼ばれたのでしょうか？　確かに一面の雪にはしゃぎたい気持ちもわかります。恥ずかしながら私も雪ウサギの家族を作っておりますし。けれどそれはベラさんがもう一人の戦士を呼ぶまでのあいた時間の暇つぶしです。今こうして戦力が集まった以上、すべきことは雪合戦のほかにはありませんか！？」

「……はい、すみませ〜ん……反省してま〜す……」「」

妖精の村の宿屋の隅っこにて、リヨカ、ベラ、シドレーは正座させられながら青いロングヘアの少女、フローラ・レイク・ゴルドスミスにお説教を受けていた。それもかれこれ小一時間。一体どこから叱る材料を持つてくるのか、彼女の台詞は多岐に渡り、しまいには古語、故事、最近の出来事に至るまでになる。

「あの……そろそろですね……」

恐る恐るベラがお説教の中座を求めるが……、

「まだ話は終わってません！」

とぴしゃりと一喝される。

リヨカは前にデボラが妹の説教を恐れていたことを思い出し、そしてそれを実感していた。

「いいですか？　……クドクド……。でしてね……クドクド……」

まだ終わりを見せない説教は、いちいち反論のしづらい言葉選びに三人ともすっかり消沈気味。

「……フローラさん、その辺にしてあげてはいかがかしら……」

ドアがキィと開き、青い派手さはないが豪華な服装に身を包んだ上品な女性がやってくる。

「ポ、ポワン様！」

ベラは慌てておでこを床にこすりつける。フローラもその威厳と

いづべきものを感じたのか、ようやく口を閉じた。

「ベラ。この方達が貴女の選んだ戦士なのですね？　なんとも可愛らしい戦士ばかりですが……」

ポワンはフローラ、リヨカを見ながらそう言う。

「はは、はい！　このリヨカはこの見てくれですが、この年にして独力で回復魔法、解毒魔法、それに真空魔法を覚えております。それに武器などの扱いにも精通しており、なにより地獄の殺し屋といわれるキラパンサーの子供を手なずけております」

その地獄の殺し屋の幼子は先ほどから暖炉の前でごろごろ寝返りをうち、店主から与えられたマタタビで気持ち良さそうにしている。「そしてあの……、本当はアンディという少年を連れてくるつもりでしたが、何かの手違いでフローラさんを連れてきてしまい……。直ぐに送り届けますので……」

「あら、ベラさんは私が戦士だと不服だというのですか？」

「いえいえ、滅相ありません。むしろ、私を含めても最強かと……」

先ほどの攻撃ならぬ口撃を見るにそうそう適う相手ではないと判断するベラ。むしろ別な理由で彼女を送り返したいのが本音だろう。

「私だつて回復魔法はベホイミまで使えますし、氷結魔法、爆裂魔法、火炎魔法も中級までは覚えておりますわ……」

「へえ、フローラちゃんは複数の系統の魔法を使えるんだ……」

リヨカは素直に驚いていた。彼も複数の魔法を覚えているとはいえ、攻撃系を複数に覚えるというのは至難のこと。というのも、魔法を放つに当たって必要なのはイメージ。

魔力を媒体に精霊を役する。真空なら風の精霊を呼び、炎なら火の精霊を呼ぶ必要がある。だが、その際イメージが伴わなければ正しく精霊を呼び寄せることが出来ない。例えば火炎魔法を使つた直後だと上手く他の精霊をイメージすることができず、氷結魔法に限らずほかの系統が使えないこともある。

普通、魔道士とされる者ならともかく、一般には一系統を覚えれ

ばそれで十分とされるのは、それが原因である。「ええ。そのうち真空魔法も覚える予定ですし、閃光魔法も初級なら問題ありません」得意そうに言う彼女は、普段姉の影に隠れる控えめな子に見えない。

「ただけど、女の子に危ないし……、アンディ君は剣も使えるから……」

ベラはなんとしても帰りたいらしく、仕切りに別の子の名を告げる。

「あら、ベラさんも女の子でしょ？ 貴女に出来て私に出来ないとも言つのかしら？ それに危ないならこそ回復魔法が使える私が必要になりませんか？」

「そうだね、僕も回復魔法はホイミしか使えないし……」

頼りにしていたリヨカにまで見放され、ベラはがっくり膝をつく。「そうですか……わかりました。ですがご無理はなさらぬようにお願いします。あなた方が傷付いて悲しむものも居ります事をくれぐれもお忘れなく……」

ポワンはそう言うと深くお辞儀をして、また元のように戻っていた。

ポワンの姿が見えなくなると、リヨカの影からシドレーが顔を出す。何かにおびえていたのか、その額には汗がうかんでいる。

「なんかすごい圧力だったな、あのおばちゃん……」

「そうなの？ 普通の優しそうな人じゃないか……ってエルフか」

「いやいや……、おい、ベラ。あの人、ただもんじゃないだろ？」

なんつうか、種族を超えているというか」

「……ええ……。少なくとも貴方ごときメラリザード、片手で灰に出来るわね……」

「ごくりと息を飲むシドレー。」

「ならおばちゃんが行けばいいんじゃないの？」

「それが出来たらそうしてるわ。このエルフの里は貴方達人間の世界のどこかに必ずあるのよ。人間達も人が増えれば新しい土地を探る必要がある。最近はまだより安全で、恵みの多い土地を求めているでしょ？ エルフの里をそういう人間達から隠すためには結界を張る必要があるのよ。それをしているのがポワン様。もしポワン様が見だりに動けばバランスが崩れて人に発見される恐れがある。だからポワン様はいけないのよ……」

「なるほどな……。まあ、しゃーないな……。よし、俺らでちよいとその何とかのフルートつてのを拾ってくるか……」

「ええ、まずはそれを盗んだとされる極悪非道の罪人、ザイル・シードをしょっぴいてあげるわ！」

こぶしを高高く掲げるベラにリヨカとフローラも「おー」と続く。ガロンはただ「にゃあ」と鳴いていたが……。

ザイルはホビットの親方と一緒に住んでいるらしく、村の西の庵

にいるとのこと。

リヨカ達は防寒具に身を包みながら向かう。特注の手袋というか足袋で四肢を防寒したガロンは元気よく荷物を載せたソリをひく。

「なあ、なんでルーラつかわんの？」

せわしなく周囲を飛ぶシドレーは自然な疑問を口にする。

「アンタだつてその葉っぱみたいな羽つかつてないでしょ？ もつと大きくてカツコイイドラゴンならあたし達皆を一度に運べるのにさ……、せいぜいトカゲのシドレーちゃんにはそれも出来ないもんね……」

「うっさいアホ！」

フンと火の息を吐くシドレーに、ベラは二ヒツと笑う。例のイタズラも本当にこの子の性格が原因なのだろうとリヨカは思えてきた。「でも、ルーラのような古代の魔法が使えるなんてベラさんもすごいですわね……。私達人間はある理由で禁止したそうですが……」

魔法に特別興味のあるフローラはふうとため息をつく。

「え？ 禁止したの？ どうして？」

「もともとルーラっていうのは、拠点を制覇することに起因しているのよ。今の世界は……人間の世界だけど、大陸ごとにある程度まとまっているわけ。けど、当然ながら火種は持っている。人が増えれば領土が必要になる。だから新たに土地を求め、場合によってはほかの国を滅ぼしたり従属させる必要がある。つまり、戦争ね」

「戦争……」

リヨカはその言葉を深くかみ締める。彼が生まれてから大きな戦争はなかったが、東のラインハット国では平和的な王が再軍備を行っているとかパスがサンチヨと話しているのを聞いた。

それが本当なら、西に位置するサンタローズにも、侵略の歩が向けられるのかもしれない。

「もしルーラなんてあつたら、斥候を走らせて大部隊を送ることができる。それは互いに同じことだけど、まあ千日手になりかねないってことよ。で、戦争を続けるにはお金やら兵站っていうか、単純

に食料とかが必要になるわけ。でも、働き手が槍をもって駆り出されるわけだから、その先に待ち受けるのは……」

「なるほど……」

荒れた田畑と悲しみに暮れる村人達。リヨカはこくりと頷く。

「で、そういったことを防ぐためにも人間達はルーラを禁止したの」「へえ……でも、昔はどうして平気だったの？」

「昔は……確かポワン様のおばあちゃんのおばあちゃんの頃なんだけど、地獄の帝王っていうのが復活してね、人間同士が争っている暇なんてない、協力する必要があったのよ。だからルーラで互いの繋がりを持っていたわけ。でも今は魔物の活動も比較的減って……」人間同士の戦いへと変遷した。エルフのベラでも言いにくそうに語尾を濁してしまう。

「嘆かわしいことですね……」

そう言うフローラは、意外そうにしていた。というのも、彼女はルーラが封印されたもう一つの理由を知っているからだ。

戦争の回避は表向きな理由だが、本当は経済界の圧力。経済を牛耳る方法の一つとして流通の掌握がある。

平地よりも危険で大型の水棲の魔物がいるというにも関わらず船を動かすのは、そうすることで商品の値段を維持できるから。

当然世界の富豪、十指に名を連ねんとしたいゴルドスミス家もまた、その恩恵にあずかっているわけだ……。

半分真実、半分流言であるルーラ封印の理由がエルフの里にも流れていることにフローラは驚きを感じていたのだ。

「んで？ その講釈と妖精のイタジャリがルーラで移動しないのはどういう理由なん？」

「それは……私がホビットの庵の場所を知らないからよ……」

「かく、そんな俺ら呼ぶ前に調べとけつての。そうすりゃわざわざ荷物ソリに乗っけて移動する必要ないじゃん……」

「う、うるさいわね！ っていうかイタジャリって何よ！」

「イタズラばかりするジャリん子だからイタジャリ。我ながらナ

イスなネーミングセンスだろ？」

「きく、誰がジャリよ！ アタシはれっきとしたレディだつてば！」

「はいはい、まだトマトリゾットも出されていないシヨンベン臭いジャリは黙っていてください」

また例の単語を出すシドレーにリヨカは疑問符を浮かべるしかない。だが、心当たりのあるフローラと今まさにバカにされたばかりのベラは顔を真っ赤にしている。

「いいでしょ！ エルフはそういうのが人間より遅いんだから！
ねーフローラさん！」

女の子というか人間の性徴を知る者ならばある程度見当の付く会話。振られたフローラはやや申し訳なさそうに俯くと一言。

「えと、私はもう……」

「え……もう？ 嘘、アタシより年下なのに……」

「その、ごめんなさい……」

何がごめんなのかわからないリヨカ。楽しそうに飛び回るシドレーと、真面目に走るガロン。ベラは八つ当たり気味に雪球を投げることが、空中を飛び回るシドレーに当たるはずもない……。

18 鍵の技法

村を出て三時間程たったころ、ようやくそれらしき山小屋が見えた。

看板には「デルトンのお家」とあり、近くの小屋の煙突から白い煙が上がっている。

「ここがザイルのアジトね！ 見てなさい。フルートを盗んだこと後悔させてあげるんだから！」

「まあまあ、落ち着いて……」

鼻息をあらげるベラを宥めるリヨカ。

「変ですね。極悪な罪人が隠れているにはあまりにも無防備すぎませんか？ 何か罠とか仕掛けているかと警戒していたのですが……」

庵の周りを見ながらフローラは言う。ここまで来るにいたって特別何かがあるわけでもなく、今こうして目の前にある小屋も危険のきの字も見えない。

「ん、それもそうね。よし、シドレー、あんたに名誉ある任務をあげる。私達はここで待機するから小屋の中を偵察してきなさい！」
「なにが名誉あるだよ……ったく……」

そう言いながらもシドレーは入ろうとドアを引く。だが、押してもびくともせず、しようがなく空へ飛ぶと、煙突のほうから入っていく。

しばらくして中の様子があわただしくなり始め、きいとドアが開く。

出てきたのはサンタローズの村にいたホビット、ドルトン親方に良く似た小男で、驚いた様子で目をぱちくりしていた。

「君ら、ポワン様の使者なのかい？ ザイルが春風のフルートを盗んだというのは本当かい？」

「ええそうよ！ 盗人のザイルを匿うのなら貴方も同罪よ！ さあ、神妙にお縄につきなさい！」

びしつと決めるべらだが、この雪の中歩いてきたせいか鼻水がずる……。

「とりあえず中に入りなさい。ここではなんだし……」

ホビットはとりあえず三人と二匹を小屋に招きいれた……。

「まあ、デルトン親方はここで鍵について研究を……」

白湯の入ったマグカップを持ちながら、フローラは驚いた様子で話を聞いていた。

「ええ、ただまあ、こういう研究でしょ？ 泥棒に使おうとするものが弟子入りしてくるので、しょうがなくこの小屋に移り住んだわけですよ。それをザイルが何を勘違いしたのかポワン様に追い出されたと言い出しましてね、それで仕返しをしようと行って出て行ったのです……。まったく困った弟子だ……」

ほつほと笑うデルトン親方はデルトン親方にそっくりで、違うところがあるとしたらおでこに大きなほくろがあることぐらい。

「ねえ親方。もしかしてデルトン親方の兄弟？」

「ドルトン？ これまた懐かしい名前だなあ。弟は元気になっているかい？」

「ええ。この前は爆弾岩に囲まれて大ピンチだったけど……」

「はつはつは、まだアイツも難儀な……」

笑い方はやや違うが、その仕草や雰囲気は良く似ている。これは兄弟だからなのだろうか？

「で、ザイルはどこに行つたのかしら？」

歓談になりかねない空気に、ようやく鼻をかんだべらが真面目な顔で切り出す。

「うむ。ザイルなんじゃが、ここにいないということはおそらく氷の女王の城かもしれない。いくら春風のフルートが奪われたとはいえ、今回の猛吹雪が説明できん。おそらくザイルの奴、女王にそそのかされて奪ったのかもしれない」

「氷の女王？」

まるで童話の中の話。いや、エルフの里という時点ですでにそんなのだが、「巡る世界のアルベルト」にも光の巫女の故郷を荒らす悪い魔物として出てきたのを思い出す。

「また厄介な奴が出てきたわね。せいぜい冬の間だけいい気にしていればいごものを！ エルフの里に二人も女王が要らないことを教えてあげる必要があるわね！ それじゃあいくわ……は、は、はくしょん！」

盛大に噴出した鼻水は空を飛んでいたシドレーをしつかりと捉えて……。

小屋を出て氷の城に向かう一行。

リヨカは印を組み、先ほど教えてもらった新たな「技」を練習している。

ガロンは相変わらずけなげにソリを引き、シドレーはその上で転寝。

フローラは顎に手を当てながら考え事しており、それはベラも同じ。

坊やに特別に『鍵の技法』を教えよう。これは簡単な鍵を開けてしまえるという特殊な技法なんだ。いわゆる禁止魔法の類じゃな。まあ、なんだ、あまり行儀の良い技ではなくてな。坊やみたいな心の清らか……というと色々語弊があるが、不思議と澄んだ目をしている子なら教えてあげてもいいと思う。本当ならワシが行けばよいのだが、生憎ぎっくり腰で寒さが堪えるんじゃ。いや、それだけじゃない。これは付け足しみたいに聞こえるかもしれないが、坊やにこそこの技法を教えるべきなのではないかと思えてな……。そう、かつてある賢者が馴染み深い塔にて盗賊から万能な鍵を奪ったことがあっての、じゃが使い道がない。しょうがなく昼寝をしてい

たら、ある勇敢な若者がある日訪れる、その者にこそ鍵を渡す必要があるとお告げじみた夢をみたそうだ。実はわしも最近変な夢を見てな、素朴だがやや女子にだらしないう少年にそれを渡すという夢なんじゃよ……。あ、いやいや坊やが女性にだらしないうつもりはないぞ？ ただまあ、ほら、可愛い娘さんたちに囲まれておるし、そういう意味では夢の通りじゃし、まあそのなんだ、とりあえず、ザイルのバカを正気に戻してやってくれ……。

「……鍵の技法がもしアバカムのような禁魔法の類なら……」

フローラは神妙な顔つきでぶつぶつと独り言。

「もう、どうしてあたしに教えないのよ！ 人間の子供に教えるなんてデルトン親方もどうかしてるわ！」

当然といえば当然。わが身を振り返れば納得いくことなのだが、どうにも当人にはそれがわからないらしい。

「そんなん当然だろ？ イタジャリなんかに教えたらイタズラに使われるっての……」

眠そうにそう呟くシドレーには雪の玉が投げられ……。

「でっかいな」

氷の城を前にして、リヨカは呟いた。

雪の降りしきる中、轟然と佇む氷の城。扉も城壁も全て氷であり、屈折率の違いのせいで七色に輝いている。

いかんせん氷のためか、中の様子がうつすらと見え、玉座と思しき場所には誰かが宝箱片手にいるのが見えた。

「あれがザイルね……。よし、いっちょシドレー、アイツに火炎をおみまいして！」

これまでの旅路の寒さ、疲労、それに鍵の技法の件について不満たらたらなベラはシドレーに言う。

「無茶言つな。なんぼ透けてる言つても、あそこまで炎が届くかいな。せいぜい壁をちよつと溶かして終わりだつての……」

小さく炎を吐くと、壁の一部が少し溶ける。だが、溶けた水もしばらくすればまた凍りつく。

「さて、それじゃありヨカさん。鍵の技法で扉を……」

フローラに促されて城門に出るリヨカ。ただ、彼女の嬉々とした視線の前でどうにもやりづらいのが本音。

「ま、いつか……」

リヨカは親方に教えてもらった印を組むと、雪の下から大地の精霊の力が集約されていく。

「大地に眠る悪戯な精霊よ、我は彼の者の戒め破らんと願うなり……、戒めを解け、……アガム……」

リヨカの声に合わせて精霊達は城門の鍵へとまとわり付き、そして開錠の音が聞こえた。

やはり禁魔法、アバカムの類なのね……。ルカ二に似た印だけど、デルトンさんはおそらく簡易型しか発見していない。これでは魔法による鍵を開錠することは無理かしら……。

フローラはリヨカに隠れてみよう見真似で印を組む。すると、それをシドレーに見られたので、笑顔で誤魔化していた。

「さて、そんじゃいくべか」

シドレーはのんきにそう言い、城門を潜った……。

19 氷の城

氷の城の廊下は当然氷。気を抜くとつるつるすべり、そのたびに壁にぶつかつたり転んだり。

城の中央では彼らの侵入に気付いたのか、玉座にいる覆面を被った少年が、その様子を指をさして笑っていた。

「きい、絶対に許さないんだから！」

今ぶつけたばかりの額を摩りながら、ベラはザイルと思しき存在に毒づく。

迷路のような、それも透明で、行けるようで辿り付けない城を練り歩き、最後には交代で左手を壁に添えて玉座を目指した討伐隊。

徐々に盗人の笑い声が近くなり、玉座への道であるう門の前にたどり着いた。

「よし、リヨカ、お願い！」

「う、うん！……アガム！」

二度目ともあり、省略しながら魔法を唱えるリヨカ。比較的初級の魔法のおかげで直ぐに使えるようであった。

扉はギシッと音を立てた後、氷の床を滑るように開き、そのまま外れてしまう。

「うは……あぶね……」

倒れてきたドアが氷の壁につつかえることで、なんとかかぺしゃんこを免れたシドレーはほっと一息。

ベラは門を飛び越え、玉座に続く赤い絨毯に立つ。

「なんだお前ら！ ここをどこだと思ってるんだ？ ここは氷の女王様のお城だぞ！ 控えろよ！」

玉座の少年は手斧をぶんぶん振り回しながら喚いているが、ベラは怯む様子なく啖呵を切る。

「そつちこそ神妙になさい！ 世界に春を呼ぶための春風のフルー
ト！ それが無いおかげでどれだけの人が迷惑していると思ってい
るの！」

「へんだ！ ポワンがデルトン親方を追い出したのがいけないのさ
！ 親方が帰るまで俺は絶対に返さないぞ！」

「なにをバカなことを！ デルトン親方は研究のために庵を移した
つて言ってるでしょ！？ 全部あんたの勘違いなのよ！」

「嘘だ！ だって、氷の女王様が……」

「何が氷の女王よ！ 春を来させないことで力を伸ばしたいだけの
小物でしょ？ アンタは騙されてるのよ！」

「俺が騙されてるって、証拠あるのかよ！」

「そんなの、周り見ればわかるでしょ？ 冬が長引くことで得する
人なんているわけないじゃない！」

「けど……だって……」

彼もこの寒さに辟易しているのか、身震いしながら白い息を吐く。
「その寒さだって、氷の女王のせいなの！ いい？ もう一度言う
けど、アンタは騙されているの！」

「嘘、嘘だ……そんなの……」

かじかんだ手は斧を持つ力も入らなくなったらしく、コロンと氷
の床に落ちると、そのまま慣性に従って滑る。

リヨカはそれを拾うと、ゆっくりとザイルに近寄る。

「ザイル君、大丈夫？ 手がこんなにしもやけになっちゃって……。
ほら、デルトン親方からもらってきたヌーク草の実。これを食べる
と温まるよ」

「ん、あんがと……」

ザイルはかじかんだ手を白い息でふーふーしながら、リヨカから
ヌーク草の赤い実をもらう。それを噛み締め、「辛い」と呟く。

「ベラの言い方はケンカ腰だけど、でも春が来ないのはおかしいこ
とだよ。本当なら今頃いるんな草花が芽を出すはずなんだ」

「けど、ポワン様が親方を……。あんな寂しい場所で一人なんて……」

…
「親方の家にも鉢植えがあったよね？ あんまり寒いとどれも芽が出てない。そしたら親方だって寂しいと思うよ」

「うっ……うっ……」
リヨカの優しい物言いに素直に反論しづらいザイル。斧を受け取る手を握られると、その温かさがかじかんだ手をかゆくさせる。

「それに、今こうしてお弟子さんのザイル君が親方の庵を飛び出したら、もっと寂しいと思うんだ。たとえポワン様が追い出したにせよ、せめて君だけは一緒に居てあげて欲しい」

しばらく黙り込むザイル。

最初はいらいらしていたベラも、リヨカの雰囲気ふうとため息を着き、表情からも険しさが消える。

「そっか、俺、親方のことも考えないで皆に酷いことしてたのか…」

ザイルは覆面を取り、生意気そうな瞳でリヨカを見る。いがぐり頭の少年は、まだまだ悪戯盛りの子。ちょっとした優しさの誤解でこうなってしまったのだろう。リヨカもかつて似たようなことをしてパパスに叱られたことを思い出し、くすつと笑う。

「笑うなよ……」

「ゴメン。でも、まだ僕らの世界はそんなに影響が出ていないけど、これが続けば取り返しがつかないことになるかもしれないんだ。だから……ね？」

「うん。わかったよ。俺が間違ってた……」

ザイルはそう言うつと斧を背中にしよいなおし、玉座に乗せていた宝箱から宝石の散りばめられたフルートを取り出す。

「これ、返す。そして俺、ポワン様に謝るよ」

「うん」

ザイルの素直な言葉にリヨセは微笑みを返す。

「ふん！ 正義は勝つ！ 当然よ！」

ベラはこの成り行きが良い方向に向かったことで、腕組みをし

ながら高笑いをする。
だが……、

20 凍りの女王

ほーっほっほっほ！ やっぱり子供だねえ〜！ 大人しく騙されていればいいものを！ 見てなさい春なんか来させやしないんだからね〜！！

一陣の風、いや吹雪がリヨカとザイルの間を縫ったと思うと、それらが集まりだし、人の形を成す。

「うは、寒いで〜！」

ふわふわした粉雪の青いドレスに身を包む女性。美しくも冷たいその存在は、右手にフルートをしかと持っている。

「お前が氷の女王ね！ 愚か者のザイルを謀り、春風のフルートを奪った罪、今ここで裁いてあげるわ！ ポワン様の懐刀、知識の探求者にして深遠の好奇心、ちよっぴりおしやまな女の子、エメラルドエルフの……って、ちよっつと待ちなさいよ！」

「ぐるるる……」

真の悪の登場に、ベラは再び啖呵を切ろうとするが、その脇をガロンが走りだし、小さいながらも鋭い牙を剥く。シドレーも口上の終わりを待つことなく先手必勝とばかりに、大きく口を膨らませ、火炎の塊を放つ。

「ぐっ！ まずいわね〜」

ガロンの牙を左腕で払いのけるが、続く炎の塊には冷や汗も凍るほど。女王は咄嗟に作った氷の盾でそれを弾く。盾は炎の威力に圧され気味で、一瞬にして半壊していた。

「今だ！」

リヨカは間髪いれずにブーメランを投げる。それは右手首を強く打ち、フルートを落させる。

「いただき！」

ちよこまか動いていたベラはフルートを拾い、扉へ走る。

「みんな！ 逃げるわよ！ これさえポワン様のところに戻れば女

「王も力を失うわ！」

勝利の予感に喜びの声を上げるベラだが、皆表情が暗い。

「出られたらの話かな……」

リヨカの言葉の直ぐ後に、扉のほうで破裂音がした。

玉座と廊下を結ぶドアが崩れ、さらにその外側でも起こっているらしく、うつすらと見える第一の城壁が崩れ、出口を塞いでいた。

「お前達さえ逃がさなければ春風のフルートはポワンの元へいかな。そうすればこの世界は永遠の冬になる。私の時代よ！ あの忌々しい姉さんだって手が出せない、氷の楽園をつくるのよ！」

「まあ、恐ろしいことですわ……」

わざとらしい驚いた口調で言うフローラが前に進み出る。彼女は、そつと両手を広げると、大きな火炎の玉が二つ作り上げる。それが空中で合わさると先ほどシドレーが放ったそれよりも一回り大きなものになる。

「なっ！ なんじゃそりゃ〜！」

「メラミ？ いや、メラゾーマ？」

ベラはその塊に冷や汗を垂らしながら呟く。せいぜい詠唱の仕方を知っている程度だろうと高をくくっていたベラだが、中級というには申し分ないどころでない迫力に気圧される。

「ただのメラですわ。でも、両手で出すとこんなに大きくなって、物騒ですわね……」

ふつと困ったようにため息をつくフローラだが、彼女を除くほとんどの者がありえない大きさのメラ（×2ではあるが）に驚きを隠せない。

「そ〜れ！」

「ひ！」

無情にも投げつけられた火焰球は、ものすごいスピードで女王へと向かう。再び氷の盾を作るが、それらは触れると同時に蒸発してしまふ。

「ぎゃああああああ〜！」

そのまま体の半分を持っていかれた女王。それでも火焰球の勢いは衰えず、城の屋根をぶちやぶつて外へ消えた。

「あらあら、粉雪のお召し物が台無しですわね……。私、夏に一着欲しかったのですが……。諦めますわ……」

「き、きい〜」

美しく切れ長の瞳が大きた見開かれ、白目が充血しだし、黒く変わる。歯軋りをする口元が耳まで裂け、剥きだしになった犬歯が鋭く光る。顔の中心に皺が寄りはじめ、一瞬にして女王の仮面が破られた。

女王は彼我の明らか過ぎる戦力差におびえ、歪み、魔物の性分ともいえる醜い顔を見せたのだ。

「わ、わあ！ 化け物だ！」

ザイルはリヨカの背後に隠れがたがた震えだす。

「よくも私の服を、城を、半身を……！ お前だけは許さない。お前だけは氷付けにして、ばらばらにしてやる！」

そう叫ぶと女王はかなりの勢いでフローラに突進する。

「バカやな〜、あの威力を見てまだ行くんかい……」

のんきに呟くシドレーは、勝利を確信しながらフローラを見る。

「それが……、先ほどの魔法でこちら辺の火の精霊さん達がいなくなっってしまったして……、連発は無理ですわ」

窮地であることを臆すことなく語るフローラに、再び啞然とする面々。女王のみがにやりと笑い、氷の槍と化した右腕を構え、フローラに襲い掛かる。

「ですが……、氷の精霊さんならいくらでも……」

「バカが！ 雪の女王に氷が効くとお思いかい？ そのお花畑な脳みそぶちまけな！」

「あらあら、そんな言葉遣いだとお里が知れますわ……」

「やれやれといった様子のフローラは空中で円を描き「ヒヤダルコ」と呟く。

それは氷結系の中級魔法ではあるが、たとえどんなに魔力の差、

錬度があるうと、氷の魔物に効果があるとは思えない。

「フローラさん！」

リヨカは臆すことなくカシの杖を構えると、彼女を庇おうと前に出る。

「大丈夫……」

だが、それは軽い真空魔法で弾かれてしまう。一体何が大丈夫なのかわからないリヨカだが、それは数秒と経たずに理解できた。

氷の槍を構えた女王が空中で、フローラにまったく届きそうに無いところで止まっていたのだ。

「な、なんだ！ バカな！」

なんと氷結魔法が氷柱をなし、女王の体を捉えていた。

「本当は氷の中に留めてしまおうと思ったのですが、意外とスピードがありますわね？ それとも私の詠唱が遅いせいかしら？」

フローラは女王が動けないことを確かめもせず、近寄ると、さらに氷の精霊を集めだす。

「ぐ、まさか、氷の、私は氷の女王だぞ！ なんで氷に！？ まさか……私が……！」

断末魔の悲鳴を上げること赦されず、氷漬になる女王。完全に氷柱に閉じ込められた彼女はもう身動きを取ることもないだろう。

彼女が望まぬ春が来ようとも……。

「嘘……、だって氷の女王だよ……」

「氷の女王を名乗られましても水妖マールのように氷を使役できるわけではないでしょう？ 風邪を引かないようにお気をつけ遊ば

せ……は、は、くしゅん……」

寒さのせいかわいらしいクシャミをするフローラは照れたように鼻をかむ。

だが、彼女がそんな可愛らしい存在とは誰も思えないわけで……。

扉を壊された氷の城からは、フローラの開けた大きな穴からル
ラで脱出した。

けれど、寒さと疲労で魔力が乏しいベラでは里まで飛ぶことがで
きなかった。

ソリを引くリヨカとザイルとガロン。乗るのはフローラとベラの
女の子二人組み。

勝利の凱旋には、今しばらく労働がつきまとうらしい。

「でも、フローラさんすごいね。あんなに魔法が使えるなんて思わ
なかったよ」

「ええ、けれど、私一人ではどうにもなりませんでした」

「またまた、謙遜しちゃってえ！ このバカトカゲなんかよりずく
つとすごいわ！」

「はん、前口上に忙しくて何もせんかったお前が言うな。それにま
あ、俺の炎のおかげやろ？」

リヨカの肩に止まるシドレーがボソツと言うと、ベラがむきにな
る。

「何が俺の炎よ！ 全部このフローラ大先生のおかげじゃない！

ああん、私は最初からずつとやれる子だって信じていました！ 貴
女を見たときからきつと名のある大魔道士の卵だと！」

目をきらきらさせるベラに、フローラは落ち着いてと手をかざす。

「シドレーさんは気付いておられたようですので種明かしをします
が、あの場で火の精霊を集めるなんて無理です。けれど、シドレー
さんが炎を吐き出したおかげで私、そこに集まってきた精霊を誘導
しましたの。それに、リヨカさんや皆さんの奮闘のおかげで魔力を
練ることが出来ましたわ」

その言葉にリヨカとベラはへーと頷く。

「あれはメラゆうか、あそこにいた炎の精霊を集めたわけやな。俺

の炎にお嬢ちゃんの魔力を上乗せしたって感じか？」

「ええ、ご明察です。ですから、メラではありますわ」

「んでも、なんで炎で倒さなかったの？」

「あの状況だと、女王は外に逃げられます。そうなると私達のほうがずっと不利になります。それならいつそ閉じ込めてしまえばいいと思ひまして……、それで氷柱に封じ込めましたわ。もちろん、彼女に氷を打ち破る力がありましたらお手上げですけどね……」

「んでもま、俺が火を噴けば、また使えるんだけどな……」

「ほつと炎を噴いてみせるシドレーだが、ベラは調子に乗るなと頭を叩く。

「でもすごいや。魔法って本当に強力だね！ 僕もちゃんと勉強しないと……」

「ええ、ですが、魔法には脆弱性があります。いくら威力がありますしても、それを練るまでの時間があります。そして、その間に攻撃されたら私のような弱い者など倒されてしまいます。それらを守る戦士というのは、やはり戦いにおいて重要なポジションなのでわ」

「ふうん……」

「ですから、リヨカさんも魔法に拘るのではなく、守ることも勉強することも重要なのです」

「うん。わかったよ。ありがとう。フローラさん」

「はい」

にこりと笑うフローラにリヨカはやや照れてしまう。

「ね、講釈もいけど、お前もちゃんとひっぱってよ」

そんな中、ガロンとソリを引っ張っていたザイルは泣き声をあげていた。

「ま、おまんが余計なことしなければ今回のこともないわけやし、罰だわな……」

「お願いだよ！ 手伝ってよ」

「ははは、がんばろうね、ザイル！」

リヨカはそう言うと、綱を肩から背負い、ソリをぐんぐんと引っ張った……。

春風のフルートが奏でる音色。それは世界に春を知らせるもの。雪を降らせていた暗い雲が流れ、暖かな日差しが差し込む。

それはエルフの里にも、人の世界にも広がるであろう。

リヨカの足元の、雪解けをしていた地面ではむくりと小石が持ち上げられ、寝坊を取り戻そうとしているのか、双葉がわかれ、どんどんと芽吹いていく。

それはまるでおとぎの世界の話だが、触れることでそれが真実であるとわかる。

「うわゝ、すごい……」

「本当……、生命、植物の神秘を感じますわ……」

リヨカは思い出したように道具袋を開けると、持ってきていたスケッチブックと貴重なカラーコンテを取り出す。

「僕、この絵を描くん。そしてあの女の子にあげないと……」

「あのアンとか言う生意気な青ジャリか……。一体何者なんじゃろな？ 俺のこと知ってるしで、気味悪いわ……」

「誰が気味悪いの？」

シドレーがぶつくさ言っていると、青い髪のおかっぱの、青いリボンをつけた女の子が笑顔でやってくる。

「わ！ 出た！」

「アンさんだ。今描いているんだけど、どうしようかな……」

リヨカはまだ描き始めたばかりの絵を見て手を急がせる。

「んーとね、この前描いたものでいいの。えとえと……」

アンはリヨカのスケッチブックを開くと、ごそごそと探し始め、そしてこの前書き上げたサンタローズの洞窟の絵を選ぶ。

「え？ これでいいの？ 他にももっと……」

「ん、お……リョカさんの絵はステキだけど、順番があるの。それで、本当は全部もらいたいんだけど、そうすると他の……んと、私も困っちゃうのよ……」

「そうなんだ。はい、君にあげるね……」

「うん、ありがとう」

アンは礼儀正しくお礼をすると、絵をくるくるとたたんでリボンで結ぶ。

「なんや、この前と違ってえろう素直じゃな……。それになんかちっさいし……？ 縮んだと違う？」

サンタローズで会った時の生意気そうな雰囲気がなく、ニコニコするアンを不思議そうに見つめるシドレー。

「え？ あ、あはは……シドレーさん、そんなことないよ……」

そして、その丁寧な口調にも、首を傾げてしまう。

「自分、この前俺のこと呼び捨てにしてなかった？ まあ、さん付けのほうが気分悪くないけど……」

なにか引つかることがあるらしく、シドレーはくるくる空中で回る。するとそれに気付いたガロンが何かの遊びなのかとじゃれ付き始めた。

「あは！ ちっちゃいガロンだ。可愛い！」

女の子はシドレーにじゃれたいガロンを抱き上げると、頭をなでなでする。

「なんじゃ？ お前、ガロンのことも知ってるのか……？ こうなつてくると、ますますわからんな……。俺の昔の知り合いってわけでもなさそうだし……」

「まま、いいからいいから……」

追及にギクリとしたアンは、ガロンを手離してしまい、ガロンも急に落されたせいで着地に失敗してしまう。

「あらあら、ガロンちゃん、乱暴に扱っちゃめーですよ？」

ガロンが走った先にはフローラが居り、やっぱり抱きかかえながら戻ってくる。その手には何か本を持っている。それはかなり古臭

く、そして厚いのがわかる。

「フローラさん、それは？」

「ええ、今回のことでごほうびをいただけると聞きましたので、魔法に関する本を一冊借りましたの……。読み終わりましたらベラさんが別のを届けてくれると仰るので、うふふ、らっきーですわ」

本を掲げながら嬉しそうに微笑むフローラ。するとアンは驚いたようにリヨカの後ろに隠れる。

「どうしたの？ アン……」

「えと、その……」

「まあ、貴女も呼ばれたの？ 本当にベラさんたらそそっかしい人……」

ふうとため息をつくフローラは彼女に歩み寄り、その顔を覗き込む。

「アンさんでしたか？ もう怖い氷の女王はこのお兄さん達で退治しましたから、安心して下さいいね？」

「は、はい、ありがとうございます！」

にこつと話しかけるフローラと対照的に、アンは直立不動の敬礼しかねない様子で言う。

「あら？ このリボン……」

フローラは彼女のおかつぱの髪を結っているリボンを見て呟く。

「こ、これ、お母様から頂いた大切なリボンなの……」

「そう。私のお気に入りなのと似ているから、つい……」

「へへ、そ、そうなんですか……とてもセンスがいいものだから、多分流行っているんですよ！」

「変ね。これはヅルトン工房で親方さんに特別に刺繍してもらったものなんだけど……」

「あ、いや、だから、多分イミテーションと言いますか……」

「イミテーション？ ふふ、おかしなことを言うのね。リボンにそんなことをする必要があるのかしら？」

何か言うたびにボロが出るアンは、しどろもどろになりだす。さ

らにはシドレーの半眼もあり、焦っていた。彼女はリヨカに助け舟を求めるかのような視線を送り出す。

「あ、フローラさん、妖精の村から帰るまえに何かお土産を買っていこうよ。ほら、エルフのお守りとかいろいろあるみたいだよ？」

リヨカは大振りでフローラの視界を遮り、彼女の肩を押しながら露天へと送る。

「あ、ありがとう……」

「ん〜ん、この前失礼なことしちゃったお詫び……」

キスのことを思い出すリヨカだが、アンはなんのことかわからない様子できょとんとしていた。

「とにかく、フローラさんは引き受けるから、アンはもう行きなよ

……」

「はい！」

不自然に素直なアンは、そう言つと宿屋の陰へと走って消えた……。

「へえ……姉さんにも何かお土産を買っていこうかしら？　ねえ、

リヨカさんなら姉さんにどれが似合うと思います〜」

「きつと赤いものが似合うと思うよ」

デボラのことを思い出すとややげんなりするところもあるが、フローラのお小言を思い出すとまだデボラのからつとした態度のほうが懐かしく思えるから不思議だ。もちろんそれを態度に表せば、きつと帰宅時間が大幅に遅れるのだから……。

「ただいま、サンチヨ！　おなせ空いたけど、夕飯はまだ！？」

家に帰つたりリヨカはいの一番に台所にいたサンチヨに声を掛ける。

「夕飯ともうされましても、まだお昼を食べて二時間程度ですよ？

お腹が空かれたようならおやつを用意しますが……」

そう言つてサンチヨはフライパンを温めます。

「……ねえシドレー。もしかして妖精の国と僕らの世界じゃ進む時間が違うのかな？」

「……どうだろうな？ まあ腹時計で確認する限り、そうらしいが……」

「こそこそ話をする二人。五分と待たないうちにホットケーキの香ばしい香りが漂い始める。」

「うわーい、サンチヨのホットケーキは綺麗な狐色なんだよ！」

皿に盛られたケーキはこんがり狐色の円を描いている。

「うは、こんな風に綺麗に焼けるとか、あんたプロだな！」

「いったただきまーす！」

二人は口々にそれを頼張る。だが、その笑顔は一瞬にしてくずれ……。

「に、にがーい！ なにこれ、苦いってば！」

慌てて水を飲むリヨカにシドレー。一体なにを間違えればホットケーキが苦くなるのか？

「今朝のことなんですけどね？ 朝食に食べようと思っていたパンがミミだけを残して……」

「ご、ごめんなさーい！」

リヨカは今朝の軽率な自分を、ちよつと、いやかなり、反省していた……。

+ +

「フローラ！ 一体どこに行っていたんだい？ 外で魔物に襲われたのかと思って心配したよ……」

フローラがサラボナの街に戻り、噴水の傍で佇んでいると、金髪の少年が慌てて走ってくる。彼の名はアンディ・ラーズ。ラーズ商会の一人息子で、フローラの幼馴染だ。

金糸で刺繍のされた服は品のよい調和を誇っており、年のわりに大人びている風もある。

「ええ、ちよつとイタズラな風に誘われまして……」

「風に？ そう……でも急にいなくなったりしないでくれ。僕は君にもしものことがあつたら心配で心配で……」

ほつとした様子で肩をすくめるアンディ。

「ええ。ですがきつとアンディなら私のことを守ってくれると信じていますわ……」

フローラは彼の左やや後ろに立つとその腕を取り、

「頼りにしておりますわ、アンディ……」

そう呟く。

「ああ、君が困っていたら僕は何をも省みず、きつと助けにいくよ！」

そう誇らしげに語るアンディの背後でそつと覺えたての印を組むフローラ。そして……。

「……大地のイタズラな精霊よ……、えい、アガム！」

彼女がそう言うと、かちやりと音を立ててアンディのベルへのバツクルが外れ、ずさつと落ちてしまふ。

「わわ！ なんだ！」

慌ててズボンとパンツをあげようとするアンディだが、可愛らしい象さんはしつかりとフローラの目に焼きついており。

「まあ！」

彼女は頬を赤らめながら口元を両手で覆う。それはもちろん、笑っていることを隠すため。彼女が鍵の技法を教えてもらえなかった要因だろう……。

22 不思議な時にアニス

妖精の里の事件を解決してから一ヶ月たった頃、サンタローズの村にもようやく若葉が生い茂る。

リヨカはその様子を絵にしてアンに贈ろうと思い、いつものようにスケッチブックを持って出かけていた。

外に出るのは気分転換と父の調べ物の邪魔をしないため。人気の無いところに行くのはリヨカが邪魔されないためと、アンを待ためた。

サンタローズに滞在している間に妖精の国、レヌール城、村の北の洞窟、サントフィリップ号の船室など色々描いてきた。そしてリヨカが描き上げると、例の女の子がやってくる。それも決まって人がいないときだった。

不思議なのはその態度で、礼儀正しいときや妙に不機嫌だったり様々。しかも数週間程度なのに雰囲気は幼かったり大人びていたりと、とにかく不思議な女の子だった。

変な子。

リヨカはそんなことを思いながらコンテを持つ。

ガロンはシドレーを追いかけて遊んでいるので、写生に集中できる条件がそろっていた。

だが、今日は別の誰かがやってきてらしく……、

「元気？」

ずっと前が暗くなり、視界が誰かの手で覆われる。

「わ!?!」

リヨカが驚いて後ずさりすると、今度は柔らかな刺激が後頭部に触れる。

無理やり上を見上げると、少し前に窮地を救ってくれた、あの端正な顔があった。

「あ、アニスさん……」

「ごきげんよう。リヨカ」

アニスはリヨカを正面に向き直らせ、そのまま抱きしめる。同時に甘い花の香に包まれ、思わず鼻息を荒くしてしまうリヨカ。

「わわ！ アニスさん、苦しいよ！」

口ではそう言うが、春の日差しと相成って柔らかな心地よさに抵抗する気持ちを失い始める。そして……。

あつ、また……。

最近よく起こる身体の変化。

おしつこに行きたいわけでもないのに、おちんちんが大きく、固くなること。何度もトイレに行つては出ないのを確認するのが最近の朝の日課。気恥ずかしさからサンチヨはパパスに相談することもできず、リヨカは困っていた。

「アニスさん、苦しいよ！」

現象を知られたくないリヨカは慌てて彼女の肩を押して距離を取る。だが、締め付けの緩いズボンではそれが隠れることなくパンパンにテントを張っていた。

「なにしとんじゃ、シヨタコン娘！」

ぼつつと大きな火炎がリヨカの背後から走る。

アニスは瞬間、指先を光らせて空中に文字を書く。精霊に呼びかける方法は何も印を組むことや声で求めるだけではない。精霊文字を空中に魔力で描くというのは高レベルな魔法使いにのみ可能な技であり、当然リヨカには何をしているのかはわからなかった。

次の瞬間、リヨカとアニスは光の衣に包まれる。それは火炎の勢いを弱めることができるらしいが、それでも火の手はアニスに襲い掛かる。

「ほんと邪魔の、このホモトカゲ。バキマ！」

アニスはやはり指先の動きみだけで風の精霊を使役する。その場で突風が起き、弱まった火炎はそのまま消えていく。

「おい坊主。そいつから離れる。アブナイ奴だ」

パタパタと羽ばたきながらリヨカの肩に止まるシドレーは、身振

りも踏まえてリヨカを急がせる。

「え？ でもアニスさんは僕らのこと助けてくれたし……」

「そうじゃない。そういう意味じゃないほうのアブナイだ……」

彼はアニスに敵意というよりは、胡散臭いといった視線を投げている。

「まったく……。この前のちゅーといい、おま、本気の変態だな？」

「あら、人聞きの悪いことを……。私はただ可愛い男の子の穢れな身体に興味があるだけよ？」

「はん！ 包茎の恥垢だらけのちんちんのどこが穢れてないんだか！」

「ちよつと二人とも、やめてよ……。あぶないよ……」

恩人であるアニスと友達であるシドレーがぶつかるのはあまり好ましいことではない。さらに言えば殺傷能力のある炎を吐ける竜と、それを軽減するどころかかき消してしまっほどの力を持つ魔法使い。この静かなアトリエが荒地になりかねない。

リヨカは二人の間に割って入り、そのにらみ合いを止める。

「ごめんなさい。リヨカ……。その、ちよつと私もおかしかったわ

……」

「……ま、坊主が言うならやめるけど、変な大人にほいほいついていくなよ？」

「アニスさんは僕のことを心配して……」

「それより先にシヨタコン娘の頭を診てもらえっの……」

「忌々しいトカゲね……。まったく……」

ケンカこそ終わったものの、やはりこの二人も仲が悪いらしく、互いに睨み合っている。

一触即発な雰囲気、リヨカは何か話題をそらせないかと思案にくれた。

「あ、そつだ。絵のことですか？ えつと、今も描いていますけど……」

ようやく思いついた話題だが、シドレーが彼の前に出て、フンと

鼻を鳴らして腕を組む。

「こつ見えてうちのリョカ画伯大先生は忙しいんやけどねえ、邪魔せんといてくれますか？ アンとかいう青ジャリの仕事間に合わせなあかんし、仕事のほうなら受付のガロンを通してくださいね」

いやみつたらしく言うシドレーだが、遅れて走ってきたガロンは、アニスに警戒することなく近寄っていく。

「あらガロン。ご機嫌ね……」

アニスにはガロンを抱き上げると、そのまま胸にだく。ガロンもその扱いが嫌ではないらしく、ごろごろと喉を鳴らす。

「まさかガキならなんでもいいんか？」

「違うわよ。ガロンはまあ……、そうね。なんでか私にも懐いてくれるのよ。ねーガロン」

ガロンを見るアニスの視線は彼女の言う穢れのないものであり、とても子供っぽいところがあつた。

「ん？ なんでお前ガロンのこと知ってるん？」

ふと首を傾げるシドレー。リョカもその指摘に「そういえば」とアニスを見る。

「え？ だつて……今、シドレーが言つてたでしょ？ ガロンさんを通してくださいねって……」

アニスはシドレーの口真似をしながら言うが、シドレーは不満気味。

「普通、受付通せつて言われて猫がガロンだと思うか？」

墓穴を掘るアニスは目を泳がせながら「まあ、そういえばそうね」と言い訳が見つからない様子。

「ねえ、それより今日はどうしてきてくれたんです？ 僕この前のお礼も全然だし、そうだ。サンチョにパンケーキを焼いてもらつよね？ 一緒にお昼を……」

また険悪なムードになりかねないとリョカは慌てて話題を換える。「ええ、それは嬉しいんだけど、でもちよつと別に用があるのよ……」

……」

「なんだ？ チンコ見せろってのか？ この変態女が……」

「ちが！ そりゃまあ……って違うわよ。いい？ この前レヌール城の絵をアンに渡したわよね？ それで……もしかして何かこう、金色の玉を見つけてない？」

「なんだ、やっぱ坊主の金玉に興味があるんか……」

「だから！ もうこのバカトカゲ！ ここで灰にしてあげたら全部解決するかしら……まったくもう……」

ぶつくさと不満たらたらなアニスだが、リヨカはこれ以上彼女の機嫌が悪くならないように道具袋から例の金色に光る玉を取り出す。

「これですか？」

「ちよつと見ていい？」

「はいどうぞ……」

アニスはガロンを離すと、リヨカの差し出した光の玉に手を伸ばす。

リヨカは疑う様子なくそれを渡すので、アニスは「ありがとう」と受け取り、それを太陽に翳す。

リヨカもシドレーもそれを見るが、木漏れ日に視界を遮られる。

「ん、ありがとう……。そうね。ちよつと違うみたいね」

「アニスさんも探し物？」

「ええ。これじゃないんだけど……」

そういつてアニスは玉を返してくれる。

「そう。父さんも何かを一生懸命探しているんだ。僕もそのお手伝いがしたいんだけど、全然弱くて……。だからアニスさんやボルカノさんみたいに強くなれたらいいな……」

リヨカはそう言うのと照れたように笑い、頭を掻く。

「そう……。そうなのよね……。それは多分、覆せないこと……なのよ……」

アニスはそう言うと瞳を潤ませる。そして急にしゃがみこむと、また彼を抱きしめた。

「お、コイツまだ諦めてないのか！ リヨカ、さっさとその変態シ

ヨタコン娘から離れる！ 妊娠するぞ！」

シドレーは苦々しげに呟くが、アニスはそれに乗る気配がない。微かに動いた長い睫、横顔に太陽の光が不自然に反射していたのが見え、シドレーも言葉を止める。

「アニスさん？」 「ごめんね。私はリヨカを守れない。貴方が本当に辛いとき、何もしてあげられない。だけど君は強いから、きっと大丈夫。どんなに苦しいことがあっても、きっと希望を見つけ出せる人だから……。私は強くないかな……。」

後半涙に掠れる声にリヨカは心が痛んだ。自然と彼女の頭を撫でているのは目上の女性に対して失礼なこと。にも関わらず、リヨカも彼女もそれが普通のようにしていた。

「大丈夫。僕は負けない。それにアンさんにも絵を描いてあげる約束をしたんだ。だから大丈夫だよ……。」

リヨカは彼女を優しく受け止め、涙に震える彼女が落ち着くまで、そうしていた。

「ごめんね。大人のくせに泣くなんて恰好悪いよね？ 強いなんていっても、せいぜい魔法が使えるだけだもの、私なんて……。」

両目をウサギのように真っ赤にさせたアニスは彼から身体を引くと、照れ笑いをしながら涙を拭く。一体彼女がどうして突然泣き出したのかはわからないが、それでも何か強い不幸があったのだろうと察し、リヨカは辛かった。

「んっ……。」

すると彼女は突然目を閉じ、唇を突き出してくる。シドレーは「またか」とぼやきながら、リヨカに判断を任せてガロンと一緒にそっぽを向く。

「駄目だよ。キスは大切な人とする行為、本当に好きな人としないと……。」

リヨカは彼女の下唇にそっと人差し指を当てると、ちよっと強く

押す。

「……むう、貴方はいつもそう……」

アニスは酷く残念そうにそう言うと、すっと立ち上がる。

「それじゃあ私はこれで……。きつとまた出会うことになると思うけど、私はいつでも貴方の味方だからね……」

「うん。僕はアニスさんのこと信じてますよ。すごくカッコイイ魔法使い！ 憧れます！」

「本当！ 嬉しいな！」

アニスは「こまっちゃうな〜」などと嬉しそうに身体をくねらせるので、シドレーは我慢していた一言をポツリ……。

「坊主の貞操の敵」

「死ね、トカゲ！」

無詠唱の炎はシドレーの居た空中を通過して、空へと消えていった……。

23 来訪者

物陰から客人が帰るのを見送ったあと、リヨカはそつと家に戻る。居間には独特の臭いのするバニアティが手付かずで残っていた。

「リヨカもあの香りが好きではないのだが、パパスはなぜかそれを好み、それはサンチヨも同じだった。」

「パパスはじつと何かを考えている様子で、リヨカがやってきたことにも気付いていない様子。」

「ねえ、父さん。さっきの人は？ ラインハツトの人？」

「ん？ ああ、居たのか。どうも困ったことがあってな……」

話しかけるとようやく気付いたらしく、ふうとため息をつく。

「また旅になるな……。今度はラインハツトか……」

「そう。どれぐらいになる？ 支度しないと……」

「リヨカはキャンバスを抱えながら二階へ走ろうとする。」

「いや、今度の旅にリヨカは連れていかないつもりだ……」

「え？ なんで？」

「リヨカは素直に驚いた。これまでの旅はどんなに過酷であろうとリヨカを連れたパパスが、今回に限ってそれをしないという。」

「うむ。それほどかかる用事ではないし、お前も絵を仕上げたいんだろ？ だから……」

「やだよ。僕も行く。父さんと一緒に連れて行ってよ！ 勝手なことしないから、邪魔にならないようにがんばるから！」

置いていかれたくないと必死なりヨカは父の腰にすがりつく。

「いや、お前が邪魔というか足手まといなことはないのだ。むしろ最近のリヨカは十分旅に堪える力を身につけているし……。そうではなくて……」

「パパスはリヨカの頭を撫でながら言葉を選んでいる様子。すると、ぎゃー！ き、き、き、キラーパンサーだ！」

外で悲鳴が聞こえた。裏返った老人の声はどこかユーモラスだが、

その後に聞こえる金属の滑る音は尋常ではない。

「キラーパンサー？ まさか！」

リヨカは外で転寝をしていたはずのガロンを思い出し、外へ出る。「ガロン！？」

外へ飛び出るとフーツと唸るガロンとそれに槍を構える二人の兵士。老人は腰を抜かしているらしく、へたりこんで動けない。

「やめてください！ その子は危なくないです！ 僕の友達なんです！」

リヨカみ兵士の前に出て、両手で必死に制止しようとする。

「なななにを言っている！ そいつは地獄の殺し屋、キラーパンサーだぞ！？ 危なくないはずがないじゃろ！」

老人はなおもそう叫び、兵士も矛を収めない。

「そんなことないです！ ほらガロン、おいで……」

リヨカがそう言って手を差し出すとガロンはひょいっと腕に飛び込む。

「なんと……地獄の殺し屋がこんな子供に……」

ようやく立ち上がった老人は別の驚きでまた腰を抜かしそうになる。

「ふむ……、まさかなあ……、子供、お前は一体……」

「それは私の息子のリヨカです……」

「なんと、パパス殿の息子……となると……」

老人が何かを言いそうになったところをパパスは慌てて人差し指を立てる。

「そうか……。なるほど。パパス殿の息子となればまああるいはありえるかもしれんな……。しかしベビーパンサーをお……」

老人はずれた眼鏡を直しながらリヨカに近づき、ガロンに手をかざす。だがガロンは敵愾心むき出しでフーツと唸る。

「ほほ、嫌われたもんじゃな……。少年よ……。おぬしはまさか魔物と意思の疎通が出来るのか？ ふむ、いや、だが、これはもって生まれた才能といふべきもの。年端も行かずほそれに目覚めたこ

とこそ賞賛すべきことか……、にしても気性の荒いとされるキラ―パンサーを子供とはいえ……」

口をもごもごさせながらぶつくさ言う老人はもう一度リョカに向き直り、両肩を叩く。そしてまっすぐ瞳を覗き込んで、

「ふむ、やはり透き通った目をしている。これまで何人かのモンスターマスターを見てきたがお主ほどの逸材はそうそう居ない。お主も『銀髪の剣士』を目指して精進すると良いぞ」

老人は満足そうに言うと、もう一度パパスに一礼して兵士を連れ、去っていった。

「ねえ父さん、『銀髪の剣士』って何？ モンスターマスターなのに剣士なの？」

「うむ、『銀髪の剣士』というのは昔、ずっと昔の、竜の神様がいたころの話よりさらに昔に居たとされる伝説のモンスターマスターのことだ。その剣士は雷を操る剣と緑の竜を筆頭に数多の魔物を従えたという。そして一時の間、自らを魔王として世界に君臨したらしい」

「魔王!？」

魔王といえば、かつて神と対峙したとされる地獄の帝王や、人間もエルフも魔族、魔物でさえ超越されたと『存在』がそれに当たるだが、それを名乗ることを許された人間が居るとなれば、それはどれだけの力の持ち主なのか？

「うむ。伝承によれば人魔王とされているが……、同じくモンスターマスターの兄妹によって討たれたらしい……。ま、全ては御伽噺だ」

だが、パパスにしてみればそれはただの子供だましの絵空事でしかないらしく、はっはと笑ってそのまま家に戻っていた。

「やっぱり嘘なのかな……」

リョカがそう呟くと、道具袋がごそごそと動く。

「坊主は騙されやすいからな……」

「そうなのかな……」

シドレーの言葉にリヨカはただ素直にがつくり来ていた……。

「旦那様、坊ちやま、お気をつけて」

ラインハットへの旅立ちの日、サンチヨはお手製のサンドイッチのお弁当とバナアティの水筒をくれた。リヨカとしてはキャラメルティが良かったのだが、旅の途中で飲むものなので甘いものは控えた。

「うむ。今回はまあそうだな、すぐに帰るつもりだ。うむ、大丈夫だ……、さ、行くぞ、リヨカ」

パパスはまだ心残りがあるのかしばし黙っていたが、決心したらしくサンチヨに頷くと、リヨカの肩を押す。

「うん！」

リヨカは今度の旅も連れて行ってもらえることに喜んでおり、いつもの旅の始まりよりも、気合の入った返事を返す。それに勇気付けられたのか、パパスも軽い足取りで村を後にできた。

「そうだ、サンチヨ！ もし僕の留守に青い髪の女の子が来たら、僕の描いた絵が二階にあるからって教えてあげてね！」

「はい、わかりましたよ、坊ちやま！ どうかご無事で〜！」

しばらくしてもまだ見送りを続けているサンチヨも、しばらくして見えなくなつた……。

東へ向かう旅も二日目、何度か魔物の群れに遭遇するも、戦力の頭数が増えたりヨカ達が苦戦することはなかった。

もともとパパスの剣だけでも余裕であったのだが、ガロンの小さくとも鋭い牙、シドレーの燃え盛る火炎に魔物達は恐れをなし、無用な戦いを避けることが出来た。

緩やかな山道に差し掛かった頃、パパスは歩を止める。

「このままのペースなら明日には着くだろう。だが今日はもう日が暮れるだろう。だからここいらで野宿をするぞ……」

日はまだ西の空に傾きかけたばかり。だが、今進むとなれば山道で夜を明かすこととなる。夜の山の天気は変わりやすいのが常識であり、下手に進んで野営の準備ができなくなるおそれもある。

リヨカは荷物を降ろすと、辺りを見回して燃えやすそうな木々を拾い集める。

シドレーは一本の生木に火をともすと、リヨカが集めてきた枯れ木をくべる。父が野宿の準備を始めたので、リヨカは夕飯の準備をしようと干肉、固めに焼いたパンを出す。

こうして旅のひと時の安らぎの時間が訪れた……。

*
*

24 焚き火

侘しい夕飯を終えたあと、リヨカは寝袋で横になる。

ゆらめく炎をみていると、昼間の疲れからか、すぐにうとうととしてしまう。

明日の山越えを終えたら、東国の境界となるライン川にたどり着くだろう。

子供の頃のうろ覚えの記憶だと、水と緑の豊かな国だった。越えた土壌を誇るのんびりとした農業国とサンチヨにも言われていた。

だが、焚き火の向こうのパパスは険しい顔つきで剣を磨いている。油断怠りなき父ならいつものことなのだが、今回の旅ではやや違う。例えばリヨカの装備だ。これまで使ってきた銅の剣を廃し、代わりに鋼の杖。明らかに攻撃力のありそうなものと刃の施されたブーメランをくれた。そして旅人の服も新調し、さらに鎖帷子も用意していた。

旅に出る時も何か険しい表情で戸惑っていた感があり、父なりに何か胸騒ぎを感じているかのよぎに思えた。

「父さん、まだ寝ないの……」

いまだ剣の手入れに余念の無い父にそつと声をかける。

「ああ、眠れないのか？ すまん。もうすぐ終る……」

「そうじゃなくて、そんなに危険なのかな……」

パパスはその問いかけに少し考えたあと答える。

「うむ……。そうだな、不安なのかもしれんな」

「不安？ 父さんが？」

父のような戦士にも不安があるのだろうか？ あまりにも意外な答えにリヨカは勢いで起きてしまう。

「私だって不安はあるさ」

息子の驚きにパパスは笑って答える。

「だって父さんはすごく強いじゃないか……」

「お前から見ればそうかもしれない。だが、私の強さはせいぜい身の回りの人間を守るくらい……、いや、それも出来ないか……」
ため息をつく父の姿は非常に小さく見えた。そして、身の回りの人間を守れないという言葉に酷く違和感を覚えた。

今日までの旅路で、パパスがリヨカを守れなかった時があっただろうか？ 思い出しても、それはリヨカがパパスに隠れてオラクルベリーの外へ出たときくらい。

「父さんは僕のことを守ってくれてるよ……」

その感謝の気持ちからか、うなだれる父に何かを言わないと気がすまなかった。

「ああ、私の最後の希望だから……」

そう言うとうやくパパスは剣の手入れをやめ、焚き火を小さくする。

「明日も早いからな。私も寝るとしよう……」

「はい、おやすみ……」

リヨカは静かに目を閉じたが、パパスはしばらく焚き火の向こうに居る息子を眺めて居た……。

25 脱皮

「なだらかな山地を越えると、大きな川が見えた。アルパカ地方とラインハットを分断する、ハイム川だ。」

ラインハット領に渡る橋には関所があり、越えるには、入国許可証を発行してもらおう必要がある。

今回の旅ではパスが既にラインハット国の入国許可証を発行されており、さらには「至急」と赤い印を押されていることから優先的に通された。

地方と国を結ぶ大橋にリョカは目を見開いた。

見たことも無い楽器を抱える楽士や、牛皮で覆われた曲刀を帯刀する剣士、大荷物を抱えながら地図を見る老人、薄い着物でおへそを露出させた若い女性などさまざまだ。

幼い頃にもせわしない情景を見た記憶があるが、改めてみることで、その規模がわかる。

大きな荷車が橋の真ん中を走っていく。弾みで積み荷いっぱい載せられた南国のフルーツの一つがこぼれたが、気付くはずもない。

「らつき、いただきまーす！」

シドレーは遠慮なく拾うと、ガロンの背中に跨ったまま口いっぱいに頬張り、果汁を飛ばしながらしゃくしゃく食べる。

迷惑な乗者にガロンは追い払おうとくるくる回る。

「だめだよシドレー。落し物は届けないと……」

「硬いこというなや、つか、こんなもんどこに届けるんだっての。腐る前に食ってあげたほうが幸せだって。この味は初めてだ……、あまずっぱ〜」

嬉しそうに言うシドレーに生真面目なりョカは険しい顔。

「あれ？ シドレー？」

ふと気付く。彼の羽の付け根の赤い皮膚がはがれ、緑の皮膚が見えた。

「シドレー、大丈夫？ 怪我してるんじゃない。痛くない？」

「おれ？ え、痛くないけどな……つか、かゆい？ ちよつと掻いてくれる？」

のんきに言うシドレーに、リヨカは恐る恐る剥がれ掛けた皮膚に触る。するとそれはペリペリと剥がれていき、徐々に緑色の皮膚が広がり始める。

「もしかして脱皮？」

「なんや、人のこと八虫類みたいになや……って、なんか言われたらだんだんかゆくなってきたな……」

シドレーは芯だけになった果物を川に捨てると、身体を掻き始める。するとどんどん皮が剥がれ、緑の身体に変わっていく。

「え？ もしかしてシドレーってメラリザードじゃなくて、ドラゴンニユートなの？」

「アホ、そんなんあるかい……。って、なんか気味悪いな……。病気？ いやいやいや、いたって健康やし……」

「ね、寒くない？ 熱があつたりとか……」

シドレーが頭を掻くと、最後の皮が捲れ、緑の羽根トカゲに変わった。

「ん〜、なんか変な気分だな……」

自分のことながら気味悪がるシドレー。まだ残っている手のひらの皮を剥ぎながら、ん〜つと唸る。

「そつえばこの前」

リヨカが気付く。この前にアンが言っていたことを。

「ねえ、アンが言ってなかった？ シドレーの色が赤いって……。もしかしてシドレーは成長すると色が変わるんじゃない？」

「なんのために？」

「それはわからないけど、ほら、氷の息が吐けるとかいつてたし……」

「氷ねえ……よっしゃ、ために……って思ったけど、ここは人が

多いな。ま、宿に着いたらちよつと試してみような……」

「うん。そしたら何かシドレーのこと、わかるかもしれないね」

「そうさな……」

頷くシドレーはガロンの尻尾を無理に引つ張ると、橋の向こうを指して駆け出していく。

「待つて！」

リヨカがそれに続くと、パパスも早足になった……。

* *

「氷の息か……、いや、これはそういうんじゃないな……」

ラインハットの城下町にたどり着いたリヨカ達は、宿の手配を終えたあと、さつそくシドレーに何か特殊能力がないかと試していた。

その結果、リヨカとガロンは間抜けな恰好で地べたにへたりこんでいる。

シドレーが吐き出した息は氷とは似ても似つかない甘い息。リヨカとガロンはそれを正面から吸い込み、そのままうとうとと寝息をたててしまったのだ。

「俺は何者なんだ？ どうしてこんなことが起きるんだ？」

他にも何かできないかと試してみると、今度は空間が歪むような焼け付く息が放たれ、さらには草木がしおれる毒の息も出る。

「……なんか俺、ばい菌？ いやいやいや、そんなはずないわ……。そつだ、あの玉触ったときから変なんだから、もしかしたら……」

シドレーは寝たままのリヨカの腰から道具袋を取り、例の光る玉を探す。

「おお、あつたこれこれ。きつとこれに俺の今回の変調の理由があるんだな……」

光る玉を両手で掲げるシドレーだが、別段変化はない。あのときは確かに触れた瞬間、何か遠い記憶が呼び起こされるような刺激がげつたのだが、今は弱い振動がコメカミのあたりにうずくだけ。

「なんや、ネジでも切れたんかいな……」

振ってみるが、何も音を立てない。

「参ったな……、坊主も猫も寝たまんまやし、俺一人じゃ運べんし……。いくら町中とはいえ風邪ひくつての……」

まだ目を覚まそうとしない二人を前にシドレーはため息をつく。

「こういつときこそ、あのシヨタコン娘の出番だろうに……」

苛立ち紛れにアニスを思い出すシドレー。彼女なら強制覚醒魔法も使えるだろう。だが、彼女が現れたら眠るリヨカに何をしでかすかわからない。むしろその方がリヨカの貞操の危機であろうと、シドレーは首を振る。

「ザメ八だっけか？ 俺にもできっかな……印はたしかこうで、イタズラなる風の精霊よ、汝に求める、かの者達におびただしい目覚めの洗礼を……」

一瞬シドレーの手の間に風の精霊達が渦をなすが、すぐに消えてしまう。

「なんでや！ なんで上手くいかんのかな……」

ぐちるシドレーだが、もう一度気を取り直して印を組む。

「そうじゃないでしょ。覚醒魔法は時の精霊よ。詠唱も間違っているし。おびただしい目覚めって何よ？ 慌しいだつてば……、ザメ八……」

聞き覚えのある声がしたと思うと、時の精霊達がガロンとリヨカの周りを舞い始め、眠気を鼻の穴から吸出し、霧散させる。

「あ、あれ？ 僕は……、あ、アニスさん？」

「にやあ……？」

目を擦りながらゆっくりと起き上がるリヨカ。彼には緑の羽根トカゲと、青い髪の魔法使いが見えた。

「お、目覚めたか……。つか、ま、シヨタコン娘にしてはフェアだな。どうせリヨカの寝込み襲つやる思ってたけどって、お前だれや？」

「アニスさんじゃない？」

雰囲気、顔立ちはアニスによく似ているが、背格好、とりわけ目つきが違う。他にも青い髪を赤いリボンで一つに束ねており、アツプさせていた。

「アニスじゃないわ……、そうね、私の名前なんてどうでもいいし……。それよりリヨカ、絵をもらうわよ……」

「え？ はい……」

その女は名乗ることもせず、ただ彼のリュックからスケッチブックを漁り、その中から一枚取り出す。

髪を留めていたりボンをほどき、絵をくるくる巻き上げる。

「それじゃ……」

「それじゃってお前、なんか他に言うことあるないんかい？ この前の青ジャリはちゃんとお礼いつとたで？」

「私は二人を起こしてあげたでしょ？ その報酬として絵をもらったの。他に何か必要かしら？」

あからさまに不機嫌な彼女は、先を急ぎたいらしく半身しか振り返らない。

「それじゃあね」

そう言うつと彼女は見慣れない精霊を集め、そしてふわっと浮かび空へと消えた。

「またルーラか……なんだい、この世界ではルーラは封印されてるんと違うか？ なんてあないほいほい使える女がいるん……」

「さあ。でも、今の人……アニスさんの知り合いじゃないのかな……」

「……」
リヨカは不思議に思いながら、ばらばらと散らかされた絵を拾い集めていた……。

26 朝の出来事

次の日の朝、パパスは早くから出かける支度をしていた。ただ、その服装はいつもと違い、旅人の服に外套ではなく、濃い青を基調とした礼服だということ。

「リヨカ、私は王宮に用があるのだが、お前は どうする？」

リヨカは寝巻きから普段着に着替えていたが、生憎パパスのように見栄えの良い服はない。いくら子供であっても、さすがに普段着でおいそれと入ってよいはずもなく、ぶんぶんと首を振る。

「そうか。今回の旅は……、そうだな。しばらくここに滞在するだけのつまらないものになりそうだが、見聞を広めるにいい機会だ、お小遣いをやるから、何か珍しいものでもビアンカちゃんに買ってあげなさい」

パパスはそういうと財布から百ゴールド紙幣を取り出し、リヨカに渡す。

「え、こんなにいいの？」

「ああ、だが滞在する間はこれだけだぞ。変なものを買ってお金が足りなくなってもやらんからな」

この国に来てからようやく笑ったパパスに、リヨカもつられて笑う。さらに、突然の百ゴールドというお小遣いに財布も心もにんまり。

「うはっ！ 百ゴールドか！ んならあそこで焼き鳥買おうぜ。なんか昨日からずっといい匂いさせてよって……」

舌なめずりするシドレーを横目にリヨカはお金を財布にしまう。

「だめだよシドレー。これで買うのはビアンカちゃんへのお土産。

それからそうだね……、この国の何か記念になるようなもの……」

「そんなん、適当に緑色の絵の具塗りたくって二本線引けばええやろ。むしろここでの郷土料理をだな……」

あくまでも食い気のシドレーと、ガロンも昨日から外で香る香ば

しい臭いにそわそわしている。

「しょうがないなあ……、でも少しだけだよ？」

かくいうリヨカも興味がないわけではなく……、お小遣いで最初に買うのは宿屋の隣に出張っている焼き鳥に決まった……。

炭火焼き鳥の屋台は盛況で、早朝も列を成していた。

リヨカ達は待っている間、何を食べようかと真剣に悩む。

ラインハットで最近品種改良されたとされた地鶏は油の乗った皮、ぷりぷりの腿肉、独特の触感の砂肝と、いずれも垂涎の一品らしい。セツトメニューで一匹分を串にしたものがあり、リヨカ達はそれを頼むことで合意した。

「ひっひっひ……、久しぶりの鶏肉か……。それも新鮮、油の乗った最高級！ いやあ、今からよだれがとまんわ〜」

その気になれば自前で焼き鳥を作れそうなシドレーに、リヨカは首をかしげてしまう。

「そうだ、父さんが帰ってきたら一緒に食べよう」

「おい坊主。冷たくなったらせつかくの味が逃げるぞ？ 美味しいものをわざわざ買ってきてから食べるのは料理に失礼だ。残すなんてせんで、俺らで食おう」

「でも……」

「なに、親父さんも食いたいなら買うだろ？ つか、王宮に呼ばれるわけやし、ちょっと口利きしてもらえばどうにかなるんじゃないか？」

今頃父はどんなもてなしをされているのだろうか？ もともとパスは招かれた立場であり、その相手はラインハット国だ。特産品の地鶏……、焼き鳥という形式ではないだろうけれど、もしかしたらもつと高級な調理法による一品を堪能しているかもしれない。

「そうか……、そうだね」

リヨカは自分に都合のよい言い訳をして、どの部位を食べようせとひたすら空想する。

「おいお前！ 張り紙を見たのか？ 一人一セットまでと書いてあるうが！」

列の前のほうから声が聞こえた。どうやら少年の声で、何か言い争っている様子。

「なんだ、ちょっと見てくるな……」

シドレーはガロンに跨ると、人ごみの足元を縫って列の前のほうへと行く。

++

「がきは引っ込んでな！」

身長二メートルになるうという大男が、その半分よりやや大きいといった程度の子供を相手にすこんでいた。

「これが引っ込んでいられるか！ 列を割り込んだだけならまだしも、お一人様一セットの地鶏焼き鳥を三セットもせびりおって！ ルールというものを守れんのか！」

対し子供も負けておらず、男を睨み返す。

少年は質の良い緑の髪が印象的で、意思の強そうな太い眉毛とやや上がり気味の瞳は青く燃えている。また地味な羽織を着ているものの服も上質なものであり、見る人が見ればその出自がただものではないとわかる。

「兄上、その辺で……」

意気込む少年の影で震えるのは弟だろうか？ 髪の色が金色であり、複雑な家庭環境にあるのだろうとわかる。こちらの少年は優しいそうな、ともすれば気弱そうな垂れ目であり、兄がこれ以上相手を刺兼しまいかと、ひやひやしている様子が見て取れる。

「なんだ、ケンカか……、アホらし、行こうか……」

「デールよ。今ここでこの者らの横暴を許せば、早くから並んでま

で買おうとした地鶏焼き鳥セットが売り切れてしまっただぞ？ それでも良いのか！」

「なぬ！」

それを聞いては黙って帰れないシドレー。もちろんこの行列の中で高々二セットを取り上げたところで自分達が買えるわけでもない。だからといって暴漢にみすみす美味しい思いをさせるのも癪である。「くそ、こいつこそ焼き鳥にしてやるか……。んでも、目立つのもあれやし……」

「シドレー大丈夫？」

するとリヨカもやってくる。騒ぎを見ていてもたってもいられなかったのだろうか、それともシドレーが無茶をしないかと心配になったのか？

「ああ坊主か……。まあ並んでも買えないししゃーないか……」。

それよりほら、あのガキとおっさんがな、どうやら最後の焼き鳥セットを取り合いしてるみたいなんだ。まああれだ、食いモンのなんとかやし、引っ込みがつかんじやろうな」

「そうなんだ……。あーあ、がっかり……」

「しゃーない。また明日並べばええやる……」

そういつてリヨカを宥めるシドレーだが、彼もまたがつくりとため息を着く。

「おら、どけ！」

ひとだけりが出来始めたことに男は苛立って少年を突き飛ばす。

強引にこの場を去ろうという算段なのだろうが、少年は踏みとどまり、さらに腰から鞭のようなものを取り出す。

「大人しくしろ。痛い目に遭いたくなければな！」

「兄上！」

少年が武器を構えたことに弟が驚いてそれを制止しようとする。

だが、少年は軽く弟を押し退け、びゅんびゅんと鞭を振るう。それは子供の遊びをはるかに越えており、砂埃を巻き上げながら、空を切る。

「うは、なんだあのガキ……、ただものじゃないぞ……」
シドレーの言葉にリヨカも無言で頷く。

少年の持つそれは蛇皮の鞭だろう。しなやかさと丈夫さ、そして伸縮性を持つ初級から中級者の扱う鞭だ。

「ガキの相手なんてしてられっか！」

男はそう言いながらも、気迫に圧されているのが見えた。

「どこがいい？」

そして不敵に言う少年。

「あん？」

パシイッ！！

空で音がした。それと同時に男は左腕を庇う。

「ラインハット仕込の操鞭術、たかが子供と侮るなかれ……、鞭の先端の威力は長さに比例し、勢い如何によつては乗数的に増幅されるのが通説。さあ、次はどこを狙つて欲しいか聞いておろう？」

ひゅんひゅんと風を切る鞭。それは円運動をしながら男の右膝をかすり、肩口をかすり、さらに鼻の頭をすれすれにかする。

「くっ……」

男の鼻の頭からすうと血が垂れる。

「おいていけ。さすればこれ以上その低い鼻が低くなることも無い……」

それが冗談に聞こえなくなったとき、男は包みを地べたに置く。

遠巻きにそれを見ていた人達もまさかの少年の勝利に喝采をわかせる。

「ふふん、正義は勝つのだ！」

少年は得意そうに言うのと、ようやく鞭をしまう。

「兄上、またご無理をなさつて……」

兄の乱暴を心配そうに諫める弟。少年はただその頭をぼんぼんと撫で、いい気な様子で高笑い。

だが、その勝利ムードに生まれた隙に、男は手放した包みを拾い上げる。

「あ！ コイツ！」

少年が気付いて鞭をかまえようとしたが、男は土のつぶてを投げる。

「ぐ、卑怯なり！」

少年が叫ぶも、もともと暴漢、誹られたところで痛む腹もなし。

「逃がすな！」

その声にリヨカは携帯していたブーメランを構える。ただ、それが刃の施されたものであると思出し、代わりに道具袋にしまっていた鎖帷子を投げる。

着るものではあるものの、それは丁度良く解けて男の両足に理み付く。

「げっ！」

突然のことに倒れこむ男。それでも包みが散らばらないように抱えて倒れることに感心してしまう。

「くつくつく、やはり天命は我にあつたようだな……。さて、いかに料理してやるうか？」

土を払い落した少年が無様に倒れる男に歩み寄り、その包みを奪う。

「ぐ、くそ！」

「ふん、もとはといえば貴様が横入りをしたのだ。本来買うべきであつた俺が手にするのが道理だろうが……」

言い放つ少年だが、ふと思ひ出したように財布を取り出すと、三セット分と思しき代金を男に投げる。

「このまま取り上げては貴様と同じになつてしまふからな。金だけはやるう。憲兵が来る前にさっさと消えうせることだな！」

少年は包みを弟に渡すと、再び鞭を構える。男は鎖帷子を外すと、悔しそうな顔をして走り去る。

「ふう……。なんとか包みは無事と……。ふっふっふ、ようやく待ちに待つた地鶏セットが拝めたわけだ……」

包みを見る少年だが、リヨカ達の呆気に取られた視線に気付く。

「むづ、貴様らもご苦労であつた。しょうがない、分けてやるつ……」

そう言つて少年はリヨカに包みを差し出してくれる。

「ありがとう……。お金を……」

リヨカは小銭入れから代金を取り出し、少年に渡す。

「ふむ、まあそつだな。うむ……」

これでようやく地鶏焼き鳥とご対面となるはずの少年だが……、

26 朝の出来事（後書き）

ここからは皆様お待ちかね、ヘンリーが登場します。

27 ヘンリー・ラインハルト

「貴方が列の一番前にいましたよね？」

リヨカは少年の前に居たと思しき男性に包みを向ける。

「ちよつと形が崩れてしまったかもしねませんが……」

「え？ いいのかい？」

男性は驚いた様子でそれを受け取ると、代金をリヨカに渡す。

「ありがとう坊や。まさか買えるとは思っていなかったよ」

男性は喜んだ様子で去っていった。

「「おい！」」

少年とシドレーの突っ込みにリヨカは驚いた様子で振り返る。

「貴様、せつかく褒美に一つ譲ってやったというのに、どうして他人にまた譲るのだ！」

「そうだ、俺らが食べるせつかくのチャンスやど？ 坊主はお人よし通り越してアホや！」

だがリヨカはその剣幕にも関わらず、少年から包みを取り上げると、本来買えるであろう順番の人に手渡し、代わりに受け取った料金を少年の弟に渡す。

「「ドアホ！」」

もう一度、二人の声が重なったのは言うまでも無い……。

リヨカ達は焼き鳥やの屋台を離れ、のんびり出来そうな広場に来ていた。

「まったく、坊主はアホか……」

「そうだな。こんなアホ、東国では見たことが無い……」

少年とシドレーはベンチに深く腰を下ろしながら、何度となく同じことを呟く。

「僕そんなにおかしいかな？」

「いえ、貴方はとても正しいことをしたとおもいますよ」

そう言ってくれるのは弟ぐらい。リヨカは頭を掻きながら、笑っていた。

「ときに貴様、名はなんと言う？」

「えと、リヨカ……、リヨカ・ハイヴアニアです」

「年は？」

「十二です」

「そうか、俺と同じ年か……。だが……」

「まったく世間というもんを知らんやつちゃでえ」

「その通りだ……」

そしてまたこのやりとりに行き着く。

「まあ渡してしまったものはしょうがない。だが、これでは分け前が減るな……」

「え？」

少年は弟の持つ包みを開けると、ごちゃっとなった焼き鳥の数を数え始める。

「そっちの猫は一本あれば十分か？　だが砂肝はやらんぞ。俺も食べたいのだからな……」

「僕らは別に……」

「俺は言っただろ？　褒美をやると。ふん、貴様のようなバカには過ぎた褒美だが……、そうだな、俺様の子分になるといつのならば分けてやるぞ？」

少年は腿肉を串から抜いてガロンに与えており、ガロンも夢中で頬張っている。

「子分？」

聞きなれない言葉に首を傾げるリヨカ。だが、それを遮るようにシドレーが前に出る。

「なりますなります！　俺ら二匹と一人、あんさんの子分になります！」

「ちょっとシドレー、僕らはそんなに長くは……」

「いいんやて、コイツはそういうの確認しないで俺らを誘ったん。つか、これが世渡りつてもんやで？」

ひそひそ声で言うシドレーはなんとも佻しい処世術を伝授してくれる。

「ふむ、ならばリョカ・ハイヴァニアよ、俺様の子分となつた証として、この雞皮とねぎ間をくれてやろう。大事にするがよい」

「ははあ……」

大げさに言う少年に対し、リョカもあわせて跪いてそれを受け取る。

「ねね、俺には？ 俺には？」

シドレーは少年の周りを煩く飛び回りながら、意地汚く催促する。

「ふん、ドラゴンニユートなどという下級モンスターの子分などいらん」

「そんなぐせつしようなこといわんと、坊ちゃんさま〜！」

「それに俺は坊ちゃんではない。ヘンリー・ラインハルトという立派な名前があるのだ」

「はは〜、ヘンリー様、どうか私めにも……」

反射的に跪くシドレーだが、その名前に「ん？」と気付く。

「「ラインハルト？」」

それはラインハット王国に一つしかない姓。ラインハット王家の苗字だった……。

「そうか、坊主兄は王子様か……。あぐあぐ……」

リョカと同じくねぎ間と雞皮で従属を誓ったはずのシドレーだが、すぐにいつもの通り、男は坊主扱いしだす。

「お忍びではあるがな……」

「兄上、あまり身分をおいそれと話すようなことは……」

「心配するな、コイツはハイヴアニア……。あのパパス殿の息子だ」
ヘンリーは確認を取るようにリヨカを見るので、彼は二度肯定の
頷きを見せる。

「リヨカさんはパパスさんの息子さんでしたか……。通りで機転の
利く……」

弟は感心した様子で呟くので、シドレーが「坊主の親父はどんだ
け有名なんだ？」とリヨカに聞く。とはいえリヨカも詳しくは知ら
ず、曖昧に笑うだけ。

「こいつはデール・ラインハルト。俺の弟にして一の子分だ。頼り
無い奴だが敬うように」

「はい、ヘンリー様」

リヨカは別段気にしていないらしく、むしろ新しい友達との変わ
った遊びという感覚だろう。

「おいおい、ヘンリー様はないだろ、呼ぶのならヘンリー親分だが
……。なんかしつくりこないな……」

「ガキが親分いうてもな……」

食べ終わったところで憎まれ口をたたき出すシドレー。ヘンリー
は食べ終わった串を投げつけるが、それはへろへろと地面に落ち、
ガロンがべるべると舐め始める。

「リヨカよ、このベビーニユートはなんなのだ？ 先ほどから人語
をしゃべるが……」

「えと、シドレーはベビーニユートじゃないんです。というか、僕
も本人もわからなくて、それにこの前まではメラリザードみたいに
赤かったし……」

「ほう、奇妙な魔物……。というにはその猫ほど威圧感も無しか……。
貴様一体なんなのだ？」

ヘンリーは首を傾げて彼を見る。

「ああ、それは俺も知りたい。つか、俺のこと知ってる奴の話だと、
もつと別の……。氷の息とか使えるみたいでな……」

「兄上、前に伝承を記した絵本に竜の神様が居りましたが、もし

かしてこの方はその幼態かもしねませんよ？」

控えめにデールが口をはさむと、三人の反応は様々。

リヨカは光の玉の一件を思い出し、「そういえば……」。

シドレーは「やっぱ俺様偉いんだろうな」としたり顔。

ヘンリーは「トカゲが竜の神？」と半信半疑。

「ねえ、その本に光る玉について書いてなかった？」

「光る玉？　そういえば伝承によると、天空にある城の原動力は竜の神様の力を封じたオーブとされていました。そのことかもしねません」

「ねえシドレー、もしかして君、本当に竜の神様の関係なの？」

力強い波動を持つ玉とそれに影響を受ける存在。その二点だけで竜の神と結びつけるのはいささか早急だが、シドレーの正体のでがかりになればと考える。

「ふむ、このバカ面がそうとは思えんがな……」

ヘンリーは立ち上がると、膝のあたりを軽く払い、リヨカを見る。

「さて、もうすぐケイン老が来る時間だ。戻るぞ、デールよ」

「はい、兄上」

「リヨカよ。今日はそうだな、もしそのトカゲについて気になるのであれば一緒に来るか？　たいした書もないだろうが、暇つぶしにはなるだろう……」

「え？　いいの？　だってお城でしょ？　僕みたいな恰好で……」

「裏口から入れば小間使いとしか思われないう。ついでに十一時になったら台所からレモネードを持つぶきてくれ。そうだな、お菓子はスコーンで良いぞ」

「あ、うん。わかったよ」「よし、それでは向かうか」

ヘンリーはそう言うと、先頭を切って歩きだした。

ラインハット城の裏口から入る一行。リョカはともかく、どうしてヘンリー達が正門から入らないのかは、兄弟が城をこっそり抜け出してきたからだ。

通路に誰も居ないのを見計らい、ヘンリーは像の近くに隠してあった鉤付きの棒を天井に向ける。やや手間取りながらも何かに引っ掛けると、蓋が開き、ばらばらと縄梯子が落ちる。

「これを上るんだ」

「へえ……」

ヘンリーはまずお手本を見せ、するすると登る。次にリョカがガロンを背負いながら上る。その様子を見ながら「不便だね」とシドレーも上がる。最後にデールが縄梯子に捕まったのを見て、上から一気に引き上げる。

「アイツはまだ小さいから自力で上がれないんだ……」

ふんと笑うヘンリーは、なかなかの親分気質のようだ。

「さて、老いぼれが来るまでにはしばらくあるだろう。デールよ、そのものらを書庫に案内してやれ……。その前にしっかりと口元を拭いておけよ?」

ヘンリーは笑いながらデールの口元を指さすが、自分の唇も……。

* *

デールに案内されながら宮中を行くりョカ達。たまにすれ違う女中は見慣れぬ少年を不思議そうに見ていたが、ヘンリーの親分ごっこのお相手と見てなのか騒ぎ立てる様子もない。

「そういえば鍵が掛かってたっけ……」

城の一階の端っこの少し薄暗い通路の先まで来たところで、デールは思い出したように呟く。

「どうしよう。書庫の鍵は大臣が管理してたし、貸してって言って貸してくれるかな……」

「鍵は魔法の鍵なの？」

「んーん、普通の鍵だよ」

「そう。なら大丈夫だと思うよ。案内してよ」

「大丈夫？」

「デールは不思議がりながらも先へ行くことにした。」

やや厳かな扉の前に来て、デールはその鍵がしまっていることを確認する。

「やっぱりだめか……。どうしよう……」

「大丈夫だよ。ちよつと離れてて……」

リヨカは印を素早く組むと「アガム」と唱える。すると地面から大地の精霊が集まり、錠が下りる音がした。

「今の魔法？ 君、魔法使いなの？」

「これはホビットのおじさんに教えてもらったんだ」

「へえ……。僕も魔法の練習してるんだけど、あんまり上手く出来なくて……。せめて兄さんみたいに鞭が使えるとかならいいんだけど、運動も駄目だし、さっぱりだよ」

デールは自嘲気味に笑い、ドアをあける。

「そんなことないよ。デールさんだって練習すればきつと出来るようになる。さっきの魔法は簡単な鍵ぐらいしかあけられないけど、そんなに魔力を集中するものじゃないから練習すればすぐにできるようになるよ」

「でも、僕には無理だよ」

「大丈夫。本当はあんまり人に教えちゃいけないんだけど、デールさんは王子様だし、泥棒をしたりしないよね？ だから詠唱法を教えてあげる」

リヨカは手で印を組み、デールに真似をさせながらゆっくりと唱える。

「大地に眠る悪戯な精霊よ、我は彼の者の戒め破らんと願うなり……、戒めを解け、……アガム……」

デールも同じようにそれを唱えると、二人の手の間に大地の精霊達が集まり始める。

「わわ、本当だ……。僕が精霊を、魔法を使えるなんて……」

喜びのあまり集中が途切れてしまい、精霊は好き勝手に消えていく。

「デールさんはまだ練習が必要みたいだけど、でもきつと出来るようになる。だからやる前から諦めないでね」

「う、うん！　ありがとうリョカさん！」

デールは初めて明るい笑顔になると、鼻歌混じりに部屋に行く。

ヘンリーとの力関係を見るに、デールは常に庇護の対象なのだろう。武術、胆力に優れた兄が、優しい面を持っているのは城を一緒に抜け出しておやつを買いに行くことでわかっている。ただ、そこにどれだけの「悔り」があり、それが弟の克己心を阻害しているかを、二人とも気付いていないのだろう。これを機会にデールが自分に自信をもてたならと、リョカは人事ながら思っていた。

「えっと、この本棚の……、これかな……」

デールは一冊の古い本を取り、ぱらぱらと捲る。

「あつた、これだ……。竜の神に関する伝承……」

本には黄金の竜が描かれていた。大きな玉座に鎮座する竜はシドレーとも似ても似つかない荘厳な存在。その周りには羽根の生えた人が複数おり、天空人とされていた。

++

かつてこの世界には地獄の帝王とされるものが居た。

その存在は長い間眠りについてしたが、人間の欲望がそれを呼び起こした。

竜の神はそれを打ち破るべく、預言の内容を実行したらしい。

だが、魔王の出現が近未来にいたる預言を狂わせた。

竜の神は焦り、再び預言を実行しようと、魔王を招いた。

そして……。

そこから先は水に濡れており、滲んでいた。

「ん〜、これと俺、なんか関係あるん？」

「そうだね。シドレーとは似ても似つかないし……。まさかシドレーも黄金になるの？」

「さあな。そしたらドラゴンキッズに間違われるな……。」

なははと笑うシドレーだが、いい加減間違われることに慣れてきたらしい。

「えと、あと他にも……。」

デールは他のページを捲りだす。

「ほら、ここ……。」

++

空に浮かぶ城。天空城に関する謎。

それは竜の神の力の込められたオーブにより維持されている。

たとえ竜の神が不在であろうと落下しないのはこのためである。

また、そのオーブは妖精の王がこの世界にもたらしたとされており、人の手で複製することはかなわないとされている。

「なんじゃい。どうも胡散臭いな……。竜だと思ったら今度は妖精？　なんでそないな奴が城浮かべるのにオーブ作るのよ」

「ん〜、やっぱり御伽噺なのかな……」

そういつて本を閉じるデール。彼も半信半疑らしく、あまり落胆した様子が無い。

「つか、一体誰が書いてん、こんなアホな絵空事……」

本の表紙を見ると、やや汚れているが、そこには「レイク……」とあった。

「レイク？　もしかしてアニスさんが書いたのかな？　ほら、あの人、レイクニアって言ってたし、光るオーブを探してるって……」

「まさか、あのシヨタコン娘がか？　いや、でも、たまたま同じ姓とか……」

もう一度著者名を調べるシドレー。ごしごしと乱暴にこすると、著者の名前がつつすらと見える。

「いやいや、名前あるで？　ほら、ポロ……、ポーロ・レイクなんちよかさんの著書だな」

「あ、本当だ……」

想像通りとは行かずがつくりとするリョカ。とはいえ、ここまで本がここまで傷むのならそれなりの年月が必要となる。アニスはどう見ても十代後半程度。普通に考えて彼女が書いたはずもない。

「リョカ君はいろんな知り合いがいるんだね。やっぱり旅をしているから？」

「え？　ああ、そうだね。でも、旅をしているってことは、出会いの数だけ別れがあるんだ……」

「そっか……」

リョカは笑顔で答えるが、デールは楽しいだけが旅ではないと知り、浅はかなことをいったことを省みている様子。

「だから僕、そういうの絵にしているんだ。これまでに行った町、そっついのを忘れないためにね……」

「へえ、リョカさんは絵も描けるんだ。ますます尊敬しちゃうなあ

「あ、いや、人様に見せるほどじゃないんだけどね……」
「まずまず尊敬の眼差しを強めるデールにどうにもやりにくさを覚えるリヨカ。最近出会ってきた子達のように、そういう垣根を作らない関係のほうが気楽でよいと考えてしまっ。」
「それじゃあ僕ももう直ぐ勉強の時間だし、行くね……」
「うん。……そうだ。僕もヘンリー親分にレモネードを届ける約束をしてたんだっけ……！」
二人はぶつと笑い合つと、黴臭そうな部屋を一緒にあとにした……。

「おかえり。リヨカ、こんな時間までどこに居たんだ？」
宿に戻るとパパスが先に戻っていた。
「ただいま。友達が出来て、一緒に遊んでいたんです」
リヨカはヘンリーのことを伏せる。それは父に心配をかけたくな
いというよりは、ちよつとした秘密を持つことでの子供らしい優越
感から。
「そうか。友達が出来たのか」
息子に友達が出来たことについては素直に嬉しいこと。だが、今
はただの旅路の寄り道に過ぎず、またすぐに別れる日がある。例外
なのは、サンタローズに近いアルパカのビアンカぐらいで……。

「うん。だからこれでラインハットに来る楽しみが増えたよ」
父の憂いを知ってなのか、リヨカはポジティブに自分の状況を捉える。

「うむ。そうだな……。きっとまた、ラインハットに来ることになるだろうからな……」

そう言うパパスの表情は険しい。それは「遊びに行く」や「調べ物があるから」などの安易な訪問には見えない。もっと違う、別の次元の用事を連想させる……。

「それじゃあおやすみなさい」

リヨカはそう言うときさっさとベッドに入る。

明日もまた親分に朝から呼び出しを受けているのだ。

ラインハット城下町、ヘンリーはリヨカを引きつれ闊歩していた。「ふむ、どうだリヨカよ。ラインハットの街は。ここまでの賑わいを見せるのは、世界においてこのラインハットだけであろう?」

ヘンリーはリヨカが各地を旅していたときき、お国自慢を試みたかったらしい。もちろん、他国の情勢を子供ながらの視点で聞きたいという気持ちもありつつだ。

「ええ、賑わいだけなら初めてです」

リヨカは素直にそう答えていたが、当然ヘンリーは渋い顔。「賑わいだけ」と言われたのが面白くないらしく、リヨカに詰め寄る。

「おい、賑わいだけとはどういうことだ? 他にこれだけの発展を見せる国があるというのか?」

「いえ、その……、前に父さんと旅をしたサラボナの街はもっとこう、商業のレベルが違うというか……」

幼いリヨカにしてみれば、ラインハット国の情勢は十分目を見張るもの。ただ、世界の経済都市となりつつあるサラボナと比べれば、まだまだ田舎臭さがあり、それはオラクルベリーに比べても感じられることだ。

「うむ。やはりサラボナか。俺もあの街の噂は聞いている。人々の誰もが金持ちで、金粉をまぶしたパンにサラダ、はては便所のそれにも使われているのだろうか？」

「そんなことはありませんよ」

さすがにそれは誇張のされ過ぎとリヨカは笑う。

「違うのか？ では支払がオンスというのも嘘か？」

「オンス？」

「……重さの単位ですよ。金を量るとき、ラインハットではオンスを使っています」

デールの解説にようやく理解が追いつたりヨカ。もしそれが真実ならば、財布はどれだけ頑丈でなければならぬのか？

「それは嘘ですよ。船を買うならともかく……」

言いかけて思い出すサントフィリップ号の乗船客たち。彼らの会話にはたびたび商船を購入したとか店を新規出店したあり、あながち金塊で取引をしてもおかしくないのかもしれない。

「そうか……。だが、貴様の目にもサラボナのほうが発展しているといえるのだな？」

「ええ、まあ……」

「なるほどな。ふむ。俺もお前のように世界を見て周ってみたいものだ」

そういうとヘンリーは考える様子で下を見る。

「兄上はいつも国をどうするか、それを考えております。きっとすばらしい王になるでしょう」

自慢の兄を心から尊敬しているであろうデールはヘンリーを頼もしい視線で見つめている。リヨカも同年代でありながら、王の子として既に政治、経済に興味を示している彼をとて大人びていると

思えた。

「さて、そろそろケインが来るころだろう。すまないがリヨカ、今日も十一時頃にレモネードを頼むぞ。それと少し甘めにな。どうも頭を使うと糖分が恋しくなるんだ」

「はいはい」

リヨカが給仕の真似事を断らないのは、台所でおやつをつまみ食いが出来るから。昨日はバターたっぷりパンケーキで、今日はなんだろうか？ そんな期待を持ちながらヘンリーに続く……と、

「……キヤー！ 泥棒！」

屋台の一角で女性の悲鳴が聞こえてきた。

「このラインハットで狼藉を働くとは不届き者め！ 我が操鞭術から逃れられると思うな！」

「落ち着いてよ、ヘンリー。この人ごみでは逆に危ないよ」

ヘンリーが携帯していた鞭を構えるので、慌ててリヨカが止める。

「だが、このまま見過ごせというのか？」

義憤に燃えるヘンリーを止めるつもりはリヨカにもない。ただ、人で賑わう街では彼らの携帯する武器は周りに被害をもたらしかねない。

「ねえシドレー、ガロンと一緒にお願いできる？」

「ん？ ああ、ええで、いくぞガロン！」

シドレーはガロンに跨り、とさかの赤い毛に掴まる。

「にゃ〜」

なんとも気の抜ける声のあと、ガロンは人々の足元をすり抜けながら声の方へと走る。

「僕らは先回りをしましょう」

リヨカの言葉にヘンリーは無言で頷き、路地裏を示して走り出した。

人の流れを不自然に遡る暴漢。突き飛ばされる人々は驚き、たまに罵倒しながらそれを見送る。

「まてや〜！」

そしてそれを追うトセゲを乗せた猫一匹。暴漢は何度か振り返るも、声はすれど姿の見えない追っ手に眉をしかめるのみ。先ほどから路地裏に逃げようとすると、それを先回りしているかのように存在感があり、いまだ人ごみから出られない。

だが市場もどこまでも続くわけもなく、ようやく人の切れ間が見え始める。そしてとうとう抜けたとき、マントをなびかせる少年が現れる。

「そこまでだ！」

広場にて鞭を構える少年。ここでならそれを自在に操れるとばかりに、縦横無尽に砂埃を巻き起こす。

「神妙にしる！ この不届き者が！」

「くっ……！」

足元を掠める鞭の先端は見切れるようなものではなく、鋭く抉られた地面にその痛みを想像してしまう。

「く……！」

男はさして抵抗をせず、盗んだと思しき財布をヘンリーに投げつけると、怯んだ瞬間に逃げ出す。

「待て！ 逃げるな！」

ヘンリーはそれを追おうとするが、手に持った財布からばらばらと小銭がもれる。

「くそ、小銭が……！」

律儀に小銭を拾う内にどんどん男は去っていく。ヘンリーはそれを齒軋りしながら見送り、財布を閉じる。

「あ、ありがとうございます！」

財布の持ち主であろう女性が彼の前にやってくる。

「なんのこれしき、朝飯前だ。だが、警備の者は何をしているんだ。こんなときこそ出番だろうに……！」

市場の警備に不満を愚痴りながらヘンリーは財布を返す。すると、その手をぐつとつかまれ……、

「なんだ？ 離せ……」

手首を力強く掴まれたことに驚くヘンリー。女に向き直ると、目と目の間にひとさし指を付きたてられる。不意のことにそれを見つめてしまい、

「手をかけさせないでね、腕白王子……、ラリホー」

強制睡眠魔法の罠に落ちた。

「な、ヘンリー！」

「兄上！」

ヘンリーが攻撃されたことに気付いたリョカとデルはかけよろうとする。しかし、背後から大きな麻袋を被せられ、声を出そうにも、もごもごと言葉にならない。

「行くぞ！」

男の低い声が聞こえたと思うと、次に聞こえたのはいなく馬の声と走りだす車の音だった……。

「つたく、逃げ足の早いやつちゃ……。つか、リョカ達どこや……。逃げた男を追いかけていた二匹はリョカ達と合流すべく市場に戻ってくる。しかし、そこには影も形も無く、また何かがあった痕跡すらなかった。

「ん？ 坊主たちどこ行つた？ 迷子か？ ほんまにしょうのない奴らだ……」

ぶつくさいうシドレーだが、ガロンは地面を嗅ぞながら路地裏へと行く。

「おいどこ行くん。お前まで迷子になったら困るで……。って……」
ふらふらと飛びながらついていくと、その先には緑色のブローチが落ちている。

「これは……あのガキのか？」

緑の二本線はラインハットの紋章であり、それはヘンリーのマン

トを肩口で止めていたものと同じものだった。

パパスは窓の外を眺めていた。現王、チップ・ラインハルトが病に伏せたことを知らされ、助力を頼まれて来たのだ。

けれど、昨日から側近と名乗る者がかかるがわる顔を見せに来るだけ。せめて王の見舞いにでも申し出るも、それも断られる。

軟禁されたというのが正直なところだろう。

ふむ、どうしたものか……。

パパスは着慣れぬ礼服の袖をまくり、手で仰ぐ。春が遅刻してきたと思っただら夏が駆け足できたかのような最近、どうにも暑くてかなわなかった。

控えていた部屋のドアがノックされる。きいと扉が開き、兵士が一礼してから用件を述べる。

「パパス殿、王が内密の話があるとのこと。ご同行願えますか」「うむ」

パパスは頷くと、兵士の後に続いた。

ラインハットの王、チップ・ラインハルトとパパスは旧知の間柄であり、前の后であるミリア・ラインハルトとの結婚式にも招かれていた。

そのミリアが子を残して病没した後も、リヨ力を連れて城を訪れたこともある。

互いに同じ年の子を持つ父として、また若干の差異はあるものの、奇しくも似た不幸な境遇を慰めあつたものだ。

「陛下、パパス殿をお呼びいたしました……」

寝室と思しき豪華なドアを前に、兵士がそう告げる。

「どつぞ……」

すると中からはチップではなく女の声がした。

前後が亡くなったあと、同じ頃に子を授かつた側室を後に迎えたと聞いており、傍で看病しているのだろうと察する。

「失礼する」

パパスは軽くノックをしてからドアを開き、天蓋付きのベッドへと歩み寄る。

ふと気付く。

臭い。

部屋中に籠る御香の臭い。それは気分転換などと呼べるものではなく、何かを誤魔化すためのものに感じられる。

「よくお越しいただきました。パパス殿。チップも喜んでおりますわ……」

そう言つて出迎えてくれたのは、二十そこそこのうら若き女性。

白を基調としたドレスは、身体のラインを現し、女性としての象徴とでもいふべき胸元が大きく誇張されていた。その隙間にラインハットの紋章入りのペンダントが飾られている。

カールした金の髪を軽くとめる黄金のティアラ。それほど富める

というわけでもないラインハットにおいてその装飾は、たとえ王族とはいえ贅沢といえるもの。

にこやかな笑顔だが、やや上がり気味の瞳がその気の強さをうかがわせ、不自然に赤い唇は生々しく艶やか。

とても看病をかつてでる婦人のいでたちとは思えなかった。

「チップはなんでもお二人でお話しがあるとのこと、私、お暇しますわね……」

「そうですか……」

たいした挨拶もなく後はパパスの脇をすり抜けると、そそくさと部屋を出る。

「ふむ……」

その慌しさにも何かきな臭さを感じるパパス。だが、一番のそれは、この部屋に微かにある臭い。

死臭だ。

旅の途中、リヨカの目にこそ触れさせないよう気をつけていたが、何度か潜り抜けてきたもの。問題は何故、この部屋にそれがあるのかということ、そして、先ほどから一言もしゃべらない古い友人について……。

「チップ王……、チップ!!」

布団に触れた時に感じた。パパスはそれを剥ぎ、愕然とする。

「なんと……痛ましい……」

布団に覆われていたのは腐乱を始めてしばらくした先王の死体だった。

胸には深く銀の剣が刺さっており、目は大きく見開かれたままだった。

「チップよ、安らかに……」

パパスは亡き友にせめて死後の安らぎをと臉を閉じ、印を組む。

「光の精霊よ、我が友を空へと解き放て、ニフラーヤ……」

パパスの詠唱の後、窓を透過して集まり始めた光の精霊が、無残に朽ち始めるチップの身体にまわり付き、黒い霧を発散させる。

ニフラーヤは死後、弔うことも荼毘にふされることもないモノが悪霊に魅入られた際に、それを被う襖の魔法である。もしそれを行わないと、生きる屍となり、現世を彷徨い始めることもある。とりわけ高貴な身分のものは悪霊も好み、その危険性が高いのだ。

それが所謂「腐った死体やワイトキング」となり、悪霊の依り代になる。

「パパス殿、どうかなされましたか？」

タイミングを見計らったかのようにノックなしで開けられるドア。その角度からでは天蓋のおかげでチップの姿は見えないのだが、

「だ、だれか！ 王が、チップ王が殺された！」

弔いもせず悪霊に夫を晒していた女が喚くと、直ぐに衛兵達がやってくる。

「ちい、畏か！」

パパスは窓へと走り、そのまま飛び出す。

ガラスの破裂音の数秒後に地面に転げるパパス。生傷に回復魔法を唱える暇もなく、目指す先は……。

* *

「おーい、おっさん！ おっさん！」

宿に戻ったパパスに一番に声を掛けたのは緑の羽根トカゲ。一瞬なにものかと目を疑うが、人語を話す羽根トカゲがそう居るはずもないと気付く。

「お主は確か……、すまないがリヨカはどこだ？ いますぐここを発つ必要がある」

「それが、坊主がさらわれたで！」

「なんだと!？」

「一緒にあそんどった坊主……えと、ヘンリーの着てたマントの二れ見つけてな！」

シドレーは手にしていた緑の紋章入りのブローチを渡す。

「ヘンリー？ まさか王子の身にも何かがあったのか？ というか、リヨカが王子と？」

予期せぬ交友範囲に混乱するパパス。

「そんなあとでええねん。それよか早よ行くで！ ガロンが臭い追えるけど、風吹いたらアウトや」

焦る羽トカゲの急き立てに我に帰るパパス。

「そうか、頼む！」

一人と一匹は宿を駆け出し、街の北を目指した……。

麻袋に詰め込まれたリヨカは、馬車に揺られること数時間、暗い場所で目を覚ました。

黴臭く、湿っぽく、肌寒い感じがする場所。当然ながら見当もつかない。

どうしよう。ヘンリーは大丈夫かな？ デールさんも……。いやいや、おちつけ、今は焦ってもしょうがない。

ひとまず落ち着かせようとダンスニードルの数を数えるリヨカ。脳裏ではサボテン達が互いの棘を痛がるコミカルなものが浮かぶ。

さてと、まずは……。

周囲に人がいないか意識を研ぎ澄ます。

足音は無い。衣擦れ、呼吸も聞こえない。たまに雨音がする程度。

「風の精霊よ……、バギ……！」

リヨカはせわしなく印を組むと、真空呪文を詠唱する。

自分ごと巻き込む真空刃だが、この状況で集められる風の精霊は乏しく、せいぜい服が破かれる程度。麻袋も同じく破れ、リヨカは開いた穴から腕を出し、びりびりと破く。丈夫ではあるが、繊維の方向には弱く、すぐに出られた。

「ふう……。ここは一体……」

リヨカの押し込まれた部屋こそ暗がりであったが、隣の部屋か

らドアを縁取って明かりが漏れている。

「誰がいるかな……？」

リヨカは静かにドアに忍び寄り、そつと隙間から外を見た。しかし、心配を他所に誰も居ない。

誰も居ない……。

よく考えてみれば一緒にさらわれたのはこの国の王子。それを知らないとしても、その恰好からして、貴族やその関係だとすぐわかるだろう。

対しリヨカはというと、旅人の服に紫の外套をまとっているだけ。身代金が筆れるはずもないのは誰の眼にも明らかだ。見た目もただの子供。麻袋から自力で逃げられるはずもないと判断されたのだろう。

どうしよう。父さんに知らせないと。でも、ここがどこだかわからない。それにヘンリーは……。

あの女は最初からヘンリーを狙っていた。きっと窃盗騒ぎも全て罠。おそらくは人々の意識を窃盗に向けさせ、その間に誘拐するのが目的だったのだろう。

ヘンリーが物取りを追いかけたことで多少の手間をとらせたわけだが、まんまと捕まってしまった。

やっぱり先にヘンリーとデルさんを探したほうがいい。

リヨカは自分が誘拐の対象ではないのなら比較的安全だと判断し、扉を開けた。

部屋から廊下に出ると松明が設置されており、歩く程度には支障が無かった。

驚くべきは壁にいくつもある模様。大半は繰り返しであびたが、それには見覚えがある。

古代文字かな？

魔法の練習もしていたリヨカは、古代文字を目にすることが多い。多少ならパパスやサンチヨも知識としてっており、訳してくれた。

壁の文字の詳しい内容こそわからないが、それは何かを諷める文句が読めた。

『悲しみに暮れる者、讒言にすぎり、そして道を踏み外した』
それが何を表すのかわからずにはばし悩むも、そんな場合ではない
と思ひ直り、明かりを辿って移動する。

しばらく進むと広い場所に出た。

まるで小さな町のような造りで、小屋がいくつも見える。

どこかにヘンリーも居るのかな？

リヨカは目を瞑り耳を澄ますが、キーンと耳鳴りがするぐらい。

近くの部屋から見てみよう……。

とりあえず直ぐに入れそうな小屋へと走った。

+
+

31 脱出

薄暗い中、目が覚めた。額に水が滴り落ちたおかげだろう。松明の火が揺れるのがわかる。ぼやけていた視界もまた定まり始める。

「お目覚めかい？ 王子様」

聞き覚えのある声でした。先ほど不覚を取った相手の声と知ると、ヘンリーは立ち上がり、腰を探る。しかし、装備しているはずの蛇皮の鞭はない。

「危ないおもちゃはここに……」

声の方に振り返ると、女が鞭を掴んでいた。

「くっ……」

劣勢を知るヘンリーは無意味に騒ぐことはしなかった。そして、

「ほーら！」

頬を掠める鞭の先端にも、やはり騒ぐことをしなかった……。

音がした。

空を切る音だった。

ヘンリーと出会ったときのこと、焼き鳥屋の列に横入りした男を咎めようとしたときに似た……。

違う？

だがよくよく耳を澄ますと、そのキレが違うことに気付く。そして、今この場所で鞭を振るわれる対象が誰であるかを考えると、リヨカの足は自然と早足になっていた。

++

「へえ、王子様、がんばるじゃないか……。これが生娘ならとうにお漏らしして許しを請うてるよ？」

女の操る鞭を受けていたヘンリー。彼の衣服はどこどころ破けており、血が赤く滲んでいた。

もちろん、彼もただそれを受けていただけではない。インパクトの瞬間をそらして（この場合は女の手でそれを把握している）ダメージを減らしていた。

「くっ……」

とはいえ痛みは蓄積しており、拷問が始まってから初めて膝を着く。

「ふふん、ガキがいきがるなっての！」

容赦なく振り下ろされる鞭。ヘンリーはそれを肩で受けつつ、苦悶の表情になる。

「さつきから生意気だね。あんたのその顔見るといらいらしくるよ」

女は鞭を構えると、ヘンリーの顔に向かって再び鞭を振るう……

が、

「……！？」

振るわれた鞭は飛び出したブーメランに絡みつき、軌道がおかしくなる。

「なっ……！？ 誰だ！？」

驚く女はブーメランの投げられた方を向くが、次の瞬間襲ってきたのは弱いながらも真空魔法。反射的に顔を庇おうと両腕を構えるが、弱い指先を掠めたとき、痛みでそれを離してしまう。

「しまった！」

手繰り寄せられる鞭を見て女は叫ぶが、そこには生意気なガキがしっかりと鞭を携えており……、

「女、世話になったな……」

床を二三度叩くと、それは「ぐっぐっ」と音を立てて……。

ヘンリーが二度三度床を叩くと女は大人しくなり、リョカが近くにあった荒縄で縛る。そのまま部屋の奥に押し込めたあと、二人はようやく息をつく。

「礼を言つぞ。リョカよ」

「んーん、ヘンリーこそ無事で良かったよ。待ってて、今ホイミをするから……」

リョカは念入りに印を組むと、ヘンリーの痛々しい傷口に手を翳す。

「ほう、回復魔法まで使えるのか……」

「簡単なのしかできないけどね……」

驚くヘンリーに照れながら言うリョカ。彼と会ってから出し抜くというか驚かせるのはこれが初めてかもしれないと、ちよつと得意になつてしまう。

「ますますお前を部下にしたいな……。いや、もうお前は俺の子分か……。いや、良い子分を持ったものだ」

「ははは……」

癒え始める傷口を擦りながら、ヘンリーは唇を噛みしめる。

「奴らは何者だ？ 俺を王子と呼んでいたし、やはりそれを知つての賊か……。となるとデールも危ないな。リョカよ、すまないが付き合え」

「はい、僕もそのつもりだよ」

一転して真面目な表情になるヘンリーに、リョカは力強く頷いた……。

周囲を伺い、気配を探る。たまに魔物の姿を見かけ、すれすれで戦闘を回避する。

いくつか小屋を探ってみたが、デールと思しき者はいない。それでも二人は必死で古代遺跡の中を巡っていた。

「……いったいどうなっているんだろうな。この廃墟、迷路のようだ」

しばらく歩いていたヘンリーは、この複雑な造りに辟易したように呟く。

古代遺跡内部にはそこそこ深い水路がいくつもあり、それをわたるには、たとえ直ぐ目の前であっても大きく迂回して立体交差路を通る必要がある。

水路を横切ることも考えたが、足跡が残ることや水の音で脱走がばれると大変なので、仕方なしに遠回りをする。

「……なにか理由があるのかな？」

リヨカは不思議に思いつつ、今は先を急ぐべきと、微かな疑念を飲む。

「むっ……、なんだか大きな小屋……というのも変だが、あるぞ」
ヘンリーの示す方向には「大きな小屋」があり、そこから明かりが見える。

「デールさん、あそこにいるのかな……」

「うむ。だが……、何故俺達は別々に閉じ込められたのだ？ 三人一緒のほうが監視も楽だろうに……」

「さあ？」

「まあいい、今はデールのことのほうが心配だ。いくぞ、リヨカ」
「はい」

ヘンリーは鞭を握りなおし、リヨカもやや刃こぼれが目立ち始めた刃のブーメランと、鋼の杖を構えた。

* *

「……兄上をどうするつもりなんですか？」

「心配なく、デール様はただ大人しく時が来るのを待てばいいの

です。さすればラインハットの王となれるでしょう」

「なにを言っている！ まだ父は健在だ。それなのに……」

「ほほほ、本当にそう思われますか？」

「まさか既に父上も？」

「ここまでして生かしておいでと思うとは、さすがデール様」

「だが僕は王位に興味はない。兄上、ヘンリーこそが時期王に相応しいお方だ」

「そう謙遜なさらずに……。貴方には貴方にしか出来ない才能がありますゆえ……。時期王にはデール様が即位なさるべきでしょう」

「ならば時期王として命じる！ そして兄上とリョカさんを解放しろ！」

「ほほほ、貴方の命令など誰が聞きますか？ 貴方が王となり最初にすべきことは傀儡……。操り人形にされることです。そう、誰の言葉に素直に頷き、ただただ愚かな王を演じること、それが貴方の才能……」

「ぐっ！ 貴様、無礼な！ 兄上！ リョカさん！」

壁に耳をつけながら中の様子を伺う二人。中からは気味の悪い男の声とデールの声が聞こえ、今回のおおよその因果がわかる。

「……なるほどな、アルミナ義母様か……」

「アルミナ？」

「うむ、デールの母だ。俺の義理の母でもある。女狐だとは思っていたが、まさかここまでだいそれたことをしようとはな……」

話の内容から察するにすでに父は廃されており、その後継を継ぐべく第一王子であるヘンリーを誘拐し、おそらくは父と同じ運命にあわせる算段なのだろう。

「ひとまずデールの安全は確保できたわけか……。だが、およそのことを知ってしまった俺とリョカは追われる身……か」

デルの安泰に一息つくヘンリー。自らは王位どころか命の危険が迫っているというのに、不安を見せない。それは彼なりの強がりなのか？

「となれば俺も流浪の身分か……。そのときは世話になるかもな、リヨカよ」

等身大の笑顔を浮かべるヘンリー。もしかしたら彼は王族という身分を……。

「ヘンリー、こんなときに何を……」

まだ二日程度の付き合いではないが、自信を喪失しかけている彼が酷く小さく見えた。リヨカは何故か悔しさを抱き、彼を叱咤するかのように肩を掴む。

「冗談だ。俺はラインハット国をより豊かな国にする責任があるのだからな……。それよりデルを救出するぞ」

ヘンリーは小屋のドアノブに鞭を掛け、リヨカと共にデルに近い窓枠へと移動する。リヨカは素早く印を組み、窓の鍵を開ける。

「ほお、そんな魔法まで使えるのか……。これは困ったな。引き出しの奥も安全ではないぞ」

おどけてみせるヘンリーに「そんなことしません」と抗議するリヨカ。空元気で、唇にいたずらな歪みが戻ったことが素直に嬉しい。

ヘンリーはドアノブを引き、中の者の注意を逸らす。

リヨカは窓をこっそりと開け、デルとアイコンタクトを取る。

デルはリヨカの姿に驚いた様子だが、すぐに平静を装う。彼は縛られておらず、そのまま窓枠へと歩み寄ってきた。

「リヨカさん、兄上は？」

「ヘンリーも一緒にいます。さ、一緒に逃げましょう」

「ですが、僕では足手まといになります。それに、彼らは二人を無事に帰すつもりはないでしょう。まだ気付かれていないうちに早く……」

流るデルだが、ヘンリーに比べて一回り体躯の小さい彼に脱出

劇は困難だろう。

「……デール、何をしている、早く逃げるぞ！」

ドアでの陽動を終えたヘンリーが戻ってきて、弟の頭をこつんと叩く。

「お前は俺の子分なのだ。こんな黴臭い場所に一人おいていけるか、ばか者が」

「兄上」

その言葉に意を決したデールは窓枠をよじ登り、小屋を出る。

「いくぞ！」

まだ中に居た者は気付いていないようだが、ドアノブが捻られる音がした。

驚いたデールはその手を引く二人に頭から突っ込む。三人仲良く地べたに這いずりながら、ゆっくりと小屋から遠ざかる。

「風でしょうかね？ ほほほ……？ デール様？ カクレンボならお暇なときに……」

もぬけの殻と成した部屋で男はしばし鬼の役を演じていた。

迷宮を駆ける三人。ヘンリー、リヨカの脱出に気付いたらしく、魔物達があらぶりはじめる。

「くっ！ この忙しいときに！」

ヘンリーは得意の操鞭術で次々に魔物達をなぎ倒す。

「唸れ！ バギ！ いけ、ブーメラン！」

リヨカも負けじと真空魔法、ブーメランで蹴散らし、活路を開く。

「いたぞ、こつちだ！」

「もつと応援をよこせ！」

だが多勢に無勢、劣勢に変わりはなく、次々と集まる魔物や賊に徐々に追い詰められる。

「どうする？ 今更ごめんなさいと謝ったところで許してもらえらともおもえんな……」

「ええ。だけど、最後まで諦めません」

二人はデールを庇いながら賊と対峙する。

「二人とも、僕がここに残ればせめて……」

「そう簡単に物事が進むと思っなデールよ」

「ですが、もう……」

この場を逆転する方法などありえない。たとえリヨカが魔法を使えようと、兄の鞭が鋭いとはいえ、体力は無尽蔵ではないのだから。「はあ！」

空を切る鞭の先端。しかし、それは不意に差し出されたしなやかな杖にまきつく。こうなると単純な力比べになり、大人と子供、多数と一人ではすぐに結果も見える。

「ふふ……、万事窮すか……」

「く、バギ！」

虚空に放たれる真空刃、しかし、それも標的を手前に霧散する。風の無い屋内では精霊も集められない。せめて魔力で増幅させるこ

とができれば多少は抗えたのだが、疲弊したりリヨカにそれはできない。

「ぐっ！　ぐわ！　なんだ、一体！」

膝を着きかけたところで、悲鳴が響く。さらに甘い臭いが漂い始め……、

「まさか、ヘンリー、デール、この空気を吸わないで！」

何事かと思いつつ口をマントで覆う二人、リヨカも外套で口を覆う。

優位に立っていた賊たちは突然のことに混乱しており、その空気の不穏さに気付かず……、一人、また一人と眠りに落ちる。

「おい、リヨカ！　ヘンリー王子！　無事でしたか！」

そしてパパスの声がした。

「父さん！　父さん！」

無事を知らせようと声を張り上げるリヨカ。倒れた男たちにかまいもせずに駆け出す。

「にゃおーん！」

最初に飛び出してきたのはガロン。彼はリヨカの足元をぐるぐる走り回る。

「ガロン！　シドレーも……」

「ああ、よかったで坊主。いやいやいや、全然よかない。つか、この親父も追われる身やで」

「え？」

父の顔は険しく、簡易詠唱のベホイミをかけつつ、ヘンリー達を促す。

「うむ。正直なところ再会を喜ぶ時間も惜しい。今はとにかくここを出る必要がある」

「わかりました」

リヨカもそれに頷き、父の来たほうへと走り出す。

難解な迷路もガロンが匂いを覚えていてくれたので難なく出口に向かうことができる。

追いかけてくる賊も立ちふさがる魔物もパパスの剣に切り伏せられた。

「貴様の父は本当に強いな！」

パパスの活躍に目を見張るヘンリー。リョカはそれに力強く頷く。「もうすぐですよ！」

徐々に向かい風が強くなりはじめ、外の空気の匂いがしだした。

だが……、

「そこまですよ……」

先ほど聞いた声の主が、出口を前にして立ちふさがる。ローブに身を包む魔物は不敵に微笑み、通せんぼする。

背後には鎧を身にまとった魔物と灰色の馬の魔物がいた。それらはこれまでの雑魚とはみるからに格が違う。

「邪魔をするな！」

パパスは問答する間もなく剣を振るう。

ガシーン！

鋭い金属音が響き、剣戟が受け止められる。

「ぬっ？」

ナマクラな剣ならば受けることも敵わず、なぎ払われるそれを、鎧の魔物は受けとめた。

「ぐう……人間風情が……」

だが、魔物もそれが限界らしく、一歩下がってやりすごす。

「なんの！」

パパスは好機とみなして再び切りかかる。

「ぐ、くっ、ぬう！」

初撃こそ防いだものの圧されていく鎧の魔物。業物と思しき剣も受け流しが決まらず、刃こぼれと悲鳴を上げる。

「ぶひひーん！」

鎧の魔物に加勢しようと、馬の魔物が嘶きをあげて襲いかかる。

「そうはさせるか！」

リヨカはブーメランを馬の魔物の目線ぎりぎりのところに飛ばし、動きを止める。ついでヘンリーの放った鞭がその左腕に逆手で絡みつく。

「ぐふう！？　ぬう、ガキが！」

子供とはいえ、力の入りにくい恰好に絡まる鞭。全体重をかけて引つ張られてしまい、引き離せない。

「だあ！」

間髪いれずにリヨカは鋼の杖で殴りかかり、足止めに専念する。

「ぬう、おい、ジャミよ！　そんなガキ共に手間取ってないで手伝え！」

鎧の魔物は不外ない相方に向かって叫ぶ。その間もパパスの攻撃は勢い衰えず、罅の入った剣は次の一撃で折れてしまう。

「ゴンズよ、そうしたいのはやまやまだが、このガキ、考えてやがる！」

リヨカとガロン、シドレーの攻健を捌きながら、なんとか左腕を解き放ちたいジャミ。しかし、ヘンリーもジャミの行動を制限させるように移動するため、それもできない。

「ぬおおおおおっ！」

防戦一方のゴンズを見て、パパスは決着をつけようと両手で剣を振りかぶり、雄たけびと共に振り下ろす。

「ぐう！」

盾をかざしてそれを堪えようとするが、鋭く重い一撃にそれは脆弱すぎ……、

バリリン！　ずばしや……。

ゴンズの左肩口からわき腹にかけて剣が走り、真っ赤な血が舞う。「ぬう……　なんと……　まさか人間ごときに……」

盾が犠牲になり威力を殺いだらしく、ゴンズは膝をつくも絶命は免れる。とはいえ今すぐに戦える状況にもないらしく、折れた剣を

着きながらパパスを睨む。

「リヨカよ、今ゆくぞ！」

リヨカに足止めをくらっていたジャミはゴonzの敗北を見て焦り始める。

「ぐ、このガキ、離れる！ くそ、くそ！ バギマ！」

ジャミは不自由な左手で中級真空魔法を放つ。だが、この混戦状況、狭い場所で向きも考えずにそれを放てばどうなるか？ 荒れ狂う真空刃は自分も巻き込みながら、天井、床を切り刻み、砂埃を巻き上げる。

「ぐわ、前が、ぐふつ、げほ、げは！」

人間よりも数倍鼻の穴の大きいジャミは巻き起こる砂埃を吸い込み咽ぶ。

「わっ！」

「ヘンリー！」

そのはずみで鞭の先端が切られたらしく、しりもちを着くヘンリー。リヨカは埃を拭いながら彼に向かって回復魔法を唱える。

「ぎゃあぁー！！！」

まだ砂埃が舞うというのに、ジャミの悲鳴が上がる。パパスは目を瞑りながらも寸前の状況からジャミを捉えており、胸に一撃をおみまいした。

「ぐう、ぐは……」

だが、やや踏み込みが浅く、致命傷にはいたらない。

「ほほほ、やりますねえ……。たかが人間ごときに遅れをとるとは……」

ローブの男はこの状況にも関わらず余裕の高笑い。膝を着くゴonzを蹴飛ばして前に出る。

「なかなかどうして……。そして子供と侮ってありましたよ……。ですが……。ギラ！」

詠唱無しの閃光魔法により、視界が光で見えなくなる。

「これならどうでしょう？」

視界を奪われながらも身構えるパパス。だが、次の攻撃は来ない。
「ぬっ……」

ローブの男はリヨ力を踏みつけ、ヘンリーを抱え、その首に鋭く伸びた爪を当てていた。

ガロンとシドレーは魔法で眠らされているらしく、険しい表情で床に伏せている。

「貴様……」

「この子達の命がどうなってもよいのでしょかな？」

途端に劣勢に追い込まれたパパス。剣を握る手に力は込めたままだが、それを振るう先がない。

「ほら、二人ともさっさと起きなさい」

傷を癒していたゴンズとジャミはゆっくりと立ち上がり、一転した状況に薄ら笑いを浮かべる。

「さあ、もうわかつていると思いますが……、もし貴方が抵抗なさればこの子達の命はありません」

「……わかった……、従おう」

息子と友人の子を盾に取られたパパスは考える間もなく武器を捨てると、観念したように目を瞑る。

「ふむ、よい心がけです……。ささ、お前達、先ほどの恨みを十分に晴らすとよいでしょう」

ローブの男の言葉に二匹の魔物は肩をいからせ、そして……。

立ち尽くすパパスに振るわれる暴力の嵐。

ジャミのこぶしがパパスの鳩尾を抉る。

ゴンズの折れた剣が背中を切り裂く。

戯れに唱えられた真空魔法が肌を刻み、燃え盛る炎が傷口を焦がす。

それでもパパスはじつと耐え忍ぶ。

＊＊

「く、もうやめろ！ 貴様ら、誇りはないのか！ 質を取り、抵抗も出来ない者を弄るとは、たとえ魔物といえど、見下げたものだぞ！」

首根っこをつかまれたヘンリーだが、まだ心まで屈していないらしく、啖呵を切る。

「ほほう、ここにきてまだ自分の置かれた状況を理解していないとみえますね。私がちよつとでも力を込めれば貴方なんてころつと死んでしまいますよ?」

「ふん、俺が死ねばパパスの枷もなくなる。そうすれば貴様ごと…
…!」

「ぐわあ!」

男は足蹴にしていたリョカを強く踏みつける。

「そうしたら今度はこの虫けらとデールさんに質になってもらいましょうかね?」

「くう、貴様……! パパス殿! こいつは絶対に俺達を助けるつもりはない! せめて貴方だけでも!」

「まったく貴方は困った王子様ですね。それでこそ王者の血筋とでも言いましょうか……、ですが、これを見たらパパス殿も観念するしかありませんまい?」

男は軽く詠唱をすると、空間から大きな黒い鎌を取り出す。それは人骨が散りばめられた見るからに禍々しいものであり、青白い湯気のようなものを出していた。

「死神の鎌といます。これで首をはねられた者は救われぬ魂となり、死後も永遠に悲しみと冷たい空間に閉じ込められるそうですが……、実験しても確証がなくて困ってるんですよ。だってほら、死んじゃうでしょう? もしよかつたらこの子達で試してみましようと思ひまして……」

「ぐう、心配なさらずに王子……。私は屈しません。そのうち、このモンスター共のほうがり疲れてしまふでしょう……」

そういつて笑うパパスだが、体中至るところから血を流し、たまに見せる回復魔法でも追いつきそうにない。

その間も攻撃の手が止まることはなく、パパスはがっくりと膝を

つき、そのままうつ伏せに倒れる。

「父さん！」

「ふむ、リヨカよ……。すまないな……。こんなことになって……。私だけならともかく、お前にまで、こんな辛い思いをさせて……。」「そんなこと、それよりも父さん、僕のことはいいいから、早くそいつらをやっつけてよ！」

地べたに這い蹲りながら交わされる会話に薄ら笑いを浮かべるロブの男。彼はそつと手を掲げ、ジャミとゴンズを控えさせる。

「よく聞いてくれ、お前の母は……。生きている。この世界の、どこか、いずれかで、今も、生きています。それを探すため、私は旅をしていた。お前に、お前に母のいる、家族というものを……。見せたかった……。が、どうやらもう私も、ここまでらしい……。だが、希望だけは失うな……。私が調べてきた、これまでのこと、妻に関わることだ、きつと、いつか、必ずや……。妻を、マー……。ぐふう！」

「茶番はそこまで結構です……」

言い終わるのを待たずにロブの男はパパスの背中に鎌を振るう。鮮血も勢いをなくし、ただだらだらと流れる。

「父さん！ 父さん！ しっかりしてよ！ 僕は、僕はまだ！」

リヨカは激しく身じろぎ、抗おうとする。

「騒がしいのは嫌いです」

しかし、ロブの男はそんな抵抗も許さず、彼をボールのように蹴り上げると、そのまま壁にぶつけ、さらにヘンリーをゴミでも放るかのよう投げつける。

「ぐわあ！」

二人ともつぶれた蛙のように呻くと、そのまま気を失ったらしく動かなくなる。

「さてと、手間取りましたが……。、デル様、お城へ戻っていただけますかね？」

思い出したように振り返るロブの男。デルは終始震えており、がちがちと歯を鳴らしていた。

「は、はい……」

恐怖におびえたデルが頷くのは当然のこと。彼にこの現状を覆すような力も知恵もないのだから……。

「ゲマ様、このガキと二匹はどうしましょう?」

煮え湯を飲まされたジャミとしてはいますぐにでもパパスのあとを追わせたいのだろう、鼻息を荒くしている。

「そうですね……、我らの教団ではまだまだ奴隷が不足しておりまして、連れて帰りましょう。そちらのベビーニユートとベビーパンサーは……、しばらくすればまた野生に戻るでしょうし、そうでなければ死ぬだけです。ほっておきなさい」

「は……」

ジャミとゴonzは頷くと、二人を抱えて遺跡を出る。

ゲマは怯えたままのデルの手を引く。

「ささ、行きましょう。貴方にはラインハット国を発展させる責務があります。我らが光の教団のためにも……」

「は……はい……」

無表情で頷くデルの目に意思はなく、視点も定まらない。

ほほう、もう言いなりになってくれましたか。これなら調教の必要もありませんね……。

多少の滞りもデルを恐怖で支配するために有益であったと、ゲマは一人ほくそ笑み、光の精霊を集めると、移動呪文を唱えた……。

34 | 奉仕者

岩を掘り出し、運び、削り、また運ぶ。
重ねて、組み込み、整える。

その繰り返し。

日が昇るより先に始まり、月が傾く頃にようやく終る。

夏の日差しに肌が焦げ、冬の寒さに心が凍る。

降り注ぐ鞭に従い、乾きを潤す水に群がる。

絶壁の孤島。四方は海に囲まれ、大鷲の姿は餌を求めて今日も舞う。

光の神殿、総本山建築現場はこの世の地獄であった。

「さあ罪深き者達よ、奉仕の時間だ。我らが光の神を迎えるため、今日も働けることを光栄に思うがよい」

薄暗い、垢と便の匂いの籠る寝床　　というのも憚られる一室に、
甲高い男の声が響く。

ゆらりと起き上がる影につられ、また一人、立ち上がる。

薄汚れ、ところどころほつれた胴衣に身を包む者達。目は空ろで、
ぜんまい仕掛けのおもちやが、切れ掛かった動力でもがいてるよう
にも見える。彼らの部屋を出るその様は、まるで生気が無いのだ。

彼らは光の教団の信徒にして最下層の存在で、奉仕者とされる。
奉仕者は過去の罪の赦しを請うため、こうして過酷な労働の日々
を送ることを義務付けられており、教団は愛を持って彼らを使役し
ている。

だが、現実には口減らしで買われた子、大小問わずの罪人など、
はみ出した存在を集めた奴隷に過ぎない。彼らはいつ終るとも知ら
ない神殿建設のていのよい労働力なのだ。

大方の奉仕者が部屋を出た頃、まだ隅に残る者がいた。

一人は寝たままの奉仕者に対し手を翳し、呪文を必死に詠唱して

いた。

もう一人はその様子を見ながら顎髭の生え具合を撫で、壁を指でなぞっていた。

「おい、お前ら、もうとっくに就労時間が始まっているのだぞ。さつさと部屋を出ろ」

苛立った教団員は鞭を振るいながら叫ぶ。

「ですが、ピエトロの解毒がまだ終らなくて……」

黒髪の青年は振り返らず、そう答える。

寝そべったままの奉仕者の顔色は悪く、紫色の斑点がいくつも見えた。それは痣ではなく、内側から染み出した、病による悪質なものと推測できる。

「貴様ら教団の子は光の神に守られているのだ。病などというものは心神の気持ちさえあれば自然と浄化される。まさか労働の喜びをサボろうとしているのではなかるうな？」

「監視殿、これは流行り病かもしれません。もし放置したら、ここらの宿舎の全員が感染しかねません」

流行り病という言葉に教団員の歩みが止まる。彼とて心神の気持ちで病が治るなどと思っただけでなく、もし全滅となれば管理責任を問われかねない。

「むう、ではその……ピエトロか、ソイツを処置室に運ぶとしよう。そこの緑の髪。お前、ソイツを運べ」

顎髭を触っていた青年はちらりと教団員を見ると、一瞬考えた後、ピエトロに近寄り、無理やり立たせる。

「ヘンリー、ピエトロはまだ安静にしていなと……」

黒髪の青年はヘンリーの行動に驚いたらしく、それを制止しようとする。

「リョカ、悪いが命令なんだ。それにピエトロの病が流行り病なら、ここに置くことで全員が危険に晒される。お前の気持ちはわかるが、こうするしかないんだ」

「だけど……」

冷静なヘンリーの意見に、リヨカは唇を噛む。

解毒魔法キアリーの効果は確かにある。暫く続けることで全快も可能だと見込みもある。だが、それは衛生的な場所と十分な栄養、それに休養が必要だ。それらが望めないのはわかりきったことであり、リヨカの解毒は病の進行を抑える程度でしかない。

「リヨカ、僕は大丈夫だから……。今までありがとう……」

ピエトロは薄目を開けると、リヨカに力なく笑い、ヘンリーの肩に捉まりながらよろよろと歩く。

「まって、せめて僕も肩を貸す」

リヨカは二人に駆け寄ろうとするが、教団員に阻まれる。

「おっと。お前には別の仕事がある。解毒魔法が使えるのだったな？ もしかしたら俺にもその病が移るかもしれんから、念の為に浄化を頼む」

それこそ心神の気持ちで何とかしてもらいたいことなのだが、ここで彼の機嫌を損ねてはピエトロの処置室行きも危うくなると、リヨカは印を組み、解毒のために大地の精霊を集めた……。

* * * * *

リヨカは奉仕者になり、三年の月日が過ぎていた。

父の死に苛まれ、過酷な労働に筋肉が悲鳴を上げ、病や事故に倒れる奉仕者を眺める日々、次第に感情が磨り減りつつ、それでも彼は自分のできることで人々を助けていた。

同じ年くらいの奉仕者、ピエトロらは彼の回復魔法や解毒魔法により傷を癒し、病を克服し感謝もした。だが、年老いた者はそれを拒み、死を望むもの多かった。

リヨカは彼らの無念を前に歯噛みし、無力を悲しみつつ日々を送ってきた。

一方、共に身を竄したヘンリーはというと、従順に監視に従う素振りを見せたと思うと、ぱっと姿を消しては夕飯の頃に戻ってくる

という神出鬼没な様子を見せていた。

あの気位の高いヘンリーが監視にへつらう様子を、リヨカは悲しさとは違う何か落胆を感じていた。だが、未来の見えない生活の中、それを軽蔑する気にはならなかった。

兵舎にて病の予防を行うリヨカ。監視の男の周りには大地の精霊が漂い、黒い霧を空中に誘い出していた。

「終わりました……」

「そうか、ご苦労……」

役目を終えた大地の精霊が地面に溶け込んでいく。監視の男は着物を正し、肩をまわす。

「ふむ。それでは持ち場に戻れ」

「はい」

リヨカは兵舎を出ると、岩切り場へと向かった……。

一日二回の食事は昼と夜半頃にある。

筋ばった肉と根菜の雑煮の一種類のみで、味は濃い塩味のもの。年齢性別問わず、一人椀に一杯のみの質素なものだが、使われる野菜が安価な割りに栄養価の高いのが救いだった。

リヨカが椀を啜っていると、ヘンリーがやってくる。今日もどこかでサボっていたのか、岩切り場でも、神殿側でも姿を見ることは無かった。

「ヘンリー、ピエトロは？」

リヨカは彼の素行などよりも、近い年の彼のことが気になっており、開口一番に尋ねる。

「聞いてどうする？」

だが、ヘンリーの言葉は簡素ながら絶望を与えるものだった。

「そう……」

処置室という場所がどのような場所かリヨカは知らない。ただ、その場所に運ばれた者が戻ってきたという話もない。

本当のところ、リヨカは処置室に行きたかった。自分の魔法で少しでも人を救えるのなら、役に立ちたいという気持ちがあったからだ。しかし、処置室は決まって老人が付き添うばかりで、その老人も処置室については何一つ教えてくれないのだ。

「ねえ、ヘンリー。処置室には……」

「ああ、そのことで話がある。いや、今すぐにはできない」

腕に反響させたぼそぼそとした声。だが、前を向く彼の瞳には、前に見せた輝きが見えた。

「……わかったよ」

だから頷いた。かつて彼を親分と呼んだときの、子供心な頼り強さがあったから……。

35 | マリア

それは唐突なことだった。

白い、まだ汚れていない胴衣を着た女がやってきた。

新しい奉仕者で非力ながら水汲みを担当するらしい。

それだけならそう珍しいことではない。

問題なのは彼女の容姿。

靡く金色の髪、白い肌。二重瞼は悲しみに伏せられていたが、高い鼻と形の良い唇のせいで、その美貌が際立つ。きつと笑ったら優しい優雅なそれを見せてくれると思う、そんな人だった。

年こそリヨカと同じくらいだが、胸の膨らみやお尻の丸みを見るに、そこそこ良い暮らしをしていたのだろうと伺える。

彼女の名はマリア・リエル。つい先日まで教団幹部の従者をしていたらしい。だが、ある「粗相」を起こしてしまい、その罪を償うために奉仕者となったらしい。

リヨカは彼女を見てつばを飲んだ。これまで出会ってきた女性の誰とも違う雰囲気、胸がざわめいた。

それはヘンリーも同じらしく、目を丸くさせながら、口を開いてしばし呆然としていた。

その日から、たびたび水飲み場に出向く働き者のヘンリーが見受けられるようになった……。

降り注ぐ太陽、神殿頂上部の作業では日差しを遮るものもなく、ただひたすら暑さに耐える必要があった。

そんな中、水飲み場だけは簡易の小屋があり、水を運ぶマリアが伏し目がちな笑顔と一緒に、ひと時の清涼感をくれた。

「すみません、水をください……」

リヨカは照れくささがあつたが、それは今も同じ。他の奉仕者に比べても仕事量を多くこなすリヨカだが、以前より水をもらいに行く回数が増えたことを自覚していた。

「はい、どうぞ。リヨカさん、がんばってくださいね」

「ありがとうございます」

それだけ言うのが精一杯だった。

かつて知り合えた女の子達なら、向こうから歩み寄りどころか踏み込んでくれたおかげで自然と会話ができた。だが、彼女のように風に吹かれてはそのままよろめくようなたおやかさを持った人だと、どうにも腰が引けてしまう。

「マリア、俺にも水をくれ。こう暑くてはかなわなからな」

「はいはい、ヘンリーさんも午後のお仕事がんばってくださいね。」

あんまりさぼっちゃだめですよ？」

「はは、君から水をもらえるんだ、いつもの倍は働いているつもりだよ」

「まあ……、うふふ」

一方で彼女に自然と振舞える友人を羨ましく思えた。

そして、彼女が彼を見る視線にも、どこか柔らかさがあることに気付いていた。

リヨカは正直なところ、嫉妬していた。

この数週間、同じ場所で、同じ程度の時間を過ごしていたはずなのに、リヨカとマリアでは共に奉仕者同士でしかない。

だが、ヘンリーはいつの間にか彼女と距離が狭まっていた。彼女は彼を前にして、よく笑う。愛想笑いではなく、心から楽しんでいるように。

どこに差がついたのだろうか。互いに同じ奉仕者なのに、どこに差がついたのだろうか。

リヨカは奉仕者の仲間を魔法で癒してきた。それは確かに感謝される行為であった。

一人減ればそれだけ他の奉仕者に仕事が向かうのだから、頭数が減りにくくなるのはありがたいことなのだ。

対しヘンリーはどこかズルさがあった。監視の目を盗んではどこかへ姿をくらしましていたり、要領よく監視に取り入るうとしたりと。なのに、彼を悪く言うものは少ない。

それが不満だった。

リヨカは最近、寝る前にそんなことを考えることが多かった。

答えはわからない……？ いや、少しだけヒントのようなものがあつた。

それはリヨカに無くてヘンリーにある何か……。

何かが決定的な差になっているのだろう。

++ ++

いつものように水を汲み、運ぶマリア。

白い胸衣もだんだんと薄汚れ、櫛も満足に入れられない髪は最近切ってしまった。日々の労働で白い肌も焼け始め、腕もやや太くなる。

初めてここへ来た時のたおやかな雰囲気も消えたが、爽やかさが備わり、破れた胸衣から見える肌に生々しさが見えた。

監視の一人は階段を上がる彼女を見つめ、ゴクリと唾を飲む。

瓶を持つ彼女は水がこぼれないようにと慎重に、気をつけながら歩いているためか、身なりにおろそかになっていた。

やや大きめの胸衣、ほつれも目立ち始め、階段の上から眺めると下着もつけていない胸元が風の具合によっては覗けてしまう。

目をしばたかせてマリアを見る監視の男。

ここへ来る奉仕者の女はどれも器量悪しの者ばかりで、彼女のような存在は彼らにとっても異質である。夕飯のおかずや労働のサボりを理由に何人かの女奉仕者とり引きをする監視は多く、その欲望が彼女に向かないはずもない。

ただ、彼女の場合、兄が教団員で、その地位は奉仕者の監視より高い立場にあるらしく、あまり下手に手を出して行為が発覚した場合、監視から奉仕者に落されかねない。

また、労働自体も比較的楽な水汲みとあり、さらに小食であることからサボリや食欲で誘惑することもできない。かゆいところに手が届かない存在なのだ。

そんな鬱憤を抱く監視が下心を出さぬはずもなく、風のイタズラで見え隠れする彼女の胸元を盗み見していた。

未だ白い肌にくつくらとした胸。手で嗜めばややあまる程度のおっぱいと、小ぶりな乳首。もし彼女が普通の奉仕者なら、何かしら文句をつけて慰みものにしていただであろう。それともか、ひと時のたんぱく質で腰を振ってくれるだろうか？ 下卑た妄想をしつつ、彼女が監視の脇を通りすぎようとしたとき、堪えられなくなった手が彼女のお尻に……。

「きゃっ！」

驚いたマリアは胸衣の後ろを押える。と、同時に瓶が落ち、がしやんと音を立ててその場に水をぶちまける。

「貴様！ 教団の財産になんてことをしてくれん！」

結果に驚いた監視は裏返った声で喚き、マリアに鞭を振りかぶる。

「え、だって、私、いきなり……」

お尻を触られて驚いて……。

そう言おうとしたが、振るわれた鞭の音に竦んでしまう。

「なんだ、何があった？」

物音に集まる監視達。その原因がマリアであると知り、「ごくりと唾を飲む。

これをきっかけに、この女を……。

下心を抱く監視達はいかに自分の手で罰を与えようかと算段している。

「何を言ってるんだ。マリアが運ぶのを邪魔したのはその監視の男だろう。俺は見えていたぞ。階段の上からマリアの胸を盗み見て、す

れ違いざまに知りを感じたのをな！」

そこへやってきたのはヘンリーだった。彼は高らかに宣言し、知りを触った監視の男を指さす。

「な、何を言っついていやがる。俺は……俺は……」

しどろもどろになる監視に、別の監視が前に出る。

「同士よ、もしこの奉仕者が言っているのが本当だとすると、貴様は罪を犯したことになるな……」

「なっ、何を……」

「奉仕者、ヘンリーよ、貴様、先ほどの言葉に嘘はないのだな？」

「ええ、俺はこの目で見ていました。水をもらおうと水飲み場に向かいましたところ、マリア……、あの奉仕者の姿が見えず、仕方なく戻ろうとしたところで階下に二人の姿を見たのです。俺は暫く待たば水を飲めると思いこの場で見ておりましたが、その際、この男が奉仕者に劣情を抱き……」

「だ、黙れ黙れ！ 同士よ、貴様らこんな奉仕者の言うことを信じるのか？ 俺はそんなこと……」

「ふむ。だが、同士がここにいる理由がわからないな。確か同士は神殿上部の監視の担当ではなかったか？ ここにいるということは持ち場を離れているということ、それは神殿建設に滞りを起こしかねない重大な罪……」

雲行きが怪しくなることに、尻を触った監視は油汗をかき始める。というのも、もし罪が認められたら財産の没収と奉仕者へ身分を落すことになる。そして、その財産は他の監視の分け前として再分配されることになっている。

神殿建設の監視など閑職もよいところ。給金も少なく、憂さ晴らしをする場所も無い。せめてもの救いは無駄遣いが減って貯蓄が増えることぐらい。

お金を貯めるということに生きがいを見出す者も居り、監視同士での足の引っ張りあいも起こる。

そして、実のところ、この監視はヘンリーと通じている部分があ

り、素行の悪い監視を糾弾しては小遣いを稼いでいた。

「これは詳しく話しを聞く必要がありますな……」

「ま、待って、待ってくれ……俺は、誤解だ、そんなこと……」
喚く監視と肅々と連れて行く監視達。にやりと笑う監視と、ほつとするヘンリー。

「だが、待ってくれ。この女は我らが教団の財産である水がめを割ってしまったのだ。尻を触られたとはいえ、その罪は免れまい」

すると別の監視がぼそりと呟く。小太りの男はマリアに下卑た一瞥を向けたあと、キョロキョロと周囲を見る。

「いや、尻を触られた程度で水がめを割るなどと、この世に水がめが存在できないだろう」

「うむ、これは十分な罪だろう。別途罰を与えるべきだろう」

マリアを糾弾する声に再び慌てるヘンリー。こればかりは通じている監視も庇いきれないらしく、無表情でいた。

「ま、待ってください。一つ忘れておりました」

「なんだ、まだあるのか？」

「は、はい。本来水がめを運ぶのはこの俺の仕事なのです」

「でまかせを言うな。いつもこの女が運んでいただろう」

マリアに懲罰を与えられると考えていた監視は、それを庇おうとするヘンリーに苛立ちがてら、声を荒げる。

「いえいえ、俺の仕事でした。考えても見てください。女の足で水飲み場から神殿の頂上に重い瓶を運ぶなどと非効率きわまりないでしょう。それに、もし俺がすっかり自分の仕事をしていれば、尻を触られることもなく、水を奉仕者に運ぶことができました。今、奉仕者達が渴きを訴え、効率が下がっているのは、全て俺が仕事を彼女に押し付けてさぼっていたことが原因です」

監視の前にひれ伏すヘンリー。彼がサボっていたことは監視達にも思い当たる節があり、また、生意気な彼に罰を与える口実ができたのは都合が良い。

マリアに関してはまた別の機会にでも難癖をつければよいと、監

視達は意地悪い笑いを浮かべる。

「あいわかった。貴様の罪、しっかりと償ってもらおうぞ………」

監視はヘンリーを引き立てると、兵舎へと連れて行く。

「ま、待って……、ヘンリーさん、私………」

当事者に口を挟むことをさせない急な展開に、マリアは困惑する。罰から逃れられた安堵と、身代わりとなったヘンリー。何故という疑問が浮かぶ頃には、ヘンリーの姿は階下の下、ずっと向こうに消えていった後だった……。

石切場から石を運んでいたリヨカは、ヘンリーの姿が見えないことに、またいつものさぼりだろうと思っていた。しかし、水飲み場の消沈した様子のマリアを見て、不思議に思い、さらに夕飯の頃、姿を見せなかった彼に戸惑った。

「ヘンリーさんが……」

夜、眠る前にマリアが涙ながらにそう訴えてきた。

「ヘンリーに何かあったの？」

「私の代わりに瓶を割った罰を受けるって……、私、怖くて、何もわからなくて……、何も、何もできずに……」

「ヘンリーが罰を？ まさか……！」

ここに来てから何度となく見てきたが、奉仕者に対する罰は拷問と呼べるもの。

監視の気分次第で鞭を振るう回数が変わるが、四十を越えるまでは終らない。幸いなのは二十を越える頃にほとんどの奉仕者が気を失うことぐらい。その後は満足な治療を受けられず、傷口が化膿し病に倒れてしまう。

リヨカはそういう奉仕者を魔法で治癒しようとしたが、「このまま死なせてくれ、むしろ殺してくれ」と頼まれることが多かった。

比較的軽症だった者も、日々監視の影に怯え、次第に精神を病み、高台から身を投げてしまった。

友人を失うかもしれない状況に、リヨカは焦りを覚えた。

暗闇の闇、疲弊と垢、病の匂いの漂う中、リヨカは部屋を出ようとする。

部屋は脱走を禁じるために施錠がされているが、リヨカは小さく「アガム」と唱え、扉を開ける。そして素早く鍵を掛けると、周囲を伺いながら兵舎へと走った。

夜とあってどこも人気は無い。警備が薄いのは奉仕者の脱走が無いためだろう。

この神殿は聞くところによると孤島にあるらしく、四方海に囲まれている。脱走したところで、下界には凶悪なモンスターがいるとされ、死ぬか殺されるかの違いしかないらしい。

まさにあるのは絶望のみ。改めてそう思うが、それゆえに友人を救いたい気持が強くなったのかもしれない。

薄暗い廊下を通り、道なりに進む。リョカが兵舎に入るのはこれが初めてだった。

ヘンリーをどうやって助けるべきか悩む。もし彼が縛にあったとして、それを逃がせば当然幫助した自分も罪に問われるだろう。場合によっては彼らの閨にいる全員が連座制として咎められるかもしれない。

単身飛び出したことを後悔し始めるリョカだが、それでも何かせすにはいられないと、早歩きになっていた。

廊下の奥、明かりと音が漏れている。同時に胸騒ぎがする。過去、囚われたヘンリーは気丈にも堪えていたが、それは女が手加減していたからだろう。容赦のない男の腕力で振るわれる鞭を耐えられるはずも無い。

ヘンリー、無事でいてくれ……。

無理な願いをしつつ、リョカは人の気配のする部屋のドアの前まで来た。

そして、こっそり中を伺う……。

部屋の中では木に縛られたヘンリーがうなだれていた。胴衣のいたるところが破れ、額、腕、足、胴と、いたるところから血が流れており、時間が経ったものは固まり黒く見えた。

ヘンリー! ?

焦るリヨカだが、監視の数は五人。単身乗り込んで勝てるかといえば、碌な装備もなく、疲労で魔力も乏しいリヨカには難しいだろう。

「おい、まだ寝るには早いぜ？ おら！」

鞭を振るう音。それはヘンリーの振るうそれに比べて数段ひよるものだ。もともと狭い部屋で扱うべきものではなく、周りに気を遣っているせいもあるからだろうか、かなり弱々しい。だが、それが今の今まで行われ、蓄積していたと考えれば、辛く苦しいものにも他ならない。

どうしよう。どうすれば……。

友人が責められている姿が見たいわけではない。こうして爪を噛む思いをするだけなら意味が無い。かといって、打開する方法もない。

その時だった。ヘンリーと目があつた。リヨカは一瞬どきつと胸がなつた。

彼は顎を上げると、目を上にする。リヨカもそれに倣い、上を見る。

部屋の上部にはプロペラが絶えず回っており、外気を取り込む穴が見えた。

リヨカはひとまず隣の部屋に行くと、空気穴をよじ登り、狭い中を這いながらヘンリーのいる部屋の上部へと回った。

「どうだい？ これからは真面目に働く気になったかい？」

監視の一人がヘンリーの頬にナイフをつきたてる。そのひんやりした感触に、これまで無反応でいたヘンリーが慌てふためきだす。

「や、やめてください！ 俺、反省してます！ もう二度と軽口立てませんから！」

そのわざとらしい反応にも、ようやく拷問を受ける囚人らしいと笑いが起こる。

「へっへっへ、いきなり命乞いか？ 安心しろよ。お前は俺らの教団の大切な労働力なんだ。簡単には殺さねーよ」

「ひっ、ひい……」

ぶんぶんと首を振るヘンリー。そして、視線を空調の穴へ向ける。「せめて、回復させてくださいよ。俺、明日からがんばって働きますから、だから……、だから……」

「てめえに薬草なんてもつたないんだよ。俺のシヨンベンでもかけてやるよ」

監視の一人はズボンを降ろし、ヘンリーに対し放尿を始めようとする。

「おいおい、部屋が臭くなるからやめろよ」

それを薄笑いの監視の咎められ、監視はしぶしぶ逸物をしまつ。

「へっへ、まあ、そうだな。ここは奉仕者の部屋じゃねんだったな。まあいい、お前はせいぜいいたぶってやるよつと！」

監視の男は鞭を手放し、握ったこぶしを思い切りヘンリーの腹に埋める。

「ぐふっ！」

血反吐を吐くヘンリー。監視はその様子に興奮したらしく、さらにもう一撃。

衝撃に胃がせりあがり、戻し始めるヘンリー。

「うわっ汚ねえ！ てめえ吐いてんじゃねーよ！」

思わぬ反撃にあった監視はヘンリーの頬を叩く。息を荒げるヘンリーはその監視を一瞬睨み返すが、また視線を落す。

「このやろっ！」

その視線に気付いた監視はさらにいきり立ち、ヘンリーに暴力を振るった。

その皮膚がやや硬いことになど、当然気付かずに……。

* * * * *

「我が鎧は堅牢なり、大地の精霊よ、彼に加護を……、スカラ……」
印を組むリヨカ。すぐさま光の精霊を集め、回復魔法を詠唱する。

今の彼にできることといえば、ヘンリーに浴びせられるダメージを少しでも和らげることくらい。リョカは魔力が続く限り、監視達の暴力が終るまで、ヘンリーへの回復魔法を唱え続けていた。そして、その残酷さを噛み締めていた……。

* * * * *

ヘンリーが戻ってきたのは次の日の夜だった。

彼は人相が変わるほどに顔を殴られており、また身体中に痣と擦り傷が見えた。

「ヘンリーさん！」

彼の惨状に涙を流して走りよるマリア。彼女は桶に汲んでいた水と比較的綺麗な胸衣の一部を破り、浸し、彼の傷口を拭った。

「いちち……」

「あ、すみません……」

「なに、気にしないでいいさ。これくらい……、比べれば平気だ」

遠い目で虚空を見るヘンリー。リョカに節目勝ちの視線を送り、ふとため息を漏らす。

「ですが、ですが……」

「はは、俺らのアイドル、マリアの直々の看病を受けられるなんて、俺は幸せだな……」

そう言いながら血反吐を吐くヘンリー。

「へ、ヘンリー？」

内臓にダメージを受けているであろうヘンリーに、慌ててホイミの印を組むリョカ。苦しみに眉間をしかめるヘンリーは、リョカの手が翳されることでやや安らぐ。

「ふむ。すまないなりョカ。お前には世話になりっぱなしだ……」

「そんなことないよ。僕は、自分が、自分のしていることが、本当に気休めでしかない、それも自己満足だって……」

傷を癒したところで、新たな傷で上書きされるだけ。罰を受けた

奉仕者が自ら命を絶つまでの間、心の恐怖に取り付かれていたことに気付けない己の浅はかさを恥じるリョカ。

それでもヘンリーを見捨てることができず、わずかな魔力で精霊を役する。

「ふん、俺は自分から頼んだのだ。お前が落ち込むのはおかど違いだ。それに……」

再び長いため息をつき、

「俺はここで終わるつもりはない。必ずここから出る。抜け出して、そして、奪われたものを取り返す。俺は、そう、王者の宿命の下にいるのだから……」

胸の前でこぶしを握るヘンリー。その姿にリョカは温かいものを感じた。

ここに来て暫くして失ったもの。日々の暮らしの中、リョカに無く、彼にあるもの。

それは希望だろう。

ヘンリーはこの地獄に落ちて未だ、三年たった今もそれを失っていない。

「だが、リョカよ……、もしもの時のために……、お前に伝えておくことがある。いいか、お前にだから……」

「何言ってるのさ、ヘンリーにもしものなんて無いよ。僕、新しくベホイミを覚えようと思うんだ。そしたらもつと効率よく回復できるからさ……。だから……」

中級回復魔法ベホイミの印をリョカは知らない。そもそも、入門書のみようみまねでしかないホイミは、ルビス正教会の神父のそれに比べても効果が薄い。けれど、弱根を吐くヘンリーを前に、何か少しでも希望を持たせようと言わざるを得なかった。

「ふん。俺は……、必ずラインハットへ戻る……ぞ」

胸の前で握られていたこぶしが解ける。そして、がくりと顔を横にする。

「まさか、ヘンリー？ ちょっと嘘だろ!？」

リヨカは彼の腕を掴み、揺らす。その腕には力強く脈打つものがあり、胸もわずかに上下している。どうやら眠ったようだった。

「脅かさないでくれよ……」

そう言いながらもリヨカは彼の身体、特に青い痣の多いおなかの周りに重点的に回復魔法を唱えていた。

それは夜半過ぎ、東の空が赤くなっても、次の日の就労時間がくるまでも続けられた。

* * * * *

「待つてください！ この人達は、リヨカさんは、ヘンリーさんの看病で……、だから！」

空ろな覚醒を促すのは聞き覚えのある声だった。

ぼやけた視界に向かい合う誰か。一人は奉仕者で、もう一人は監視。

自分やヘンリー以外の誰が監視に噛み付くのだろうか？

そんなことを考えながらゆっくりと起き上がる。

「なんだ、そっちは働けるのか？ おら、もう就業時間だぞ。今日も光の教団のために働けることを幸せに思え」

「お願いします。リヨカさんはヘンリーさんの看病で寝ていないんです。今日は……」

ヘンリーという言葉にハツとなるリヨカ。隣にはヘンリーが寝ており、その胸は呼吸とともに上下していた。

だが、唇が青く、端に血が見える。寝ている間も吐血しているのだろう。内臓へのダメージはまだ回復しきっていないかに見える。

リヨカはすぐさま印を組み、ヘンリーに回復魔法を施す。眠る彼の眉間から険しさが消え、ほっとする。

「ふん、貴様は何か勘違いしているな。看病など必要ない。お前らは光の教団に奉仕することこそが至高の幸せなのだ。ほら、さっさと持ち場に行け。そっちのソイツは処置室に運ぶ」

「な、処置室なんて……。どうか、それだけは勘弁してください。必ずヘンリーは復帰できます。きっと彼は労働力になりますから、だから……」

処置室という言葉に酷く怯えるマリア。リョカは氣をとられたものの、すぐに処置に向き直る。

「ふむ……。となると、そいつが寝ている間、お前が代わりに奉仕をするというのか？」

「え？ ええ……。私が代わりにいたします。なんなりと……」

「そうか……。なるほどな……」

監視の男は上唇をペロリと舐めると、マリアの腕を掴む。

「よしわかった。それならそっちのお前。お前はソイツの看病でもしている。特別に許可する」

リョカは振り向くこともなくヘンリーに集中する。内臓のような重要な器官の損傷は完全に回復させなければと、神経を研ぎ澄ます。

背後で何が行われようと、今は目の前の友人を救うことが、何よりも大事だった……。

37 | ルビーエルフ

ヘンリーの看病から二週間目の昼。ほぼ不眠不休で回復魔法を唱えるリョカに疲労は目に見えるものだった。

ヘンリーは相変わらず吐血を繰り返し、少しの油断でも大事に至る不安があった。

「くそ、どうしてだ。ヘンリー。がんばってくれ。僕もがんばるから。だから、死なないでくれ。僕を、僕を一人にしないでくれ。君はラインハットの大地を踏むんだろ？ 民を、国を幸せにするんだろ？ こんなところで寝てる場合じゃないんだ！」

上手く行かない看病に愚痴を零し始めるリョカ。度重なる精神集中と魔力の過剰な使用に視界がかすみ、何度も眠気に誘われる。そのつどりョカは唇を噛み、大腿に爪を立て抗った。

「……俺は、きつと、必ず、戻る……」

ヘンリーの口からうわごとが漏れる。リョカは目を見開き、その腕を掴む。

「そつだよ。だから、がんばってくれよ！ 君は、君は王者になるんだろ？」

「王者？ その奉仕者が？」

不意に声が聞こえた。リョカは振り向くが、誰もいなかった。物見夕山の監視だろうかと考えたが、声は女であり、聞き覚えが無かった。

だが、気配がする。

「誰だ？ 誰かいるのかい？」

リョカの声に誰も答えない。だが、リョカは勘違いと片付けず、周囲を伺いながら部屋のドアを閉める。

「前にもこんなことがあった。誰かいるね？」

虚空に話しかけるリョカだが、彼の経験上、姿を隠せる魔法があることを知っている。それは妖精族が知る禁魔法の一種のレムオル

だ。

「ベラ・ローサ。僕の知っている妖精の子だ。君は知らないかい？」
「ベラ・ローサ？ 知らない名前だ。だけどローサはエメラルドエルフに多い姓ね……」

再び虚空から聞こえた声に、リヨカはひれ伏す。

「やっぱり妖精なの？ ねえ、お願いがあるんだ。どうか、ヘンリーを助けてくれないか？」

「アンチ・レムオル……」

光輝く精霊が現れ、霧散すると同時に淡いピンクの髪と赤い瞳の女の子が現れた。

冷静そうな細い目と流麗な眉に睫、整った鼻梁と控えめな唇は、ベラのような陽気な雰囲気がない。カールさせた髪で耳を隠しているが、精霊のイタズラで揺れたとき、尖った耳が見えた。

「貴方は妖精と会ったことがあるのね。ふうん……」

「君みたいな妖精は初めて見るけど、前に一緒に冒険をしたことがある」

「そう。まあいいわ。それより、その倒れている人……、王者としての資質があるの？」

「え？ えと、ヘンリーはラインハット国の王子だ。王者というか王子だし、国に帰ることがあればそうなんじゃないのかな？」

「そうじゃないわ。これを持たせて……」

赤い目のエルフはリヨカに何かの欠片のようなペンダントを渡す。リヨカがそれを受け取ると、それは不思議と温かさがあり、白く光った。

「ふうん。私は貴方でもいいんだけどね」

リヨカは戸惑いながら、彼女の協力を得るためにヘンリーにそれを握らせる。すると、温かくなり、さらに緑色に光る。

「へえ……まさかね……」

その様子に赤いエルフは驚いたように目を見開く。そしてヘンリーに近寄り、手を翳す。

「浄化の光よ、今一度彼に生の喜びを……、ベホイミ……」

リヨカのうる覚えの印とは異なった、ついでに詠唱の形式も違う中級回復魔法はヘンリーの青みの残る腹部、胸元から黒い霧を吸いだしていく。

「え、え、え？」

まるで知らない魔法に見え、戸惑うリヨカ。だが赤い目のエルフは気にする様子もなく、別の印を組む。

「イタズラなる風の精霊よ、我は汝に求める、かの者達に慌しい朝の目覚めの洗礼を……ザメハ……」

今度はヘンリーの額から青白い霧が立ち、すっと消える。

「ん？ 俺は……」

がばつと立ち上がるヘンリー。長いこと同じ姿勢でいたせいかわかると抱えるが、腹部や胸元を押える気配もなく、血反吐に咽ぶ様子もない。

「ヘンリー！ 良かった！」

「うむ。看病ご苦労であった……。お前は？」

喜びのあまり涙を浮かべるリヨカを労いつつ、見知らぬ赤い目の女に眉を顰めるヘンリー。

「ご挨拶ね。貴方を助けてあげたって言うのに……」

「そうなんだ。この人がヘンリーを助けてくれたんだ。えっと……貴女は……」

「私はエマ、エマ・ミュール」

「エマか……。ふむ、初めて見るな、エルフというものは……」

「あら、よくわかったわね」

さほど意外というほどではないが、驚いてみせるエマ。

「ルビーエルフ。伝承の中の架空の存在だと思っていた」

「へえ、博識なのね。なら、私がどういふつもりかわかるかしら？」

「だから驚いている。ルビーエルフが人間を助けるなど、その存在を知る者ならありえないからな」

「ちよっとヘンリー、どうしたのさ？ 彼女は君のことを……」

不穏な空気にリヨカは慌ててしまう。険悪というわけではないが、ヘンリーが彼女を警戒している様はみてとれる。

「何が目的だ？ 貴様らが見返りなしに人間を助けるはずなど無いだろう？」

「話が早いよね……。なら言うわ。王者となりなさい」

まったく話の見えないリヨカは、二人を見返して口を嚙む。

「ふん、そんなこと、頼まれるまでもない。俺はこんなところで死ぬつもりはない。ラインハット国の王族なのだから」

肩を鳴らしながら立ち上がるヘンリー。エマは腕を組みながら彼に冷ややか視線を送る。

「言うわね。でもどうやってここを出るつもりなのかしら？ 四方は海に囲まれて、ここを降りたところで凶悪な魔物がひしめいているっていうのに」

「俺が無駄にここで時間を過ごしていたと思うか？ リヨカよ、俺は何日寝ていた？」

「え？ えと、多分二週間目かな？」

「そうか、なんとか間に合いそうだな。よし、明日だ。明日にはここを出ようではないか」

「な、なんだって？」

先ほどまで寝ていたヘンリーがいきなり脱走を提案することになりヨカは驚きを隠せない。まさかまだ熱に浮かされて現実と夢の区別ができないのではないかと疑うほどだった。

「そんなことができるのかしら？」

それはリヨカも思う疑問。

「ならお前なら出られるのか？」

だが、ヘンリーは自信に満ちた様子で言い返す。

「私にはルーラがあるわ」

「ほう、便利だな。お前俺の子分になるか？」

「冗談。貴方が私の僕になるんでしょ？ そうしたら今すぐにでもこの地獄から抜け出させてあげるわ」

「なら交渉の余地はないな。俺はお前の僕になるつもりはない」

「ヘンリー、そんな言い方は……」

「ルビーエルフは人間を信用しない。というよりは、我々が恨まれることしかしていないのだ。むしろ俺を助けてくれたことすら奇跡に近い」

「話が早くて助かるわ」

「リヨカ、お前とマリアだけなら何とかできる。任せろ」

「そう……。けど僕はここに留まって少しでも……」

「バカなことを言うな。お前もわかってるだろう？　ここにいたところで救える命など無い。俺はお前の看病に感謝している。そして、ラインハット国を立て直す力になってほしいと考えている」

「僕は……」

逡巡するリヨカ。ここから脱出したいという気持ちは当然あるが、自分だけ助かってよいのだろうかという後ろめたさがある。

まだここには自分よりも若い子もいるのだ。もしできるのなら奉仕者を全て脱出させてあげたい。一方でそれができないことも知っている。ならばせめて少しでも彼らの負担を軽減させられたら……。そんな気持ちがあった。

「リヨカ、前を見る。ここにいてもお前の父の遺言は果たせない。卑怯な言い方だが、お前がここに留まるのはパパス殿の遺言を異にするだけだ」

そして、父との約束。

母を捜すことはパパスの遺言であり、願いだった。無念に散ったであろう父のことを言われると、リヨカの心の天秤はヘンリーに傾き……、

「頼む、リヨカ」

「……わかったよ、ヘンリー……」

頷くほかになかった。ヘンリーは彼の肩を叩き、無言で頷いた。

「ふん。かってに盛り上がって……。まあいいわ。ヘンリー、貴方の王者としての資質、見させてもらおう……」

「そうだな。その時はお前も子分にしてやる」
「だから、貴方が僕になるのよ……」

神殿建設に当たって奉仕者が不足する事態がある。

もともと過酷な労働環境で、しかも監視の気分次第の拷問もあるのだから当然だろう。

そして、それを補給する必要がある。その方法は、孤島故、船で行われる。

ヘンリーはここへきて数えてきたものがある。

一つは曜日。日付はそれほど重要になく、直ぐに飽きて忘れたが、曜日だけは壁に記していた。

一つは奉仕者の数……、というよりは死人の数。何人減ったら補給が行われるのか？ これを数え始めたのはピエトロを処置室に運んでからだ。

ヘンリーはリヨカに指示を出した。

俺にはまったく回復の兆しが見えない。だからこのまま処置室に運ぶべきだろう。ただ、暴れるから一人では無理だ。マリアに手伝ってもらい、処置室に運べ。

リヨカは頷き、その時間を待った。

「監視殿、ヘンリーの様子なのですが、どうにも手に負えそうになく、処置室に運ぼうと思います……」

夜半頃、労働が終り、奉仕者達が戻ってきた頃、リヨカは扉に鍵を掛けようとした監視に声を掛ける。

「ふん、やはり無駄だったか……。まあいい、許可しよう。さっさと運んで来い……」

「それが、下手に回復させたせいで、暴れてしまっていて、もう一人付き添いが必要とします。許可をお願いしますか？」

「勝手にしろ」

「ありがとうございます。マリア、お願いできるかい？」

「え、でも、ヘンリーさんを処置室になんて……」

「お願いだ。君しか頼めないんだ……」

「ですが……」

執拗に拒むマリアだが、もがき苦しむふりをするヘンリーは彼女の手を握る。

「わかりました……」

一瞬の目配せにマリアは頷き、暴れるヘンリーを起こす。

「ああ、終わったらマリア、お前は兵舎に来るように……」

「はい……」

監視の薄ら笑いを不思議に思いながら、リヨカはヘンリーに肩を貸した。

リヨカは薄暗い闇を出るとき、一度振り返る。噛み締めた唇から、鉄の味がした……。

処置室とされる部屋に入ると、水の音がした。

いくつか樽が置かれており、病人の手当てをする場所には見えなかった。

「ヘンリー、ここが処置室なのかい？」

想像と全然違う場所にリョカは疑問を口にする。

「ああ、そうだ」

肩を回しながら全快ぶりをマリアに見せるヘンリーは、すぐに樽を四つ用意する。

「でも、処置って……」

「処置というのは名ばかりで、ここから海に捨てるのさ。この樽に入れてな」

「え！？ じゃあまさか……、ピエトロは……」

病に倒れた彼はあの日ここへ運ばれ、樽に入れられ、そのまま……。

「言つな。俺にはどうにもできないことだ」

悔やむリョカに、ヘンリーは務めて冷静に言う。おそらくマリアも知っていたのだらう。悲しそうに目を背けるが、リョカのように驚く素振りはない。

「この樽は二重になっている。昔異国のお土産にもらったマトリョーシカとかいうものを思い出してな、一つ目で落下の衝撃吸収、もう一つで海に浮かぶというわけだ。これで外に出られる」

「ふうん。猿なみには考えたつもりなのね。でも、外に出てどうするの？ そんな樽、海流に乗れなければ海を漂うだけでミイラになるわよ？」

「だ、誰？」

虚空からの声に驚くマリア。するとふわっと光が集まり、エマが姿を見せ、彼女はほっと息をつく。

「当然だな。だが、今日はできるのだ。というか、チャンスは今日のような日ぐらいだろうな……」

「何か考えがあるの？」

「うむ。奉仕者の数は多すぎても少なすぎてもいけない。多すぎると管理ができず、少なすぎると工程に支障をきたすからな。奉仕者の数は一定量で推移する必要がある。俺はここへきて暫くの間、各閨の奉仕者の数と、減った数、それに補充される曜日調べていた。当然、補給の日も船の都合などがあるだろうからな。そして、連絡船のくる周期を突き止めた。この前の補充から俺が倒れるまでに死んだ奉仕者は十三人。樽の減った量をみるに、そろそろ新しい奉仕者を補給する必要がある。今日はその定期船が来る日だ。まあ一日二日のずれはあるかもしれないがな……」

自信満々に語るヘンリーにエマは感心したように頷く。それはリヨカ、マリアも同じで、彼がただイタズラに作業をサボっていたわけではないとわかる。

ヘンリーは印を組み、手で筒を作ると、「レミア」と唱える。それは光の屈折率を変えることで簡単な望遠鏡を作る魔法だった。彼はそれを使い、連絡船や神殿のあるおおよその場所などを推測していたらしい。

光を集める焦光魔法レミアの派生で、誰にでも使えるらしく、リヨカもまねをして鮮明になる視界に感心していた。

「へえ、口だけではないのね」

「ふふん、当然だ。さて、リヨカ。俺達は今からこの水路を経て下界に出る。そうしたらまず船を見つけるのだ。教壇の連絡船は常に日の出のほうから来る。岩場づたいに東を目指す。そして、船を見つけたら強引にもぐりこむのだ」

「そこから先は無計画なのね」

ふうとため息を着くエマ。とはいえ、リヨカ達がここから出る方は他に無い。

早速タルを二重にすると、古びた胴衣を詰め、さらにリヨカが入

念に防壁魔法を施す。そして水の流れるほうへと転がしていった。

「それでは行くぞ。リヨカよ、必ず無事ラインハットの地を踏むぞ。その時は俺が親分で、お前は子分だ。いいな？」

「ああ、わかった。けど、僕は父さんの……」

「うむ。お前はまずパパス殿の……その時は俺に償いをさせる」

「償い？ ヘンリー、君は……」

誤解だと言いたかったリヨカだが、強引にフタをされてしまう。

「よし、行け！」

ヘンリーは続いてマリアをタルに詰める。

「マリア、俺がラインハットの王に戻った時は、君が隣にいてくれると嬉しい」

「ヘンリー、私は……そんな価値の無い……」

「頼むぞ……」

何か煮え切らない彼女を強引にタルに押し込め、続いて自分もタルに籠る。そして横になり、転がりながら水路を目指していく。

「まったく、素直に私の僕になれば良いものを……」

腕を組みつつ嘆息をつくエマ。だが、真の王者になるべく者が簡単に頭を下げるのもつまらないと、ごろごろ転がる様を見る。

そして、じゃぶんと一つのタルが転がり落ちたのをきっかけに、三つ四つと続いていった……。

* * * * *

波に揺られる不安な感覚と、ごおーという水の流れる音。タルが急に向きを変えたと思ったら、不快な無重力に包まれる。

せいぜい三十秒といったところのはずが、狭く黒いだけのタルの中、時間の流れが緩やかに感じられる。

海面にぶつかっただらどうなるか？ 二重のタルには緩衝材の布切れとリヨカの防壁魔法スカラが掛けられているが、万全とは言いがたい。

もし、着水の衝撃でタルが砕けたら？

その不安は、神殿の奉仕者として緩やかに死ぬことと天秤に掛けたとき、どちらに傾くかわからない。

直近の今だけを見れば、明日に怯えて眠りに着くことのほうが楽かもしれないが……。

人工の滝は急傾斜であったが、直下という角度ではなかった。

そのせいか、リヨカ達の乗ったタルは緩衝用の外のタルの破損だけで済み、気がつくまでの数十分、波に漂っていた。

「……ん……」

タルの隙間から滲みこむ潮の香りに目が覚める。リヨカはフタを開けようとして手を止める。まずは姿勢を制御する必要がある。

リヨカは狭いタルの中でフタが上になるようにゆっくり身体を動かし、膝でタルの脇に踏ん張り、フタを押し上げる。

パコンと音がして外の空気が入ってくる。

リヨカの目の前には満点の星空が見えた。それを遮るのは神殿のそびえる総本山。脱出したという感慨が浮かんでくる。

「僕は……僕は……」

三年の月日の中、在りし日の父を思い涙に濡れながら闇で目覚める毎日、生きて神殿の外へ出られるなどと思わなかった。

その興奮、感動を言葉にしたくても、リヨカの胸に訪れる苦しさが、それをさせず、ついには涙で空まで曇る。

「いけない……。ヘンリー、マリアは……」

リヨカは涙を拭い、タルを繋ぐ鎖を見る。もし落下の衝撃でちぎれていたら？ そんな不安は、のんきに浮かぶタルの姿に払拭される。

「ヘンリー！ ヘンリー！」

リヨカは海原に飛び込みかねない勢いで鎖を引き、そしてタルの

フタを開ける。

中にはマリアがいた。おそらく気を失っているのだろう。顔を曇らせながら、すーすーと寝息を立てていた。

「マリアさん。よかった……」

リヨカは軽く回復魔法を唱えた後、フタをしっかり閉める。そしてもう一つのタルを引き寄せる。しかし、それはやけに軽い。

「ヘンリー？」

リヨカは恐る恐るそれを開けるが、中には調理場から盗んだであろう干し肉と竹筒の水筒があるだけだった。

「嘘だろ？ そんな……」

リヨカはさらに鎖を引つ張る。しかし、その先には何もつながれておらず、鋭利な刃物で切られた鎖が見えただけだった。

「まさか脱出できなかったの？」

脱出の前に捕まったのだろうか？ そんな不安が訪れるが、監視達が来た様子は無かった。ならばどうして鎖が切れているのだろうか？

「ヘンリー……」

波間にたゆたうリヨカを乗せたタル。ふと視界の先に光が反射する。

「光？ 船か？」

リヨカは慌てて振り向き、光源のほうを見る。連絡船らしきものが神殿の麓の簡易港に停泊しているのが見えた。

リヨカはタルの中からオールを取り出し、こぎ始めた。

ヘンリーならきつと、もし、リヨカが遭難したとしてそうするだろう。

リヨカは今できること、マリアを救うためにも、甘さを捨てるべきと波をかき分けた……。

停泊中の船に忍びこむリヨカ。積み下ろしを終えた船員達はしほの休憩に酒盛りを始めており、何人かはそのまま眠りこけていた。リヨカは船倉へと降り、隠れられそうな場所を探す。すると、鍵付の倉庫があり、中には見たことのない不思議な香りのする草がたくさん置かれていた。

おそらくこれを大陸に持ち帰るのだろうと考えたりヨカは、ここに隠れることにする。

都合よく鍵も掛けられることでまさにつけてつけた。

リヨカは船員達の目を盗み、マリアを連れて倉庫に隠れ、出航の時を待った……。

干し肉で餓えを凌ぎ、苦い野菜で乾きを潤す密航者。

動くこともままならず、おかしな匂いにする草に囲まれる日々は労働とは別の苦しさがあった。

それが一週間ほど続いたある日のことだった。

船が大きく揺れ、ばりばりと木々の折れる音がした。なにごとかと船倉を出る二人。甲板のほうでは船員達の怒声が響く。

「リヨカさん、一体……」

怯えるマリアはリヨカに抱かれながら膝を折る。

「時化だ。今この船は嵐に見舞われているんだ……」

唸る風の音、叩きつけられるような雨の音。船の暮らしなど知らないマリアはそのつど肩を震わせ、リヨカの手を強く握る。

「ひとまず上を見てくる。ここで待っていてくれ」

「そんな、私一人でこんなところに……」

「大丈夫、直ぐ戻ってくるから……」

リヨカは立ちすくむマリアを宥め、甲板へと駆け上がる。

そして見たものは折れたマストと、大きく傾く甲板の様子を。

何人かの船員は必死にそれを食い止めようとしていたが、煽られる波しぶきに足をとられ、今その瞬間波間に消えた。

「ちくしょー！ 何が光の神様だ！ くそくらえ！」

「だからあんなクソ教団の仕事なんて請けたくなかつたんだ。もうすぐオラクルベリーだつてのによー！」

怒号の中、懐かしい言葉を拾うリヨカ。嵐のせいで視界は零だが、光の精霊を集め、屈折率を変える。すると、そう遠くない場所に大陸が見えた。

これはもしかしてチャンスかもしれない……。

そう考えたリヨカは船倉に引き返し、タルを抱える。

「マリア、この船はもうもたない。脱出しよう」

「そんな！？ こんな嵐の中をどうやって!?!」

「僕に考えがある。ここで大人しく難破するのをまつよりもずっといい」

「リヨカさん……わかりました……」

リヨカはマリアの手を取り、大きめのタルを抱えて階段を上る。

ざわめく船員達は密航者のことなど眼中になく、怒号と罵声の中、祈りだすものもいた。

リヨカはタルに防壁魔法を唱えると、マリアに中に入るよう促す。続いて自分も半身を入れ、印を組む。

「吹き荒ぶ風よ、嵐を担う横暴な猛者よ、今、我の求めに応えて唸れ、バキマー！」

リヨカはタルに向かって中級真空魔法を唱える。荒れ狂う嵐の中、風の精霊を集めることは容易く、初めて詠唱する中級真空魔法は、バギとは比べ物にならない威力だった。

タルは荒れ狂う嵐の空に放たれ、着水する。衝撃は防壁魔法で何とか緩和される。

リヨカはその衝撃に堪えながら、再び印を組み、真空魔法を推進力に変える。

「バギ、バギ、バギ……」

魔力が尽きるのが先か、それとも……？

魔力を使い果たした頃、リョカ達の乗ったタルは海流に乗ることができた。

既に陸地の見える距離であり、浜の近場で漁をしていた小船に拾われた。

二人はこうしてオラクルベリー付近の修道院へとたどり着いた……。

39 | オラクルベリーの暮らし

キャラバン隊が草原に行く。オラクルベリーからアルパカを目指し定期の商隊で、農業主体の地方に鉄鋼業の恵みを届ける大事なラインだ。

これまでサンタローズの村の北にある洞窟からの供給で間に合わせていたのだが、三年前にラインハット国による侵攻で村は滅ぼされてしまった。そのため、オラクルベリーの商家が陸路での交易路を拡充し、今に至る。

最近では昼夜を問わず魔物が横行する。今、草原に行くキャラバン隊もその煽りを受けていた。

赤く大きなねずみの群れが荷馬車に追いつがる。振り払おうと鞭を振るうが、積載量をはるかに越えた積荷に馬力が出ない。

「ちくしょー！ ねずみが鎊物をかじるってのかよ、パンでもまいて追いつ返せ」

手綱を握る男は苛立ち混じりに鞭を振るう。しかし、馬はそれに応えることができず、次第に赤いねずみ お化けねずみの群れに追いつがられる。

馬車のしんがりで荷物を押えていた男がその煽りに遭い、転げ落ちる。

「商隊長殿、馬車を止めてくれ！ 一人落ちた！」

「何言っつていやがるんだ。そんなことしたら食い物どころか、俺らまでかじられるぞ？」

後方からの悲鳴に商隊長も悲鳴を上げる。そうしている間も徐々にお化けねずみに追いつがれ、一匹が馬車に乗り上げると、それに続いて雪崩のように押し寄せる。

「うわ、駄目だ！ くそ！ こいつら！」

箒を片手にお化けねずみを追い払おうとする隊員。しかし、大型犬くらいあるお化けねずみはびくともしない。

「はっ！」

不意に突き出された鉄の昆。お化けねずみはそのまま馬車の外に追い出される。ひるまず上ろうとするねずみは容赦なく振り払われる。

「このまま走ってください！」

青年の声を聞かずとも商隊長は手綱を緩める気配はない。そして青年は颯爽と馬車を飛び出すと、同時に風を操る。

「唸れ！ バギマ！」

「ごうごうと唸る真空の刃、集団で固まっていたお化けねずみはそれをかわすことができず、血煙を撒き散らす。

混乱するねずみの群れに鋼の昆を振り乱しながら突撃する黒髪の青年。比較的無傷であったねずみもその強撃に打たれ、戦意を喪失したのから散り散りに消えていった。

「うう……」

馬車から転げ落ちた隊員は顔を抑えて蹲っており、露出した肌には齧られた痕がいくつ藻見える。

「大丈夫ですか？」

青年は駆け寄り、初級回復魔法を唱える。

「はあはあ……た、助かったのか……？」

ところどころ痛ましい傷跡は見えるが、致命傷に至るものは見受けられず、隊員は暫くして自力で立ち上がることができた。

「すまない、リヨカさん……」

砂を払い、頭を下げる隊員に、リヨカはまだ治療が終わっていないと制す。

「いえ、それが仕事ですから」

最近活発になった魔物達。少人数の旅人だけではなく、数人から多い場合十人単位になるキャラバン隊も狙われることが多くなった。そのため、今はどこも傭兵を雇い、護衛に当たらせていた。

そして、リヨカもその一人であった。

「いやあ、一時はどうなるかと思ったよ。さすがリヨカだ。今後も頼りにしてるぞ！」

アルパカの酒場にて合流を果たしたりリヨカを待っていたのは商隊長のビール責めだった。

二人がたどり着く頃には積み降ろしも終わっており、復路の荷積み待った頃だった。

「すみません、僕はまだ未成年なんでお酒は……」

「なに硬いこと言ってるんだよ。お前だってもう立派な戦士だよ。ほら、俺のおごりだ。飲め飲め」

断りきれずにグラスを煽るリヨカ。なれないアルコールの感覚に眩暈を起こす。

「なんだ、だらしないな。もつとしゃきつとしろ！」

そう言ってリヨカの背中を叩く商隊長。

「……まったくいい気なもんだ。リヨカがいなかったら今頃ねずみの餌だつての……」

同じく合流を果たせた隊員は置き去りにされかけたこともあり、隅でしょぼくねながら一人酒。とにもかくにも往路が無事終わったことで、皆ほっとした様子で宴に興じていた。

暫く歓談したあと、リヨカは酔いを理由に酒場を出た。

アルパカには商隊の護衛を始めてから一ヶ月に一度のペースで訪れるようになった。

懐かしい町並は二年前とさほど変わっていない。ただ、リヨカ個人にとっては大きく違った。

淡い恋心を告白した相手の不在。

奉仕者の生活から脱出し、再訪を果たしたとき、リヨカはルードの宿屋を目指した。しかし、看板にその名は無く、受付も見知らぬ若い男性だった。

受付に訪ねたところ、二年前にオーナーのダンカンの容態が悪化したらしく、静養のために宿を手放したとのこと。今は風の穏やかなサラボナ地方へ移り住んだと聞かされた。

断絶させられた時間と取り戻せない時間。リヨカにとって彼女の不在は新たな喪失感となる。

それに追い討ちを掛けたのがサンタローズ村の焼き討ちと、その経緯。

ラインハット国王、チップ・ラインハルトを暗殺したのは、流れ者の傭兵、パパス・ハイヴァニア。新国王となったデール・ラインハルトは、パパス討伐を命じ、彼を匿っているとされるサンタローズを侵攻した。

それを期にラインハット国は近隣諸国への武力侵攻を行い、東国は現在戦乱の世となっている。

それは西に位置するアルパカにも伝播しており、町の立て札には「兵士募集」の触れ込みがある。

リヨカに仕事を斡旋している組合は、彼の腕前からラインハットでの仕官を勧めることもあるが、彼は断った。

理由は父がラインハット国王を殺したという「事実」。パパスはヘンリーを誘拐し、今も逃亡中とされていた。

この三年でリヨカを取り巻く全ては、彼に優しくない変化を遂げていた……。

* * * * *

「マリア、今帰ったよ」

アルパカへの陸路から帰ったりリヨカは、オラクルベリーの片隅にある借家へと戻った。

共同井戸の周りでは洗濯物を洗っていたマリアが、彼の声に顔を上げ、一瞬驚いた後、ほっと胸を撫で下ろす。

「お帰りなさい。無事でよかったですわ」

マリアはリヨカに駆け寄ると、それが幻でないとか確かめるように彼の頬に手をあてる。

「くすぐりたいよ」

リヨカが笑いながら言うと、マリアはむっとしたあと、頬を軽く抓った。

修道院で目を覚ましたリヨカとマリア。二人は暫くの間、そこで寝起きをした。

ただ、修道院も貧しく、東国で続く戦の難民の受け入れもあり、いつまでも施しを受けるわけにはいかない。

リヨカは腕が立つことからオラクルベリーのキャラバン隊の護衛を請け負い、マリアはパン屋の受付をしながら彼の帰りを待っていた。

二人は一緒に暮らそうと提案したわけではない。だが、お互いに頼れる存在もなく、共に地獄の日々を過ごした仲でもあり、自然とそうなった。

リヨカは当たり前のようにマリアに「行って来ます」「ただいま」といい、マリアも「お帰りなさい」と迎えてくれた。

そんな暮らしがもう一年近く続いていた。

「ねえリヨカさん、キャラバン隊の護衛は危険ですし、もういくらもお金も貯まってきましたから、もっと安全な……」

台所で売れ残ったパンを焼きなおしながらマリアは言う。

「大丈夫だよ。マリアは心配性だな」

リヨカは笑って返すが、マリアは怒りとは別に困った顔で彼にミルクを勧める。

「でも、最近は魔物の動きも活発になったて聞きますし……」

それはリヨカも体感していることだった。普段なら少し威嚇するだけで逃げていく魔物達も、この頃は死に物狂いで襲ってくることもある。

噂によると東国の戦で住みかを追われた魔物が西に流れ、そこで魔物同士での縄張り争いが起こっているらしい。彼らも食い扶持を求めて必死なのかもしれない。

「こう見えても僕は強いから平気だよ」

「けど、人間いつどうなるかなんて……」

マリアの消沈にはリヨカも思い当たる節がありすぎる。父のこともそうだが、共通の知り合いの欠落が重くのしかかる。口にはしなくても、それを意識することがあり、二人の距離が縮まらない原因でもあった。

「ね、だから……。リヨカさんは治癒魔法も使えますし、教会のお手伝いとかいくらでも……」

「うん、考えておくよ……」

リヨカはミルクを飲むついでに彼女から視線を逸らす。

最近、マリアはリヨカにこの話ばかりをしていた。

オラクルベリーで働いてほしいと願う彼女の気持ちはわかる。リヨカの不在の間、マリアがどれだけ心細いことか……。借家の一階に住む世話焼きのおばさんもリヨカを捕まえては「あんなイイコを留守番させとくなんて罰当たりだね」と尻を叩かれることしばし。

リヨカ自身、彼女と共にこの町で暮らすことを考えることはある。貧しいながらも幸せな日々。父も母も、友も初恋の相手も失った今、リヨカがその誘惑にいつまで抗えるかは、時間の問題だろう。

「……………」

「……………」

いつもならマリアがきりのよいところで台所に引込み、一時この話題は終わりになる。しかし、今日は違った。彼女の顔は見なくても想像できる。

眉を顰め、まっすぐな瞳で自分を見る。薄い唇をきゅっと噛み締めて。

それは怒りからくるものではなく、心配と寂しさからなのだろう。ミルクをゆっくり飲むリヨカだが、コップが空になってまでその

逃げが通用することも無い。とんと静かにコップを置くリョカにマリアは無言で答えを待つ。

すると……、

「なんか焦げ臭くない？」

鼻に微かに伝わる匂い。それは甘さを越えた苦味を含むもので……。

「あ、いけない、パンが焦げちゃう！」

マリアははっとした様子で台所に掛けていく。リョカは台無しになったであろう昼食にほっとしてよいのか、がっかりなのか、複雑だった……。

夜、リヨカはいつものように台所に布団を敷いていた。マリアはまだおきているらしく、居間から明かりが見えた。

リヨカはその明かりに背中を向け、今後のことを考えていた。

マリアと共にこの町で暮らすこと。

それはとても魅力的な話だ。彼女は優しく、気の利く賢い女性。これまで会ってきた女性の誰とも違う、魅力的な人。

だけれど、彼女はきつと友のことを想い、友もまた、彼女を想っていたはずだ。

だから踏み出せない。

そして、もう一つが父との約束。

母を捜してほしいという遺言を、リヨカが忘れられるはずもなく、またどうしてよいのかもわからなかった。

せめて手がかりがあればと思うも、全ては故人のそれ。父とともに旅した箇所に行くにしても、マリアを置いて行くことはできず、記憶も曖昧……。

そういえばサンタローズの村の……。

サンタローズの北にある洞窟はどうなったであろうか？ ドルトン親方の昔の作業場で、かつて父が調べ物をしていたはず……。

もしかして、あそこに何かあるのかな……。

ようやく思い出した手がかりにリヨカの中である打算が浮かぶ。

そこを調べても何も無かったら、もう諦めよう。僕は、僕にはそれができるほどの力なんてないんだ……。

何もかもが奪われたリヨカに、希望になるかもわからない遺言は重すぎる。彼はそう考えると、目を閉じた……が、

「……もう寝ましたか……？」

隣の部屋で物音がした。返事を待たずに戸が開き、気配が濃くなる。

「う、うん……、何かな？ 今日はまだ眠いし、また明日にでも……」

リヨカは上ずった声でそう答えると、布団を深く被る。

いつもなら、いつものマリアなら夜にトイレに行くときでも声を掛けることはしない。その「いつもと違う」ということが、リヨカを変に意識させた。

「なんだか眠れなくて……」

「そ、そう……」

彼女はリヨカの隣に座ると、そのまま横になる。

「マリア？ こんなところで寝ると風邪ひくよ。ほら、ベッドに戻れば……」

「こんな温かい日に風邪ですか？」

「だ、だけど……」

「……リヨカさん……」

彼女はリヨカ of 言葉などおかまいなしに、布団に手を掛け、もぞもぞともぐりこむ。

「ど、どうしたの？」

「駄目ですか？」

「駄目じゃないけど、でも……」

リヨカは侵入する彼女に対し、自分から布団をはみ出ようとする。けれど彼女の手が背中に触れ、それもできなくなる。

「リヨカさん……、私……」

「マリア……」

彼女の手が触れ、そしておでこだろうが、そっと触れる。

「寂しいんです……、すごく……」

「そう、一人にしてて、悪かったね。これからはもっと早く帰れるような……」

「そうじゃなくて、私も……、女だから……」

ごくりと音を立てて唾を飲む。身体が硬くなるのがわかる。緊張のしすぎだろう。そして、昔感じた、あの妙ないきりたつ感覚。下

半身が意思とは関係なく強張り、何かを急かすように脈打つ。

それがどのような欲求なのか、実のところリヨカは知らない。

本来学ぶべき時期を父との旅と奉仕の時に過ごした彼は、その欲求の行き着くべききを知らないのだ。たまに傭兵仲間に「やったのか」と聞かれても、「なにを？」と素で答えては笑われる日々だった。

「リヨカさん……」

彼女の手がリヨカの腕を取り、脇を抜き、胸元を抱く。その冷たい指先が触れたとき、リヨカの中で何かが切れそうになった。

「あ、あのさ！ 僕は、今度、ちよつと旅に出ようと思うんだ！」
が、咄嗟に口を出したのはまったく別のこと。

「た、旅？」

「うん。実は昔、父さんとサンタローズに滞在しててさ、それで一度行ってみたいなって思って……」

「お父さん？ リヨカさんの、亡くなった……」

「うん。急で悪いけど、その……、父さんの遺言のことであつたね。もし何も見つからなかったら、もう忘れるつもりでさ、いいかな？」

「え、ええ……わかりました……」

「はは、はは……」

「……ふっ、ふふ……うふふ……」

リヨカの笑いにマリアもくすりと笑う。そして、ため息のあと、マリアは寢室に戻った……。

あくる朝、リヨカが目覚めると、焼きたてのパンの良い香りがした。

いつもならマリアも働きに出ている時間なのだが、彼女の姿があり、テーブルの上には包みが見えた。

「あれ？ マリア……」

「ああ、リヨカさん、おはようございます」
「うん、おはよ……」

いつものワンピース姿ではなく、カジュアルなパンツルックと外套を纏った彼女に、リヨカは面食らう。

「どうしたの？ その恰好……」

「ええ、私もリヨカさんと一緒にサンタローズの村に行こうかと思
いまして……」

「だって、パン屋は？」

「はい、暫くお暇をいただきました……」

「そう……、でも危険だよ？」

「平気です。リヨカさんが守ってくれますから」

「そりゃあそうだけ……」

「だって、私一人守るとキャラバン隊守るのならどっちが大変で
すか？」

「まあ、そうかもしれないけど、でも大変だよ？ そんなに長旅に
はならないけど、でも……」

「私と貴方の仲で大変なんて、そうそうあるのかしら？」

マリアは意味深な笑顔を浮かべる。大変などという言葉、一年前
に嫌というほど味わってきた二人が、どうしてサンタローズへの旅
路ごときで根を上げるものかと……。

「わかったよ。それじゃあ一緒に行こう」

「ええ、どこへでも……」

マリアはようやく嬉しそうな顔を見ると、お弁当を作る続きを始
めた……。

* * * * *

サンタローズへの旅路は男の足で二日と半日。女の足なら三日と
いうところだろう。

旅路は特に滞りも無く、二人とだけということと特に魔物の目に

留まることも少なく、予定していた三日よりも早く着いた。マリアがリヨカの歩調に合わせたおかげかもしれない。彼女も無理にいつてきただけあり、文句の一言も言わず、気を遣うリヨカを逆に急かしました。

ようやくたどり着いたサンタローズの村は残骸だらけの変わり果てた姿だった。

村の入り口にあるフェンスは倒れ、酒場は壁を残して崩壊。畑は荒れ果て、馬の足跡だろうか、ぼこぼこ穴が空いている。

それでも教会と、その近くの庵だけは残っていたところをみるに、壊滅というわけではなかった。

「酷いですね……」

「うん……」

マリアの言葉に、リヨカは頷く。

かつて父と共に訪れ、淡い初恋や不思議なおとぎの国の冒険をした日々、おかしなトカゲと、それに不思議な年上の女性のこと……。リヨカはもう全てが夢の中の出来事だったのではないかと思い始めていた。

「リヨカさんの家は……」

「えと、あつちの……」

かつての借家の跡地を目指すリヨカ。逸る気持ちが早足になる。

そして、倒壊した家屋を見つけた。

「やっぱり駄目か……」

瓦礫も手付かずのままの借家にリヨカはため息をつく。父の書齋が二階にあったこと、そのご雨晒しになったことを考えれば、書物の類が駄目になっていることも容易に想像できる。

ただ、少し気になったのは、地下室。リヨカは印を組むと精霊を集め、瓦礫に手を翳す。

「バギマ！」

荒ぶる風の刃は瓦礫をばらばらと吹き飛ばし、そして階段を晒す。

「階段？ 地下に何かあるんですか？」

「んーん、ただ、僕の思い出がちよっとね……」

地下室には自分の描いた絵と絵画セットがあるはず。リヨカはノスタルジックな気持ちに浸りながら、階段を降りる。

「レミール……」

光の精霊を集め、慎重に降りると、そこには古びた絵の具セットと愛用していた筆があった。

「良かった。ここにあったんだ……」

リヨカはそれを拾うと、唯一変わっていない過去にふと目頭が熱くなる。

「あれ……」

そして気付く。これまでに描いたはずの絵がなくなっていることに……。

「アンかな……？ それともアニスさん？」

サンチヨが渡してくれたのだろうか？ だとすればほっとする出来事だ。誰かに見せるためでも誰かに贈るためでもない絵だが、ここで野ざらしのまま朽ち果てるのは可哀想なことだから。

「リヨカさん？」

「ああ、マリア。ここは危ないからもう出よう」

リヨカは彼を訝しむマリアを急かし、過去の残っていた地下室を出て、その後崩落の危険があることから入り口を中級真空魔法で破壊した。

41 父の残した物

村の北にある洞窟をはかつてと同じ姿でいてくれた。

黄鉄鉱の取れる洞窟は頑丈であり、まだ採掘の可能性があることから破壊には至らなかったのものであろう。

集光魔法で周囲を照らすリヨカ。マリアはその背後で松明を持ちながらついていく。

弱いながらも魔物が出ることもあり、マリアを連れて行くことに躊躇したが、夜盗がかねない殺風景な村にそれもできず、一緒に潜ったのだった。

「父さんはどうしてこんなところに隠したんだろう……」

「見つかつてはいけないものだったのでしょうか？」

「さあ、父さんも不思議な人だったけど、そういう危険なものとかを集める人でもないし……」

正直な話、リヨカはパパスが何者なのかわからないままだった。

一国に招かれるほどの人物であることはわかるが、それが戦士としてなのか、それとも要人としてなのか、リヨカは最後まで知ることができなかった。

そういえばヘンリーは何か知ってたのかな？

ヘンリーに父のことを聞くことは憚られた。

父が策謀に巻き込まれたのは悲しい事実。しかし、それが幼いヘンリーの責任にはならない。かといって、彼はそのことを齒噛みし、リヨカに対し負い目のように背負っていたのも事実。自然とリヨカはヘンリーに父の話をするのができなかった。

「あ、あそこ……ドアが……」

洞窟の向こうの先、不自然なドアがあり、レンガ固めの壁が見えた。

近くによると看板があり、「ドルトンの古いほうのお家」とあった。

「相変わらずだな、親方は……」

妖精の国で見た庵の前の看板を思い出し、くすつと笑うリヨカ。開錠魔法の印を組もうとしたが、抵抗なく開いた。

中は暫く使われていなかったらしく、饅えたにおいが充満していた。

「何かあるのかな……」

リヨカは手近にあった机を調べることにした。

「私もお手伝いしますね……」

マリアはそういうと部屋の奥のほうへと松明を片手に歩いていく。奥はマリアに任せるとして、リヨカはひとまず机の引き出しを開ける。

一段目にはメモ程度の走り書きがいくつかあり、地名にバツが書かれていた。

二段目には小さなメダルがいくつかあり、その他ガラクタがある程度だった。

三段目を開けようとしたとき、鍵が掛かっており、開かなかった。もしかして……。

リヨカは開錠魔法の印を組み、「アガム」と唱える。がちやりと音がして、手ごたえが無くなる。リヨカはおそろおそろ引き出しを開いた。

そこにはロケットが一つあった。

「え？」

他に何かないか引き出しを取り出し、上下左右全てみる。しかし、やはりそれしかない。

ならばそれこそが秘密なのかと手に取るが、特に魔力の類も感じられない、本当にただの、質の良い乳白色のロケットに過ぎなかった。

そしてそれを開くと、一枚の絵があった。

そこには在りし日の父と、黒髪の、優しそうな、優雅な女性がいた。

「この人は……？」

不思議と胸が熱くなる。記憶の奥底、沈殿した泥の中、そつと探るようにして探すと、意外にも明確に現れる。

「母さん？ この人が僕の母さん……マーサなの？」

リヨカは目を見開く。埃の舞う狭い部屋、目は二重の意味で涙を溢れさす。

「僕は……、僕の母さんを……」

幼き日、乳飲み子のリヨカの脳裏にだけある存在。それがマーサ、母だった。

それが鮮明な、絵ではあるが、温かみのある存在に塗り替えられる。

ようやく目を瞑ることができた時、リヨカはそれを胸に抱き、暫く声を出さずに泣いた。

「リヨカさん！」

すると奥のほうで声がした。

「なに？ まさか魔物？」

涙を拭い、急いで奥へ駆け出すリヨカ。だが、そこではマリアが一振りの剣を前に呆気にとられているだけだった。

「これは？」

「わかりません。この部屋のそのこの棚にあったのですが、不思議なんです……」

緑を基調とし、金のラインが引かれた鞘。そこに収まる一振りの剣。かつて見たパパスの剣と同じくらい大振りなそれは、一目で業物だとわかる。

集光魔法に照らされ、湯気のようにゆらめく青白い霧が見え、そして暗くさせていた。

凍りつくような波動を微弱ながらだしており、それが魔法に干渉しているのかもしれない。

「これは、一体？ 母さんに関係があるの？」

リヨカは剣に触れた。そして眉を顰める。その剣は持ち上げよう

にも重く、渾身の力をこめてわずかに傾くだけであった。

「これ、呪いの剣？」

慌てて手を離すリョカ。手放せなくなる常備性の呪いではないらしくほつとするが、一方でうかつさに頭を掻く。

「危険なものですわ。きつと……」

おそらくマリアも持ったのだろうか、怯えるようにして後ずさる。ただ、もし本当に呪われているのであれば、このロケットをそうしたように施錠つきの何かに隠すだろう。そうでなく、無造作にしまわれていたのであれば、これは「安全ないわくつきな剣」程度のだろう。

「父さんはなんでこんなもの？」

鞆に触れるとかちゃりと言を立てて転がる。

「え？」

慌てて手を伸ばすと、それは難なく拾える。ただ、柄を持つとすると、片手でもっているにも関わらず重く感じてしまう、非常に矛盾した状態になる。

「呪いってわけじゃないみたいだけど……」

鞆で持つ分には可能というおかしな剣。魔力というか不思議な靈力を帯びたそれは、邪な雰囲気はない。けれど、人間が扱うには矛盾を含みかねないという代物だった。

「とりあえず持っていこう。ねえ、他には何かなかった？」

「え？ ええ……、他には……なにもありませんわ」

マリアは後ろ手を組みながらそう答えた。

「ねえリョカさん、もう出ませんか？ きつとここにはその剣を隠していただけなんですわ。かなりの業物なのでしょうし……」

「ん……そうかな……そうかもしれないな……」

一通り見回したところで他には何も見当たらない。せいぜいドルトン親方が残っていた。鑄物の整備器具ぐら이었다。

「父さんはここに思い出を残していたのかな……」

リョカはロケットを抱くと、亡き父の無念とその想いに胸が痛ん

だ……。

洞窟を出た二人はその足でアルパカに向かった。そのままオラクルベリーに帰ることも考えたが、蓄積された疲労と消耗した水や食料の補給も兼ね、寄り道をする。

一日の野宿を経て昼下がり、二人はアルパカの宿屋にチェックインできた。

二人とも旅の疲れを癒そうと早めにシャワーを浴びると、早めに夕食を取り部屋に戻った。

問題なのは部屋。それほど旅銀に余裕の無いリョカ達が一人部屋を二つ取ることはできず、必然的に一緒の部屋になってしまう。すると思い出されるのはあの日の夜のこと。

マリアが自分の布団に潜り込み、しがみついていたこと。

マリアはヘンリーのことを……。ヘンリーはマリアのことを……。

その二つに縛られ悩むリョカ。

そして、こういうとき男がどう応えるのかわからず、拍車をかける。

本当は彼女を抱きしめたい。その後どうするのかはわからないが、とにかく触れ合いたい。そんな気持ちで一杯だった……。

僕はどうすれば……。父さん、母さん……。

父と母のロケットを見つめるリョカ。父の遺言を守るのであれば彼女と共にオラクルベリーで暮らすことは適わず、かといって母との再会も果たせない。

いや、すでに答は出ている。サンタローズに母の手がかりは無い。そして、他に手がかりのありそうな場所も知らない、思いつかない。もう母に会うことはできそうにない。

父との約束を反故にするのは後ろめたさがあるが、彼もまた今日まで常人の数倍の苦勞をしてきた。奇跡的な脱出を果たせただけで、

もしかしたら今もあの地獄に居るか、不要なモノとされて海に捨てられていたかもしれない。

今、こうして小さな幸せを手に入れたとして、それにすがりついたところで、誰が彼を責めることができるのか？ リヨカがロケットを閉じるのは時間の問題だった……。

……が、

「リヨカ！」

懐かしい声が出た。

振り返ると開いたドアの向こうに黒色の鎧とフルフェイスの兜の兵士が立っていた。

緑のマントと鎧の左肩の二本線。記憶が確かなら、それはラインハットの紋章。そしてリヨカを知るのであれば、それは一人しかない。

「その声は……もしかして……」

兵士はリヨカが立ち上がるのを見て駆け出す。そして兜を脱ぎ、肩にかかる程度に伸びた髪をふわっとなびかせる。

燃える青い瞳と精悍な顔つき、左の額から目の間を通り、右の頬に走る痛ましい傷こそ知らないが、それは一年前に生き別れたはずの友だった。

「ヘンリー！ 無事だったのかい!？」

リヨカは駆け寄り、抱きつく。ヘンリーは握手程度だと思っていたらしく、「おいおい」と彼の肩を押す。

「ヘンリー、ヘンリー……」

自分がいつの間にか泣き声交じりになることにリヨカは恥じることもない。彼にとって、ヘンリーが生きていてくれたその事実は、歡喜の涙を流すに十分な事実であった。

たとえ、再び恋と別れようとも、平穩が遠ざかること……。

42 | 奴隸王子

岩を掘り出し、運び、削り、また運ぶ。
重ねて、組み込み、整える。

その繰り返し。

日が昇るより先に始まり、月が傾く頃にようやく終る。

夏の日差しに肌が焦げ、冬の寒さに心が凍る。

降り注ぐ鞭に従い、乾きを潤す水に群がる。

絶壁の孤島。四方は海に囲まれ、大鷲の姿は餌を求めて今日も舞う。

光の神殿、総本山建築現場はこの世の地獄であった。

毎日をやり過ごす奉仕者達。その目に生氣は無く、空ろに、半開きの口と猫背な姿勢でふらふらとさまよう。

何時終るかもわからない作業と、理不尽な暴力。

男なら鞭に打たれ、女なら器量次第で……。

彼らの希望は唯一つ。この辛酸の果てにある開放で、他にはない。そう、無いはずだった。

神殿建設現場、頂上付近にて、緑の髪の手仕者が一人居た。

彼は周囲を気にしながら右手を筒のようにして左手で印を組む。

「……深遠を覗くものもまた、覗かれるものなり……レミリア……」
光の精霊が彼の右手の輪の中に集まり、一瞬陽炎のような揺らめきを見せる。

レミリアは集光魔法の派生で光の屈折を変える魔法だ。筒の中に集めることで魔法によるレンズを作り、簡単な望遠鏡を作ることができる。

「……ふむ……」

神殿の外の世界、広大な海原を見つめるのは時と場合によっては

爽快な気分にさせてくれるが、虜囚にある彼にとっては絶望に他ならないだろう。たとえこの牢獄を抜け出したところで、大海原という自然の防壁がそれを阻むのだ。

それでも彼は周囲を見渡していた。

「ふむ」

そして何かを見つける。

大海原に木の葉一枚浮かんでいるような微かな変化。光の反射に紛れるも、魔法の精度を高めることでそれを確定する。

「……あれが連絡船……だな」

彼がそう確信するのはわけがある。

初めて彼が外界を見たとき、北西に灯台が見えた。それはポートセルミの灯台であり、距離感こそ曖昧なもの、世界地図でのおおよその位置を把握できた。

そして海路。商業船の航路は昔から陸に沿うもの。航海術とそれに伴う魔法が進歩したとして、これが覆うことはないだろう。それは水棲の魔物の脅威もあるが、何時見舞われるか判らない「時化」。もう一つは、陸地が見えることでの安心感の確保。船員とて人の子なのだ。港を直線で結び、海原を横断するなど、世界地図を買ってもらったばかりの子供のする妄想にすぎない。

ポートセルミの南東の海域を直進で横断するというのは世界一周に近い行為。それを商船クラスを下回る積載量で行うとすれば、ただの自殺だ。そうでないのであれば、当然この神殿に向かうということ。そう推理していた。

「ふむ……。前は火曜日で、今回は木曜日……。一ヶ月単位か」
指折り数えながら頷く彼は、光の精霊を四散させる。

++ ++

「最近の天候だと、小豆相場が……。ポートセルミ近くの辺鄙な村があつたらう？ そこへどれだけ台風が来るかで変わってくる」

作業場の隅っこ、人気のない場所でヘンリーは監視者の一人とひそひそ話をしていた。

監視の男は熱心にメモを取り、頷いていた。

「他にラインハットでできない臭い話があったな？　なら金の価値が相対的に上がる」

ヘンリーが師事しているのは相場について。ラインハットに居たころから政治経済に明るい彼は、天候や地域の情勢から市場の動向を大まかに予想する術を知っている。

監視の一人が相場についてばやいていたのを盗み聞きし、簡単な手ほどきをしたのだった。それ以来、ヘンリーは相場指南の見返りとして、色々と便宜を図ってもらっていた。

「うむ。なるほどな……参考にさせてもらう……。それと……」

監視は辺りを見回してからこっそりと包みを出す。それは干した肉が数枚包まれていた。

ヘンリーが提供している情報の代金としてはかなり下回るのだが、奉仕者という立場上、平等の取引など願えるはずもなく、ヘンリーは黙ってそれを受け取る。

「いつもすまない。それと……、次は何時もらえるかわかりますか？」

「ん？　ああ、定期船はまだ暫く……、あと三週間程度かかるな。

その時にはまた干し肉を便宜するから……」

「わかっています」

ヘンリーは干し肉を腹に隠すと、周囲を伺ってから作業場に戻った。

彼には目的があった……。

43 | 出会い

初めて出会った時、彼はわが目を疑った。

この世の地獄とも言うべき光の教団、神殿の建設現場にて、それはやってきた。

靡く金色の髪、白い肌。二重瞼は悲しみに伏せられていたが、高い鼻と形の良い唇のせいで、その美貌が際立つ。きつと笑ったら優しい優雅なそれを見せてくれると思う、そんな人だった。

彼女の名はマリア・リエル。王族暮らしのヘンリーにとって彼女程度の容姿ならそれほど珍しい存在ではない。ただ、久しぶりに見るたおやかな彼女に、ふと心がざわめいた。

運命などという安い言葉をヘンリーは信じない。けれど、彼女にだけは例外を認めたい。この地獄において、可憐といえる存在に見えるなど、奇跡のほかにはありえないのだから。

++ ++

彼女が来てから暫くの間、ヘンリーは黙々と作業に従事していた。もちろん、信仰心からではなく別に目的があつてのこと。彼は奉仕者の数を数えていた。

その日その日の気分次第の拷問により、二、三日に一人が処置室送りになる。前に流行り病を患った同世代の奉仕者は、リヨカの看病の甲斐なく処置室送りとなった。

その時肩を貸したヘンリーは、処置室とは名ばかりの簡素な部屋を見た。

タルと水の音のする部屋に入るなり、ヘンリーは追い出された。徒に「処置」をしているところを見せて、奉仕者を必要以上に追い詰めたくないのだろう。だが、他に処置を待つ奉仕者や、これまでに処置をされた奉仕者が居ないことを見れば、そこで何をされてい

るのは一目瞭然だった。

処置室送りに随行する老奉仕者がそれを語りたくないのはわかる。きつといずれは自分も処置されるのだろうから。だが、ヘンリーはそこに希望を見出していた。

神殿と下界を結ぶ抜け道。そして、定期船。この二つを結べば、脱出も可能ではないだろうか？

ヘンリーは計画が形になるまで波風をたてまいと、周囲の状況に合わせていた。

++ ++

重いカメを運ぶマリア。ふらつく足取りは水たまりを作りながら進むため、彼女がどこを通ったか直ぐにわかる。

その様子からナメクジ女とからかわれるが、それは彼女の身なりが他の奉仕者に比べて小奇麗に保たれているのが故の嫉妬だった。

今日も重いカメ一杯に水を張って作業場を往復するマリア。作業がはかどるほどにその往復路が長くなるわけで、マリアの作業は日々過酷さを増していった。

「ふう……」

硬くなった手の平を見ながら、マリアは息をつく。ここに来たときは白く長い、細い指先だったのが、今は赤茶けた土まみれで、手のひらにはいくつもタコができていた。

彼女が今こうしているのはかつて光の教団の支部で働いていたときの粗相が原因だった。

もしあの時こうしていればと思うも、それはそれで別の地獄が待っただけと、彼女は悲観的にもなれなかった。

「手伝おう」

不意に声がした。振り向くと緑の髪の青年が立っていた。

「えと、ヘンリーさん？」

「名前を覚えていてくれたのか。光栄だ」

ヘンリーはふふつと笑うと彼女から水カメを奪い、颯爽と運んでいく。

「あ、あの、それは私のお仕事で……」

「こんな重いものを君に運ばせろっていうのかい？ それじゃいつまでたつても俺達奉仕者は喉が渴きっぱなしだ」

もつともらしいいい訳をするヘンリーに、マリアは呆気に取られていた。この奉仕者という名の奴隷生活で、彼は何を恰好つけているのかと……。

++ ++

あくる日も、その次の日も、ヘンリーは彼女の水汲みの手伝いをした。

もともと監視の一人を抱きこんでいるヘンリーにとって多少のサボリはお手の物であり、また必死そうにカメを運ぶ姿を見せていればそれなりに仕事をしているようにも見えた。

「どうして手伝ってくださいなの？」

マリアは素直な、鈍感な疑問を口にした。

「ほっておけない……じゃだめかい？」

ヘンリーはそっけなく、笑いながらそう返した。

実のところ、彼にもよくわからない。いうなれば遅い初恋とでもいべきだろうか？

もともと国政にはかり興味を持っていた彼は、周りに居たアルミナを筆頭とする権利欲に塗れた女を見すぎたせいか、忌避していた節がある。

「でも、ヘンリーさんの仕事が……」

「大丈夫。うまくやってるさ。俺が鞭で打たれるところ、見たことないだろ？」

けれど、マリアにはそれが無い。当然といえば当然だが、身分や他の何でも無く、等身大で向き合える女性に、ヘンリーの中で煽ら

れるものがあつた。

「ほんと、いけない人ですね。さぼってばかりいて……」

くすつと笑う彼女は、そつと手で口元を隠す。荒れた手と唇、よじれた前髪。女性としての嗜みも制限される中、彼女のその仕草がいじらしく、ヘンリーは目を細める。

「そのおかげで君の手伝いができる。いけないかな？」

もしかしたら、自分より大きく思える友が、彼女に見とれていたせいかもしれない。

「え……？ でも、私だけ……特別扱いなんて……」

自分はリヨカに負けていない。けれど、勝っているのだろうか？ その疑問が、恋と勘違いさせ、彼を焦らせたのかももしれない。

「いけないかな？ 君を特別扱いして……」

ヘンリーはそう言いながら距離を詰める。マリアは、彼の気持ちがわからず、戸惑いの表情を返す。

「君はここに相応しくない」

右手を取り、そつと髪を撫でる。洗うことも櫛を入れることもできずに絡まる髪をいとおしげに撫でるヘンリー。

マリアは、少し前までの憤ましいながらも平穏な日々を思い出す。兄と両親との暮らし。心配性な兄は何かというところ「お前が心配だ」といつて寂しそうに頭を撫でてくれた。その懐かしさが、不意に蘇り、目頭が熱くなる。

「マリア？」

指で涙を掬う彼に、マリアは抗う気持ちを失っていた。

「……あつ、すみません……。兄のこと、思い出してしまつて……」
ほろりとこぼれる涙。気恥ずかしくなり、視線を逸らす、その一瞬の隙に、抱き寄せられる。

「へ、ヘンリーさん？ いけません。こんなところを見られたら……」

「構わないさ……。暫く、こうして……」

そつと抱きしめるヘンリー。背中に回した手が優しく愛撫し、薄

汚れた頬を重ねる。耳もとに彼の吐息がかかる。そのくすぐったさに、しばしマリアは現実を忘れる。

「一緒にここを出よう……」

「え？」

マリアは急に現実に戻り、彼を見返す。

神殿建設現場での日の浅いマリアでも、この地獄から抜け出す方法など無いと理解していた。だが、ヘンリーは嘘や冗談、希望を見せるための偽りを語る風ではなく、いたって真剣に、彼女を見つめていた。

「そんなこと、できるはずが……」

「できるさ。俺を信じる……」

そういつてもう一度抱きしめるヘンリーに、マリアはそっと身をゆだねた……。

44 | 身代わり

いつものように水を汲み、運ぶマリア。

白い胴衣もだんだんと薄汚れ、櫛も満足に入れられない髪は最近切ってしまった。日々の労働で白い肌も焼け始め、腕もやや太くなる。

初めてここへ来た時のたおやかな雰囲気も消えたが、爽やかさが備わり、破れた胴衣から見える肌に生々しさが見えた。

監視の一人は階段を上がる彼女を見つめ、ゴクリと唾を飲む。

瓶を持つ彼女は水がこぼれないようにと慎重に、気をつけながら歩いているためか、身なりにおろそかになっていた。

やや大きめの胴衣、ほつれも目立ち始め、階段の上から眺めると、下着もつけていない胸元が風の具合によっては覗けてしまう。

目をしばたかせてマリアを見る監視の男。

ここへ来る奉仕者の女はどれも器量悪しの者ばかりで、彼女のような存在は彼らにとっても異質である。夕飯のおかずや労働のサボりを理由に何人かの女奉仕者とり引きをする監視は多く、その欲望が彼女に向かないはずもない。

ただ、彼女の場合、兄が教団員で、その地位は奉仕者の監視より高い立場にあるらしく、あまり下手に手を出して行為が発覚した場合、監視から奉仕者に落されかねない。

また、労働自体も比較的楽な水汲みとあり、さらに小食であることからサボリや食欲で誘惑することもできない。かゆいところに手が届かない存在なのだ。

そんな鬱憤を抱く監視が下心を出さぬはずもなく、風のイタズラで見え隠れする彼女の胸元を盗み見していた。

未だ白い肌にふつくらとした胸。手で嗜めばややあまる程度のおっぱいと、小ぶりな乳首。もし彼女が普通の奉仕者なら、何かしら文句をつけて慰みものにしていただであらう。それともか、ひと時の

たんぱく質で腰を振ってくれるだろうか？ 下卑た妄想をしつつ、彼女が監視の脇を通りすぎようとしたとき、堪えられなくなった手が彼女のお尻に……。

「きゃっ！」

驚いたマリアは胴衣の後ろを押える。と、同時に瓶が落ち、がしやんと音を立ててその場に水をぶちまける。

「貴様！ 教団の財産になんてことをしてくれぬ！」

結果に驚いた監視は裏返った声で喚き、マリアに鞭を振りかぶる。

「え、だって、私、いきなり……」

お尻を触られて驚いて……。

そう言おうとしたが、振るわれた鞭の音に竦んでしまう。

「なんだ、何があった？」

物音に集まる監視達。その原因がマリアであると知り、ごくりと唾を飲む。

これをきっかけに、この女を……。

下心を抱く監視達はいかに自分の手で罰を与えようかと算段している。

「何を言ってるんだ。マリアが運ぶのを邪魔したのはその監視の男だろう。俺は見えていたぞ。階段の上からマリアの胸を盗み見て、すれ違いざまに知り触ったのをな！」

そこへやってきたのはヘンリーだった。彼は高らかに宣言し、尻を触った監視の男を指さす。

「な、何を言っていやがる。俺は……俺は……」

しどろもどろになる監視に、別の監視が前に出る。

「同士よ、もしこの奉仕者が言っているのが本当だとすると、貴様は罪を犯したことになるな……」

「なっ、何を……」

「奉仕者、ヘンリーよ、貴様、先ほどの言葉に嘘はないのだな？」

「ええ、俺はこの目で見ていました。水をもらおうと水飲み場に向かいましたところ、マリア……、あの奉仕者の姿が見えず、仕方な

く戻ろうとしたところで階下に二人の姿を見たのです。俺は暫く待てば水を飲めると思いこの場で見ておりましたが、その際、この男が奉仕者に劣情を抱き……」

「だ、黙れ黙れ！ 同士よ、貴様らこんな奉仕者の言うことを信じるのか？ 俺はそんなこと……」

「ふむ。だが、同士がここにいる理由がわからないな。確か同士は神殿上部の監視の担当ではなかったか？ ここにいるということは持ち場を離れているということ、それは神殿建設に滞りを起こしかねない重大な罪……」

雲行きが怪しくなることに、尻を触った監視は油汗をかき始める。というのも、もし罪が認められたら財産の没収と奉仕者へ身分を落すことになる。そして、その財産は他の監視の分け前として再分配されることになっている。

神殿建設の監視など閑職もよいところ。給金も少なく、憂さ晴らしをする場所も無い。せめてもの救いは無駄遣いが減って貯蓄が増えることぐらい。

お金を貯めるということに生きがいを見出す者も居り、監視同士での足の引つ張りあいも起こる。

そして、この監視はヘンリーに相場の師事を受けていた者だ。

「これは詳しく話を聞く必要がありますな……」

「ま、待って、待ってくれ……俺は、誤解だ、そんなこと……」

喚く監視と肅々と連れて行く監視達。にやりと笑う監視と、ほっとするヘンリー。

「だが、待ってくれ。この女は我らが教団の財産である水がめを割ってしまったのだ。尻を触られたとはいえ、その罪は免れまい」

すると別の監視がぼそりと呟く。小太りの男はマリアに下卑た一瞥を向けたあと、キヨロキヨロと周囲を見る。

「いや、尻を触られた程度で水がめを割るなどと、この世に水がめが存在できないだろう」

「うむ、これは十分な罪だろう。別途罰を与えるべきだろう」

マリアを糾弾する声に再び慌てるヘンリー。こればかりは通じている監視も庇いきれないらしく、無表情でいた。

「ま、待ってください。一つ忘れておりました」

「なんだ、まだあるのか？」

「は、はい。本来水がめを運ぶのはこの俺の仕事なのです」

「でまかせを言うな。いつもこの女が運んでいただろう」

マリアに懲罰を与えられると考えていた監視は、それを庇おうとするヘンリーに苛立ちがてら、声を荒げる。

「いえいえ、俺の仕事でした。考えても見てください。女の足で水飲み場から神殿の頂上に重い瓶を運ぶなどと非効率きわまりないでしょう。それに、もし俺がすっかり自分の仕事をしていれば、尻を触られることもなく、水を奉仕者に運ぶことができました。今、奉仕者達が渴きを訴え、効率が下がっているのは、全て俺が仕事を彼女に押し付けてさぼっていたことが原因です」

監視の前にひれ伏すヘンリー。監視達は意地悪い笑いを浮かべる。「あいわかった。貴様の罪、しっかりと償ってもらおうぞ……」

監視はヘンリーを引き立てると、兵舎へと連れて行く。

「ま、待って……、ヘンリーさん、私……」

当事者に口を挟むことをさせない急な展開に、マリアは困惑する。罰から逃れられた安堵と、身代わりとなったヘンリー。何故という疑問が浮かぶ頃には、ヘンリーの姿は階下の下、ずっと向こうに消えていった後だった……。

45 | ルビーエルフ

薄暗い、錆びた鉄のする部屋は、奉仕者のそれと比べれば上等という程度だった。

ヘンリーは縛り付けられた状態で、鞭による責め苦を受けていた。小太りの男は顔を真っ赤にさせながら「ふーふー」と鼻息を荒げている。容姿的なコンプレックスがあるのか、執拗に彼の顔に鞭を走らせるが、周囲に気遣ってのせいか、それほどではない。

「どうだい？ これからは真面目に働く気になったかい？」

業を煮やした監視はヘンリーの頬にナイフをつきたてる。そのひんやりした感触に、ヘンリーはようやく汗をたらす。

ふと反射した光が目眩しく、視線を逸らしたとき、通気口に何かが見えた。

そこに集まる光の精霊。そして身体に訪れる癒しの風。ヘンリーは気取られぬように笑い、ある賭けをする。

「や、やめてください！ 俺、反省してます！ もう二度と軽口立てませんから！」

そのわざとらしい反応にも、ようやく拷問を受ける囚人らしいと笑いが起こる。

「へっへっへ、いきなり命乞いか？ 安心しろよ。お前は俺らの教団の大切な労働力なんだ。簡単には殺さねーよ」

「ひっ、ひい……」

ぶんぶんと首を振るヘンリー。そして、視線を空調の穴へ向ける。「せめて、回復させてくださいよ。俺、明日からがんばって働きますから、だから……、だから……」

「てめえに薬草なんてもつたないんだよ。俺のシヨンベンでもかけてやるよ」

監視の一人はズボンを降ろし、ヘンリーに対し放尿を始めようとする。

「おいおい、部屋が臭くなるからやめろよ」

それを薄笑いの監視に咎められ、しぶしぶ逸物をしまう。

「へっへ、まあ、そうだな。ここは奉仕者の部屋じゃねえんだったな。まあいい、お前はせいぜいいたぶってやるよつと！」

監視の男は鞭を手放し、握ったこぶしを思い切りヘンリーの腹に埋める。

「ぐふっ！」

血反吐を吐くヘンリー。監視はその様子に興奮したらしく、さらにもう一撃。

衝撃に胃がせりあがり、戻し始めるヘンリー。

「うわっ汚ねえ！ てめえ吐いてんじゃねーよ！」

思わぬ反撃にあった監視はヘンリーの頬を叩く。息を荒げるヘンリーはその監視を一瞬睨み返すが、また視線を落す。

「このやろつ！」

その視線に気付いた監視はさらにいきり立ち、ヘンリーに暴力を振るった。

その皮膚がやや硬いことになど、当然気付かずに……。

+-+-++

賭けには負けたというべきだろう。

リヨカが防壁魔法と回復魔法が使えるまでは良かった。しかし、その後の監視者のエスカレーターする暴力に、彼の身体は死線をさまようはめになる。

本来ならそこそこの怪我を受け、仮病後、処置室送りを要求させるつもりだった。

その見送りにリヨカとマリアを指定することで脱出を図るつもり計画だが、どうにも身体が言うことを利かない。

痛みと熱にうなされ、ヘンリーは何度も夢を見た。

ラインハットの緑の三本線の入ったマントを翻し、民の前に立つ

自分の姿。

必ずラインハットの地に戻り、国民のために国を繁栄させると誓ったはずが、ここで朽ち果てかねない自分。

ならばせめてリヨカだけでも逃がしたい。脱出の計画、算段を伝え、できればマリアを連れて……。

彼の父を奪い、奴隷に落とさせたことへの償い。たとえこの身が朽ち果てても、果たすべき命題。

ヘンリーは血反吐を吐きながら、文字にならない何かを延々と書きなぐる。

リヨカはそれをうなされたと勘違いし、必死に手を握る。

せめて精霊文字を空に書けるほど魔法に精通していればよかったと後悔するヘンリーは、痙攣をしたあと、また深い眠りにつく……。

++ ++

「浄化の光よ、今一度彼に生の喜びを……、ベホイミ……」

誰かの声が聞こえた。知らない女。マリアではない声。

「え、え、え？」

そして戸惑う友の声。

「イタズラなる風の精霊よ、我は汝に求める、かの者達に慌しい朝の目覚めの洗礼を……ザメハ……」

不意に視界が明るくなり、身体が嘘のように軽くなる。

「ん？ 俺は……」

喉元に絡まる血反吐の不快感もなく、身体を蝕む病の疲労もない。

「ヘンリー！ 良かった！」

「うむ。看病ご苦労であった……。お前は？」

喜びのあまり涙を浮かべるリヨカを労いつつ、フードを目深に被る見知らぬ赤い目の女に眉を顰めるヘンリー。奉仕者にも監視にも見えない異質な存在だった。

「ご挨拶ね。貴方を助けてあげたって言うのに……」

「そうなんだ。この人がヘンリーを助けてくれたんだ。えっと……
貴女は……」

「私はエマ、エマ・ミュール」

「エマか……。ふむ、初めて見るな、エルフというものは……」
文献でかつて眼にしたことがあったから直ぐに出た。

「あら、よくわかったわね」

それほど意外という様子もなく、エマはそっけなく言う。

「ルビーエルフ。伝承の中の架空の存在だと思っていた」

「ルビーエルフ。彼女らはエメラルドエルフなど非戦闘種族を保護
する誇り高き戦士。」

「へえ、博識なのね。なら、私がどういふつもりかわかるかしら？」

「だから驚いている。ルビーエルフが人間を助けるなど、その存在
を知る者ならありえないからな」

その存在からたびたび人間と衝突も繰り返していた。その原因は、
人間の欲望にある。なぜなら彼女らは、その涙がエメラルド、ルビ
ーといった宝石に変わるから。

「ちょっとヘンリー、どうしたのさ？ 彼女は君のことを……」

「何が目的だ？ 貴様らが見返りなしに人間を助けるはずなど無い
だろう？」

治療を施すということから間近な悪意はないだろう。特に呪いに
秀でた種族というわけでもなく、時限的なものも感じない。だから
こそ、疑念を抱いてしまう。

「話が早いよね……。なら言うわ。王者となりなさい」

「ふん、そんなこと、頼まれるまでもない。俺はこんなところで死
ぬつもりはない。ラインハット国の王族なのだからな」

肩を鳴らしながら立ち上がるヘンリー。エマは腕を組みながら彼
に冷ややか視線を送る。

ラインハットの王子として生まれた彼は、もとよりそのつもり。
優しいといえは聞こえの良い軟弱な父に代わり、いくつかの国に分
かれるラインハット地方を統一する野望をもっている。それは武力

でも経済によるものでもどちらでもだ。

「言うわね。でもどうやってここを出るつもりなのかしら？ 四方は海に囲まれて、ここを降りたところで凶悪な魔物がひしめいているっていうのに」

「俺が無駄にここで時間を過ごしていたと思うか？ リョカよ、俺は何日寝ていた？」

「え？ えと、多分二週間目かな？」

頭の中で足し引きをするヘンリー。鈍った頭がやや痛むが、脱走までの簡単な計画が浮かぶ。

「そうか、なんとか間に合いそうだな。よし、明日だ。明日にはここを出ようではないか」

「な、なんだって？」

「そんなことができるのかしら？」

「ならお前なら出られるのか？」

ヘンリーは自信に満ちた様子で言い返す。

「私にはルーラがあるわ」

「ほう、便利だな。お前俺の子分になるか？」

禁止魔法のルーラが使用できるのであれば、ラインハット地方に限らず、世界中の戦力図が塗り替えられるだろう。語源通り地点制覇を可能とするのだから。

だが、ヘンリーはそれほど真意に迫った様子もなく、笑い半分で告げる。

「冗談。貴方が私の僕になるんでしょ？ そうしたら今すぐにでもこの地獄から抜け出させてあげるわ」

その半笑いに苛立ったエマは眉間に皺を寄せながら言い返す。今、この世界でルーラを使えるのは妖精ぐらい。そしてレムオルをはじめとする強力な魔法もまたしかり。それほどのポテンシャルを持つべく自分を一笑にふす彼の態度が、根拠の無い自信に見えて苛立った。

「なら交渉の余地はないな。俺はお前の僕になるつもりはない」

「ヘンリー、そんな言い方は……」

「ルビーエルフは人間を信用しない。というよりは、我々が恨まれることしかしていないのだ。むしろ俺を助けてくれたことすら奇跡に近い」

「話が早くて助かるわ」

「リヨカ、お前とマリアだけなら何とかできる。任せろ」

「そう……。けど僕はここに留まって少しでも……」

「バカなことを言うな。お前もわかっているだろう？ ここにいたところで救える命など無い。俺はお前の看病に感謝している。そして、ラインハット国を立て直す力になってほしいと考えている」

「僕は……」

逡巡するリヨカ。優しい彼ならきつと自分を省みずそう言うだろう。その盲目的な博愛主義が、ヘンリーには悔しかった。

リヨカには潜在的な力を感じる。多種にわたる魔法の習得、おかしな随行者との触合いを考えると、「パパス」の息子だからという一言で済ますことができない。

親和性や協調性、ヘンリーに足りない魅力を持つリヨカは、彼の描く未来の欠片を埋めるのに適している。

「リヨカ、前を見る。ここにいてもお前の父の遺言は果たせない。卑怯な言い方だが、お前がここに留まるのはパパス殿の遺言を異にするだけだ」

だからこそ、ヘンリーは意地になっていた。

「頼む、リヨカ」

きつと彼が断れないであろう文言を出すのは卑劣と思いつつ、ヘンリーは手段を選ばない。

「……わかったよ、ヘンリー……」

ようやく頷くリヨカに、ヘンリーはほっと胸を撫で下ろす。

「ふん。かつてに盛り上がって……。まあいいわ。ヘンリー、貴方の王者としての資質、見させてもらっわ……」

「そうだな。その時はお前も子分にしてやる」

もし可能であれば、この便利なエルフもと、あわよくばそんなことを考えながら……。

「だから、貴方が僕になるのよ……」
女はそういうと、虚空へと消えた。

46 | 脱出

「監視殿、ヘンリーの様子なのですが、どうにも手に負えそうになく、処置室に運ぼうと思います……」

夜半頃、労働が終り、奉仕者達が戻ってきた頃、リヨカは扉に鍵を掛けようとした監視に声を掛ける。

「ふん、やはり無駄だったか……。まあいい、許可しよう。さっさと運んで来い……」

「それが、下手に回復させたせいで、暴れてしましまして、もう一人付き添いが必要とします。許可をお願いしますか？」

「勝手にしろ」

「ありがとうございます。マリア、お願いできるかい？」

「え、でも、ヘンリーさんを処置室になんて……」

「お願いだ。君しか頼めないんだ……」

「ですが……」

執拗に拒むマリアだが、もがき苦しむふりをするヘンリーは彼女の手を握る。

「わかりました……」

一瞬の目配せにマリアは頷き、暴れるヘンリーを起こす。

「ああ、終わったらマリア、お前は兵舎に来るように……」

「はい……」

監視の薄ら笑いを不思議に思いながら、リヨカはヘンリーに肩を貸した。

ヘンリーは計画通りと、小さく口元をゆがめた。

+ + - - + +

処置室とされる部屋に入ると、水の音がした。

いくつか樽が置かれており、病人の手当てをする場所には見えな

かった。

「ヘンリー、ここが処置室なのかい？」

想像と全然違う場所にリョカは疑問を口にする。

「ああ、そうだ」

肩を回しながら全快ぶりをマリアに見せるヘンリーは、すぐに樽を四つ用意する。

「でも、処置って……」

「処置というのは名ばかりで、ここから海に捨てるのさ。この樽に入れてな」

「え！？ じゃあまさか……、ピエトロは……」

「言うな。俺にはどうにもできないことだ」

彼の犠牲のおかげで活路が開けた。その意味でピエトロの死は無駄ではない。それが詭弁であるのは判っているが、言うとおりにできることはなかった。

「この樽は二重になっている。昔異国のお土産にもらったマトリョーシカとかいうものを思い出してな、一つ目で落下の衝撃吸収、もう一つで海に浮かぶというわけだ。これで外に出られる」

監視に用立ててもらっていた古びた毛布と干し肉をしまいこむ。

「ふうん。猿なみには考えたつもりなのね。でも、外に出てどうするの？ そんな樽、海流に乗れなければ海を漂っただけでミイラになるわよ？」

「だ、誰？」

虚空からの声に驚くマリア。するとふわっと光が集まり、エマが姿を見せ、彼女はほっと息をつく。

「当然だな。だが、今日ができるのだ。というか、チャンスは今日のような日ぐらいだろうな……」

「何か考えがあるの？」

「うむ。奉仕者の数は多すぎても少なすぎてもいけない。多すぎると管理ができず、少なすぎると工程に支障をきたすからな。奉仕者の数は一定量で推移する必要がある。俺はここへきて暫くの間、各

閨の奉仕者の数と、減った数、それに補充される曜日調べていた。当然、補給の日も船の都合などがあるだろうからな。そして、連絡船のくる周期を突き止めた。この前の補充から俺が倒れるまでに死んだ奉仕者は十三人。樽の減った量を見るに、そろそろ新しい奉仕者を補給する必要がある。今日はその定期船が来る日だ。まあ一日二日のずれはあるかもしれないがな……」

それほど得意ではない魔法やこれまでには入れた知識と簡単な情報を数珠繋ぎにして形にした脱出作戦。成功の可否は神のみぞ知るレベル。それでも三人の賞賛の眼差しを見て、気持ちの上で勝率を修正する。

「へえ、口だけではないのね」

「ふふん、当然だ。さて、リヨカ。俺達は今からこの水路を経て下界に出る。そうしたらまず船を見つけるのだ。教壇の連絡船は常に日の出のほうから来る。岩場づたいに東を指す。そして、船を見つけたら強引にもぐりこむのだ」

「そこから先は無計画なのね」

ふうとため息を着くエマ。だが、リヨカと自分の魔法ならそれも可能だろう。火炎や氷結、風などはほとんど使役できない彼でも、幻惑魔法のマヌーサ、メダパニなどは妙に得意だったから。

早速タルを二重にすると、古びた胴衣を詰め、さらにリヨカが入念に防壁魔法を施す。そして水の流れるほうへと転がしていった。

「それでは行くぞ。リヨカよ、必ず無事ラインハットの地を踏むぞ。その時は俺が親分で、お前は子分だ。いいな？」

本当は友と言いたかった。けれど照れくさく……、

「ああ、わかった。けど、僕は父さんの……」

「うむ。お前はまずパパス殿の……その時は俺に償いをさせる」
後ろめたかった。

「償い？ ヘンリー、君は……」

「よし、行け！」

ヘンリーは続いてマリアをタルに詰める。

「マリア、俺がラインハットの王に戻った時は、君が隣にいてくれると嬉しい」

自分でも不思議に思うほどの執着に戸惑いつつ、ヘンリーは彼女の頬にそっと口付けした。

「ヘンリー、私は……そんな価値の無い……」

彼女の弱々しい言葉など、聴く耳を持たずに。

「頼むぞ……」

煮え切らない彼女を強引にタルに押し込め、続いて自分もタルに籠る。そして横になり、転がりながら水路を目指していく。

「まったく、素直に私の僕になれば良いものを……」

腕を組みつつ嘆息をつくエマ。だが、真の王者になるべく者が簡単に頭を下げるのもつまらないと、ごろごろ転がる様を見る。

そして、じゃぶんと一つのタルが転がり落ちたのをきっかけに、

三つ四つと続いていった……。

++ ++

波に揺られる不安な感覚と、ごおーという水の流れる音。タルが急に向きを変えたと思ったら、不快な無重力に包まれる。

せいぜい三十秒といったところのはずが、狭く黒いだけのタルの中、時間の流れが緩やかに感じられる。

海面にぶつかっただらどうなるか？ 二重のタルには緩衝材の布切れとリヨカの防壁魔法スカラが掛けられているが、万全とは言いがたい。

もし、着水の衝撃でタルが砕けたら？

その不安は、神殿の奉仕者として緩やかに死ぬことと天秤に掛けたとき、どちらに傾くかわからない。

直近の今だけを見れば、明日に怯えて眠りに着くことのほうが楽かもしれないが……。

「横暴なる風よ、世界を駆け抜ける一塵の刃となり、かのものを切り裂け！ バキマ！」

誰かの声が聞こえたような気がしたが、着水の衝撃で気を失うヘンリーにそれを知る術はない……。

遠くに聞こえる音。それが波の音だと気付けないのは、彼が内陸育ちだから。

苦味のある潮風に吹かれ、前髪が瞼をくすぐると、ようやく彼は目覚めた。

「……………ん？　ここは……………」

瞼を開こうとするとぱりぱりと砂が落ちる。顔中、いや、身体中が糊付けされたような引きつる感覚があり、間接を動かすと乾いた砂が落ちる。

唇の端で固まっているそれを舐めたとき、苦味と辛さがあった。ジンワリと口の中の水分を吸い上げ、痛みを伴う。

塩？

砂ではなく海水の乾いたものだと理解した頃、ようやく周囲を見渡す余裕ができる。

目の前には広大に広がる海があり、白い波しぶきを立てては引いていく。

背後には松林があり、防波堤らしきものが見える。

ここはどこだ？　俺は脱出できたのか？

辺りには砕けたタルの破片が散らばり、ちぎれた鎖が見えた。

「リョカ！？」

共に脱出を図った友の名を呼ぶ。しかし、返事はない。

照りつける太陽に額から汗がこぼれる。ヘンリーはそれを腕で拭い、近くの松林の下に身を隠した。

日暮れを待つて、ヘンリーは街の明かりを頼りに歩き始めた。

無一文。着るものも奉仕者の綿の粗末な物。浮浪者といえる恰好。ポートセルミはサラボナ地方の港町として世界地図の西側への玄関の役割を果たしていて、かなりの規模で発展している。

ようやく街へとたどり着いたヘンリーは、空いた腹を摩りながら、いかにして日銭を用立てようかと思案する。

脱出の際に用意していた干し肉や古着などは全て失ってしまった。金銭面においてそれほど大きな損失ではないが、次の一手を打つ上で何も無しでは手数が狭くなる。

ふむ……。

ひとしきり考え込んだ後、彼は酒場へと向かった。

++ ++

街の酒場では夕暮れ時から水夫達が大勢集まっており、酒やギャンブルに興じていた。

みすばらしい恰好のヘンリーだが、それほど上等ともいえない格好の水夫達に紛れるのは容易で、すぐに場に溶け込む。

ヘンリーはカウンターに向かうと、バーテンの目を盗み、空いたグラスをこっそり奪う。その足でルーレットの台へと向かうと、今チップを張ろうとしている客に声を掛ける。

「やあ兄弟、今日の調子はどうだい？」

「よしてくれブラザー、生憎俺を好いてくれる女神は貧乏神らしい。両の手のひらをお手上げとばかりに上に上げる男は、酔いと負けのせいで顔が紫に見える。」

「そっちの兄さんはバカ付きだねえ？」

隣でチップを高く積み上げる男にも声を掛ける。

「ああ、どうやら今日のツキは有頂天らしいんでね」

ヘンリーは笑いながら空のグラスを男のチップの上に置くと、その肩を叩く。

「あんたのツキを分けてもらおうよ？」

「はは、もっていけるもんならな？」

そういつて再び勝負に出る男。ヘンリーは三十七分の一の悲喜劇を見守らずに、トランプの台へと向かった。

ブラックジャックの台へとやってきたヘンリーは、暫く見物に勤しんでいた。

その台では四人の客があり、皆そこそこの勝ち負けをしていた。中盤から一人がやや勝ち始めたが、それもカードの配られ方によるラックというものだろう。

その流れでも負けが込んできた一人が席を立つ。そこへヘンリーが一枚のチップを見せながら言う。

「俺も運試しをしたいんだが、受けてくれないかい？」

本来なら場に参加するためにアンティを支払う必要がある。さらにコール料がかかり、試合の流れによっては他の客のレイズに付き合う必要がある。

彼の持つ百コインのチップでは、アンティを支払った後のコールができない。

「はっは、面白いな坊主。ちょうどいい、張りな」

優勢の男は快勝気味な情勢に笑いながら百コインのチップを場に出す。他の二人も通常より安いレートにそれほど抵抗は無いらしく、それに続く。

チップが出揃ったところでカードが配られる。

勝ち気味の男が親となり、一枚目が七。順に八、五、そしてヘンリーは七と四。

親はそのままステイし、続く男たちが一枚もらい、顔に手を当てる。続く男もそれにならう。それが駆け引きによる演技でないことぐらい、彼らから漂うアルコールで分別できる。ヘンリーは視線を右上に上げてしばし考えこみ、「コール」と告げる。

スピードの六がきたところで再び考え込む。そして再び「コール」。

配られたカードはクラブの二。まさに今の自分に似つかわしいと

笑いつつ、ヘンリーは頷く。

そして続くオープンの掛け声。

親の十八を前に、男二人はバーストで続く。そしてヘンリーは余裕を持って手札を見せる。

「はは、ついてるな……」

そう言っつて四百コインまで手にするヘンリー。

「それじゃあ失礼……」

席を立とうとした彼に親の男が声を掛ける。

「おい、勝ち逃げする気か？ もう一勝負しようぜ！ 青二才」

ヘンリーは参ったなとばかりに髪を掻き、言われるままに座る。

「見ての通り、俺はこれしかないんだ。だから……」

「ああいいだろう。百コインのみで勝負だ」

かつかし始める男にヘンリーは「おてやわらかに」と済ました態度。

ディーラーはなれた様子でシャッフルし始めた……。

親の制限と男二人のバーストの告白。十七以上なら負けることはなく、手札が十一スタート。見物中ずつとカードを記憶していた彼は、おおよその見当をつけて二枚コールをした。

ヘンリーの初陣の勝利は約束されたものだった。そして続く勝負も……。

カウンターで肩を落とす男が居た。

「やあ兄さん、ツキはどうしたんだい？」

ヘンリーはその隣に座り、そつと肩を叩く。

「はは、どうやらあんたに乗り換えたみたいさ」

力なく笑う男は、先ほどまでルーレットで快勝を続けていた男。

「そんな日もあるさ。これは俺のおごりだから飲んでくれ」

ヘンリーはバーテンにビールを頼むと、やや盛り上がったコースターと一緒に勧める。

「ありがとうよ、兄弟」

「お互い様さ……」

ヘンリーは十分に温かくなった懷を抱え、酒場を出た……。

48 | 道のり

酒場で快勝したヘンリーは宿へと向かった。

受付では彼の身なりから前金を取られたが、チップを渡すことで態度が変わり、二階の個室まで案内してくれた。

三年ぶりの開放感にヘンリーはベッドの上で大の字になる。多大な疲労で逆に眠れず、重い瞼と火照る額に悩まされる。

リヨカよ、生きていろ。

自分がこうして生きているのであれば、きっとリヨカも……。そして心を惑わすマリア。彼女もまた生きていてくれるのではないかと期待してしまう。

だが、大破したタルと付近の海流、水棲の魔物を考えると、それは……。

「……まったく、ずるい人ね。人のチップを無断で借りるなんて……」

「誰だ！」

不意に聞こえた女の声。ヘンリーは起き上がり周囲を見る。しかし、暗がりの中、誰も居ない。ならばこそ、心当たりがある。

「エマか……？」

「ご明察」

ヘンリーがそう伝えると、光の精霊が舞い始め、何も無い空間にローブ姿の女性が現れる。

「ふむ……」

「あら、ご挨拶ね」

「貴様が無事なのはわかりきっているからな」

「まあ、そうね」

「それより……、貴様はリヨカとマリアの行方を知らないか？」

「さあね。私は貴方のことを助けるのに必死だったし……」

「俺を助ける？俺が生きているのは……」

「貴方ねえ、あんなタルで海流に乗れると信じているの？ まったく……、落下と一緒に大破して海に投げ出されて、タルの残骸に絡まって漂流してたの、忘れたの？」

「いや、覚えていない……」

「くらげみたいに漂っていたのを見つけてここまで運んであげたのに……」

「そうか、お前が俺を……。ではリヨカとマリアは？」

「二人は……。見つからなかったわ」

「……くっ！」

「あらあら、荒れてるのね」

「当たり前だ！ 俺は、俺はみすみす友と愛する人を死に追いやったのだぞ！ これが、これが……」

「しょうがないでしょ？ それに、たとえ脱出に参加しなくても神殿が完成すれば死ぬのよ？ 私がレムオルを使えるのはわかるでしょ？ こっそり聞いたのよ。監視達が話してるのをね……」

「だが……」

「なら、あの二人は貴方のせいで死んだ。せいぜいそう思えばいいんじゃない？」

「貴様には……。思いやりがないのか？」

「ヘンリー、貴方だつてわかっているでしょ？ 奉仕者に落ちた時点で遅かれ早かれそうなるの。せめて脱出のチャンスがあっただけでも儲け物。貴方には運があつて、彼らには無かつた。ただそれだけのことよ……」

「……」

「ヘンリー、もう忘れなさい……。貴方は王者になるべき人。あの地獄から抜け出せたのは、運命がそうさせた。違うかしら？」

「俺は運命など……。信じない……」

「貴方は疲れてる……。彼にひと時の安らぎを……。ラリホー……」

「ぐ、貴様……」

「おやすみなさい……。ヘンリー、世界の王者となる者よ……」

ヘンリーは深く、深く眠りについた……。

++ ++

次の日、目を覚ましたヘンリーの前にエマの姿は無かった。

彼はそれほど気に留めず、用意されていた朝食を平らげ井戸へと向かう。まずは身なりを整えるためと剃刀で髪を切り、不精髭を剃る。次に仕立て屋へと行き、旅人の服を用立てる。これで彼が逃げた奴隷と思う者もないだろう。

続いて武器屋にて蛇皮の鞭を買い、腰に装着する。昨日目覚めた砂浜へ戻ると、周囲に砂煙を上げながらクレーターをいくつも作る。「居るのか？」

ヘンリーはタルの残骸を前にして、そう告げる。

「ええ、ずっとね」

すると再びエマが姿を現す。

「ふん、まるでストーカーだな。そして、なんの用だ？」

「なんの用って、貴方こそ用があるんじゃないの？」

「無い」

「またまた強がって……。貴方には目的があるんでしょ？ ラインハットに戻って……」

「そのつもりだが」

「なら、私が連れて行ってあげる。ルーラでひとつ飛び……」

「不要だ」

「なに？ まさかまた子分になれとでも言うの？ まったく変なところで子供なんだから」

「そうじゃない。ラインハットに戻るにしても色々順序がある。それに自力でできる。まあ、貴様が子分になるというのなら、今すぐ使ってやるがな」

「おあいにく様。人間の家来になるつもりはないの」

「家来ではない。子分だ」

「どう違うのよ？」

「全然違うだろ？」

「そうかしら？」

「そうさ……」

これ以上のやり取りはばかばかしいとエマはそっぽを向く。

「俺はアルパカへ向かう。そこまでの旅費なら昨日の残りとお水夫見習をすればなんとか口がきけるだろう」

「アルパカに？ 知り合いでもいるの？」

「そういうわけではないが、もし監視の話が真実なら、むしろ都合が良い……」

西を見ながら黙り込むヘンリー。彼のその思案気な様子に、エマは「へえ」と漏らした……。

+ + + + +

船に揺られること三週間、各地の港へ寄りながら、ヘンリーは無事アルパカに辿り着いた。

彼がラインハットへすぐに戻らずにアルパカに寄る理由。それは、監視に聞いたある噂を確かめるため。

ラインハット王、チップ・ラインハルト殺害は旅の庸兵、パパス・ハイヴァニアによる暗殺。さらに第一王子であるヘンリー・ラインハルトを誘拐した。

賊はサンタローズに潜伏しているという噂を元に、兵を差し向けた。サンタローズは焼き討ちに遭い、その後も近隣の街に出兵しているという話だ。

問題は国軍を運用したことで東国のバランスが崩れたこと。

東国の大国の一つであるブランカ王国は、ラインハット国の西国出兵、及び先王の死による混乱を勝機とみなし、軍を差し向けたのだ。

しかし、本来謀殺であるチップの死による混乱はなく、ラインハ

ット国側は逆に迎撃にてそれを撃退する。勝利の勢いそのまま隣国のボンモール国に飛び火させた。その後は西国、東国を問わず出兵しているらしい。

そして現在アルパカはラインハット国の影響下にあり、志願兵を募っている。街には志願兵募集の立て札があり、兵士となって一花咲かせようと企む若者が群がっていた。

ヘンリーはひとまず酒場へと向かい、最近の東国の情勢について尋ねまわった。

ラインハット国の現王、デール・ラインハルトとその太閤アルミナ・ラインハルトの噂は酷いものだった。

毒婦とすら蔑称されるアルミナは、初戦の勝利に近隣諸国に攻め入り、併呑に抵抗を示した街や村は徹底的に破壊しつくしているとのこと。

難民や流れ者が増え、オラクルベリーではそれらを恐れて自衛のために橋を落としたほどだ。

現在もブランカ国と一進一退の攻防を続け、双方とも次第に国力を落としているらしい。

さらにこの街でも仕事にあぶれた若者が戦争へと向かってしまい、世代的な空洞化まで心配されている。

ヘンリーは胸にたまるものを苦い水で飲み下し、ようやく宿へと戻る。

「……まさかここまでとはな……」

ベッドに大の字になりながら、ヘンリーは呟く。

アルミナが欲望に忠実なのは知っている。だが、元々女中の出の彼女が考える贅沢もたかがしれている。彼女の器を考えれば、他国への侵略は別の誰かの入れ知恵と推測できる。

そして現実には戦火は拡大し、浪費、疲弊していく。

「本当にね。人間というのはどうしてこう欲望本位に動けるのかしらっ。」

突然の声にももう驚かない。エマはヘンリーが一人で居るとき、姿を見せずに話しかけることが多かった。

「欲望本位か。いや、手に余る財貨に目が眩んだのかも……。身の丈に合わぬそれは、身を滅ぼすだけなのだがな……」

「貴方は違うというの？」

「俺は王者になるんじゃないのか？ 王者となる器が、たかが一国程度の示す財貨で心崩れることはない」

起き上がりウイスキーをコップに注ぐヘンリー。船旅で水夫に教えてもらってから気に入ったらしい。

エマにも口を向けるが、「やめとくわ」と言われ、一人分だけ注ぐ。

「……ふう……。ふふ……」

「何がおかしいの？」

「いや？ 俺も非情だなんて思ってな……」

「非情？ 貴方が？」

意外そうに言うエマに、ヘンリーは逆に驚く。

「俺が情にもろいでも？」

「非情には見えないわ」

「そうだな。心の中までは見えまいから……。エマよ、お前ならこの混乱をどう考える？」

「どうって……、本当にくだらない争いをしてるとしか……」

「エルフの側から見れば人間の権謀術数などくだらないことだろう……。いや、今の東国にそんな高尚なものですらないかもしれんな……」

そう言って一口啜る。含み過ぎたところがあり、咽てしまう。嗜好が合うことと飲めるということは別にあるらしく、タオルで口を拭く様はまだまだ青二才そのもの。

「こほん……。今の俺にとって、ラインハット国、いや東国の状況は有利に動くだろう」

「どうしてそう言えるの？」

取り繕うヘンリーに、エマは半眼を向ける。

「混乱と疲弊、明日が見えないのなら、人々は英雄を求めるものだからだ」

「貴方が英雄？ ふうん……そうは見えないけど……」

今しがたウイスキーの濃さに咽た男だけに、エマは半信半疑。

「……お前、俺に王者になれと言ってなかったか？ ……まあいい。英雄になるには……色々面倒な条件がある。俺はその一つを潜在的にクリアしており、結果的にクリアしている。あとは……なるようにさせるさ……」

「まったく、いつも貴方は自信過剰ね……」

「お前の手で助けられた。そのことには感謝している。そしてポトセルミに運んでくれたことにもな……」

「え？ ……まあ、そうよね……そう……」

何時に無く真剣な表情で見つめるヘンリーに、エマは視線を逸らせて口ごもる。クールを装う彼女も慌てることはあるらしい。だがヘンリーが見ているものはもっと別であり……。

「俺はきつとラインハットの王になる。もともと約束されていたのだ。お前はこれまで通り黙って見ていればいい。なに、この程度の苦難、俺一人で十分乗り越えられる……」

そう言っつてヘンリーが再び褐色の瓶を斜めにしたとき、エマは指を鳴らす。空中に小さな氷が現れ、コップにちゃぽんと音を立てる。「オンザロック。少しは頭を冷やさない」

エマはそう言っつと、再び姿を消した……。

「ふむ、これはこれで……」

丁度良い具合のそれに、ヘンリーは快い酩酊を覚えた……。

48 | 道のり（後書き）

コパルもウイスキーが大好きです。

ヘンリーが飲むのはアイラ系の匂いのきついものでしょう。

とある死刑囚は飲むと病みつきになるといって、酷い目に遭いました
が……？

土曜の朝早く、アルパカの街の広場にて人垣ができていた。

緑の二本線を左肩に記した兵士達がラインハットの旗を持ち、志願兵の受付をしていた。

腕自慢の若者が幾人が並んでおり、中には物見夕山で眺めているものもいた。

名前をアルベルト・アインストと偽り志願兵入りを果たしたヘンリー。彼はアルパカ精鋭部隊の一員として三ヶ月の訓練の後、早速最前線へ送り込まれた。

+ + - - + +

ボンモール国の東に位置するエンドール。かつてボンモールによって併呑された国家だが、その経済力と内政力、交渉力から内側からボンモールを支配している。

ラインハットの初戦の勝利とその勢いからボンモールこそ攻め落としたものの、経済の中核であったエンドールは未だ健在。残った戦力をかき集め、足りない分は東の海に船を走らせて補充した。

胎を据えての防戦は単純な進撃をことごとく退け、その勝利の氣勢から徐々に反撃の意思が芽生え始める。

ラインハット侵攻軍、第三野営地。聞こえはよいが、簡易の小屋とテントの集落でしかない。城攻めを行う上で戦力は敵の三倍を要するという定石が、侵攻軍では守られていなかった。

エンドールは平和的な国であり、軍備もたかが知れている。ボンモールを落とした時点で降伏も時間の問題だろう。その甘い見通しが仇なして今に至る。

見張りの任を受けたヘンリーは塹壕にて一人槍を抱いて待機する。

「……城門が一つで、城壁も高いか……」

簡易の魔法望遠鏡にてエンドールの城を見るヘンリー。ボンモールよりも大きく、そして防壁に秀でたそれは、生半な手で攻略できるものではない。

「こればかりはお手上げじゃないの？」

光が眩き、ふわっとローブの女性が塹壕に降りてくる。

「珍しいな、お前が人の目に触れそうな場所に出てくるのは」

「誰も来ないわよ。というより、貴方以外は皆及び腰。勝負以前の問題よ」

城を前にして感じる絶望感。手数も武器も城攻めに必要な道具も何もなく、ただ「落とせ」の命令のみ。日々切り詰められる兵站と高まる反撃の氣勢。ラインハット侵攻軍の士気が下がるのは当然と言える。

「城攻めなら門を開ければいい。私ならレムオルで誰にも気付かれないでそれができるわ。なんならルーラで小隊を運んであげるわよ？」

胸を張って言うエマ。確かに彼女の力を借りればそれは可能だろう。敵の頭を越えて進撃ができるのであれば、高い城壁も堅牢な門も意味を成さない。

「いや、それはできないな……」

だが、ヘンリーは首を横に振る。

「なんで？ まさかこの状況でまだ自分に拘っているの？」

「そうじゃない。もしそれを使えば、俺の経歴に闇を残す」

「経歴に傷つくのが怖いのか？ 馬鹿じゃない？」

「傷ではない。闇だ」

「闇？」

「うむ。もし安易に禁止魔法を使ったことがばれば、ラインハット国を危険国家と考える国が増えるだろう。東国に限らず西国、果てはグランバニア、テルパドル地方にすら噂が広まる。それにサラボナの強欲な者達がルーラの使用に気付けば、自分達の利権を守

るためにも経済封鎖をかけてくることもありえる」

「複雑なのね、人間は……」

人間世界でルーラが禁止されている理由。それは一部の商家や王族に限り知りえること。東国を統一したとして、世界から封鎖されては意味がない。

「なに、その複雑さゆえ、手が回らぬ場所が出るものさ……」

ヘンリーはにやりと笑うと、塹壕を出て近くの湿地へと歩いた……。

++ ++

ラインハット侵攻軍、第一野営地にて、指揮官であるトム・エワードはクマのようにうろついていた。

もともとは国境の見張りであつた彼は、兵士としての年季こそあるものの、侵攻の才能はない。手に余る任務もさることながら、人と人が生死を交差させる戦場の雰囲気に及び腰になっていた。

今日も敵国の情勢を見守るだけという弱気な指示に、部隊の多くは厭戦感を持ち始めていた。

「本国にいつて……、いや、そうしたら俺は打ち首か？ 今のアルミナ様なら俺の首など庭の花を手折る程度にしか感じないだろう。そうしたら家族は、妹は……」

トムは答の出そうに無い悩みを抱えながら、今日も簡易の小屋の中で円を描く。

そこへ……、

「げこ……げこげこ……」

「うひゃ！」

突然現れたがまがえる。トムは驚いてしりもちを着くと、手近にあつたものを適当になげる。しかし、がまがえるはそれに怯まず逆にびよんびよんと近づいてくる。

「だ、誰か、誰か来てくれ！ いや、お前は来るな、あっちいけ！」

「まったく、情けないな……」

ため息交じりの声とドアの開く音。入ってきた兵士はガマガエルを拾い上げると、小屋の外へ放り投げる。外で女の悲鳴が聞こえたが、トムは目の前の脅威がなくなったことに安堵する。

「な、情けないとは無礼だな。まさか貴様のイタズラか!？」

「そうだとしたらどうする気だ?」

「なっ!」

横柄な態度の兵士にトムは顔を真っ赤にする。もともと信頼の厚い指揮官というわけではなく、本人もそれは自覚しているが、こうあからさまにされては立つ瀬がない。

「無礼な、名前と所属を言え!」

すると兵士は外を見た後、向き直って言う。

「ヘンリー・ラインハルト……」

「ヘンリーだな……貴様、絶対に……」

真っ赤になっていた顔がはつとなり、そして緩み始め……。

「ヘンリー? まさか……、そんな……けれど、ライン……」

「しっ!」

指を立ててその先を制すアルベルト。もう一度外を見た後、ゆっくりとドアを閉める。

「いい加減、カエルぐらい馴れる……。あれも食べれば鶏肉みたいで旨いらしいぞ?」

「あれを食べるなんてとんでもない。というか、へ……、アルベルトのせいですよ……。貴方が私の寝所にカエルを入れたこと、未代まで忘れません」

どさりと椅子に座り込むトム。手で顔を押しさえ口もとをゆがめる。

「まさか、また会えるなんて……」

「まあな……」

「王子が賊に誘拐されたと聞き、私はこの国の行く末に不安を感じました。まあ、今そのまったくただか中にいるわけですがね?」

「そうだな……」

「そうだ、デール王にはお会いになられましたか？ 今すぐにも
こんなばかげた戦争を……」

「残念だがトム、こちらから攻め立てた以上、そうもいかん」

「ですが、いくらアルベルトでもこの状況下、どうやって盛り返す
というのです？ 地図の上では確かに我らが圧しています。しかし、
現状、エンドールの城を落とすなど……」

ヘンリーの才能についてはトムも知っている。ラインハット国の
政治、経済を司るケイン・マッケインの師事を受け、軍師団長を演
習にて互角に戦い抜いたとされる手腕。剣をこなし、魔法を習得す
る才能の寵児。それがヘンリー第一王子だった。

彼ならばこの窮地をひっくり返すほどの策があるのだろう。もし
くは、和平の道を探るべく、交渉に立つてくれるのでは？

「そうだな。普通はできん」

そんな期待はすぐに打ち砕かれた。がっくりと肩を落とすトムだ
が、ヘンリーの余裕の表情を見るに、まだ何かあるかと顔を上げる。
「俺は一度だけエンドールの城に入ったことがある。その時、迷子
のふりをして城の中を探索させてもらった。抜け道を知っている。
あれだけ大きな城だ、改修などできないだろう。そこでだ……」

「はい……、ふむふむ、なるほど……そんな道があるとは……」

「決行は明日の夜半過ぎ。俺と何人か来い。他の兵は第一野営地で
待機。それと、油だな。古くて臭くなつたものならなおよしだ。ほ
かに大工道具もだ」

「はっ！」

トムは礼をすると、ただちに指令を出すため、部屋を出た。

日が沈み、辺りに夕闇が訪れた頃、ラインハット第一野営地に明かりが点される。

他の野営地は小屋を残してテントなど全て撤収されており、傍目には撤退を匂わせていた。

そんな中、エンドール城下町の南東に位置する武器屋にて、黒装束に身を包む男達が居た。男達は武器屋のドアを破壊し、なだれ込むと店主を縛り上げる。

急なことに目を白黒させる店主には目もくれず、リーダー格の男が店の一階へと降り、そして……。

地下を走るラインハット侵攻軍奇襲部隊。

古びた扉を慎重に破壊し、埃の籠る部屋へ出る。そこには階段があり、何年、いや何十年とその存在が忘れられているのだろう扉を軋ませ、城内へと侵入を果たした。

その異変に気付いた見張りが槍とランタンを片手に走る。

漆黒の闇から二匹の蛇が現れたと思うとランタンを持つ手と口に激しい痛みが訪れる。

その隙に続く黒装束が猿轡を噛ませ、手足を封じ、そのまま地下へと捨てられる。

黒装束達は手に大工道具という奇襲には不釣合いの獲物を持ち、散り散りになる。

城内部にある兵舎にて、扉に門を取り付ける。隙間に尖った木材を詰め込み、ドアの下から油を流し込む。廃油に近い油の匂いに感づく兵もいたが、そのときには窮地を理解できる。。

兵士の身動きを封じたアルベルト達は、見張りを残して城門の開錠と王室の二手に分かれる。

エンドールの城から白い煙が上がる。それを合図にラインハット
侵攻軍が正門を目指す。

本来なら堅く閉ざされている城門だが、なんと内側から開けられ、
その侵入を許した。

民は町が戦場と化すことを心配し、その行方を見守っていた。

階下の騒乱を聞き、城門の開放に成功したと察知するアルベルト。
それはエンドール側も同じであり、王室を守る近衛兵達が剣を片手
に現れる。

「貴様ら、どこから！」

「入り口からに決まっておろう？」

アルベルトは軽口と共に鞭を走らせる。それは近衛兵の利き手を
的確に打つ。しかし、並の兵士とは装備が違う彼らの手はナツクル
カバーに守られており、多少の痛みには堪えつつ上段を振りかぶる。
自信故のおごりか、アルベルトはそれを予期できずに兜で受ける
はめになる。

剛剣は兜を破壊するがそれに留まり、突如放たれた真空魔法が近
衛兵を吹き飛ばす。

「!?!」

無詠唱の真空魔法に皆の目が丸くなる。黒装束の男達にそのよう
な高尚な魔法技術があるわけでもなく、突風が吹くような場所でも
ない。

唯一その原因を知るアルベルトは、その隙に残りの近衛兵に鞭を
放つ。今度は手を打つなどと甘いことはせず、しっかりと露出した
顔を打つ。そして多勢に無勢のまま押し切った。

暫く聞こえた剣戟もじきに収まる。

エンドール軍は緒戦のボンモール落城で兵を失っていたものの、

野営地にあるラインハット侵攻軍の倍はある。援軍が来たという様子もなく、いくら城門を開かれたとはいえ、制圧されるはずが無い。きつと撃退したに違いない。

民衆はそう考えていた。

しかし、城のバルコニーに松明が点され、現れたのはラインハットの三本線が印された鎧を纏う緑髪の男だった。

民衆はその光景に目を疑った……。

+ +

南東に位置する武器屋は竜の神が存在したところから王家と縁のある老舗。戦乱と遠ざかるうちに地下通路の存在は意義を失われ、ボンモールに併合された時、文書のやり取りの中、見逃されていた。それを発見したのは好奇心溢れるラインハット国のやんちゃ坊主だった。

彼は隠し通路を通過して内側へと忍び込み、兵舎のドアに門を掛けて回った。兵士の大半を封印した状態で城門を開け、官僚、大臣の拘束をした。

倍以上の戦力とはいえ閉じ込められては振るう矛も無く、向ける先も無い。

寝室にて佇む王、リック・ボンモルドは現れた黒装束の男を前にして、驚いた様子だった。

彼はあわてる様子もなく席に着くと、侍女にハーブティを注ぐようにいう。

アルベルトは毒見を申し出る部下を諫め、外で待機するように言う。

その後、二人はしばらく話し合いをしていた。

+ +

兵士達は捕虜となり、ラインハットへと移送される。大臣、閣僚、官僚は今後のエンドールの政務に滞りが無い程度を残し、人員が入れ替わる。

トムは副官をエンドールに残し、アルベルトと共に戦勝の報告をするため、帰路についた。本来なら指揮官が行う任務ではないが、ヘンリー凱旋を一国も早く伝えたいトムは躍起になっていた。

道中、日が沈んだところで、フォックスヤード村にて宿を取るトム。かなりの上機嫌で鼻息交じりで風呂へと向かった。

一方、アルベルトは個室を取り、今後のことを考えていた。

「……まさかも王位に帰り着くとはね。本当に貴方って王者になるべき存在なのかしら？」

ふわりと光を眩かせながら、エマが現れた。その表情は感心しているのか、いつもより柔らかさがあつた。

「いや、まだ早い……。俺が戻るのは東国を統一してからだ」

「そうなの？ ならなんで戻るの？ ラインハットには貴方を知ってる人がいるかもしれないのに……」

「問題ない。この傷があるからな……」

アルベルトはそう言いながら割れた兜を指でくるくる回す。近衛兵に切られた傷は彼の顔に斜めの傷を走らせた。見た目こそ痛々しいものの、皮をやや切り裂いた程度で、化膿することなく、傷跡のみ残した。

「傷ぐらい私のベホイミで消せるわ。それにモシヤスも使えるから変装ぐらい……」

「必要ない」

「また……。どうして貴方は私の力を拒むの？」

「この程度、自力で乗り越えられる」

「まあ、そうかもね……」

ふうとため息を着くエマ。それは呆れているというものではなく、

仲間はずれにされているような疎外感に近い。

「それより、どうして手を貸した？」

「え？」

「真空魔法のことだ。お前以外にいないだろう？」

「だって、しょうがないでしょ？ 私の位置からは貴方が切られたように見えたり」

「俺が死ぬと思ったか？」

「そりゃ思うわよ。っていうより、あと少しでも間合いが近かったら死んでいたのよ？」

「そうだな。また貴様に助けられた」

「そうよ。感謝なさい」

胸を張るエマに、ヘンリーは静かに目を閉じる。

「……」

「……」

「それで終わり？」

「今回は頼んだ覚えがないからな」

「前だって頼まれてないわ」

「つまり、無償の奉仕というわけか、殊勝なエルフも居たものだ」

「やめてよね。人間のくせに思い上がって……。せいぜい自分の無力さを思い知るといいわ。その時こそ私の僕にしてあげるんだから！」

そう言うとエマは光を纏い、そしてドアを乱暴に開けると、気配が遠のいていった。

アルベルトは初めて見るエマの昂ぶる感情に、不思議と笑いがこみ上げてきた……。

少しからかいすぎた。本当に少し反省した。

50 | 落城（後書き）

本当はお城から武器屋への一方通行です。

そこでは諸刃の剣が手に入ります。

呪いの武器にはロマンがあるのです。

51 | ブラックジャック

ラインハットにエンドール城陥落の知らせが届いたのは、その三日後のこと。しかし、戦勝の報告にも関わらず、王宮は暗い雰囲気にも包まれていた。

その理由は徒に広げた戦火のせい。ブランカ国への侵攻の片手間、西国にまで出兵しており、その維持費を賄えるほどの財源の見通しがない。ボンモール陥落時に得た賠償金なども、もう底が見え始めているのだ。

ラインハット国の舵はアルミナが執っている。デールはその言葉を大臣、官僚へ伝えるだけの存在。そして、下賜された政務の類は古株の大臣であるケイン・マツケインが担っていた。

ケインは既に六十を越えており、チップの死後、オラクルベリーで隠居の日々送っていた。しかし、東西各国への侵略にて政務の指揮系統が混乱し、急遽呼び戻されたのだ。

本人曰く、もう少し早く橋が落とされていればカジノを破産させられたとのこと。ともかく、今日も城の一室にて、彼はソロバン片手に実務に追われていた。

ノックの音がした。

ケインは時計を見る。定例報告は既に終えており、夕食というには早すぎる時間だった。だから無視した。

だが、またドアが叩かれる。

「……誰だ？ ワシは今忙しいんだ。宅の馬鹿女の飯代算出するのに骨が折れていてな」

ラインハット国において彼の邪魔をできるものはいない。もし彼の仕事が滞れば、それはつまりラインハット国の政務の大半が滞ることとなる。たとえアルミナであろうと、それを邪魔することはできないのだ。

だが……、

「……ふん、死にぞこないが……」

乱暴な物言いと同時にドアが開く。城内にも関わらずフルフェイスの兜をした兵士は、ずかずかと部屋に入り込み、近くの戸棚からトランプのデッキを二つ持ち出す。

「なんじゃいお前は……、部屋の中なんだから兜ぐらい取ればよいじゃろ。暑苦しい」

「それがそつもいかないんで……」

ふいに扉が閉まり、それを見てから兵士は兜を取る。

「お前は……」

ケインは兜を外した、緑髪の青年の顔を見て絶句する。

かつての幼さが消え、精悍さを備えた容貌。顔を斜めに走る傷こそ知らないが、野心に燃える青い瞳と力強い太い眉、高い鼻、二ヒルな唇、全てはかつての教え子を思い出させる片鱗がある。

「さすがにこんな傷じゃ師匠の目は誤魔化せないか……」

「ふふ……、長い便所じゃったの」

かつてケインの授業をサボるとき、よくトイレ休憩を使ったのを思い出す。

アルベルトは勘弁してくれとばかりに口元をゆがめるが、ケインの瞳には……。

+ + + + +

ブラックジャックをするときの追加ルール。

デッキから最初に引いた一枚を示し、より小さい数字を引いたほうが親となる。

二枚目を引き、勝負開始。勝ったほうは場に出されたカードを全て取り、最終的にその枚数が多いほうが勝ち。

続く親は勝ったほうが行い、カードがなくなるまで繰り返される。コールにも関わらずカードがなくなった場合、その勝負は引き分

けとなり、没収される。

手にしたカードは常に確認することができる。カードの残り枚数を知ること、勝利への期待値を上げることができる。

勝てば勝つほど有利になるルールであるが、ケインを相手にするときだけは、それほど意味を持つものではない。なぜなら……。

「爺さん、少しは衰えたと思ったんだがな……」

最後の一枚を引いたところでバースト。笑いながらケインはカードを全て取り、カードの枚数を楽しそうに数える。

「ふふん、まだまだ負けられんからな……」

これで三度目の敗北を喫したヘンリー。これまでの勝率も芳しくなく、ケインにブラックジャックで勝てたのは運の絡んだ数回のみだった。

「……にして、何故そんなものを被っているんじゃ？ おまけにアルベルト・アインスなどと懐かしい名前を……」

「それはおいといてくれよ。今回ここへ来たのは、爺さんにだけは俺が生きていることを報告しておきたくてな」

「殊勝な心がけじゃな」

「ああ……。爺さんだっけわかってるだろう？ 父上の死について……」

「ふむ……」

あごひげを撫でながら目を瞑るケイン。彼はすつと頭を下げる。

「お、おい、爺さん？ どうした？ 眼鏡ならおでこにあるぞ？」

「誰が眼鏡を探してるか、ボケ。……ワシは……、先王の死を……、そして盟友であるパパス殿に濡れ衣を着せ、いまだにぬくぬくと生に興じている……。そのことを恥ておる。本来、お前にあわせる顔など無いからな……」

「パパス殿を陥れるためにか……。となると、ゆくゆくは……」

ヘンリーは目を細めると、部屋の壁にある地図を見る。

「そして今もアルミナの愚行を止められずに……」

「止めたところで汚い生首の出来上がりだ。お前を責めるつもりはないさ。それよりも、今この国を踏みとどまらせているのはケイン、お前のおかげだろう。俺は感謝している」

「まあ、そうだがな……」

「今死ぬか？ 爺」

「ふふ、相変わらずだな……」

「ああ」

「して……」

「ん？」

「面を上げるとか言わないの？ この姿勢きついんだけど……」

椅子に掛けて面を伏す姿勢。筋張ってきた老体には中々きつく…

「ああ……、お前が頭を下げる場所は珍しいからな。暫く見て目に焼き付けておこうと思ってな……」

三度の負けの憂さ晴らしか、ヘンリーはそれを楽しそうに見ていた。

++ ++

「……今日ここに、アルベルト・アインスを東夷隊第三部隊隊長の任を命ずる。これからもラインハットの為に尽力を尽くすよう、心がけよ……」

「はっ……」

エンドール陥落の勲功を称える式典は戦中ということもあり簡素なものだった。

今回の作戦にて大きな役割を果たしたアルベルトは、その功績を認められ、進軍隊の一つを任されることとなる。

その証として緑の三本線の引かれた鞘と儀礼用の剣が、ケインより下賜される。アルベルトはそれを恭しく受け取り、頭を垂れる。

「して……、その方、何故に式典において兜を脱がぬ？ 国王不在
とはいえ、礼節を弁えぬのは失礼に当たるぞ？」

「はっ、実は先日の戦にて不覚にも顔に傷を受けました。それを恥
じ、戒めるためにもこの兜は取れませぬ」

「ふむ、武人の矜持というものか……。ならばそれもよからう」

しばしの沈黙が訪れる。その間、アルベルトは頭を垂れたまま。

その心中は、昨日の件の意趣返しに唇を噛むほどだった……。

51 | ブラックジャック（後書き）

不審な男のコパルさんはよく一人でブラックジャックをします。
意外と楽しいです。

「まったくいい気味ね……」

「ふん、あの爺、いつか引導を渡してやる」

部隊がそろつまでの数日間、アルベルトには当間の部屋をあてがわれた。ドアを閉めると同時にエマが姿を現すが、いつもと違い頭を垂れた様子。先ほどの式典と同じ嫌味にアルベルトは舌を噛む。

「でも、貴方が負けるなんて意外だったわ……。あの老人、何かいかさまをしているようには見えなかったけど……」

「ブラックジャックか？ 何のことは無い。あいつは場に出たカードを全て記憶してただけだ。俺はせいぜい自分のカードと絵札ぐらいだ。期待値の信頼度を考えれば、勝率も続けるだけ下がる」

「記憶つて、百八枚全部？ いくらなんでもそれは……」

指折り数えるも直ぐに首を振るエマ。あまり細かなことは得意ではないのだろう。

「カードの裏の傷だけで表を当てることもあった。ことブラックジャックに関しては奴に勝てる気がしない」

「へえ……。貴方でも勝てない人がいるのね……」

「俺は別に完全無敵のパーフェクトではないぞ？ 買いかぶりすぎだ」

そう言つてアルベルトはカードをシャッフルする。エマはそれを見て、彼の対面に座る。

「買いかぶるものにも、そこまでとは思ってないわ……」

「ふん……」

ならばどこまでかと聞こうとして、目の前に出されたブラックジャックの手札に舌を鳴らすヘンリー。

「そういえば、貴方の偽名のアルベルト・アインスって何？ 懐かしいとか言つてたけど……」

「うむ。これはだな……」

だが、かつての師に練磨された弟子が遅れをとるはずもなく、徐々にカードの枚数は……。

「俺に勝てたら教えてやるわ」

「調子に乗って……！」

それを挑発と受け取ったエマは、たかがカードゲームに熱くなり始めていた。

アルベルト・アインス。かつてケインが二人の王子に読み聞かせた英雄譚の主人公の名前でしかない。そんなことよりヘンリーは、エマがムキになる様子を意外そうに見つめていた。

++ ++

「全員に告ぐ。我らラインハット侵攻軍、双頭の蛇はこれよりブランカ国へ進軍し、東国平定を行う。これはラインハット地方を安定させ、強国とせしめるための大切な戦だ。目前の過小なる戦果に目をくれず、常に大国となる威風を纏え！ 我らの勝利こそが、ラインハットの明日を作るのだ！」

エンドール平定を終えたアルベルトにブランカへの進軍の命令が下ったのは、あれから三カ月後。アルベルトは進軍に当たり、部下を前に激を飛ばしていた。

部下は全員フルフェイスの兜を脇に持ち、それには緑の三本線とは別に、首が二つに分かれた蛇の印が描かれている。

エンドールを陥落させたのは、降り注ぐ弓矢にも切り結ばれる剣戟にも退かぬアルベルトの勇氣と両手に備えた牙にある。

実際は闇夜と地下通路を使った奇襲にすぎないが、いつの間にか大群に少数で攻め入り、乱戦の中で陥落させたと筋書きが異なり始め、彼の額に走る傷も英雄譚の一つとして上書きされていた。

かくしてアルベルト率いる双頭の蛇が、ブランカ陥落を求め、歩を進めることとなった……。

東夷隊第一部隊隊長、ミハエル・カーマインは陣営にてせわしなく歩き回っていた。

苛立つときに爪を噛む癖があるのか、ふやけた親指の爪はぎざぎざになっており、その表情は焦りに満ちていた。

「まずいぞ。まずい……。まさかエンドールが落ちるとは……。あのアルベルトとかいう庸兵、どんな魔法を使ったというのだ？ このままでは俺の立場が危ういではないか……」

本国から伝えられたボンモール・エンドール国の落城。それはラインハット軍にとっては朗報であるが、彼にとっては少々勝手が違う。

ミハエルの指揮する東夷隊は、ブランカ国がラインハットの防衛の拠点として急場しのぎに建設させた木造砦、レイクバニアに臨んでいる。彼が指揮を執り、二ヶ月。木造の砦と遮るものの無い、守るには不適合な立地にも関わらず、攻め込めず、退かずの現状であった。

膠着の原因は砦を前にして流れるフレノール川だろう。小高い丘からラインハット軍の陣営を見下ろし、攻め入るにしても川を渡ることに手間取り、思うように進軍ができないのだ。

例え渡りきったとして、魔法による迎撃が行われる。大規模な部隊を率いて攻めようが、広域魔法の餌食となるのが目に見えている。火矢を放とうにも距離があり、進軍する間に火消し、迎撃をされるのは明らか。

ブランカ国の初戦における疲弊も日が経つにつれて回復の兆しを見せている。オラクルベリーとの陸路を絶たれたはずのブランカ国だが、北海航路からグランバニアと通じ、その支援を受けていた。

さらに噂によるとグランバニア国名つての軍師が一人、援軍に駆けつけているらしい。

「くう……一体どうなっているのだ、あの砦は……」

急場しのぎの砦など三日で落とす。そう意気込んでやってきたミハエルだが、思うように攻め入れず、今に至る。だが、本国からの伝言は「何時になったらブランカ国を落とせるのか？」の一言のみ。意気込みだけで覆る戦況では、もはやないにも関わらず……。

「隊長！ 東夷隊第三部隊が到着いたしました！」

伝令の兵がノックもせずによってくる。

「くう、仕方がない。今は猫の手でも借りたいところだ、して、兵は如何ほどだ？」

「はい、騎馬隊が二十に重装歩兵隊が十、他に……」

「は？」

彼が驚くのも無理はない。砦を前にして投入された兵がたかが百にも及ばないのだ。決戦を控えるわけではないが、焼け石に水といわざるを得ない数字に、ミハエルは伝令を押し退け、外へ出る。

丁度黒色の鎧とフルフェイスの兜の兵が馬から下り、向かってやってくる。

「東夷隊第一部隊隊長、ミハエル殿とお見受けする。私は東夷隊第三部隊隊長、アルベルト・アインス……」

「そんなことはどうでもいい！ まさかこれだけか？ これでは小隊ではないか？ 何が隊長だ、馬鹿にしおって！」

話を遮り癩癩を起こすミハエル。アルベルトは特に気に留める様子もなく、続ける。

「これより東夷隊第二部隊隊長と合流し、軍議に移りたいのだが……」

……

「はん！ 貴様のような氏素性も判らぬ名ばかりの隊長などと話したところでなんになる？ 小隊ごとき、砦の見張りでもしている！」

吐き捨てるようにいうと、ミハエルはそのままテントへと戻っていった。残された伝令兵もアルベルトに一礼すると、所属する陣営へと走っていった。

「ふむ……、許可も出たところだ。見張り任務でもさせてもらおうか……」

アルベルトはフルフェイスに隠れてにやりと笑った……。

53 | マホカンタ

グランバニア国。先代の王と現在の王の時代にグランバニア地方を統一されている。

領内には高地のチゾット村や西海岸に展開されるネツドの開拓地があり、共存共栄の道を選ぶことでそれが実現したのだ。国の定義によって七とも八とも分割される現在の大陸にて、友好的な統一を成し遂げている貴重な例。グラン山脈に眠る特殊金属や、チゾット高地の希少動物による高級食材、開拓地としてのキャパシテイが、国の繁栄の礎だ。

だが、その裏に弱点がある。それは大地。

高地と荒地、険しい森林が大半を占めるグランバニア地方は、大地の恵みが乏しい。そのため食料が高騰しやすく、サラボナの商人に足元を見られることが多い。

それを挽回するために、ネツドの開拓地に希望を託している。

しかし、それを解決する一番簡単な道はなんだろうか？ それは侵略だろう。

直ぐ北にはエルヘブン地方があり、北西にはラインハット地方がある。そして今、ラインハット地方が混乱の中にあり、その発端の一つが……。

グランバニアが此度の戦でブランカ国に肩入れするには、二重の理由があった。

++

レイクバニア砦の一室にて、紅茶が淹れられていた。

グランバニア産、最高茶葉のバニアティが振舞われるが、軍議に参加した士官は一人を除いてそれを一口飲んで辞退する。

バニアティ独特の臭いは高地の茶葉の初芽のみを摘んで発酵させ

た一級品の物。ただ、そのクセの強さにグランバニア出身の者でも馴れないことが多い。チゾットに住む人々はヤギのミルクに茶葉を入れて煮詰め、蜂蜜にてそのコクを楽しむらしい。

「ふむ……、悪鬼のさばるラインハルト軍も、もう潮時でしょうか……」

エンドールの陥落と東夷隊の補充。報告だけを聞けば戦況が険しくなるはずだが、実質届いた部隊は一個小隊のみ。

ブランカ国が反転攻勢を仕掛けるには、万全を期すなら一ヶ月、まだ数週間の猶予が必要だ。だからこそ、敵の機微には目を光らせていたが、それが徒勞でしかないと、皆安堵の息をつく。

東国、西国に広げられた戦火を賄うほどの国力はない。エンドールが陥落させられたところ予想外だが、賠償金の自転車操業で続けられるほど戦争は儉約家ではない。

栗毛のおかつぱ頭の男はスコーンをつまみ、バニアテイで流し込む。このスコーンは人気があるらしく、仕官は手を油で汚しながら、それをつまんでいた。

「このペドロ、必ずや貴方の汚名を濯いで見せましょうぞ……」
飲み終えた後、グランバニア国よりやってきた軍師は、軍議を始めた……。

++

「悠久なる大地の轟く無限の力、今こそ爆ぜろ、イオ！」

爆裂初級魔法を放つアルベルト。それは青白い光の魔法障壁により弾かれ、近くの土手で爆発する。

「マホカントか？ あの布陣で敷かれては魔法も無力だな……」

少数の兵士を引き連れ川を渡った双頭の蛇。ブッシュ藪のような身を隠せる場所もなく、やみくもに放った程度では逆に被害を受けるばかり。

もちろんアルベルトも落とせる見通しなどはない。難攻不落とさ

れるレイクバニアを自分の身で体験してみたかったという安易な欲求の表れだった。

「隊長、ここは撤退を……」

「うむ。命あつてのものだな。よし、全軍撤退……？　なんだあれは？」

砦の一部に法衣と魔力を増幅する杖を持った兵が集まり、青白い魔法障壁を張る。

アルベルトに魔法で挑むつもりが無ければ無意味なのだが、彼らは何か目的があるらしい。

しばらくして栗毛の男が出てきたと思うと、望遠鏡でアルベルトを確認し、複数の魔法使いと共に火炎を空中に出現させる。その一つ一つはそれほどではないが、やはり人数が集まると圧巻である。

「馬鹿な。ウサギ狩りのためにここを焦土にするつもりか？」

おそらくは初級閃光魔法程度であり、せいぜい追い払う程度だろう。そう考えたアルベルトだが、次の瞬間目を疑う。

「ギラ！」「ギラ！」「ギラ！」

一斉に放たれた閃光魔法。広域に放たれるはずのそれだが、青白い魔法障壁に導かれ、集積してアルベルト達に向かってくる。

「いかん！　散れ！」

アルベルトがそう言うところには既に兵士達は蜘蛛の子のように散らばっており、彼も咄嗟に横に飛び、何とかそれをかわす。ある程度距離があつたおかげでなんとか逃れたものの、弾が初級魔法であることから連発も可能と予想できる。

アルベルト達は散り散りになり、撤退を余儀なくされた。

+ + + + +

「貴方、たまに本当に馬鹿なんじゃないかって思うの」

夜明け前、ようやく寢所に戻ったアルベルトを迎えたのはエマの呆れた声。それもそのはず、一歩間違えれば命すら落としかねない

状況に自ら進んでいくのだ。正気の沙汰ではない。

「まあそういうな。あれでもそれなりの価値はある」

「お尻に火がついて逃げ出した貴方の言うことかしら？」

「ふふん。瑣末なことだ」

「なら、またお手並み拝見ってところかしら？ 今度はどれくらい？」

「そうだな。今回は一ヶ月……だな」

「そんなに？ 相手の準備を待つてどうするつもりなの？」

「一ヶ月もあればブランカ国の反撃戦の準備が整うのではないか？ エンドールのような抜け道を使う裏技的な勝利が望めるわけもないが、それにしてもものんびりしすぎな目測に、エマは驚きをあらわにする。」

「いや、落とすだけなら今からでもできるだろう。だが、その後が良くない」

「その後？」

「ああ。俺は初めて見たが、マホカントを実戦部隊に配備していた」
「ええ。魔物相手ならともかく、人間の戦争にしては珍しいわね」

「魔法使いを部隊に配置する試みはどこでも行われている。だが、もともと高位の魔法を使えるものは少なく、軽装歩兵による槍袈のほうがるかに安価で効率が良い。また、乱戦の際に同士討ちを起こしかねないことから、広域魔法は嫌われ、せいぜい砦における防衛にのみ発揮されるに留まっている。」

「だが、レイクバニアに配置された魔法部隊は違う。広域魔法を収束させて放つという戦法は、これまでに例が無い。マホカントが高位の魔法であることからそれほど汎用性があるわけではないが、初級広域魔法を凶悪化させることで、戦力の幅が確実に広がるだろう。」
「で？ どうする？ マホカントなら私も使えるけど……」

「エマはいつものように手助けをほのめかすが、きつと答は同じだろう。」

「うむ。そうじゃないな。先ほども言ったが、落とすだけではその

後が良くないんだ。なんせ次も勝たねばならないからな……」

「はいはい、聞いた私が馬鹿でした……」

そう言うとエマは光を纏い、消えていった。呆れたというよりは拗ねた印象を受けることに、アルベルトは自分の勘が鈍ったかと思っただが……？

++

アルベルトがレイクバニアに挑み、三週間ほど経った。その間、彼らは見張りとお規模な弓矢、魔法による小競り合いに終始し、これといった戦果を上げることはなかった。

斥候によって報告されるブランカ国側の状況に、ミハエルはいよいよ敗北、撤退の日が近いと、陣営における散歩の時間が長くなり、既に両の親指を深爪したとのことだ。

ただ、何か、ラインハット国ではなく、ブランカ国に、変化が訪れていたのも事実で、その伝令は、ミハエルの焦燥した目には映らなかった……。

53 | マホカント（後書き）

オリジナル展開ですが、がんばってついてきてね

グランバニア国はラインハルト地方に攻め入る準備をしている。

現状、ブランカに支援をしているのは、その周到なる準備。もともとラインハット国が強行にでた理由も、全てはグランバニア国によるラインハット王家への凶行が理由。

全ては瘦せた土地に喘ぐグランバニア国が、沃土と醸すラインハルト地方を妬み、奪うつもりで仕掛けた策謀。

そんな噂が流れ始めたのは、ブランカ国の初戦の痛みが喉元を通り過ぎた頃。

「私を解任したいと……、そうおっしゃるのですね？」

栗毛の男は、甘い香りのするブラン・マロンティを嚙りながら告げた。

対峙する短髪、角刈りの男はこけた頬と鋭い細目の冷徹な印象を受ける。

最近、栗毛の男はレイクバニアの砦にて一人になることができなかった。トイレ、入浴の時さえブランカ国兵士の気配を感じるほどだった。ブランカ国に流れた噂が原因だろう。

「われわれブランカの民はグランバニアの好意に感謝しています。初戦の敗走を救い、現状の建て直しができたのも、全てはあなたのおかげ。それはいたみります。けれど、我らもまた主権を持つ国家として、これ以上は……」

含む物言いをする男に、栗毛の男は頷く。

「私も善意ではないので、貴方達の不安もわかります。その臭みを消せなかった、私が甘かったようですね。このモンブランティのように……」

「ええ、バニアティのような確かな香りに紛れて、ハーブの香りが

少し……ね？」

ふっと笑う男が指を鳴らすと、兵士がティーポットを抱えてやってくる。

「でも嫌いじゃないんです。どうか誤解の無いように……」

そして二人分注がれ、最後のティータイムが行われた。

「ああ、そうだ。スコーンの作り方、教えていただきたいのですがよろしいですか？ 息子がとても喜んでおりましたね。ペドロ殿」

ペドロは目の前の強面の男、オットー・シュティンが結婚していたことに驚きつつ、子供という言葉に頬が緩んでいた。

++ ++

ブランカ国にて最近広まった噂は、アルベルトによるものだった。彼は斥候とともにグランバニアとの港に潜り込み、兵舎、酒場、井戸端、いたるところでグランバニアの侵攻を醸したたてた。

ラインハット憎しで団結していた両国だが、ブランカ国の情勢安定に伴い、不自然な厚意に疑いが持たれるのは必死。うらぶれた国粹主義者に小金を持たせ、アルコールで懐柔すれば、その不安は至る所で煽ってくれる。

その結果が前線からのグランバニア魔法部隊の排除。もともと小隊以下の規模であり、彼らがいなくても防衛、反撃は可能という見通しが強かった。

任務半ばで帰国を余儀なくされたペドロとその一行は、帰国の船を待つ間、酒場にて時間を潰していた。

本国より派遣された魔法部隊隊員は、ようやくの帰国に胸をなでおろしていた。

演習で幾度も魔法部隊の威力と有用性は認識しており、魔物ならいざしらず、人間相手に放つことには抵抗があった。魔法反射障壁魔法を唱える者の中には威嚇で済むように角度を調整した者も居た。

不毛な大地出身の彼らには共生の考えが根強く、今回の派兵には懐疑的であった。

だが、部隊を預るペドロは違つらしく、馴れないアルコールを飲みながら齒軋りをしていた。

「われわれはブランカ国民だ！ ラインハルト地方を治めるのは、聡明で頑強な我らをおいて他に無い。グランバニアの甘言に惑わされ、バタ臭いやギのミルクを口にしたい腑抜けはいるか！？」

酒場の隅で始まる国粹主義者の演説。鼻の赤い酔っ払いがどこで手にしたのかわからない小金で聴衆を集めてはグランバニア国の悪口を言うのだ。

ペドロはそれを苦々しく聞きながら、ふうとため息を着く。

「奴らはこの機会に乗じて我らが愛するブランカ国の大地を乗っ取るうとして居るのだ。レイクバニアはかつて天空に竜の神が居たころから、大商人の知恵と、天女に加護に守られてきた。いわば神に愛された土地なのだ。それを未開の地の蛮族に奪われてなるものか！」

今日の演説者はいつもの赤鼻ではなく、緑の髪と額に傷を走らせる美青年だった。聴衆の中にはそれをうっとり見つめる婦人もおり、凜々しいなりに若者の頷く姿が見られる。

オットーの冗談めいた言葉の裏を読みつつ、ペドロは懐にナイフを二本忍ばせる。

「我らは我らの手でブランカを守る必要がある。そして、この東国を治める天運があるのだ！」

意気揚々とこぶしを上げる青年に、サクラが呼応し、聴衆も霧囲気に流されて真似をする。

そんな中、光が空を切る。それも二本。

「むっ！ 誰だ！」

緑の髪の男はかろうじてかわした凶刃に、その放たれた方向を見る。一瞬の出来事に聴衆はしゃがみこみ、サクラは男を守るように取り囲む。

「失礼、線が足りないかと思ひまして……」

栗毛の男は明らかに酔っ払いの類ではないその演者に、携帯していた二節の昆を構える。先には鋼の鉄球が仕込まれ、それを結ぶ鎖がじゃらりと音を立てる。

「なんのことかな？」

「レイクバニアではお灸の鱧え方が足りなかったようですね？ 今一度、悪鬼にはオシオキが必要かと……」

携帯用のモーニングスターを構える栗毛の男の異様な殺気に、聴衆達は我先にと逃げ出す。サクラは緑髪の男を守るべきかと悩むが、男の目配せでそれに紛れて酒場から消える。

放たれた鉄球を寸前でかわす緑髪の男。古くなっていた床板はその一撃で脆くはじけ飛ぶ。

「なるほど、貴様が魔法部隊の指揮官か！ 屈辱は忘れていないぞ？」

緑髪の男、アルベルトも腰に帯びた双頭の鞭を構え、びゅんびゅんと音を立てる。それは先の一撃に比べれば、蚊の鳴くような大人しいものにも聞こえる。だが、放たれた鞭はペドロの足元で破裂し、木片を弾いて威嚇する。それに気を取られていると、もう一つの蛇がモーニングスターの先に絡みつく。

「ほう、噂のラインハルト操鞭術ですか？ ですが、この鉄球の生み出す力にはかえませんまい？」

「搦め手は乗算、手数は多いほうがいい」

凝集された力と手数、搦め手。急に始まった綱引き、力比べに興じる二人に視線が集まる。

「ふん、何が魔法部隊だ。その腕力で火球でも投げるといふのか？ 徐々に引き寄せられるアルベルト。力勝負ではペドロに軍配が上がったらしく、さらに騒ぎを聞きつけた魔法部隊が駆けつける。

刻一刻と不利になる状況だが、アルベルトはそれほど悔しそうになく、一方のペドロは力みとは別に歯軋りをしていた。

ころあいを見計らい民衆に紛れたサクラが、ナイフをペドロの足

元に投げる。彼が怯んだ隙にアルベルトは鞭の途中を切る。反動でずっこけるペドロ。アルベルトはその隙に聴衆へと走り出し、しゃがむサクラの肩に駆け上がり、別の哀れな聴衆の肩を足場に人ごみを飛び越える。

「く、逃げるか！」

「この場の勝利を貴様の手向けにくれてやる。駄賃は本国にてゆっくり聞くがいい！」

高らかと笑うアルベルトに、ペドロはこぶしを床に叩きつける。

「グランバニアの名軍師、サンチョ・ペドロともあるう者がこれでは噴飯ものですか……。復讐に目が眩みすぎました……。申し訳ありません。旦那様……。」

バニアティに隠れたハーブの香り……。三年前のあの日から忌避してきた香りは、緑の大国原産のもの。旦那様、いや主君の無念と汚名を晴らせず、サンチョはその憤りにしばし肩を震わせた。

54 | 噂（後書き）

サンチヨペドロは19XXの5ステージに出てきた列車のボス。

ロシア製？ 実際にあるのかは知りません。

やりやすいゲームでコパル3でもワンコインクリアができた珍しいシューティングゲームです。

魔法部隊の帰国の知らせを受けたアルベルトは、進軍を開始する。急場しのぎの木造砦など近づきさえすれば、火矢でまさしく火の砦。これまでは広域魔法にて阻まれてきたが、おごりと猜疑心に昂ぶるブランカ兵がそれを排除した。

防衛の要を失ったブランカ国がまともに戦えるはずもなく、また広域魔法の恩恵を受けるべく立地条件仇となり、それに拍車を掛けた。

砦を越えてレイクバニア　かつてレイクイナバとされた商業都市へと騎馬隊が駆ける。

それが目視できるようになった頃、庁舎に集まったブランカ兵が籠城の構えを見せはじめ。グランバニア国魔法部隊が帰国した時点で負けを覚悟した仕官の一人が、秘密裏に民衆を先導していたおかげか、市街地にはほとんど人がいない。

本来なら民衆の混乱に乗じての乱戦を想定していたアルベルトは、ここで一時膠着に陥った。

グランバニアの魔法部隊ほどではないが、予測された進路には魔法部隊が配置されており、無人の街へ被害を顧みずに広域魔法を放つのだ。とはいえ、街の一区画ずつを牛の歩みのように確保し、徐々に追い詰める形となる、何れは勝利が約束された戦場でもあった。「ふむ、敵にも切れ者が残っていたか」

市街地の一角、制圧したカフェに陣取るアルベルトは予想していなかった抵抗に舌を巻く。斥候の話によれば退去する民衆に混じってレイクイナバの将も本国に逃げ出したと聞いていた。

「だが……、無人の街を守る理由などあるのか？　奴らの目的は……」

アルベルトが敵の真意を測りかねていると、伝令兵が息を切らしてやってくる。

「伝令、ブランカ国、レイクナバ防衛隊、降伏されたし。指揮官を名乗る者が交渉を求めております！」

「なん……だと？」

籠城戦と兵糧攻め。長期戦を予想していたアルベルトは肩透かしを食らった。

++

レイクバニア制圧において、アルベルトはブランカの敗残兵の一人と面会していた。

本来なら大体の書類を受け取り、本国に送れば残りは官僚間の仕事であり、仕官程度に会う理由も無い。しかし、市街戦の思わぬ展開に、その指揮官と会いたくなり、あえてこの男に会う時間を設けた。

「まるで赤子の手を捻るようなものだったな」

主権委譲に関する書類に目を通しながら、アルベルトはにやりと笑う。

対する男は直立不動の鉄面皮、鋭く冷静な視線には、感情が無いかのように見える。

アルベルトは今でこそ軽口を叩くが、目の前の男が率いたレクイナバでの攻防は予想外であり、物量をもって歩を進めるという不出来な戦果であった。

「冗談だ」

「わかっています」

「ふふ……。ならば重ねて問う。何故にグランバニア国の助力を断った？ 木造平屋の砦による防衛など、奴らの魔法部隊があつてこそだろうに」

「その質問は不適です。彼らを帰したのは我らではなく、貴方ですよっ？」

その答に感心した様子で彼を見るアルベルト。自分としては周到

に行つたつもりだが、この男にはばれていた。おそらくは逃げた將軍の手抜きが今回の勝因であり、ことこの男に勝てたとは素直に
いえないのかもしれない。

「そして意味の解らぬ白旗。勝ちを譲つたつもりか？」

「レイクナバと民衆を守りきるのが私の目的です。守るべき市民の退避が完了したならば、次は部下を守ります。そのためならば私の御印も差し出しましょう」

けして冗談に思えぬ断言に、アルベルトはゴクリと唾を飲む。敗残兵に気圧されるのはいささか癪だが、経験と覚悟なら目の前の男のほうが上だろう。自分は搦め手によるこすつからい勝利を重ねているに過ぎないのだ。

「ふむ……。貴様、ラインハットの将兵として働く気は無いか？」

「私はブランカ国の兵です。いかなる理由があろうと、母国に刃は向けられません」

「なるほどな。だがその国もすぐに落ちる。違うか？」

「貴方が本国に向かうというならそうなりましょう。けれど、貴国のアルミナ・ラインハルトに従うことなどできません。奴こそが此度の戦の元凶。けして頭を傳くには値しません」

「ふふ……。ならばその二つを排除したとき、貴様を我がラインハルト国軍に迎え入れることができるということだな？」

「そう……。なりますな……」

男はようやく表情を崩した。目の前の男、アルベルトが指揮官として優秀なのはわかる。だが、デルはさておきアルミナを排除できるとは思えない。あるとすれば、それはクーデター……。はつとして頷く男は、もう一つの質問に答える。

「失礼、私の名はオットー・シュティン。もし貴方がブランカ国を落とした時、私もまたラインハルト地方の平定に協力させてください……」

「ふむ。よろしく頼む」

彼にはまだ、守るべき家族がいるのを思い出した……。

レイクバニア庁舎近くの迎賓館一室で、アルベルトはデッキを切っていた。

またも蚊帳の外で彼の手腕を見ていたエマは、配られたクラブのジャックに、コールするかを考える。

「人間、猜疑心が働けば、それが強ければ強いほど恐れるものだ」
「そうね」

一枚目はハートの五。コールをすれば七以上でバーストだが、まだ配られ始めたばかりで可能性は低い。対し、アルベルトはダイヤのキングを見せている。

「後はここを平定し、ブランカ本国を残すのみか……」

レイクバニア平定においてオットーが尽力を尽くしていた。彼は元官僚の出身の指揮官であり、内政方面に明るく、自国の安定ならばと参加してくれたのだ。

また、アルベルトの厳しい規律のもと、兵士達の略奪行為を封じることができたのも大きい。中には目を盗み、不当な行為を働く者も居たが、翌日には背中を大きく割かれた死体となって発見され、それが兵士達の脅しとなっていた。

「このまま本当にあつという間に統一しそうね……」

「ああ、そのようだな。不服か？」

「ええ」

そう言っただけでコールするが結果はバースト。カードを没収され、むっとするエマ。

「そういえば、貴様の目的は俺を僕にすることだったか？ すまんな、その範疇に留まる器じゃなくて……」

「僕じゃなくても王者になれるのであればそれでいいわ」

「ふむ。前から気になっていたが、エルフが人間の王者に何を求める？」

「別に？ なんでもいいじゃない」

「何か理由があつてだろう？ 話してみないか？」

「貴方が王者になれば必然的にそうなるわ」

取り付く島も見せないエマにアルベルトはふつと笑う。

「俺はお前の特殊な能力……、禁魔法の類だが、それを買っている。素直に理由を話してくれば、内容如何によつては便宜を図る。それほど悪いことではないと思うがな……」

アルベルトの一枚目は七。もう一枚がジャックで合計は十七。親の縛りで交換不能だが、エマはその言葉を挑発と取つてか、果敢にコールを挑んでまたもバースト。

「ま、大体予想はつくがな……」

「ふん」

余裕綽綽のアルベルトは椅子の背もたれ一杯にふんぞり返り、エマはテーブルに差し出された互いのカードを見つめ、前のめりになつていた。

++ ++

レイクバニアを失い、グランバニアの後ろ盾を拒否したブランカ国。ここ一ヶ月の進軍でブランカ国の領土はかつての二割以下となり、民衆の中には国を捨てて逃げ出す者が増え始めた。

アルベルトはその政情不安を煽る一方で、本国や隣国、占領地に噂を流し始めていた。

英雄の誕生。東国を平定に導き、大陸を統一。サラボナやテルパドールなどの経済大国に負けぬラインハルト大国を形成する。

戦乱の世に現れ、勝利で大陸を凱旋する英雄。それがアルベルト・アインス……と。そしてもう一つ、ヘンリー第一王子の帰還の噂。

アルベルトは既に次の段階に歩を進めるため、動いていた。

だが、残すところブランカ城下町となり、アルベルトは一気に制圧に動くかと思いきや、ここで再びその手を止める。

ブランカ国は円環状に城下町を形成しており、城の中枢を攻め落とすには市街地戦を強いられる。民に守られる形の建設に、アルベルトは苛立ちを感じていた。

「で、今度はどうするの？ 魔法がどうのとかいうレベルじゃないのは私でもわかるけど……」

紙袋を持って現れたエマは、揚げたての香ばしいドーナツを食べていた。

「ふむ、美味そうだな」

アルベルトはひょいと手を伸ばし、それを口にする。

「あ、ちよつと！ 誰もあげるなんて！」

エマが手を伸ばすも既に一口齧られたところ。

「もう、三ゴールドよ」

「ふむ……」

手を差し出すエマを無視し、アルベルトは何か感慨深そうにそれを見る。

「ちよつと、アルベルト？」

「よし、いいことを考えた。次の作戦はこれだな」

アルベルトは齧ったわつかを眺めながら、次の作戦を夢想していた。自然と三ゴールドのことは流しつつ……。

ブランカ城下町陥落作戦「ドーナツ」。

城下町近くにて簡易の砦郡にて包囲を固め、水面下で重臣の切り崩しを行い、陸路・水路の断絶による兵糧攻め、投降する難民の受け入れなどで吸い上げを行っている。

ドーナツのように内側を空洞にするというものだった。

?? ??

ラインハルト国へ伝令の任を受けたミハエルは、その馬上で苛立ちを隠せずにいた。

本来なら東夷隊第一部隊隊長がこなす雑務ではないのだが、その任を解かれた今、下士官的な扱いに甘んじていた。

「く、あの田舎侍が。俺の手柄を横取りしやがって……」

全てはアルベルトによる搦め手が功を奏したのだが、視野が狭まっていたミハエルがそれに気付くこともない。

「そうは言われなくても、アルベルト殿の実力は本物です」

そう執り成すのは同じく隊長の任を解かれたトム。

「貴公は悔しくないのか？ 聞けばエンドールでの戦果も掠め取られたというではないか！」

「ええ、ですが、あの作戦はアルベルトが発案したものでして、私では到底……」

その剣幕にたじろぐトム。だが、そのあまりに謙虚な姿勢にミハエルの視線が向き……。

「ま、確かにアルベルト殿は王者の片鱗をお持ちのようだからな……」

……。そういえばお主はアルベルトと親しい様子だが、何かあったのかな？」

そつと水を差し向けられ……、

「ええ。ちよつとイタズラが過ぎるところがありましてね。昔カエルを寝所に入れられて……」

「イタズラ……ねえ……」

ふと思い出すのはトムのトラウマの話。彼がどうしてカエルを苦手としているか、そんな瑣末なことをミハエルは思い出していた……。

++ ++

ブランカ国を臨む野営砦「オールドファクション」。あの日エマが買ってきたドーナツの一つだ。アルベルトはその一室でいつものようにウイスキーで晩酌をしていた。

あの悪夢からおおよそ一年。幸運に助けられつつ、何とかここま

で来た。

かつての友、想い人を懐かしむには丁度よい区切りだが、最近ある噂を耳にしたことで、胸がざわめき始めていた。

オラクルベリーの陸商隊に腕の立つ護衛が居る。黒髪の青年で名をリヨカという。

東国では聞かない名前に、アルベルトは気になっていた。

「どうしたの？ 今日はやけにピッチが早いみたいだけど……」

すつと扉が開き、遠慮の無い監視者が現れる。

「うむ。気になることがあってな……」

「へえ、貴方でもそんなことがあるんだ。いつも自分中心に物事を進めるくせにね」

「さすがにどうにもできんこともある」

「で？ 一体なにがあつたのかしら？」

「うむ。リヨカが見つかったかもしれん」

「リヨカ？ ああ、彼が……」

特に驚く様子もなく、エマは頷く。それは彼の生死に興味が無いという冷たいものでもなく、どうにも引つかかりのある態度に見える。

「今、オラクルベリーで陸商隊の護衛をしているそうだが……、奴の腕をそんなところで腐らせるのは惜しい」

「ちよつとアルベルト……。それは買いかぶりすぎじゃないかしら？ 確かに彼にも素質はあるけど、たかが知れているわ」

各種魔法を教育も無しに覚えたことは確かにエマも認めている。

膂力もあの地獄の三年間がかなり鍛え上げただろう。さぼってはかりのアルベルトとは、単純な腕力や魔力で差がついているはずだ。

だが、人として、その社会で地位を成すということとは結びつきにくい。アルベルトのような知恵に優れた者こそが彼女の思う王者に相応しく、当時の無責任な博愛主義のリヨカでは役に不足していた。

「俺は奴に会いたい。奴には大きな借りがあるからな……」

「会いたいの？ なら会いに行けばいいじゃない。貴方ならそんな

こと考える暇よりも即行動で示すと思っただけど……」

「そうしたいのはやまやまだ。だが、俺がこの砦を長く留守にするわけにはいかない。ドーナツとは別に、もう一つ雲行きを見極める必要があるからな」

「ふうん。でも、そんなこと私に話して……」

エマがようやく思い至ったところで、アルベルトが彼女に歩み寄り、片膝をつく。

「ちょ、ちよつと辞めてよ。貴方のそんなところ、室内にも関わらず雨が降るわ」

「初めてお前に頭を下げる。俺は奴の生死を確かめたい。どうか、ルーラで導いてくれ……」

「な……、こんなことぐらいで……、貴方ねえ、たかが旧知の人に会うぐらいで軽々しく頭下げないでよ。砦を落とすのとどっちが大変だと思ってるのよ……」

「だが、お前の力を除いて他に方法が無いのだ。俺がこの地を長く離れず、かつ奴の生死を確かめるには、魔法の力を借りねばならない」

「わ、わかったわよ。わかったから頭を上げてよ……」

「そうか……。ありがとう……。ふう……。だがこれで俺もお前の僕か……」

「なっ……」

「そうだろう？ 俺はラインハットの王座に座ることなく貴様に助力を求めたのだ」

「ああ……。いえ。これはフェアじゃないわ。だから今回は特別に無償で協力してあげる。今回だけだからね」

「？ いいのか？ こんなチャンス滅多にないぞ？」

「ふふん。貴方が私に跪く様を見ただけでも十分の見返りよ」

腕を組んで鼻を高くするエマだが、アルベルトは特に気にする様子もない。

「そんなことでよいのならこの軽い頭などいくらでも下げるのだが

「？」

「やめてよね。貴方は王者なの。だから決してみだりに人に頭を下げては駄目」

「うむ。肝に銘じよう」

「で？ 何時行くの？ 今からでもいけるわよ？」

「いや、さすがに今日は飲みすぎた。明日、明日にでも頼もつかない？」

「はいはい。それじゃおやすみなさい」

そう言つとエマは姿を消し、やがてドアがひとりでに開き、バタンと閉じられる。

アルベルトは彼女がいつもどこで寝ているのか不思議に思いつつ、残りを一気に煽った。

55 | 進軍(後書き)

ここからしばらくお休みします。

ちよっと書き直さないといけないところがありまして・・・。

自由に修正、投稿できることがこんなにうれしいことだったなんて・・・。

「きつと生きていると信じていたぞ、リヨカ……」

ヘンリーは再び出会えた友にそう告げた。再会に顔を綻ばせる彼は、リヨカへと歩み寄ると、周りも憚らずに抱きしめる。

「よかった。鎖が千切れたのを見た時はもう絶望していたんだけど……」

リヨカはあの日の絶望を今も覚えていた。鎖を引くその頼りない抵抗、そして断絶されたその先……。けれど、今こうして触れている確かな実感。そして、鉄の匂いと血の香り。

「うむ、どうやら俺の乗ったタルはあまり頑丈でなかったみたいだな。気付いたらポートセルミ近くの浜辺に残骸と一緒に打ち上げられていた」

そういいながら豪快に笑うヘンリー。彼の悪運が成せる業なのだろうと、リヨカもつられて笑う。

「どうやらエマに助けられたみたいだな」

「エマ？ ああ、あのエルフの……」

「手を借りぬと言っておきながら結局助けられてしまったわけだ。俺もまだまだ甘い」

「今は？」

「俺のストーカーといったところか？」

「ストーカー？」

「ああ、ぞつこんらしいからな。はっはっは……」

ヘンリーが高笑いをしたと思うとその背後に光が集まりだし、白いローブ姿の女性が現れる。

「誰がぞつこんよ」

エマは透過魔法で隠れていたらしく、ヘンリーの頭を軽く小突く。「エマさん。よかった、無事だったんですね」

「私は別に教団に捕まっていたわけじゃないわ。むしろ貴方が無事

だったことのほうが驚きなんだけどね……」

腕を組みながら言い放つ彼女は、リヨカのように再会を喜ぶ様子はない。

「で、ヘンリー、君は今……」

リヨカは彼の左肩を見ながらそう言う。緑の二本線はラインハット国の紋章であり、その鎧に身を包むということは彼が国に戻ったことの証。問題は最近のラインハット国の噂。ついこないだまではオラクルベリーやアルパカの位置する西国に侵略しており、またリヨカの父に不名誉な濡れ衣を着せている。いくらヘンリーが生きていたとして、それはリヨカにとっては複雑なところだ。

「実のところ俺は今、ヘンリーではない。アルベルト・アインスを名乗っている」

「アルベルト？ アルベルトって、東国で有名な……」

「ま、偽名だ。あの国の中枢には俺を殺そうとした者がいるのだからな。正体を隠す必要があるからな」

「でもデルさんは？ いくらなんでもわかるんじゃないかい？」

「いや、いくらか男前の顔つきになったおかげで、公式な場所でもこれを被ることが赦されているんだ。まあデルに会うような場に出るほどの機会もないが、保険の意味だな」

ヘンリーはフルフェイスの兜を指でくるくる回しながら、顔に走る斜めの傷を見せる。

「傷ぐらい消せるって言ったのに残すっていうのよ。この人。顔だつてモシヤスで変えられるのに、どうして苦労したがるんだか？」

ふうとため息を漏らすエマ。

「そういうわけにもいかないんだよ」

ヘンリーも負けじとフンと鼻を鳴らす。

「俺は今、ラインハットの進撃隊の隊長を任されている。最近オラクルベリーに腕のたつ庸兵がいると聞いてな、その容貌がお前にそっくりだからエマに無理を言って送ってもらったのだが、まさか当人だとは思わなかった。リヨカ、俺とともに来い」

「来いって、ラインハットにかい？」

「ああ、俺に力を貸してほしい」

そう言いながら頭を下げるヘンリー。その様子にエマは驚いたように目を見開く。それはリヨカも同じで、慌てて彼を制する。

「待ってよ、ヘン……、アルベルト、僕はそんなこと……、それよりも、君が戦争を起こしているのかい？」

リヨカの戸惑う目にヘンリーは一瞬面食らった様子になる。そして少し考えたあと、頷いてから告げる。

「そうだな、俺が作戦、指揮を執っている」

一瞬目を細めた後、仕方なしに閉じて頷くヘンリーは、リヨカをまっすぐ見ない。

「じゃあ君がサンタローズを？ 父さんに罪を着せて進軍させたのか？」

「それは違う！」

激昂するリヨカにヘンリーも鋭く言う。

「すまん。いや、その時は俺もお前もあの地獄に居た」

ふうと息をつくヘンリー。彼としては母国が友人の父に不名誉を着せ、あまつさえ侵攻の理由にしたことは苦く思っているらしい。

リヨカもまた、逸る気持ちを抑えようと水を飲む。

「もし……もつと早くに俺が戻っていることができれば、なんとかでも止めていた」

「けれど……、サンタローズは……」

「他国に攻め入る理由がほしかったのだ。本来サンタローズ程度の田舎町を取る理由など無いから……。いや、こんなことを言ったところでラインハットの愚行に代わりはないのだが……」

「君は、人々を幸せにするんじゃないのかい？ なんで戦争なんて？」

「東国を安定させるためだ。今の状態では野放図に侵略を行い、共倒れになるのが目に見えている。それならばいっそのこと、強いラインハット国が支配するのが大多数の平穩に繋がる。不幸な民もで

るが、それ以上に幸福な民を増やすつもりだ。それが王者として人々の上に立つものの背負う業だ」

「けど……」

「リヨカよ、お前の気持ちはわかる。というか、お前の父に国王殺しの汚名を着せた国だ。今も侵略戦争を行っている以上、協力などできないのは当然だ。だが、東国を平定するのは今しかない」

「僕にはそんなこと……、それにもう……」

リヨカの中で固まりかけていた未来。それは小さく、つつましい幸せを直ぐ傍にいるあの人と共に過ごすこと。その一方でマリアはヘンリーの……。

「リヨカよ、お前は父の汚名を晴らしたくは無いのか？」

「え？」

静かな一言がリヨカの雑念を払う。

「俺が何を考えているか、わかるか？」

「わからない」

「俺は奪われたものを奪い返すつもりだ。国を奪い返す」

「ちよつとアルベルト!？」

エマは驚き声を荒げる。彼女は彼の内に秘めた野望を知ってはいるだろう。そして、それをみだりに口にすべきでないことも。どこに間者がいるかもしれないのだ。

「俺はリヨカを信じている」

「本当に貴方つてバカなのかもしれないわ……」

「話を戻すぞ。リヨカ、俺は国を取り戻す。その時は必ず貴様の父の不名誉を晴らす。これだけは約束する。しかし、お前はそれでいいのか？ お前には力がある。魔法でも単純な戦闘能力でもな。無いとすればそれは汚名を晴らすための機会だろう。それは俺が必ず作る。そつだとして、貴様は本当に何もせずにはいられるのか？」

「それは……どういう……」

「お前には父の汚名を晴らすことができるのだ」

「僕が父さんの……汚名を……」

「ああ、ラインハット国先王チップの死はパパス・ハイヴァニアによるものではないと証明するのは、お前の手でこそすべきではないか？」

父の汚名を晴らしたいということはリョカにとっても否定できない願望である。ヘンリーの提案がどれほど現実的なものかはわからないが、藁にすぎるような希望でも、もしあるのであれば掴みたいというのが本音。だが、リョカを囲む世界は、今はマリアのみであり、彼女は……？

「誰？」

エマが扉に駆け寄り、ドアを開ける。それと同時にマリアが倒れこむ。

「貴女、立ち聞きなんて本当に趣味が悪いわね」

「すみません、エマさん……」

立ち上がるマリアはヘンリーを見て、複雑な表情をしていた。

「マリア……そうか、君も無事だったのか……。よかった……」

ヘンリーは話も途中にして席を立つと、マリアに駆け寄り、その手を取る。

「マリア、君と離ればなれになって以来、ただの一日として君を想わぬ日はなかった。本当に無事でよかった……」

その手を振り払おうとするマリア。ヘンリーは衆人の目があるゆえの抵抗と笑い、そのまま抱き寄せ、彼女の顎を上向かせる。

「ヘンリー……だ、だ……め」

馴れた手つきでの唇の逢瀬を求めるヘンリー。しかし、マリアはそれを払いのけ、俯き加減に彼からそっと離れる。

リョカはただ、痛む胸と晴れやかな気持ちで視線を逸らした。

57 ラインハット、再訪

あくる日の朝、ルーラでオラクルベリーに戻ったりヨカは、借家にて荷造りをしていた。

留守にすることの多いリヨカの荷物はそれほど多くなく、また使いふるした鋼の昆などは別途支給すると言われ、質屋に入れた。

その他にもお金になりそうなものは全てゴールドに換え、台所のテーブルの上に置く。

これまでの傭兵としての給料もかなりの量であり、女一人がしばらく暮らすには十分な資産を残すことができた。

「……あ、あの……」

荷造りが終わりがけた時、マリアがそつと口を開く。

「なんだい？ マリア」

リヨカは務めて平静にそう応える。ただし視線は荷物に向けたまま、向き直る様子もない。

「私は……。いえ、リヨカさんはどうなさるつもりなんです？」

「どつって……」

「ですから、ヘンリーさんと一緒にラインハットへ行くつもりなんですか？」

「ああ、僕はやっぱり父さんの汚名を晴らしたい」

「だって、もし、もし失敗したらどうするんですか？ そうしたら

私はまた……、また一人に……」

「大丈夫。きつと上手くいくさ。僕らはあの地獄からも出てこれたんだ。だから……」

楽観的に言い放つリヨカだが、本当のところ、今居る締め付けられるような穏やかな牢獄から逃げ出したいのかもしれない。だからリヨカはマリアを数秒と見つめられずにいた。

「それとこれとは違いますわ。監視の目を盗むのと国一つ盗むなんて全然……全然違う……。きつと、きつと上手くいくはずなんて……」

…ありえない……。どうしてそんな見えないようなもの……。もつとこう、小さな幸せで満足できないんですか……」

その逃げを赦さぬマリアは彼の胸に飛び込み、潤んだ瞳を向ける。「マリア。僕も本当は自分や、守りたい大切な人と一緒に過ごせる程度の幸せだけで十分だと思うんだ。でも、僕もやっぱり奪われたものを取り返したい気持ちがあるんだ。それに、父さんとの約束、母さんを探すことはできそうにないし、それならせめて父さんの名誉だけでも取り返したい。だから僕は行く。暫く戻ってこれないと思うけど、その分のお金はあるよね？ ゴメン、マリア。けど、これは譲れないことなんだ。今のチャンスを逃したら、もうきつと二度と父さんの汚名を晴らすことはできないんだ、だから」

リヨカは彼女に深く頭を下げる。

「どうして、どうして……」

「ゴメン。もう行くね……」

リヨカは部屋を出た。

「お待ちせ……」

荷造りを終えたりヨカは、宿の外で待っていたヘンリーに声を掛ける。

彼のその鎧の紋章から街の人は遠巻きにそれを見ており、明らかに怯えていた。

「マリアは……」

ヘンリーは彼の後ろの彼女がいないことを不思議がる。

「この街に居たほうが安全だと思うし、君が王になってから迎えに来るといい」

「そうか……。すまないな……」

ヘンリーは何か言いたげな様子だったが唇を噛みそれを飲み込む。

「よし、行くっ……」

二人は頷き合うと、エマの待つ人気のない路地へと向かった……。

ラインハット軍による東国統一作戦。

残るは北東の山脈に囲まれるブランカ国のみ。

レイクバニアの砦を失ったブランカ軍の指揮官は我先にと敗走を始め、次第に城を擁するブランカの城下町一つにまで追い詰められることとなる。とはいえ城下町もまた難関であり、小手先の戦術で落とすことなどできず、再び膠着状態へと陥った。

現在、ブランカ国侵攻はアルベルトの率いる「双頭の蛇」が主体となっている。

庸兵から正規軍の長となったアルベルト・アインス。異例の抜擢には何かと噂が付きまとい、儀礼の席にしても兜をとらないことから彼を胡乱じるものも多い。

彼がそのフルフェイスの兜を常に装備しているのは戦場にて受けた傷跡が故。額から斜めに走る傷を当人が「武人の恥」と語り、頑なに隠している。

国王デールに代わり執政をとるアルミナ王女は、その有能さから特に気にする様子もなく、彼に正規軍の隊長の任を与えたのだった。ブランカはボンモールと違い山に囲まれた難攻不落の城。これまで何度も侵攻戦が行われたが、結局のところ頓挫してしまった。

そこを任されたアルベルトが提案したのが、ブランカ城下町陥落作戦「ドーナツ」。

城下町近くにて簡易の砦郡にて包囲を固め、水面下で重臣の切り崩しを行い、陸路・水路の断絶による兵糧攻め、投降する難民の受け入れなどで吸い上げを行っている。

ドーナツのように内側を空洞にするというものだが、効果はいまひとつ上がっていない。

その消耗戦に、アルベルトを疎く思う者は冷ややかにほくそ笑ん

で
いた。

58 | 揚げたての菓子

リヨカはブランカ国近くの野営砦「オールドファッシュョン」にて、簡単な説明を受けていた。

砦にはいくつものテントと大きな鍋、燃料となる蒔きとコークス。それに食料が詰め込まれており、今日も陸路にて追加が行われていた。

まさかこのまま兵糧攻めで落とすつもりだとすれば、それはのんきを通り越して莫迦としか言いようが無い。だが、ヘンリーは特に気にする様子もなく、その報告を受けていた。

「僕のまったく知らない世界だ。けど、今更僕に何か手伝えるようなことは……」

大方理解したりヨカだが、兵隊の欠員なら正規軍を増員するべきで、今更一人増やす意味がわからない。それに、大半のことは堅物の男が一人でこなし、ヘンリーはといえば、優雅にお茶を飲んだり、エマとブラックジャックに興じていたりといったのんきな様子。

「うむ。お前にはもつと重要な仕事があるからな」

「ああ。それはやっぱり……」

女王暗殺……。

でかかった言葉をリヨカは飲み込む。彼の正体を知られることも憚れるが、それ以上に国家転覆を図る計画などおいそれと口にすべきではない。

正直なところ、ラインハット国の情勢は安定していないことは誰の眼にも明らかだった。

アルベルト登場までのアルミナによる野放図な侵略により国内は疲弊しており、新たな侵略戦争の出費はボンモール国からの賠償金による自転車操業によるもの。

内外問わず国王、女王への不満は高まっており、一部利益に興じるものへの打壊しに目を逸らさせられているのが現状だった。

そしてもう一つ出始めている動き。それはヘンリー第一王子の凱旋の噂。

四年前に出奔したヘンリー第一王子は、実は生きている。

幼き頃から次期王としての自覚を持ち、帝王学を学んでは先人を平伏させ、政治学に明るく、治世に置いては自ら剣を振るう胆力の持ち主。

暗愚とされる妾の子、デール第二王子を討ち、その時こそラインハットによる真の東国統一がなされる。それはヘンリーによるクーデターを意味し、日に日に庶民から渴望されてきているのだ。

東国事情に疎い……というよりは、意識的に耳を塞いでいたリヨカにとつては初耳だった。

「アルベルト隊長！」

ノックもせずに兵隊が駆け込んでくる。

「何事だ、オットー」

「はっ……、準備が整いました」

「そうか、ならば予定通りに動け……」

ヘンリーは一瞬考え込んだあと、立ち上がり、兜を拾い上げる。

「リヨカよ、俺に続け」

リヨカもそれに続き支給された装備を取る。しかし、左肩に走る緑の二本線を見て、そのままの軽装でヘンリーを追った。

+
+

日も沈んだころ、ブランカ国と対峙しているラインハット国の砦の間で、火の手が上がった。

膠着状態であった戦場から突然響いてきた馬の嘶き、切り結ぶ剣の音、兵士達の声……。

城下町の人々は皆、戦が始まったことに怯えていた。

「ラインハット軍が攻めてきたぞ！ もうそこまで迫ってきている。」

皆逃げる！」

「ブランカ国営軍が敗走を始めたみたいだ！ このままだと、皆殺しにされる！」

「敵の総司令はレイクバニア砦を落としたアルベルトだ！」

「百戦將軍のアルベルトが相手じゃ敵わない！」

街を駆ける馬の音、不安を煽る兵士の声。続いて街の一角から火の手が上がる。

「ラインハット軍が火をつけた。逃げる、このままじゃ煙に巻かれるぞ！」

夕闇を不気味な赤で揺らめかせるそれに、締め切った窓の隙間から外を見ていたブランカ民、ギル・オウルは目を見張った。

レイクバニア砦が落とされた頃から時間の問題とされてきたブランカ国の防衛ライン。

急造の四つの砦に囲まれ、日々陸運から何かを運び入れていた様子が井戸端で囁かれていた。

つい先日、大軍が追加されたらしい。

東国の残る拠点はブランカ城のみ。皆殺しをもって制圧するつもりだろう。

英雄を名乗るアルベルトがそんなことを？ 彼はエンドールを無血開城させたじゃないか？

だが、後ろにいるのはあのアルミナだ。人の生き血を啜って生きる女が、いつまでも待つかよ。

このままじゃ殺されるのかな……。逃げたほうがいいかな？ 噂じゃ大臣達も逃げてるらしいぞ。ほら、財務副大臣の家は

もぬけの空で空き巣に入られたそうじゃないか？

なんだって？ 王族達まで逃げ出す準備をしてるってのかよ！

砦の設置後にまことしやかに囁かれた噂が、ギルの脳裏に浮かぶ。石畳を走る音がした。

ギルはそれをみた。

紫のターバンを巻いた男が風呂敷包みを抱え、路地裏へと走る。

夜逃げだろうか？ 誰かの手を引き、なんども周囲を伺い、馬の姿を見た途端、物陰に隠れる。

これは本格的にヤバイぞ……。

ギルは部屋の奥で震えている妻を呼び、荷物を抱えてアパートを出た。

性格的に破壊や暴力の似合わないリョカは、ヘンリーに言われて街中を疾走していた。

風呂敷包みを背負い、アパートの周りで台詞を叫び、ラインハット国兵士と鬼ごっこをすること。もし、街を出ようとしている人を見かけたら、脱出ルートを教えて砦に誘導する。双頭の蛇の兵士達もまた、それを担っていた。

そんな彼らの後ろ姿を見て不安に駆られた国民は、荷物片手にこそこそと町を出る。

安全な道だとそのかさされ、ついた先はラインハット国の砦前。

呆然としながらも、重装鎧に身を固める兵士達に囲まれては抵抗する気概も薄れ、言われるままにテントの集落へと連れて行かれる。

そこでは氏名と家族構成の調書をとられ、粥の一杯を振舞われた。怒りと混乱、困惑を抱えるブランカ民だが、極度の緊張と、寒さにかじかむ手をかゆくさせる椀の暖かさに、暫くまともな思考がで

きずにいた。

それでも遠くに見える赤く染まるブランカ国の姿に、戦争の敗北だけは感じていた。

徐々に火の手が広がるブランカ国城下町。本来石作りの建築物が多いはずの東国において、これほどまでに火の手が上がるはずはなかった。

それもそのはず、大半は見せ掛けの火事であり、路地裏で燃やす枯れ木が原因だ。

それでも煙にいぶされ、赤い炎を見ると、その真贋を問う暇もなく、民衆は騙される。

彼らは手にせめてもの財産と縁者を連れ立つ。

ブランカ国兵士は人波に矛を向けるも、そうそう止まるものではなく、小競り合いが起こる。

街を八周近く走り回ったところでアルベルトに合流を果たしたりヨカ。オットーから竹筒の水筒を二つもらい、一つは頭から被り、もう一つをごくごくと飲み下す。

「ご苦労様」

「ふう……まったく、人使いが粗いよ」

「そういうな。ま、これで侵攻作戦の大詰めといったところだな」

「アルベルト隊長！ イーストシエル、準備完了いたしました」

準備の整った正規兵の幾人が追いつき、ヘンリーに傳く。

「同じく、ポン・デ・リング、完了いたしました」

「ヴィアナブロード、若干の小競り合いがありました。作戦に支障の無い範囲に留まります」

「うむ。とにかく砦に明かりを点せ……。今日は眠れない夜になるだろうからな」

「はっ！」

短く応えると皆散り散りに走りだし、路地裏で三色の火矢を放つ。

ヘンリーも鉄の弾き合う音とその匂いの漂う中、高台を目指す。

「エマ、いるのだろう？　これが俺の侵略作戦だ」

ふわっと光が集まると、何時から居たのかエマが姿を現す。あながち彼のストーカーというのは間違っていないのかもしれない。

「まったく意固地なんだから。どうしてそんなに私の力を借りたくないわけ？」

「貴様が俺の子分になるといつのならば考えてやろう」

呆れた様子のエマに、ヘンリーはフンと笑って応えた。

++

周囲を一望できる一際高い砦、「クーヘン」に、三人はやってきた。

既に魔法使いの部隊が待機しており、印を組みつつ「レミーラ」を詠唱していた。

ヘンリーは松明を点し、炎に燃えるブランカを見る。そして東にそびえるイーストシエルを向き、松明が大きく円を描くのを確認する。ついで西にあるポン・デ・リングが描く円を見る。最後にブランカ国に隣接しているヴィアナブロードの円を確認し、松明の背後に立つ。

「よし、始めるぞ……」

ヘンリーの声に魔法使い達は光の精霊を集め「レミーラ」と唱える。するとヘンリーの背後からまばゆい光が放たれる。

十数人による集光魔法は辺りを真昼のように照らし、難民達の視線を奪う。

「ブランカの民よ！　うるたえずによく聞け！　我らラインハット国軍は難民を受け入れる準備をしている！」

燐とした声が響く。混乱と焦燥の避難民達はざわめきながら、その声の方、光り輝くクーヘン砦の頂上を見る。

闇夜に一点の輝きを点す者。まるでその声の主こそが光を放つか

のような、「太陽の子レビ」を彷彿させるほどに力強く、明らかな存在感を示す。結果、逃げ惑う人々はしばし言葉を、冷静な思考を失う。

「我らラインハット国軍の求めるものは東国の統一だ。徒に戦火を広げるつもりはない。しかるに、今こうして貴様らの土地を、財産を、愛する者を奪う炎は誰によるものか？ それはブランカの国王によるものだ！」

再びざわめきだす難民達。彼らは自分達に矛を向け、自由な往来を奪うラインハット国軍の言うことは、にわかには信じられない。

「疑うのももつともだ。しかし見るといい！ 貴様らの国を。何故、王宮の明かりが消えている？ 何故、街が燃えている？ 彼らは自力での消火を諦め、あまつさえ、混乱に乗じて逃げようとしているのだ！ 彼ら、国王が愛すべき、守るべき国民を裏切ったからだ」

国王の裏切り、逃亡という言葉に罵声、怒声上がる。それは徐々に伝播していき、難民同士伺い合い、疑惑の目を持つ。

「うるたえるな！」

そして再び力強い声が響く。十数メートルと離れた場所にあり、どうしてその声が届くのか、それほどまでの音量など、もはや人間の声帯には不可能のはず。そして後光に照らされる黒いシルエットはその存在を小さな人間から天照す神にすら見せた。

「今、我らラインハット国により、ブランカは併合されるであろう。しかし、それは滅亡ではない。ともに、東国の発展のために、歩むための同化だ。我らは国を違えて、地図の上の線に区切られながら睨み合うべき時ではないのだ」

その言葉に平伏すものが出始めた頃、ヘンリーの背後で一瞬青い光が見え、次の瞬間に三つの砦が輝き始める。

「今、我らはブランカの民を愛すべき、共に歩むべく同胞として受け入れる準備がある。炎に焼かれ、国を追われた者達よ、光を求め、くるがよい……」

そう告げたところで光が消える。代わりに松明を掲げた兵士達が

砦までの道を作り、焼き出された人々を導く。その先導を切るのは、事前に国を捨てたブランカ民であり、全ては打ち合わせ通り。わけもわからずにサクラに同調するものが出始めた頃、流れが決まる。

統率の取れた行動にブランカの人々は従い始め、その動きを制そうとしていたブランカ兵もついには矛を捨てる。

この夜、ブランカの城下町は王族を残し、もぬけの空となる。まるでドーナツがごとく。

それらが全て、アルベルト・アインス ヘンリー・ラインハルトによる策であるなどと、知る由もなく……。

勝利の凱旋を果たしたアルベルトへの賞賛は、惜しまれることが無かった。

東夷隊、とりわけ彼が率いる双頭の蛇には、老若男女問わず声援が送られ、アルベルトもそれに応えて手を振っていた。

この四年間にわたる戦争の勝利と終結はラインハット国民を沸かせたが、それは一時のこと。太閤に居座るアルミナはこの度の戦勝に勢いに乗り、西進をほのめかしている。

現状、ケイン老が東国の平定と融和における執務を理由にそれを留めているが、それが何時まで保つかは解らない。

「で、いつまでその被り物をしているつもりなんじゃ？」

執務室にてカード片手に顔を歪めるのは時の人、アルベルトだった。

「外しているだろう？」

カードを切るも、期待値を大幅に超える数字でバースト。

「そういう意味ではないわい。さっさとあの女狐をなんとかせんかい」

「ふむ。そうしたいのは山々だが、何かおかしくないか？」

「何が？」

「いや、アルミナの雰囲気さ」

「さあ？ ワシ、不能になってからは年増の女はどれも同じに見えるんでな」

「まったくこのボケ老人は……。俺の勘違い……。にしてはなあ……」

ブランカ国併合に至り、アルミナとデルによる調印式にアルベルトは遠巻きながら出席した。久しぶりに見るデルはやつれたように見えたが、自分の意思で歩いていることに、文字通りの操り人形となったわけでは無いと安堵した。

だが、その隣に傅く存在、アルミナにかなりの違和感を覚えたのも事実。

彼女のその変わらぬ美しさもさることながら、禍々しさがにじみ出るかのような雰囲気、アルベルトはフルフェイスの下で気圧された。

「ワシもお前が居ない間、お役御免でオラクルベリーに居たしのお。もともとあの女と顔合わせておらんよ」

「なるほどな。以前を知らぬとなればその違いがわかるはずがないか……」

アルベルトが腕を組み、長考をはじめるとノックの音がした。

「アルベルト殿、リヨカ殿を連れて来ました……」

リヨカと頬のこけた鋭い目の男がやってくる。彼の名はオットー・シュティン。かつてレイクバニアの指揮官を務めていた男だった。

その後、その有能さを買われ、ラインハット国に任官し、現在はケイン老の補佐を行っている。

「リヨカ、やはり着てはくれないか……」

旅人の服を纏ったリヨカの姿にアルベルトは嘆息する。

「ごめん。僕はああいう正装っていうのになれてなくて……」

「うむ。しょうがあるまい、お前にはそう簡単に譲れぬ思いがあるだろうしな……」

「でも君の言った日にはちゃんと着てくるから……。なんとなく窮屈でさ」

「ふん。俺もだ……」

そう言っただけ笑い合う二人。その背後でトランプが散らばる音がした。

「お主……、まさか……、パパス殿の？」

目を見開いたケイン老に二人は後ずさる。今まさに大往生とでもいふべき驚愕の表情なのだから。

「ああ、そうだ。紹介していなかったな……。うむ。お前の言うとおりだが、何故知っている？」

「えつと、初めてお会いしたような……」

「ふふ、覚えておらぬも仕方あるまい……。さすがにワシも老いたからな……」

「貴様は俺が生まれた頃から妖怪だろう？」

「黙らっしゃい。……そうじゃな。あのキラールパンサーは元気かな？」

「キラールパンサー……。ああ、貴方はあの時の……」

ようやく思い出したリョカの表情は複雑だった。三年前、パパスをラインハット国に召集した官僚こそ、このケイン老なのだ。

「今更謝つたところでしょうのないことだが……、この老いばれ、貴殿の父とは先代の王と等しく親しくさせて頂いたものだ……」

がつくりと肩を落とすケイン老は床にひれ伏し、深く頭を垂れる。「や、辞めてください。そんなことされても僕は……」

リョカの心は複雑だった。彼もまた欺かれた者なのだから。

「ワシはパパス殿がチップを殺めたなどと信じはしない。あの女狐こそが黒幕なのだから……」

リョカに促され立ち上がるケイン老。リョカには父の名誉を信じてくれる人がいるだけでも心強かった。

「おいボケ老人。誰が聞いているのか解らんだ。おいそれと軽口を叩くな」

「ふふ、弟子に尻を叩かれるとはワシもモウロクしたものじゃわい。だが、リョカと申したな。もし、ワシにできることがあつたら何でも言つてほしい。お主の父に対する不義理を拭きたい」

「僕は、別に……。父の無念を晴らせればそれで……」

もし母の行方を知っているのならそれを……。リョカはそれを口ごもり、言葉を濁した。

日に日に薄まる勝利の余韻。代わりに高まるアルミナへの不満。

そして沸き起こるヘンリー王子凱旋の噂。最近ではアルベルトこそがヘンリーなのではないかと噂されていた。

その理由の一つが特異な緑の髪。ラインハット地方でこそ珍しくない髪質で、彼の出自がアルパカ方面となっていることだ。

パパスに誘拐された王子はサンタローズからアルパカに連れ去られ、そこで折を見て脱出した。その後は苦難の日々を経て、祖国の危機に参上した。

まさに英雄譚に相応しい展開に、街ではいたるところでそんな噂が飛び交った。

それらを操るのは当然アルベルト・アインスであり、彼は機会を待っていた。

「街では貴方の噂で持ちきりよ？ アルベルト……」

ラインハット国兵舎に用意させた一室で、アルベルトは安楽椅子を軋ませながらエマの報告を聞いていた。

「複雑な気分です。貴方が仕掛けた情報戦に敗北を喫したブランカ国の私が、まさに同じことをして貴方を助けるのですから……」

二種類のポットを用意して紅茶を淹れるオットー。爽やかなハーブの香りのするものをアルベルトとエマに、リョカと自分には独特の臭いのする紅茶を注ぐ。

「ありがとうございます。バニアティなんて久しぶりです……」

そうは言うものの、リョカはあまり嬉しそうではない。懐かしさと嗜好は別にあるというわけだろう。

「失礼、リョカさんはグランバニアの方と思ひまして……」

それに気付いたオットーは急いで別のカップを温め、やや濃くなつたハーブティを注ぐ。

「え？ なんてわかるんです？」

香りが良く、すつきりする喉越しを堪能しつつ、リョカはふと出身について尋ねられたことに驚く。

「お名前を聞けば、ある程度は……」

「僕はそういうのあまり詳しくなくて、名前で出身とかわかるんですね」

幼い頃父と共に旅暮らしであったリヨカが、大陸によって変わる名前の韻に疎くなるのは当然かもしれない。会う人、会う人で皆個性的な名前を持っている程度にしか思わなかったから。

「へえ……グランバニアか……。僕の父さんもその人だったのかな……」

そう言いながらお茶請けのスコーンを一口。それが懐かしい味であったことにさらに驚きを隠せない。

「これ、サンチヨが作るスコーンに味がすっごい似てる……」

「……リヨカ殿は……」

その言葉に今度は逆にオットーが驚く番だった。だが、アルベルトはそれに気付き、ひとさし指を立てる。目ざといオットーはそれを横目に、いつもの鉄面皮を被る。

「で、貴方は何時決起するのかしら？ 十分に時間は経ったと思うけど？」

そういつてスコーンを一口。最近のエマはアルベルトの作戦を物語の続きを尋ねるかのように促す。

「うむ。俺が立つというよりは、むしろあちらが仕掛けてくるだろう。十分に餌は蒔いてあるから……」

「餌？」

「ああ、奴らの目的がラインハットを乗っ取るつもりなら、英雄は邪魔でしかないからな……」

???

ラインハット城の一段と豪華な部屋にて、男が傳っていた。

天蓋つきのベッドに横になり、美しい裸の美女に背中をマッサー

ジさせる者こそ、ラインハット国の影の支配者、アルミナであった。

「して、その噂は本当なのかしら？」

「ええ、アルベルト・アインストは仮の姿、奴は四年前に出奔したヘンリー・ラインハルト王子に他ありません」

「ふむ……。そうになると、やっぱりだわね……。教団の導くラインハットを掠め取られやしないか心配だわ……」

アルミナは立ち上がり、侍女に肌着を用意させる。

「しかるべきご判断を……。ぜひ私めに彼奴の成敗を……」

かつてレイクバニア砦にてその任を下ろされた士官は、アルミナを伺いながらほくそえむ。彼女ならきつと正統なる王者、ヘンリーの存在を疎むだろう。何か理由を付け、廃するに決まっている。その時こそ逆恨みを晴らすときと、男は皮算用をしていた。

「そうね……。でもその前に……」

アルミナは男の前に歩み寄り、その顔を上げさせる。そして……、「真実を知っている奴を生かしくわけにはいかねんだよ……」

その容姿からは似つかわしくない鈍い声が出た後、鋭い爪が男を穿ち、悲鳴を上げさせる隙も与えず、絶命させた。

「この生ゴミを……。そっちのも飽きたからついでに片付けておけ……」

アルミナは侍女にそう命令すると、眠たそうに欠伸をしながら部屋を出る。その背後では侍女が怯えきつた様子で失禁した裸の美女の首を半回転させ、馴れた手つきで麻袋にしまっていた……。

61 | 動き始めるモノ

月明かりが辺りを照らす頃、リヨカは兵舎の近くで、空に浮かぶ月を眺めていた。

廊下で拾った小さなメダルを月に翳し、片目を瞑って光を遮り、網膜に残る余韻に浸る。それほど楽しいことでもないが、眠れない夜、他に暇つぶしもないのでそんなことをしていた。

昼間に飲んだバナアティのせいか、妙に目が冴える。そして、オットーの言葉が頭を過ぎる。

これまで父との旅で、自分がどの出身なのかなど考えたことが無かった。気付いたときには父に手を引かれており、出会う人、色々様々な物に見とれる合間、ほとんど気に留めることも無かったのだ。

けれど自分の名前、リヨカ・ハイバナアがグランバナア地方の姓であると言われたことで、それが変わってきた。

長い旅路の中、グランバナア地方に赴いたことは無い。サラボナ地方、ラインハット地方、アルパカ、テルパドル地方、世界のほとんどもを旅してきたと行って良いリヨカだが、なぜかグランバナア方面の記憶が無い。

もしかしたら、母さんもそっちのほうなのかな？ マーサって名前もグランバナアの方なのかな？

手がかりとなりえる事柄にリヨカの気持ちさがわめいた。まるで秋に向かう風が色を変えた草木を揺らすように。

「ちょっといいかしら？」

不意に光が集まりだす。ローブ姿の女性が現れ、リヨカを見下ろす。

あまり機嫌の良さそうではない声に、リヨカはたじろぐ。

「何かご用ですか？」

リヨカはエマのことが苦手だった。もともと再会を喜び分かち合

うほどの仲でもないわけだが、最近は妙に敵意をむき出しにしてく
る彼女の雰囲気を感じてのことだ。

何か嫌われることをしたかといえ、ここ一年間顔を合わせるこ
とすらなかったので心当たりも無い。リヨカにはどうしても腑に落
ちないことであつた。

「貴方、どうするつもり？」

「どうつて？ えっと、何についてですか？」

「部下になるの？ ならないの？」

「……僕はヘンリーの友達です。部下とかそういう関係じゃない」
ぶしつけな質問にリヨカは眉を顰める。以前友人を助けてもらつ
た関係ではあるが、だからといってその横柄な態度や、真意の見え
ない質問に気分を良くできるほどとんでもない。

「そう。ならさっさとラインハットから出て行きなさい。マリヤを
連れて」

「は？」

唐突に出たマリヤの名前に首を傾げるリヨカ。

「貴方がいると……、いえ、正確にはあの女がいるのはマイナスな
のよ」

「マリヤはヘンリーの大切な人だ。僕がどうこうするわけにはいか
ない。それにマイナスってどういう意味ですか？」

「ヘンリーは王者になる器なの。その後としてマリヤでは役に不足
しているわ。わかるでしょ？」

「彼女はステキな女性だ」

「そうね。でもそれは庶政の妻としての意味でしょ？ 王者には王
者に相応しい后が必要なのよ」

「僕にはわかりませんが、たとえそうであつたとしても僕がマリ
ヤを連れて行く理由にはならない」

マリヤがかつてヘンリーと恋仲にあり、そしてヘンリーもまた彼
女を未だに愛している。ならばその行き着く先は、互いを伴侶とし
て、つまり結婚すること。

ヘンリーがラインハットに戻るとすれば、それはマリアが王女となることであり、ここ一年のリヨカとの貧しい暮らしとは比べものにならない幸せが待っているはず……。

リヨカはそう考えていた。

「貴方、彼女と一年一緒にいたのでしょ？ 寝食共にして、それで何も思わないわけ？ ありえないわ」

意外そうに言うエマに、リヨカは口ごもる。彼とて、この一年を振り返れば、貧しいけれどささやかな幸福があったのも事実。彼女は彼にとっても自分にとっても輝いて見えた。

「貴方はマリアを愛している。だから共にいた」

「僕は……、ヘンリーの代わりにマリアを守る必要があった」

「それは嘘。彼女には修道女になる選択肢もあった。けれど貴方は自分の傍に置いた。それはどうして？ 生きているか判らないヘンリーのために？ 詭弁ね。貴方はマリアと一緒に居たかったのよ。それは彼女を愛していたから。邪魔なヘンリーがいなくなつて、二人で夫婦ごっこ。そうでしょ？」

「僕は、違う……。マリアを、マリアは好きだが、そうじゃない……」

口では否定するものの、リヨカはエマを見ない。彼女を見れば気持ちが悪くなる。アルパカの夜に感じた喪失感を伴う悔しさが蘇りそうに怖い。そして、彼女の誘いに乗りそうに……。

「……マリアはパン屋の受付をしながら貴方の帰りを待っていたわね。貴方が傷ついて帰ってこないか、すごく心配してた。そうよね、彼女にとって貴方は頼れるべき理想的な男だもの。強くて優しく、絶対に自分を見捨てたりしない」

内容こそ賛美に聞こえるが、口調はどこかしら含み笑がある。

「あの日、マリアは貴方に何を求めていたのかしらね？ 夜遅くに男の寝所を伺うなんて……ね？」

「エマ!？」

激昂したリヨカは掴みかかる勢いで彼女を睨む。しかし、次の瞬

間には光が集まりだし、その姿を隠す。

「もし……、貴方がマリアを望むなら私の名を呼びなさい。どこへでも好きな街へと運んであげるわ……」

ふわつと巻き上がる草花。リヨカは苛立つものを感じながら、寝所へと戻る。

何故、エマがマリアと自分の暮らしを知っているかなど気に留めることもなく……。

??

城下町の警備に格下げされたトムは、共に降格されたはずの同僚の姿が最近見えないことを不思議がっていた。

ついこないだまではしつこくアルベルトについて聞かれていたので、得意になつて話してしまった。

カエルの話からお城の探検など、自身が手を焼いたことを今は昔のように語ったものだった。それらは全てあくまでもアルベルトとして語ったつもりだが、聞く人が聞けば誰なのかはまるわかりな話。最近ではアルベルトの話が聞きたがる子供達にまでその話をしてしまい、お城の女中にまで笑われていた。

「トム……、トム・エウード……」

今日も一日仕事を終えた彼が兵舎で明日に供えて寝ようとしたとき、声がした。

「はあ……」

生返事をしながら、戸を開けるトム。するとそこには、

「王子……。どうしてここに？」

目深に被ったフードと隙間から見えるこけた頬。生気の無い唇からは小さいけれど、聞きなれた声が聞こえる。

「こんな時間にすまないけれど、頼みがあるんだ……」

周囲を伺い、フードを脱ぐ。短く刈りそろえられた金髪と、優しいような瞳。その端正な顔つきは、西国、東国はおろか、ラインハット国民からも疎まれるもの。デール・ラインハルトのものであった。「はい、王子の頼みとあらば、どこへでも……」

だが、トムにしてみれば、幼少の頃から仕えてきた王子。年が近いということから従者というか、兄からは馬車馬のごとく使われたもので、彼は第二の子分だ。家庭教師から脱走した二人の捜索、探検ごっこに兵隊ごっこ、魔法の練習台にさせられたりと様々。極めつけは寢所にカエルを投げ入れられたこと。換えのシーツを用立ててくれたのは彼が兄を嗜めてくれたおかげでなんとかなった。とにかくこの二人の兄弟には、思い出が尽きない。

世間が暗愚と言えど、彼にとっては手のかかる弟のような存在でもあった。

トムはデールを招き入れると、周囲を伺ってから鍵を掛け、窓とカーテンを閉める。

「一体なんの御用で？」

「うん。最近、アルベルト・アインスという兵士がいると聞いた。君は彼と親しいらしいじゃないか？ なんでも、寢所にカエルを入れられたとか……」

「え？ ええ……まあ」

「それはもしかして……」

ラインハット国の国教は光の教団の教え。四年前、デールが即位してからの決まりごとだった。

国民全てが入信というわけではないが、帰依することで税金の優遇、任官時の必須項目などがあり、貧しい者の大半はそれに従っていた。

一躍時の人となったアルベルトもまた例外ではなく、ラインハット国の師団長として任命されるにあたり、強く入信を求められていた。

兵舎の一室にて、アルベルトは椅子にふんぞり返っていた。

オットーは代わらずの鉄面皮で、リヨカはしきりに周囲を気にしている。

「……ふん、既に入信済みなのだがな」

下士官からの伝令を受け、アルベルトは皮肉に口元を歪める。

あの三年間の地獄の日々を思い出せば、今すぐにもそれを破り捨てたいもの。だが、入信に当たっての洗礼で、アルミナが同席するとの報も受けた。

暗殺の機会ならいくらもある。だが、それでは四年前のチップ王の死を髣髴させ、ラインハット王家の闇となりかねない。アルベルトがヘンリー第一王子として凱旋するには、光のあたる王者としての舞台が必要なのだ。そのため、今回の洗礼の儀は絶好のチャンスといえた。

衆人環視の中、アルベルトが正体を名乗り、逆賊を糾弾する。戦争の終結と圧政からの開放。全ては彼の描く英雄物語の一節だ。

「この機会こそ千載一遇のチャンスだろうか？ それとも、あるいは……？」

アルベルトは立ち上がり、暫く悩んだあと、自らが纏っていたマントを彼の肩にかける。

「リヨカ、俺は奴を討ち、お前の父の汚名を晴らす」

「アルベルト、わかったよ……」

リヨカは力強く頷き応えるが、その胸中ではエマの言葉が渦巻き、友の視線が痛かった。

??

ラインハット城、地下の洞窟。かつて竜の神がいたとされた時代から存在したもので、初代リース・ラインハルトが挙党するに至った地である。

かつてはある秘宝を保管していた遺跡であり、二度の地盤沈下、大地震にも耐えた。その地盤の強さから城が構えられたのだ。有事の際の緊急避難場所としても、有用であった。

今はお城の下水設備という認識でしかない。たまに風雨を凌ぐと浮浪者がたむろするぐらいだった。

アルベルトの光の教団への帰依。その一大イベントにデールは呼ばれなかった。いくら傀儡とはいえ王は王。これまでの儀礼的な式典には必ず参列させられてきたデールにとって、今回のことは別の意味が透けていた。

表向きには「たかが一兵士」の帰依。けれど、王女が参列する式典。それもあの違和感のあるアルミナだ。となれば、それはつまり……。

一方で今回のことで、彼への監視の目は緩くなっていた。とすれば、それは行動を起こすには絶好の機会。

デールはかつて兄が使っていた部屋に閉じこもると、椅子をずらし、そこから……。

??

城を抜け出したデールはトムを従えて、お堀に小船を出した。棧橋に隠れた入り口から奥へと向かう二人。途中、船は見つからないようにしつかり固定しておく。手探りで歩きながら、恭しい台座に向かう。一段小高くなったそこにはスイッチがあり、それを押すと奥の壁が開く。以前、搜索に疲れたとき、一休みにと腰をかけたときに偶然見つけたのだ。

この先に何かがあるのか、それを確かめるためだ。

二年前のことだった。

昨日まではデールにのみ優しくかった母が、突然変わったのだ。

表面的な態度こそこれまでとそう変わらなかつたが、彼を見る雰囲気には明らかな侮蔑があつた。

そして、雨の夜、女の啜りなく声がどこからか聞こえてくるようになったのだ。

一時は侍女達の噂になつたが、地下下水道への道が嚴重に管理されてからは、口外を禁じられた。

時折、アルミナが侍女を連れ立ってお城のどこかへ消えてしまうという噂があり、やはりそれも口外を禁じられた。

彼女が何かをするときは誰も部屋から出てはいけない。そんな決まりまで出来てしまつたが、それがデールの持つ不信感の確証ともなつた。

もちろん、彼もまた部屋から出てはいけないという決まりを守る必要がある。王とはいえ傀儡でしかなく、例の紫のローブの男が本気になれば吹いて消される命なのだ。

けれど、その程度の侮られた存在感故、彼が寢所を抜け出したことを見咎められることもない。

相手が自分を侮っているのであれば、それに乗るのもまたよし。頼みもしないで手加減したとして、勝負は勝負なのだ。

かつてケインに言われたときは理解できなかった文句も、今は少

しわかるようになっていた。

黴の匂いと湿気の漂う地下道。明かりは松明だけという頼りないもので、たまに光につられてドラキーやバブルスライムがやってくることもあった。

とはいえ、彼らは侵入者にはめもくれず、外の匂いを辿って去って行く。

「一体何があるんだろう……」

「さあ……。そもそもお城の地下にこんな場所があったなんて知りませんでしたし……」

「ここは僕も兄上も知らなかった。けど、母上がどこかへ行くとしたら、ここしかないんだ。少なくとも、何か関係があるはず」

「ええ……」

アレを母と呼ぶべきか迷う。そもそも自分の想像通りだとして、母は生きているのだろうか？ もし既に廃されていたとするなら、その証拠を手にしたい。兄に伝えることが出来れば、賢い彼のことだからきつと何か策を講じてくれるだろう。

「ふふ……」

未だ兄に頼りたがる甘ったれた自分を嗤いつつ、それでも出来ることのため、デールは先を急いだ。

62 | 調査（後書き）

追加された部分です。

63 | 偽アルミナ

英雄の帰依という一大イベントに際し、兵舎から教会までの道にはたくさんのお客が詰め掛けていた。ただ、名ばかりとはいえ、デール王がいないという異例の式でもあった。

ラインハット正教会。今ではすっかり光の教団のものへと様変わりしており、時の眠り子ルビスを祭るものは全て取り外されていた。光の教団では光を放つ炎もまた信仰の対象であり、赤い胴衣を纏った僧が大きな杯を担ぎ、そこに火が点されるといふ象がいくつも見られる。ただ、その僧は人間というにはやや異質であり、黒一色の瞳は魔物を彷彿させる不気味さがあつた。

教会内には司祭を中心にアルミナとその従者が壇上に立ち、洗礼を受けるアルベルトと、腹心の部下という触れ込みのリヨカを見下ろす。さらに、オットーや、親アルベルドの兵隊、双頭の蛇の参列も許可されていた。

「汝、アルベルト・アインスは光の加護に包まれるであろう……、汝には死後の救済と、輪廻からの解脱が赦され、光の国へ導かれんことを……」

司祭はアルベルトとその腹心の部下達を前に「イブールの本」と呼ばれる経典を持ち、洗礼の項目を読み上げる。

そのありがたい教義を右から左に流し、アルベルトは状況を確認する。

目の前に居るアルミナは、あの禍々しいアルミナ。列席する来賓に紛れる、殺気を纏う者。

おそらく彼女の目的はアルベルトの命だろう。しかし、それならば何故アルベルトに親しい、もしくは彼に従う者の列席を許すのか？ おそらくは共に始末してしまおうという腹積もりなのかもしれない。

「今日、ここに、汝アルベルト・アインスの、光の教団の入団を許

可する。これからは一層、国の発展に尽力を注ぐことを願わん……」
司祭は経典を閉じ、アルベルトに向かって本を差し出す。それを
受け取ることが入団の証らしいが、彼はそれを掴むと、兜と鎧の隙
間の辺りを守るように構える。

ストンツ！ と小気味の良い音の後、白く輝く刃がそこに刺さっ
ていた。

「な、なんだ!？」

突然のことに兵士達は動揺を隠せない。アルベルトは構わず、ア
ルミナに向かつてそれを投げる。しかし、それは侍女が寸前でキヤ
ツチする。そのか細い腕からは信じられない所作であり、さらには
微動だにしない様子からも、その異常さが伺える。

「ふん、やはり人外か!」

マントを翻し、鞭を構えるアルベルト。脇に控えていたリヨカも、
背中に隠していた鋼の昆を取り出し、アルミナを睨む。

「くつくつく、さすがに小細工で殺せるほど甘くないかい？ 油断
ならない坊やだね……」

酷くしゃがれた声は、老婆のそれでも異質なもの。アルミナと思
しき女性はつかつかと歩みだし、服をびりびりと破いて正体を現す。
「いったいどうやって神殿を抜け出したのか知らんが、あそこで奉
仕してたほうが幸せだったと思わせてやるよ……」

豊満なバストが徐々に筋肉質に変わり、白い肌が赤紫になる。ぼ
やけた顔が輪郭を変え、鋭い牙と大きな一つ目の巨人が現れる。

それを合図に臣下に紛れていた殺意の列席者が、文字通り皮を破
るかのようになり、その正体を現す。

??

道なりに進む二人を遮る木製の新しい扉。棧橋下から侵入者が来
たときの防御策だろう。今も便宜上は下水道として使われているの
だから。

その扉は重厚で、何かで切りつけられたような痕がいくつも刻まれているが、押ししても引いてもびくともしない。

「壊せますかね？」

トムはさっそく木槌を構える。

「それ！」

比較的脆い蝶番の辺りに渾身の一撃を打ち込む。

「うわ！」

しかし、木製の扉はびくともしない。

「いつそ燃やしてしまいませんか？」

「それじゃあ僕らが煙に巻かれてしまうよ。……そうだ、もしかしたら……」

デールは扉の前に出ると、かつて旅人に教えてもらったある印を組む。

「大地に眠る悪戯な精霊よ、我は彼の者の戒め破らんと願うなり……

……、戒めを解け、……アガム……」

鍵を凝視し、一点のみに集中する。

コメカミのあたりが痛くなり、おでこの辺りが熱を持つ。指先にかが集まってくるのを感じるが、代わりに足が震えだす。

レンガの隙間、足元、天井からふわつと黄土色の霧が沸き立ち、

鍵穴に忍び込み……、

「どうだ！」

かちやりと音がして、きいとドアが開いた。

「やった！」

デールは倒れそうになる足腰を気合で堪え、トムに先導されながら先を急いだ。

背後では風に揺られたのか、ドアが二度開閉した……。

??

兵士達はアルミナの御前のため、武器を携帯しておらず、手近に

あつた椅子などで応戦を始めた。人外の魔物達は牙、爪をむき出しに威嚇するも、狭く、かつ戦いに不適な足場に戸惑いを見せていた。そんな中、教会の中央では、ヘンリーと偽アルミナが対峙している。

「知らぬ顔だな……、あのゲマとかいう魔物なら仇討ちも果たせたのだがな……」

「ラインハットなど田舎国ごときにゲマ様が来る必要がないだろ？俺さまで十分だ」

「その田舎国の統一もできぬマヌケが、何を十分なのか教えてもらおうか！」

ヘンリーは腰に備えた鱗の鞭を振るう。

状況を理解したオットーは短剣を構え、その大きな一つ目に投げつける。

「雑魚がでしゃばるな！」

投げられた短剣を乱暴に振り払い、手近にあつた長椅子を持ち上げ、大きくなぎ払う偽アルミナ。

「ふん、バカ力が売りか？　だが、こんな狭い場所では振るいがいもないだろうに」

アルベルトは隙だらけの偽アルミナのわき腹に鋭い一撃を放つ。

しかし、それは先ほど本を掴んだ侍女に阻まれる。

「くっ、こいつも人外だったな」

唯一状況がわからないのは司祭のみらしく、抜けた腰で壇上近くに這い蹲っており、リヨカの手に引かれて比較的安全なほうへと運ばれる。

侍女は鞭の絡まる腕を力ませ、勢い任せにヘンリーごと引き寄せらる。

「ラマダ様、いかほどに？」

「そうだな。この王子は東国を統一してくれたんだ。その褒美に俺様直々にあの世に送ってやりたいのさ」

それを待っていたとばかりにラマダは長椅子で出迎える。しかし、

左手の鞭を素早く天井の梁に巻きつけ、空振りにさせる。

「やあああああ!!!」

司祭の誘導を終えたりヨカはラマダの背後から飛び掛り、鋼の昆をその脳天に叩きつける。

「ぐおっ!」

渾身の一撃にたまらず仰け反るラマダ。その隙をヘンリーは見逃さず、鋭い鞭を幾重にも振るう。

「貴様! 調子にのるな!」

侍女はヘンリーに飛び掛るが、再び巻き起こるリヨカの風刃により邪魔される。

その巨体と鈍重さ故、容易に背後を取られてしまうラマダ。ヘンリーの鞭は場所を選ばず、露出した皮膚を幾度も打つ。それに意識を取られれば、今度はリヨカの昆が降りかかる。

「ぐはあ!!! くそ、人間風情が……」

ラマダの皮膚は怒りからか赤みが増し始め、そして大きく息を吸い込んだと思うと、燃え盛る火炎を吐き出した。

「てめえら皆燻製になりやがれ!」

みるみるうちに周囲に燃え移る炎。壁などは石材が使われているが、所々木材もあり、もうもうと黒煙があがりだす。

兵士達は退路を確保しようとするが、外側から鍵でもかけられたのか、びくともしない。

「逃がさねーよ! 丸焼きと燻製、どっちがいいか、選ばせてやる!」

武器を持たぬ兵士達も仕込みの賊も一人、また一人と煙に巻かれ倒れていく。

「くっ、多勢に無勢と甘くみていたか……、だが!」

それでもヘンリーは諦めることなく、儀礼用の剣を構えて切りかかる。

「玉砕か? 手間が省けるぜ!」

「やあああああ!!!」

無謀とも思えるヘンリーの突撃。ラマダは長椅子を振りかぶり、それを迎え撃つ。

「あばよ！」

ラマダの長椅子が彼を捉えた、その刹那、ヘンリーの右手から爆発魔法が放たれ、途中から砕く。

「でやあ！」

斜めに切り裂く一撃。儀礼用の剣のせいか切れ味は鈍いが、怯ませる程度の一撃ではあった。

「はっ！」

それを見逃さず、リヨカは昆を振りかぶる。めちやくちやになった足場のなか、身動きもろくに取れず立ち尽くすラマダ目掛けて振り下ろされる昆。左右の石突から繰り出されるそれは、まさに無数というに相應しく、その肉体を打ちのめす。

「ぐっ、雑魚が、人間ごときが！」

力任せに長椅子を振り切り、リヨカを追い払う。しかし、一瞬避難の遅れたオットーを他の兵士ごと吹き飛ばす。

「ガハッ！」

壁まで吹き飛ばされた彼は、血を吐きながら咽る。

「オットーさん！」

リヨカはすぐさま彼に駆け寄ると、回復魔法を唱える。

「私のことはいいですから、奴を……」

気丈にも呟くオットーだが、ゴボつと吐いた血の量は半端でない。「癒しの風よ、願わくば彼の苦しみを解き放て、ベホイミ」

拒むオットーを制し、回復魔法の印を組むリヨカ。彼の姿にかつての親友を重ね見たリヨカは、頑なになっており、窮地にありながら治癒をやめようとしない。

ラマダはそれを好機とみなし、新たに長椅子を拾い上げ、彼らに振りかぶる。

「ぐおおおおお！！！」

力任せに椅子を振り回すラマダ。

「危ない！ リョカ！」

ヘンリーの叫びも間に合わず、リョカへと振り下ろされる長椅子。彼も背後の殺気を気取っており、防壁魔法の紫の霧を纏う。どれほどまで軽減できるかわからぬが、もし彼がその場から離れれば、凶撃はオットーと兵士達へと振り下ろされる。

「爆ぜろ！ イオ！」

瞬間、どこからか爆発魔法というか、爆発魔法を抱えた人影が現れ、椅子の中ほどを掴み、そのまま破壊する。

「雑魚が、どっから沸いた！」

黒煙立ち込める中、リョカは背後のことを気に掛けつつ、オットー達の治療を急ぐ。

「そういうな。雑魚かどうか、試してみなよ」

黒煙に紛れる人影、赤い髪をした背の高い男で、ひらひらした緑の胴衣に身を包んでいた。彼はラマダに向き直ると、左半身を前に出し、右足のかかとをそつと浮かせつつ、腰を低く構える。

リョカの知らない声。双頭の蛇の誰かだろうか？ 期せずして現れた援軍を背に、入念に治療を施すことにした。

63 | 偽アルミナ（後書き）

オリジナルといえばオリジナルなキャラが登場しました。
展開だけならオリジナルですけどね・・・。

64 | 炎の中で

道なりに進むうちに明かりが見え始め、そしてすすり泣く声があった。

「母様！」

それに聞き覚えのあったデールはトムの静止も聞かずに走り出す。黴臭さに変わり生臭く、青臭さが強くなる中、行き着く先には鉄格子が見えた。

「母様！ アルミナ母様ですね！」

デールは鉄格子を叩き、奥で俯いていた女に声をかける。するとその声に気付いたのか、女はゆっくりと立ち上がり、鉄格子へとかけよる。

「おお、デール。私の愛しい子……」

久しぶりに聞く母の声に、感極まったデールは、胸に言葉が詰まり、涙と鼻水で何もいえなくなる。

「母様……。待っていてください。今ここから出して差し上げます」

「デール様、お任せください」

荷物から金切りを出して鉄格子にあてがうトム。時間はかかるだろうけれど、今日なら気付かれる心配も少ない。

「デールや。良いのです。母がもしここを抜け出たことがばれたら、お前まで無事では済まされないのでしよう」

「大丈夫です。ラインハットに兄上が戻ってまいりました。きっと賊も成敗してくれるでしょう」

「おお、ヘンリーが……。ならばなおさらでしょう。私はかつて、自身の欲望からヘンリーの父を殺し、さらには奴隷へと売り飛ばした。今こうして私がここに繋がれ、屈辱にまみれたとして、それは天命です。それに、あの魔物達では、いくらヘンリー王子とはいえ、敵うはありません。どうか、母のことは忘れて、お前だけでも生きてください」

涙ながらに言うアルミナは、かつての強欲な態度も失くし、子を想う母としてデールを見ていた。

「いいえ、たとえ貴女がしたことが兄上を苦しめ、国を貶めることとなったとして、貴女は私の母です。どうしてこのようなことを見逃せましょうか？」

それはデールも同じであり、膝を着くアルミナの手を強く握ることとで否定する。

「うう、私は、私は……」

「そして、共に裁判を受けましょう。その時はけして一人にはさせません」

「はい、デール……」

その言葉に頷くアルミナは、ただただ声を殺して泣いていた。

「切れた！」

そんな二人を他所に、トムはようやく人が通れる程度の隙間をこじ開ける。

「ささ、早く、母上……」

「はい、デールや……」

トムは彼女を抱き、今来た道を引き返そうと走る。しかし、

「誰だ！」

来た道と逆方向から声がした。恫喝を含む乱暴な物言いで、壁に映るシルエットは人外のものであった。

「兵士じゃない、魔物!？」

せいぜい偽アルミナの息のかかった兵士だろうと考えていたデールだが、やってくるのは鎧に身を包んだどころか、鎧に悪霊が乗り移ったさまよう鎧に骸骨の剣士。数こそ少ないが、デールは武芸も魔法も人並でしかなく、トムもまたアルミナを庇う必要がある。

「なんだ！ 騒がしいぞ！ ドアが開いてるが、侵入者か！」

そして今度は来た道からも声がした。

「くそ、どうすれば！」

絶体絶命ともいえるピンチ。足音はどんどん近づき、彼らを目視

するや否や、武器を構えて走ってくる。

すると、デールは誰かにドンと押された。よろけるままにトムに肩を借りると、今度は誰かに腕をつかまれる。

「……過去を辿るに如かずとも、わが足跡を辿るに詮は無し、時の精霊よ、願わくば、今一度安息の母屋へと導きたまえ、リレミト……」

目の前で一瞬緑の火花が散ったと思うと、数秒の息苦しさのあと、小船の上にあった。

そして今度は光が集まりだすと、トンと小船が揺れた。

三人は何が起こったのかわからず、それでも互いの無事を確かめたあと、急いで堀をでた。

「おらあああああああ！」

ラマダは長椅子を振りかぶると、男目掛けて振り下ろす。しかし、男は半身を翻すだけで、そのヒラヒラした胴衣すら掠めさせることなくかわしきる。

「はは、鬼さんこちら！」

男はやや浮いた右足のかかとを強く踏み込むと、床石をメコつと踏み抜き、次の瞬間、ラマダに向かって大きく跳躍する。そして、鋭いけりを左肩に放つ。

「ぐっ！」

男も長身ではあるが、ラマダはそれより頭二つ分大きく、横も彼の二人から三人分ある。体積体重だけなら四倍以上のラマダだが、男の一撃で大きくよろめき、悔しそうに睨む。

「どうだい？ これでも俺は雑魚かい？」

「ふん、蚊だと思ったら蜂だったわけか？ どちらにせよ、虫けらに違い無い」

「言っね」

それを挑発と受け取った男は、低い姿勢から飛び出し、ラマダの奮う長椅子の下を潜り、脚の内側、太腿、腹、鳩尾の順に蹴り、手を打ち込み、よるめいた膝を足場に再び跳躍すると、空中でくるくる回転し、かかとを頭頂部へと決める。

「ぐぐあ！」

息も切らせぬ連続攻撃に、ラマダは初めて後ずさりをする。

「このまま決める！」

勝機とみなした男は一足飛びで距離を詰め、その勢いのまま大きく振り上げたかかとを落とす。

「ぐー！」

ラマダはその大振りで緩慢な攻撃に反応し、両手で頭を守ろうとする。すると、次に訪れたのは腕への衝撃ではなく、床石を踏み砕く破裂音。

踵落としてはフェイントであった。次にラマダが見たのは、床石を踏み抜いた男の残像と、鋭く突き出された拳。それが今まさに自分に放たれたところまで。

「ラマダ様！」

その寸前、今度は腹の近くで爆発魔法が破裂する。侍女の横槍で何とか距離を取る。

「くそ、ヒヤダルコ！ バギマ！」

中級の氷弾魔法と真空魔法を放ち、男を吹き飛ばすことに成功したラマダ。駆け寄る侍女の回復魔法で体勢を整え始めた。

「惜しかったなあ、小僧……」

こきつと首を鳴らしながら獲物を探すラマダ。大きな一つ目は憎々しげに男を睨み、悠然と歩み寄る。

「蜂から小僧に格上げかい？」

無様な姿勢で嘯く男は、それほどダメージもないのかすつと立ち上がり、痛いたしく黒くなっている左腕に聖水のような水を掛ける。

「大丈夫ですか？」

そこへオットーの治療を終えたりヨカが近づき、回復魔法を唱え

る。

「これぐらい平気さ。ま、昔から魔法は苦手なんでこういう失敗ばかりさ」

よく見ると左腕の怪我は爆発魔法によるもので、おそらくは長椅子を砕くときに自爆したのだろ。それよりも、この状況にも関わらず陽気に笑う男に、リヨカは見覚えがあつた。

「貴方はボルカノさんですか？」

「え？　なんで俺のこと知ってるの？」

ボルカノと呼ばれた男は意外そうにリヨカを見返し、頬を掻く。

「え？　だつて、前に……」

四年前の草原でのことを思い出すリヨカだが、ある違和感がそこにはあつた。今日の前にしている彼は、かつて出会った彼よりも若干幼い気がしたから。

「まあいいさ。そんなことより、アイツをなんとかしないとさ」

放たれる真空の刃を見もせずにかわす男。リヨカも慌てて昆を構える。

「だあああああああ！！！」

長椅子や砕けた像の破片でめちゃくちゃになった足場を疾走するボルカノ。リヨカもテールを駆け出し、ラマダへと迫る。

飛び掛るリヨカと、下からもぐりこむボルカノ。上下から来る連撃に一つ目のラマダは視線がきよろきよろと上下する。

「ラマダ様！」

侍女は手近なりヨカに真空刃を放つが、それは虚空中で反射壁にぶつかり、戻ってくる。

「何奴！」

何者かの存在を気取る侍女だが、背後から鞭が放たれ、首の辺りにまきつく。

「ぐ、卑怯な」

「お互い様だ」

ヘンリーは鞭を手近な長椅子に固定すると、儀礼用の剣を抜き、

侍女に向かって走る。

「はっ！」

鋭く光る一線は侍女の肩口から腰までを切り開き、言葉を発する暇も与えずに絶命させる。

周囲では徐々に人外が倒れていく。もともと精鋭ぞろいの双頭の蛇と、ラマダの劣勢に逃げ腰の者が出始めたせいだろう。

「さて、残るは貴様一人だな」

リョカとボルカノをなんとか振り払ったラマダだが、既に多勢に無勢。時間と共に教会の異常を知る者も増えるだろう。そうなれば異形である彼が不利になるのは必然。

「ぐ、くそー！！！」

ラマダは怒りに任せて壁に体当たりをすると、そのまま教会の外へと抜け出す。

教会の周囲にはアルミナの命令で入り口を見張っていた兵士しかない。その兵士すら、突然現れた魔物の姿に驚き、そのままちりちりになって逃げていく。

「ふん、わざわざ出口を用意してくれるとはな」

今しがたラマダが開けた大穴から咳き込みながら出てくるヘンリーの姿があつた。煤に塗れた黒い顔。咳き込み、涙目になりながらも、その表情は勝利に満ちていた。

「ぐぐう、舐めやがって……！！！」

外に出たことで、さらに正体を見せてしまったことで形勢はすでにヘンリーに傾いている。それは近づいてくる兵士の足音が確信させ、ラマダを窮地に立たせる。

「くそお！ イオ！ イオラー！」

無詠唱の爆発呪文を唱えるラマダ。巻き起こる砂煙に怯むヘンリー達。続く二撃目に供え、皆距離を置く。しかし、砂煙が不自然な風に晴れる頃にはラマダの姿はなく、流れた血が点々と森へ続いていた。

森へ逃げたラマダは必死に精霊を集め、魔法による擬態をする。とはいえ大きく切り裂かれた傷口を隠すことはできず、ヘンリー達の目をくらすことはできない。

「ここに居たか……。ラインハットは返してもらおうぞ？」

満身創痍で見つかったラマダに、ヘンリーは剣を構える。

「くくく、一足遅かったな……」

しかし、ラマダは不敵に笑う。

一度外へ出てしまい、擬態が終わればラマダもまたアルミナであり、王の母。それを襲うアルベルト達は、賊といってしかるべきものの。

教会の火の手に気付いた兵士達が集まり始め、さらに血だらけで発見された太閤に息を飲む。

「……アルベルト殿、これはどういうことですか!？」

たとえ英雄であったとして、女性、それも王女に鞭を振るうなどと赦されざる行為。元々出自も怪しいアルベルトに対しての疑惑は高まり、事情を知らない兵士達はアルミナを守るように立ちふさがる。

「退け! その女はアルミナではない! 魔物だ! 正体を見せろ!」

アルベルトの声に一瞬たじろぐ兵士。

「何を言っている! 騙されるな! こやつはわらわに剣を向けた、謀反者ぞよ! この国を、ラインハットを乗っ取るつもりなのじゃ!」

必死に喚くアルミナの言葉に聞く耳を持つものは居るのだろうか? 戦争を終結させた英雄と、国を荒廃させた悪女。兵士の何人かはアルベルトに向ける矛を下ろしてしまう。

「この裏切り者!」

その気配を察してなのか、一人の兵士がヘンリーに切りかかる。鞭しか持たぬヘンリーはそれを受けることができないが、一瞬はやくリヨカが鋼の昆で受ける。

「くう……」

どうやらこの兵士もあの侍女と同じく魔物の類らしく、その腕力はリヨカでも五分。

「切れ、切れ！ この者達を切れ！」

アルミナは傷を庇いながら立ち上がり、兵士に守られながら修羅場を後にしようとする。

「待て！ 貴様らそいつがしたことを忘れたのか！？ そいつはこの東国を戦火に晒したのだぞ！ 今、そいつを斬ることこそが大儀だと何故わからん！」

アルミナを追おうとするヘンリーだが、兵士達に振るう鞭もない。彼らがヘンリーに剣を向けないのと同じように。

だが、そうしている間も人の皮を被った魔物兵が応援に駆けつけているらしく、三人を囲む人員が増えていた。

「くつ、貴様ら、何故わからない……」

「アルベルト殿、申し訳ありません……。我々として家族がおりますゆえ……」

その言葉にヘンリーは唇を噛む。魔物は論外としても兵の中には質を取られているものがいるのだろうか。

アルミナ打倒に重きを置きすぎた。四年前の出来事を考えれば教団内に魔物が多数居ることは周知のことであつたと、ヘンリーは自らの甘さを噛み締める。

「……そこまでです……」

ヘンリーが覚悟を決めた時、懐かしい声が出た。三人を取り囲む兵士達はその声に包囲を解き、声の方へ振り返り、跪く。

「お前、デール……」

三年前と比べるとかなりやせ細ったデールが、その青白い、頬のこけた顔で笑顔を浮かべてやってくる。

「兄さん、人が悪いですよ……。帰ってきたくせに僕に黙ってるなんて……」

その隣にはトムに連れられた女性が一人。遠目にもその美しさがわかり、病的な白さと唇の妖艶な赤が映えた。

彼女はヘンリーを見るなり、崩れ落ち、侘びの言葉をぐちゃぐちゃと口にする。

一方、兵士に囲まれた傷だらけのアルミナもまた蒼白になり始める。

「皆のもの、聞いてください……。そのアルミナはニセモノです……。本当のアルミナは、城の地下に閉じ込められていました。今日、ようやく偽アルミナの監視を逃れて助けることができました……」

「なっ、何をいつているの？ デール、私の可愛いデールや、母を、母を助けてはくれないのですか？」

必死に繕うラマダだが、突如現れた二人のアルミナに兵士は困惑を強める。もつとも、常人なら絶命せずとも息絶え絶えになりかねない傷を背負って歩き回る偽アルミナに対する疑惑の目のほうが強くなる。

「貴方は母じゃない。一体だれなんですか？」

デールの確信に満ちた問いかけに、兵士達も状況を感じ始め、次第に護衛の輪が薄れ、人外と思しき兵士のみが彼女を守る形となる。

「さて、こんどこそ逆転は無理だな……」

ヘンリーは傍に居た兵士から剣を奪い、アルミナに詰め寄る。

「貴様らの教義では死んだ後も光の国で生きていけるのだから？」

一足さきにそこへ行くといい。俺が送ってやる」

ヘンリーは偽アルミナに向かって剣を振り下ろした。

「ぐぎよええええ……！！」

あの巨体の怪物にしては呆気なく事切れ、それを守ろうとしていた兵士達も顔を見合わせ、われ先にとその軀に剣を突き立てる。

哀れ偽アルミナは味方と思しき者からも見捨てられ、果てることとなった……。

66 | 勝利の余韻

ヘンリー凱旋の報は兵士達に瞬く間に広がった。

一応の緘口令こそ強いてはいるものの、人の口に戸は立てられず、もともとヘンリーの指示でその噂も広まっており、時間の問題だろう。

そんな中、ヘンリー達はラインハット王謁見の間へと通された。

「兄さんが戻っていたのは、トムから聞きました。エンドールを落とした時の話を聞いて、もしかと思ひまして……」

かつてヘンリーがエンドール城の抜け道を発見した時のことは、しっかりと自分であるデールにも聞かせていた。それはもしもの時のためではなく、自分が見つけた秘密というものを誰かに自慢げに話したいという子供らしい欲求からだった。

結果、デールは兄の帰還を一足先に察知することができた。彼が名乗りでないのであれば何か理由があるのだろうと気付かぬフリをしていたわけだ。

「待たせたな、デールよ。だが、俺としてはもう少し格好良く凱旋するつもりだったのだが……」

「そう仰りますが、東国の平定だけでも十分な功績でしょう。これからは兄さんこそが王になるべきです。私はあの日、保身の為に国を売ったのですから」

そう言つて玉座を退くデール。ヘンリーもどう切り出そうかと考えていたところであった。元々気の優しいデールに王位は似つかわしくなく、本人もそれを承知なのだろう。

「ふん、戴冠式まではお前が座っている。それに、俺にはもう一つやる事が残っているからな……」

「兄さん。ですが今日だけは、再会の喜びを分かち合わせてください」

「ああ、そうさせてもらおうか……」

ヘンリーはそういうと、いつになく優しく笑う。デールもまたそれに応えるが、どこかに陰りが見えるのは、今後のデールの処遇を思えばこそ。彼もまた、アルミナと共にこの国を退廃させた一人なのだから……。

兄弟の再会にリヨカは席を辞した。デールは彼の不幸を労いたいと申し出たが、前後の事柄を見ればそれも難しいと理解を示し、かつて教えてもらった禁魔法のお礼だけ述べるに留まった。

救出されたアルミナはかつての教団との癒着と、ヘンリー誘拐、チップ王の暗殺と、その罪をパパスに被せたことを認めた。

今後の裁判により詳細を明らかにされるであろうが、父の汚名は濯がれることとなり、さらにサンタローズ復興への尽力を約束させるに至った。

今、ラインハルト地方では、王子とその友人の英雄譚が面白おかしく語られていたが、彼らの窮地に颯爽と現れた赤毛の青年のことは、いつの間にかはしよられていた。

ヘンリーは特別に褒章を与えたいとして、あわよくば雇い入れたいとして探すように努めたが、それらしき人を見たものは彼ら以外に現れなかった。

広くて大きなベッドのある部屋。香の臭いが立ち込め、リラックとした雰囲気を見せてくれた。それでも寝付けず、寝返りを繰り返すリヨカ。緊張が強く、眠いのに眠れそうになく、身体が火照っていた。

暇つぶしに先日拾った小さなメダルを磨いていると、風がカーテンを揺らし、人の気配を臭わせた。

「で、どうするつもりかしら？ 彼、貴方のことを部下にするつもりでいるみたいよ？ お父さんのことを探すことを餌にしてね」
「そういう言い方は辞めてください」

リヨカはメダルを磨くふりをして、極力彼女を見ないようにしていた。

エマはそんな彼の態度を咎めるつもりないらしく、部屋にあったティーポットで自分の分だけお茶を注ぐ。

「明日になればヘンリーはマリアを迎えに行くわ。そうしたらもう彼女と結ばれることはないわね」

「マリアはヘンリーの恋人だ。それが自然です」

「へえ……。友人の恋人と一年間寝所を共にしたのに？ かなり不自然だと思うけど……」

「僕は確かに……、確かにマリアを愛している。もしヘンリーと再会しなければ、きっと僕は……」

父の遺言を破棄し、マリアと添い遂げること。なんの手がかりもなく、ただ漠然と母を捜せなどと、この広い世界で絶望に等しい。リヨカが揺らぐのも無理の無いことだった。

「だけど、ヘンリーは生きていた。そしてマリアを向かえにきた。マリアだって僕と一緒に貧乏暮らしよりも、お城お后としての暮らしのほうが良いに決まっている」

「だから身を引くの？ やっぱり貴方を選ばなくて正解だね。王者には似つかわしくない」

腕を組み、落胆した様子で言い切るエマ。

「後悔してもしらないわよ？ 本当にいいのね？」

「ええ……。僕にはヘンリーを裏切ることではできませんから……」

その言葉にだけ、エマの半眼が柔らかくなったのだが、それに気付くほどリヨカは彼女を見たくなかった……。

67 | すり抜けたモノ

久しぶりのオラクルベリー。東国の平定の噂はここへも伝わっており、橋を建てなおすべきか否か、街で投票が行われていた。

「……オラクルベリーか、できればここも手に入れておきたいのだが、そうもいかないから……」

「ヘンリー、さすがにそれはどうかと思うよ」

物騒な話にリヨカは苦笑いを返すしかなかった。

東国の平定が終ったとはいえ、それはあくまでも国境での話。今後はケイン老がてんやわんやになっている頃だろう。

「冗談だ。それより、リヨカ。お前はとうする？」

「僕は……」

「母……か？」

「うん」

「そうだな。パパス殿との約束だからな。だが、何か手がかりはあるのか？」

「それは……その……」

「今の俺、ラインハット国の王となる俺なら、その力になれると思っぞ？」

昨日のエマの言葉が蘇る。母の手がかりを餌に自分を釣ろうとしている。きつと半分は本心から、半分は打算からだろう。必要とされることは嬉しいが、リヨカからすると、自分がそこまでヘンリーに求められる理由がわからない。

「僕にも手がかりがあるし、自分の力でやれるところまでやってみるよ」

「そうか。だが、もし俺の力が必要なら……」

「ほらヘンリー、マリアが待っているよ。急ごう！」

リヨカはヘンリーの言葉を遮り、かつての住居へと走った。ヘン

リーはそれに続き、その少し後から、舌打ちと足音が続いた。

「マリア？」

アパートの一室に戻ったりリヨカだが、そこに人の気配は無い。パン屋の仕事かと考えたが、今日は例の投票のせいでどこもお休みだ。露店がいくつもあったが、そのどこにもマリアの姿は見受けられなかった。

「リヨカ。マリアは一体……」

探すというか、隠れるほどの場所の無い部屋で、二人は顔を見合わせる。

「まさか、誘拐された？」

「ありえないわね……。彼女にそんな価値は無いわ……」

光と共に現れるエマにリヨカは視線を逸らす。ヘンリーは彼女を睨むが、誘拐されるぐらいなら、その価値が無くとも無事なほうが良い。

「おい、なんとかならんのか？」

「無理よ。人を探す魔法なんてしらないもの」

お手上げな様子の彼女も意外らしく、きよろきよろと部屋を伺う。
「ねえ、そういえば剣は？」

「剣？ ああ、そうだ！ 父さんの残した剣！」

リヨカはサンタローズの洞窟で見つけた父の剣を思い出す。

タンスには珍しく鍵が掛かっており、リヨカはアガムでそれを開く。そこにはしっかりとあの不思議な剣があった。

「良かった、あった……」

ほっと一息つくリヨカ。その剣先の示す場所には封筒があり、月日が経っているか、黄ばみが見えた。

「これ……」

リヨカはそれを手に取り、一瞬迷ったが、二人に促されて開ける。

リヨカよ。この手紙を見ているということは、私は既にこの世に居ないということだろう。

もし、父が志半ばにして倒れたのであれば、それは赦してほしい。お前には話していなかったが、私が世界を旅していたのは、お前の母、マーサを捜すためだ。

マーサはエルヘブン地方に住む少数民族の巫女で、ある不思議な力を持っていた。

その不思議な力を求めてか、マーサは魔物に狙われていた。あれはお前が三歳になったころだ。

月明かりの綺麗な夜、マーサは一人バルコニーから忽然と姿を消した。

あるいはマーサもまた、その運命を受け入れたのかもしれない。だが、私には到底納得できることはない。

私は身分を捨て、旅に出ることにした。全てはお前とマーサの三人で暮らすために。

きっと私は倒れるおり、お前に妻を捜すよう頼むかもしれない。だが、なんの手がかりもなく、それをするのは困難だろう。

そして、お前の人生を私が壊すことは憚られる。

お前の人生はお前のものだ。

どうか、自分のために生きてほしい。

全ては私がそうしたことが故に起きたことなのだから。

ただ、これだけはお願いしたい。

私が旅の途中に見つけた、不思議な剣をサラボナのルドマン・ゴルドスミスに届けてほしい。

以前船で一緒になった富豪だ。

パパス・グランバニアの子と名乗れば取り次いでくれるだろう。

くれぐれも父の二の舞になるな。

愛する息子、リヨカへ……。

「これって……、父さんの手紙？ 僕に僕の人生を生きろって……」
「エルヘブン地方は謎に包まれているが、グランバニアからは航路があるのか……」

「この剣って、もしかして……」

三者三様、ばらばらな感想を抱くが、一番の疑問は、何故それがここにあり、マリアがいないのかということ。

「ちょっとあんた達！ ここはリヨカさんの家だよ！ 今日那は留守にしてるんだから、勝手に入っちゃだめだよ」

入り口のほうからがなり立てる女性の声がした。彼女はリヨカを見ると、目を丸くした様子で手を叩く。

「あ、おばさん、お久しぶりです。戻ってまいりました」

リヨカは階下のおばさんの声にはつとなり、挨拶に出向く。

「あらあら、なにしているのかと思えばこのトウヘンボク。マリアちゃん、あんたがもたもたしてるから出家しちゃったじゃないのさ！」

「出家？ まさか、光の教団に？」

「光？ 違う違う、あんな胡散臭いところじゃなくて、海辺の修道院よ！ もう……、なんだってあんなイイコ、お嫁にしないのさ……」

「ま、まで、出家しただと？ マリアが、どうしてだ？」

驚きを隠せないヘンリーは階下のおばさんに詰め寄る。

「まあ、いい男じゃないの。マリアちゃん、結構彼氏いるんだね」
にやにやと笑うおばさんは冗談もそこそこに、エプロンのポケットから一枚の紙を取り出す。

「これリヨカさんに渡すように頼まれてたけどね、まあ、封筒に入っていないからあたしもつい読んじゃったけど、あんた本当に罪な男だね……」

「か、貸せ！」

ヘンリーはそれを奪い取ると、ざっと目を通す。

「……」

そして紙を落とすと、エマに向き直る。

「おい、今すぐ俺を修道院に連れて行け。頼む！ 急ぐんだ！」

「え、ええ、いいけど……」

エマはその焦燥ぶりに気圧され、彼と共に部屋を出る。

リヨカはヘンリーの落とした紙を拾い上げ、目を通す。

リヨカさんへ。

ごめんなさい。お父様の手紙を隠したのは私です。

剣と一緒にタンスにしまっておきますので、どうぞお読みになつて下さい。

本当はあの時、貴方に報告すべきでしたね。

けれど、怖かったのです。

貴方が旅に出て、もう二度ともどらないのではないかと思って。

私は貴方の旅についていくことはできません、そして待つこともできません。

ただの弱い女なのです。

そして、その弱さ故、貴方を恨んでおります。

私は貴方と共に暮らしたかった。

貧しくても小さな幸せのある、平穏な日々。

それが望みでした。

貴方の無事を祈り、一時の安らぎを手にし、再び別れる日々。

貴方は私のためにお金を稼いでくれました。

けれど、本当に大切なのは、貴方が傍にいてくれること。

ただそれだけだったのです。

私はもう待つことができません。

私から終止符を打ちます。

貴方の未来にルビス様の加護があることを、海辺の修道院から願っております。

読み終えたりヨカは愕然とした。

短い走り書きの手紙に、ヘンリーの名前が無いこと。そして、彼女が、彼女もまた自分との生活を望んでいたことに。

「マリア、君はヘンリーのことを……？」

今頃ヘンリーは海辺の修道院へと向かっているのだろう。だが、文面が彼女の真実の気持ちなら、それは明るい結果をもたらさないだろう。きっとそれはリヨカでも同じこと。

ただ暗く、重い気持ちを抱えながら、リヨカはしばらく部屋に佇んでいた……。

サラボナへの定期船を待つ間、リヨカはオラクルベリーの港に居た。

ヘンリーからの誘いは、父のもう一つの遺言である届け物を理由に断った。

それならば見送りに出るという友に、リヨカはラインハットの政務があるだろうと諭した。

偽アルミナの悪政とデールの裁判などのヘンリーにとって頭の痛い問題は目白押し。

暫くの間は滞在し、微力ながら、それこそ話し相手ぐらいなら努めて良いと考えていた。

ただ、リヨカの中にあるわだかまり。マリアの残した手紙の内容を反芻するほどに後ろめたく、エマと二人でアパートに戻ってきた彼を見たとき、さらにそれが大きくなった。

「本当に行くの？」

波止場にてふわつと光を纏うエマ。驚いて逃げる猫に手を振りながら、リヨカは頷く。

「ええ。というか、エマさんは僕がいけないほうがいいんでしょう？」

「それはそうだけど、今の彼には貴方が必要かもしれないわ……」
つい数日前のやり取りの意趣返しというわけではないが、エマは

むっとした様子でリヨカを睨む。クール、ポーカーフェイスを気取ってはいるが、意外と感情豊かな人なのかもしれない。

「失恋したんだもの。しょうがないさ」

「失恋ねえ……」

冗談交じりに言うリヨカに、エマは海を見る。まさかこの優男からそう返されるとは思ってもいなかっただろうし、一方でヘンリーがそれを理由に落ち込むのが意外だった。

「ええ」

「でも、貴方だってそうじゃないの？」

「僕は少し前に済ませたからね」

「そう？ ああ、そうだったわね……。で？ サラボナに行った後はどうするの？ もし、お使いが終って、気が変わってヘンリーの部下になりたいなら……」

「僕は彼の友達です。部下にはなれませんし……、よく考えたらもう子分になってるんですよ」

「子分ねえ……。まったく変なところで子供なのよ。貴方もヘンリーも……」

わからないとばかりに小石をつまんで海へ投げるエマ。

「でも、不思議。どうしてマリアはヘンリーを選ばなかったのかしら……」

エマの危惧はまったくの取り越し苦労だったわけだが、何か不満気味。

「きつと……」

「きつと？」

リヨカの言葉にエマは振り返る。なぞなぞの答えを知りたがる子供のような視線に、リヨカはやはり愛想笑いで頭を掻く。

「いえ、やっぱりわかりません」

「思わせぶりね」

期待しただけ損したと、再び小石を投げるエマ。今度は水面を二度ほど跳ねる。

「子供か……。でも、ヘンリーもアルベルトなんて名前乗るぐら
いだからね……」

「ねえ、あのアルベルトってなんなの？ 私だけ知らないのよね。
失礼しちゃうわ」

「ああ、アルベルトっていうのは……」

リヨカはかつてサンタローズの借家で読んだ話を思い出す。

巡る世界のアルベルト。

ピアンカが読めない単語ばかりでつまり、すぐに飽きた本のタイ
トルだった……。

68 | 気になるつわざ

東国の統一の噂はサラボナ、テルパドルなど、世界の要衝とされる国に伝えられていた。

最寄にして最大の港であるオラクルベリー港、レヌール港では、商人や出稼ぎ、物見優山から各国の諜報員、報道関連の者が溢れかえった。

西国へ出発する予定であったリヨカだが、乗船券の競争率が上がり、まんまと逃してしまい、今もオラクルベリーの安宿でその日暮らしをしている。

その一方で、ラインハット国に再度建設されることとなったルビス正教会の仕手の手伝いをしていたり、ギルドで陸商隊の仕事を請け負ったりと、日銭を稼いでいた。

簡易な治癒魔法と解毒魔法、それに大工仕事をこなす彼に、教会の神父は「神官を目指さないか？」と誘うほどだった。

ある日のことだった。

ラインハット北西部を調査していた部隊が魔物に襲われた。

東国、とくにラインハット近辺は人の住む場所が拡大しており、それに伴い強力な魔物は駆逐されてきた。残るのはスライムやイエティ、ドラキーぐらいの小物ばかりで、たまにスライムナイトなどが発見されるぐらいだった。

問題となったのは北にある遺跡。かつてヘンリー達が囚われた場所であり、誘拐、謀殺に関する手がかりがないかと調査をしていた矢先のことであった。

遺跡にはダンスニードルや魔法使いなど、比較的手ごわい程度の雑魚しかおらず、一般兵が遅れを取ることはなかった。けれど、最深部へと向かったところで、それまでとは違う魔物が現れたとのこと。

大柄の四足で、東には生息しないはずの魔物。俊敏で鋭い爪と牙を持ち、瞬く間に喉笛を食いちぎられて殺されたとのこと。

慌てて逃げた調査団の一人もまた背中に傷を負っており、今も治療を施されている。

ラインハット国はその魔物を討つべく、ギルドに依頼をした。

リョカはその話を聞いたとき、居ても立ってもいられず、ただちにギルドへ申請をしていた。

69 | キラーパンサー

北の遺跡の魔物討伐へ向けて、ラインハットを出る傭兵達。

魔物討伐となればパーティを組んで取り掛かるのが自然であり、リヨカを含めて十五人の戦士達がそれを担った。

相手は大型の四足獣。爪と牙と敏捷性を武器にするのなら、魔法で攻めるが常道。パーティには魔法使いと、それを守るべく重装備の戦士が幾人かいた。

リヨカのような軽装備のものはほとんど居らず、道中も浮いていた……。

黴臭い場所。饅えた水の匂いの立ち込める不愉快な場所。

かつて誘拐された王子が監禁された場所で、本来なら取り壊してしまいたいもののだが、光の教団が謀殺に関わった証拠がないか、その調査が終るまでは残すつもりらしい。

洞窟を前に松明を灯す一行。入り口付近には何かを燃やした痕のように黒くこげた影があった。

「これは……」

兵団をよそに、床を調べるリヨカ。四年の月日を経て、今もなお風化しきれない痕跡に、頭の中で何かが揺れた。

金槌でトンと叩かれたような、小さくともはっきりした痛み。段々としみこむような深みがあり、自然と涙があふれ出る。

「父さん……」

涙を流すリヨカに兵団たちは怖気づいたのだらうとみなし、彼に構わず奥へと行く。

軽装で魔物討伐に参加した彼など最初から戦力としてアテにしないのかもしれない。

＊＊

目を瞑ること数秒。

自分を守るために戦い、耐え、そして死んだ父。

遺志を願ひ、一方で彼の人生と幸せを願う父。

その非業の死を思い出し、涙がとめどなく溢れる。

今もどうすればよいのかわからない。

母を捜すべきなのか、父の仇を討つべきなのか、それとも自分の人生を探すべきなのか？

「泣いてなんか……。確かめに来たんだから、いかないと……」

それを拭い、瞼が痛くなった頃、別に思い出すもの。

四足の獣。鋭い爪と牙に俊敏な動き。それらは彼の思い出に居る、ある魔物の特徴にそっくりだったから……。

＊＊

レミールで光を集めるリョカ。

かつてきたときとそれほど変わっていない遺跡を壁伝いに歩く。

遠くの方で魔物達と兵団の小競り合いらしき音が聞こえたので急いだ。

音のほうへと走ると、道なりに切り伏せられた魔物達の残骸が見えた。

さらに走ると、例の街並のような広い場所に出る。

「ぎゃあああああ！」

そして聞こえた男の悲鳴。

リョカは昆を構えると、念の為防壁魔法を唱える。旅人の服の下には鎖帷子を仕込んでおり、腕には青銅の盾を装備しての彼にとつては比較的重装備だ。

魔物を呼び寄せないためにもレミールを止め、暫く周囲を伺う。ここは天井のいくつかが崩落している箇所があり、多少なら視界が利く。目がなれるまでの数秒、じっと物音に注意し、そして五メートル先が見えた頃、リヨカは気配のほうへと走った。

＊＊

土壁を鉄製の武器で殴る音が聞こえた。

どこかで魔物に襲われているのだろうか？ 雄たけびとも悲鳴ともわからない声が響く。

道なりに進むと、土の精霊があらぶるのが見えた。だれかが鈍足魔法を唱えたのだらう。他にもリヨカはよく知らない類の精霊も見えた。

精霊があらぶるのは、魔法が失敗したり、目標の喪失による行き場を失うが故。魔法が効かないか、それともかわされているのだらう。

手ごわいかも……。

リヨカは曲がり角を向かえたところで気配を感じた。それは荒々しいものの、動く気配がない。

まさか！

リヨカは角を飛び出し、昆を構える。そこには魔法使いの男性が肩口を押えて倒れていた。

「大丈夫ですか？」

「見てのとおりだ……」

「今治療を……」

リヨカは印を組むと肩口へと翳す。男は辛そうに眉を顰める。次第に傷口はふさがるが、辺りを血で濡らすほどの出血に顔色が良くない。

「あの、せめて物陰に……」

言葉少なめの男を抱きかかえると、大型の魔物が入れそうに無い

場所にまで運び、道具袋から鳥の肝臓の干物を取り出す。

「気休めかもしれないまんせんが……」

「すまない……。いや、それよりも逃げる。お前はまだ動けるんだ……。あれは人間が相手できるもんじゃない。ラインハットに戻って伝えるんだ……」

男は早口で捲くし立てると、急に肩を落とす。

事切れたのかと驚くりヨカだが、心臓の音はしており、脈拍も弱いながらある。

リヨカはしばし迷ったあと、遠くで聞こえる声の方へと走った……。

複雑な街並を駆け出すリヨカ。切れ切れにさす光に見える血しびき。喉を食い破られ、血溜まりに沈む庸兵。戦意を失い、物陰で腰を抜かす魔法使いをかわし、今まさに戦闘を繰り返している場所へと走った。

「くそー！！！」

重装備の庸兵はモーニングスターを構え、大型の四足魔獣へと振りかぶる。しかし、その鈍重な攻撃を待つほど魔物も甘くなく、ひらりとかわすと、背後へ回り込み、前足で突き飛ばす。

鎧は爪、牙からの攻撃こそ防ぐものの、力による打撃に脆く、男は膝を着く。

「ぐ、土の精霊よ、かのものに纏わり着き、その悪戯を戒めよ、ボミオス！」

控えていた魔法使いは魔物目掛けて鈍足魔法を唱えるも、察知した魔物はひらりとかわす。

魔法に疎い魔物なら当たりさえすれば効果はある。本来なら重装

備の庸兵が足止めをし、魔法で弱らせて捕獲するつもりだろう。けれど、身を隠すにはうってつけの遺跡群において、足止めもできず、その重装備ゆえの鈍重さで上からの攻撃に対応できずに混乱を誘発した。

庸兵たちが散らばっていたことから、推測でき、結果は見ての通りだった。

「やああああ!!」

リヨカは今にも魔法使いへと襲い掛かろうとしていた魔物に振りかぶる。四足はそれを察知し、寸前で翻えり身を隠す。

「大丈夫ですか?」

「今はな、だがもう直ぐ大丈夫じゃなくなる」

皮肉たっぷりな魔法使いに肩を貸し、比較的安全そうな小屋へと運ぶ。

「ぐ、ぐう……」

一人残してきた重装の庸兵が四足に襲われていた。

リヨカは小屋を飛び出すと、風の精霊を集め、

「その人から離れる、バギ!」

真空の刃を放つ。四足は不意をつかれ、その真空の刃をまともに胴体へ受ける。

しかし、その金色の毛皮を切り裂くどころか、少し怯ませる程度で霧散する。

「こんなところじゃバギの威力はたかが知れてるか……。それにしても堅すぎる……」

リヨカを睨む四足。兵士がよろよろと立ち上がり、避難を始めたとき、一瞬リヨカの視線を遮った。

「ゴワアアオオオ!!」

次の瞬間、リヨカへ向かって飛び掛る四足。リヨカは昆を横にしてその爪を防ぐが、勢いとその腕力におされ気味。

「ぐ、ぐ……、さすがにこんな大型獣と力比べは無理があつたかな

……」

膂力ならラインハットの重曹歩兵にも引けを取らないリヨカだが、自身の二倍近くあるそれに飛び掛られてはひとたまりも無い。

昆の片方を離し、そのままいなす。四足は着地が早いのか、すぐさま転身し、再び牙を剥く。

瞬間、リヨカは再び風の精霊を放つ。威力こそ弱いものの、向こうからそれに飛び込んでくるのだ。そして、狙いは打たれ弱いであろう眼。

「ぐわおおおん!!」

突然視界が潰された四足は勢いのまま、リヨカを越し、彼を威嚇する。

「僕も必死なんだ……」

リヨカは相對する四足、キラーパンサーを睨みながら、昆を構えなおす。

のんきなことを考えていたら、ノスタルジックに浸っていれば殺される。

「今死ぬわけにはいかない……!!」

リヨカは昆を地面に突きたて、引きずりながら走りだす。キラーパンサーもまた、彼に向かって飛び掛る。しかし、リヨカはそれに付き合うつもりをみせず、地面に真空魔法を放ち、煙を上げる。

視界を奪われたことと、先ほどの脆弱ながらピンポイントで弱点を狙われたことを思い出すキラーパンサーは警戒するように後ずさり、砂煙を遠巻きに見つめる。

砂煙から放たれる金属の塊。キラーパンサーはひよいとかわしていた。

リヨカはその間に重装の庸兵を抱え、近くの小屋へと隠れた。

「参ったな……。あれほどまでとは……」

散り散りに逃げていた庸兵達と合流を果たしたりリヨカ。何人かは怖気づいて逃げ出したらしい。その中のリーダー格の男は比較的責任感があるらしく、負傷した仲間の手当てに残っていた。

「ええ……。これは僕らでは対処できないと思います……」

無傷で渡り合ったりリヨカだが、それはあくまでも結果に過ぎず、もし一撃でも受ければボロ雑巾のようにされたかもしれない。

「うむ。今回の仕事は失敗だ。一度退こう。リヨカだっけ？ 手伝ってくれるか？」

「はい……。あ、だめです。あっちの小屋に一人残してきました。彼を何とかしないと……」

「むう……」

まだキラールパンサーがうろついているであろう付近の小屋に隠れている魔法使い。リヨカは小窓から外の様子を伺う。

「はあはあ……」

重装の庸兵は息を荒げながら眼をつぶる。その表情は苦悶に満ちており、簡単な治療だけでは間に合いそうにない。

「すまないが、コイツの容態が悪いからな。一度馬車まで戻りたいんだ」

「はい。僕は残ります」

「そうか……。わかった……」

リーダー格の男は重装の庸兵にもう一度回復魔法を唱えたあと、肩を貸す。

「あ、リヨカ……。すまなかつた。お前が来てくれたおかげで助かった。今は持ち合わせがないから、これをやる……お守りぐらいにはなるだろうさ……」

男はポケットから小さなメダルを取り出すと、リヨカに握らせる。

「大したことはしていませんよ。どうかご無事で……」
リヨカはそう言うと、一人ドアの前に立つ。

「僕が出来るだけひきつけますので、その間に逃げてください」

「ああ。だが、お前までアイツの餌になるなよ？」

「ええ、このコインにかけて……」

リヨカはそう言うとドアを開け、例の小屋へと走った。

周囲からは殺気が感じられる。

それは奥へ行くほど強くなり、すぐ近くにキラーパンサーの気配がした。

しかし、入り組んだ街並のような遺跡では姿が見えず、たまに上を飛び交うドラキーの影に怯える始末。

「おちつけ。そんなんじや彼を助けられないよ……」

リヨカは気合を入れるために頬を叩き、昆を握りなおす。すると、
「ぐるるるる……」

丁度真上から唸り声がした。リヨカはそれに気付いて振り向くが、
丁度光の差し込む場所であり、視界が遮られる。

「しまった！」

リヨカは翻りその場を飛びのく。キラーパンサーも片目を怪我しているせいで距離感がつかめならしく、その爪はリヨカの旅人の服と鎖帷子を引き裂く。

リヨカは翻り、距離を取ろうとするが、敏捷性、速度ともにキラーパンサーのほうが優れており、回り込まれてしまう。

「くっ！」

反射的に手にしていたものを投げるも、学習しているらしく、彼から視線を離さない。そして、ゆらりと詰め寄ると、一気に飛び掛る。

リヨカは壁に昆を突き刺し、右手で支える。キラーパンサーのア

ギトを防ぎつつ、胸元へ蹴りを放ち、さらに真空魔法で追い討ちをする。

「ぐるう！　ぐるう！」

打撃が通ることに光明を見出すリョカ。左腕にしていた青銅の盾を右手に構え、力いっぱい鼻っ柱を殴りつける。

「ぎゃうん！」

さすがに怯んだキラーパンサーだが、そのまま退くわけでもなく再び飛び掛らんと姿勢を低くする。

「ぐ……」

追い詰められる格好のリョカは、せめてもの抵抗と防壁魔法を幾重に掛ける。

「グアオオオオオオ！！」

しかし、せいぜい元の頑強さの数倍程度の補強に価値もないだろう。とりわけ、その鋭い爪と牙を見せられては、まず心が折られる。

「やあああああ！！」

突然、上から声がした。

光を遮り、一つの影が今まさにリョカに飛びかかるうとしていたキラーパンサーを横から蹴り飛ばす。

その一撃は近くの壁をぶち破る。

「な……うそ……」

目の前で起きたことにリョカは絶句する。

大型の四足魔獣を蹴り飛ばす脚力。土ぼこりから現れる青年のシルエットは、つい最近見たあの人と同じ。

「ボルカノさん？」

「ええ。お久しぶりです」

「いや、ついこないだも会いましたけど、貴方も参加していたんですか？」

「あ、いや、そういうわけじゃないんだけど、そんなところです」

「？」

背が高く、ヒラヒラした道着とその隙間から見える引き締まった

四肢。少し前に見たときよりもやや強そうな風だったが、それは目の前での戦果を見たからだろうか？

「一度、戦ってみたかったんです。四足の魔獣と……」

ボルカノは視線を壁の向こう、砂埃から現れる獣へと向ける。

「無茶だ……。いくら強くても……」

「そういつリヨカさんだつて無茶をしているじゃないですか？ 貴方に出来て俺に出来ない理由がないさ……」

一足飛びで飛び掛るキラパンサー。ボルカノは寸前でかわすも、今回は胸元をかすり、道着が破かれる。

「速い！」

驚くよりも楽しそうに言うボルカノは、壁を蹴り、キラパンサーの横つばらに鋭い蹴りを繰り出す。十分に警戒をされているせい、それほどダメージを与えられた様子もない。

「なら、これならどうだ……」

ボルカノは両足を肩幅に開き、腰を下ろし、両手を前に出す。

「まだ実践したことないけど……」

「ぐるぐるるるう……」

「一か八かで決めてみせる！」

「があ！」

飛び掛るキラパンサーにボルカノはそつと半身を引き、右足を踏み込む。

今まさに飛び掛ってきたキラパンサーの首の辺りに自分の肩口を当て、今度は左足を強く踏み込む。左足は石畳の床をぶち抜いた。「どっせい！」

掛け声とともに左足一本で立ちあがる。そのまま右手を掲げるように上げたときには、キラパンサーは数歩先の床にあお向けで叩きつけられていた。

リヨカが見えたのは、飛び掛ってきたキラパンサーが回転して、地面に伏せたところ。ボルカノがどんな魔法を使ったのかなど、見当もつかなかった。

「やつ！」

そして飛び上がり、首の辺りに蹴りを放つ。鈍い音がして、キラパンサーは動かなくなった。

「すごい……」

その一連の動作に、リヨカはただただ呆然としていた。

「師匠ほどじゃないですけどね……」

照れくさそうに鼻を掻くボルカノ。彼は肩を回し、首を鳴らす。

「いつもいつも、ありがとうございます」

リヨカは彼の腕の辺りに治癒魔法を唱えて労う。

「さて、それじゃあ帰りますか……。またピンチの時は、きつと助けに来ますよ……」

ボルカノは笑いながら言い、そつとその場を去ろうとした。すると、

「ぎゃーっ！」

「危ない！」

絶命したと思っていたキラパンサーの腕が急に振りかぶられ、ボルカノへと振り下ろされる。リヨカはそれを瞬間的に察知し、彼を突き飛ばす。

その爪はリヨカの背中、そしてボルカノの左腕を切り裂く。

「ぐ、まだ生きてるのか！」

ボルカノは再び構え直し、キラパンサーを睨む。

「しぶといな……」

リヨカは背中に受けた傷を癒しながら、壁伝いに立つ。

「まったく、どうしてここまで……」

例の不思議な水を傷口にかけながら、ボルカノは左腕が動くことを確認する。

「なるほど、魔獣を侮るなどはこういうことね……」

自嘲気味に笑うボルカノにリヨカは治癒魔法を唱える。

「ボルカノさん、逃げられますか？」

「心配はありません。俺は何時だって逃げる事ができる。けど、

貴方はそうはいかない。それに、こんな怪物を残していたら、いつかきつとこの地方に災いを残します。なんとかしないといけない」
片方の瞳を潰され、身体に無数の打撲を受け、一際でかいのがボルカノの首へのけりだろう。左前足を引きながら、それでもキラールパンサーは威嚇の唸り声を止めない。

リョカ達も装備を切り裂かれ、しばし痛みの残る身体で、何とか対峙する。

「アイツは手ごわい。戦闘中も学習しながら戦います。さっきの技はもう効かないかもしれない……」

「重心を見ればわかりますよ。警戒しているのか、中々飛び掛つてこない。それに、この腕じゃ、回転させるぶんばりが利きそうに無いし……」

「他に何か必殺技みたいのありますか？」

「男の子だし、そういうのには憧れますけど、どうにもこうにも……」

無駄話は余裕があると思いたい心の現われか？ 袋小路に阻まれた二人は絶体絶命であることには変わらない。

「ひ、ひい……！」

そんな緊張の中、悲鳴が聞こえた。小屋に隠れていた魔法使いが恐怖で錯乱したのか、出てきたのだろう。

「ぐるぐる……！」

するとキラールパンサーは目の前の強敵を無視し、男のほうへと走る。

「なっ！」

後ろを取られることすら顧みない謎の行動に、リョカは困惑してしまう。けれど、走り出すボルカノにつられ、急ぐ。

「お前の相手は俺だろう！」

ボルカノは小屋の屋根を走りながら、キラールパンサー目掛けて鋭い蹴りを放つ。それはまったく警戒されていないどてっばらに深くめり込むも、それでもキラールパンサーは男を指す。

そして、飛び掛り、鋭い牙を向ける！

「ぎゃあああー！」

観念した男は最後の断末魔と思える悲鳴を上げるも、寸前間に合ったリョカが昆を突き出す。その石突はキラーパーンサの顎を貫き、左頬を貫通する。

降り注ぐ生暖かい血しぶき、それでもその突進は止まらない。

「一对多数は気が引けるが、そうもいつてられないんだ！」

ボルカノはその横につくと、その場で反転すると、上半身を振り下ろし、両手で地面を突く。その反動を右の脚を振り上げに乗せ、キラーパーンサーの首を蹴り上げる。

鈍い音と、吹き飛ぶ四足。壁にぶつかり、それでも立ち上がるうとし、じりじりと前に進む。

「まだ、か……」

ボルカノはその一撃に集中しすぎたせいか、どっと疲れが押し寄せ、膝を突く。

「禍根を残すわけにはいかない……」

リョカは昆を手に立ち上がると、キラーパーンサーに歩み寄る。

「ゴメン。でも、僕らも必死なんだ……」

リョカはそれを振り下ろし、キラーパーンサーは一度痙攣したあと、動かなくなった。

満身創痍のリヨカとボルカノ。腰を抜かしていた魔法使いは、荷物の中から気付けのウイスキーを取り出し、二人に差し出した。

「すみません……」

きついアルコールの舌触りに咽ながら、神経が尖るのを感じた。

「いやいや、お前さん達のおかげで助かったんだ。これぐらいさせてくれ……」

「でも、一体どうして貴方のほうへ行つたんでしょ……」

「ん？ ん……」

突然の転身に首を傾げるリヨカに、魔法使いの服がもぞもぞと動く。

「お……、起きたのか？」

魔法使いの服の下からとんと降りてきたのは金色の毛皮に赤い鬣の、小さなキラパンサーだった。

「それは？」

「うむ、おそらくは、そいつの子供じゃろつて……。雌らしいしの……」

魔法使いは顎を撫でながら言う。

「この子らも危険じゃからのう。今のうちに殺してしまわないといけない。ただ、子供だとどうしても殺せないというか、なんというか……」

悩んでいる様子の魔法使いに、リヨカはかつての自分の姿を思い出す。

彼が今回の依頼に参加した一番の理由は、ガロンのことが過ぎつたから。

もし、ガロンが自分の手を離れ、人を傷付ける魔物と化していたら？

その決着をつけるつもりだった。

今回のキラーパーンサーがガロンでなかったことは彼にとって安堵できることだったが、一方で、その子供が居たことに、後悔に似た痛みがあった。

「子供か……。あの、もしよかったら俺にくれませんか？」

すつと立ち上がると、ボルカノが魔法使いの前に出る。ベビーパンサーは状況がわからず、ころころと床に寝転がり、甘えるように「にゃ」と鳴いていた。

「お前さん、魔物使いなのか？ いや、そうだとしても、ベビーパンサーは無理じゃろうて……」

「ええと、俺は違います。知り合いに魔物の扱いが上手い人がいて、その人に任せようかと……」

「ふむ……。まあ、恩人である貴方の頼みならきかんわけにもいかんし……。任せようかの……」

「ありがとうございます……」

「ボルカノさん……。僕からも言わせてください。ありがとうございます……」

「いえ、貴方のピンチには俺やアンリがついてますから……」

照れくさそうに笑うボルカノは、ひよいとベビーパンサーを抱えると、光を集め、そしてすつと飛び上がると、そのまま消えた……。

「さ、私達も出ますか……。脱出魔法、私は時間かかりますけど、できるのです……」

魔法使いは印を組み、念入りに詠唱をすると、リヨカの手をとり、光となって洞窟を出た……。

数名の犠牲を出してでの魔物討伐は、結果こそ成功といえるだろう。

けれど、詳細を聞いた庸兵達は、浮かない顔をしていた。

わが子を守る為に戦ったキラーパーンサー。その子供も殺したとの魔法使いの報に、なんともやりきれなさがあった。

リヨカも知らずとはいえ、母親のキラーパンサーを殺したことを
悩んでいた。

その子はボルカノに預けられて、どう育つのだろうか？

かつて、自分が辿った道に重なるベビーパンサーの境遇に、しば
し気持ちが沈んでいた……。

72 | カジノ

波打ち際、石ころ投げて夕暮れ時、リヨカはオラクルベリーのカジノに併設されている食堂で夕飯を食べていた。

本来なら今頃、サラボナへの定期船に揺られているはずだったが、久々の時化のせいで船が大幅に遅れているとのこと。暫くの間はオラクルベリーに留まらざるを得なくなり、財布の中身と相談を余儀なくされる。

マリアに預けていたお金のほとんどは修道院に寄付しており、それほど余裕はない。とはいえ足りなくなっただとしても、最近の魔物の活発さから用心棒の仕事は選り好みできるほど。帰りを心配する人もいないおかげで討伐クエストの依頼にも気兼ねなく受けることができ、それほど心配はなかった。

カジノの煌びやかな様相と、レースを見守る観客達の歓声を背中に、一人侘しく夕食を取るリヨカ。少し前まではヘンリーと雑談をしながらで、その前はマリアとロウソクを隔てての慎ましいもの。するととつとつと思いが蘇る。

かつて父とともにこの街に訪れたときのこと。

赤毛の勝気な女の子と夜の冒険に出たこと。そして、そこで出会った不思議な生き物。シドレーと名乗っていた彼は元気だろうか？ ガロンともども行方不明のまま、せめて生きていてくれたらと願うのは、父の非業の死を看取ったからかもしれない。万が一を考え、討伐クエストで「緑の羽トカゲ」や「キラーパンサー」の依頼があれば優先的に回してもらおうようギルドに頼んでおり、幸か不幸か、未だ彼らとの再会を果たせていない。

「ちよつと！ 今のいかさまでしょ！」

リヨカがそんな感傷に浸っていてもここはカジノ。客同士のイザコザは絶えず、今もこうして背後で男女が……。

「おいおいねーちゃん、おいらがいかさましたって証拠がどこにあ

るんだい？ なんなら調べてくれてもいいぜ？ ベッドの上で念入りにな」

続いて飛んでくる下卑た野次。

「むしろねーちゃんのが詐欺っぽいよな？ ケツの辺りとか、おっぱいの辺りとか、男をだまくらかすには都合がいいぜ？ なあ兄弟」

その声に男たちの笑い声が続く。

「な、なんですって！ ここまでの侮辱、赦せないわ！」

「お客さん、ここはポーカークーブルですぜ？ 揉め事はポーカークーブルでお願いしますぜ」

「そうだなあ……、ねーちゃんが勝ったらいかさまでもなんでも認めてやるぜ？ 代わりに、負けたらここでストリップショーだな」

「誰がそんなこと……」

「はっ、威勢がいいわりにもう怖気づいたか。ま、さっさと家に帰って旦那のチンポでもしゃぶってるのがいいわな」

そしてまた笑い声。

「なんか賑やかだなあ……」

リヨカはほうれん草のペペロンチーノを啜りながら騒ぎのほうを見る。もしこれがマリアの前ならきつとお行儀が悪いと叱られ、ヘンリーと一緒にエマに子供みたいといわれるのだろう。

「またアイツラか……。最近揉め事ばかり起こすんだよ……」

シエフは髭を弄りながらため息をつく。

「そうなんですか？ でも、ここくらい大きいカジノなら用心棒の一人や二人……」

「それが困ったことに、その用心棒がアイツラなのさ」

顎で示すのでよくみると、確かに胸元にオラクルベリーギルドのバッジをつけている。

「それはお気の毒に……」

「ま、係わり合いにならないことだね」

「そうですね……」

リヨカは残りのパスタをちゅるりと啜ると、食後の珈琲を飲む。

「上等だわ！ あなた達なんて丸裸にしてあげるんだから！」

売り言葉に買い言葉。けれど、そのフレーズでは逆に男達を喜ばせてしまう。

「はっはあ！ そりゃいいや。んじゃ早速勝負と行こうか？」

かくして始まるポーカー勝負。リョカは暇つぶしがてら、光の精霊を集めてその始終を見ていた。

「嘘、ありえないわ……」

女のハートのフラッシュに男はキングと八のフルハス。ストレートフラッシュならまだしも、ありふれた役にそれほど驚愕する必要はない。問題は、女の記憶違いがなければ男の手が成り立たないということ。なぜなら、少し前に捨てたはずのカードが再び男の手札にあるのだから。

このあからさまなイカサマにも関わらずゲームが進行するのは、ディーラー、ギャラリーの全てが女の敵だから。それに加えて彼女自身、お酒を飲んでいるせいか記憶に自信がない。

普段ならそんなへマをするはずもないのだが、苛立ちを抱えていたせい、小事が見えていなかったのだ。

「ほら、さつさと脱ぎな。それともドロップするかい？ 今なら俺の股潜るだけで赦してやるぜ？」

「くっ！」

あからさまな挑発に、女は気丈にもガウンを脱ぐ。

背中、胸元ともに露出の激しい赤のドレス姿の女に、観客から歓喜の声上がる。

これが社交界の幕間なら彼女も誇らしく胸を張るのだろうが、ここは平民の娯楽の場所。ステージの上で踊るシヨーガールを見つめる目線で褒められても嬉しくはない。

「さ、続きよ！」

「へへ、そうこなくっちゃ！」

勝気な女はディーラーにカードを要求し、男も啞え煙草をくゆらせる。

だが、勝負の行方は最初から決まっているのだ。運任せの一縷の逆転などあるはずもなく、女に配られるのはフラッシュを狙える程

度。対し男は、このゲーム三度目のジョーカー……。

「ズルはだめです。ゲームは正々堂々やらないと……」

不意に伸びた手が、男の腕ごとカードを場に伏せさせる。

「ちよつと！　なんでジョーカーがあるのよ？　これで三枚目よ！
？」

飲酒の影響があるとはいえ、ミニデーモンの描かれたカードを見間違っはすもなく、女は声を上げる。

「な、てめえ何者だ！」

けして細くない腕を逆手とはいえねじ伏せる青年に、男は油汗まじりに叫ぶ。

「まあいいじゃないですか。それより、ちゃんとルールを守って楽しく遊びましょう」

賭けの対象を考えれば遊びの範疇を越えているのだが、青年は諭すようにゆつくりという。

「この野郎！　おらっ！」

取り巻きの男が手近にあった酒瓶を片手に青年に振りかぶる。しかし、その気配を察知した青年はそれをかわして、リーダー格の男と入れ替わる。

ガシャンと大きな音を立てて酒浸しになる男と、血気立つ取り巻き達。

いきなり始まった乱闘騒ぎに、モンスター格闘場の観客達も集まりだす。

「このやろう！」

青年一人を追い掛け回す男達。けれど、すんでのところで足元を乱し、同士討ちを繰り返す。青年は汗をかいているが、軽いジョギングの後のように晴れやかな顔つき。対し、リーダー格の男は身体中に回ったアルコールのせいで全身真っ赤で息も絶え絶え。

女を質に取るうとした男は、裾を持った彼女のスタイリッシュな膝で幸せなる凶悪な一撃を受けて昏倒済み。

周囲は誰に味方するわけでもなく、声援を送る始末。

「もう、その辺にしてはどうでしょうか？」

そんな乱闘騒ぎにつかつかと歩み寄る者が一人。タキシード姿で白髪、モノクルと白手袋という一風変わった老人だった。

「げ、フレッド……」

女は舌打ちしながら青年の影に隠れる。

「まったくお嬢様も困った人だ。あれほど夜遊びは控えるように申しましたのに……」

「あ、あの？」

状況が読めない青年は背後に隠れる女の人にきよるきよるするが、彼女は何とか彼を盾にしようと必死になる。どうやら彼女の恐れの対象では、この老人のほうが荒くれ用心棒達より上らしい。

「もしお嬢様に何かありましたら、私は旦那様になんて申し上げれば……」

老人は彼女が脱ぎ捨てたガウンを拾い、埃を掃う。

「おや、君はもしかしてリヨカさんかな？」

老人の言葉にギャラリーからも幾人かが声を上げる。

「え、僕のこと知っているんですか？」

「オラクルベリーの名うての用心棒、リヨカ・ハイヴァニアといえは、ここいらでは有名ですよ」

「嘘、貴方があのリヨカなの!？」

女性はくるつとリヨカの前に立つと、その顔をまじまじと見つめる。

瞬きせずにじーつと顔を見つめる彼女。カールさせた睫に強気な猫目。整った鼻梁に煽情的な真っ赤なルージユ。唇はそれほど大きくなく、ややみ出していた。

健康的な褐色の肌と、おいたのせいでずれた肩紐の日焼けの残り。鎖骨にうつすらときらめく玉の汗に、リヨカは自然と唾を飲み込んでいた。

「まさかとは思ったけど、へえ……」

「えと、初めまして……」

名乗るつもりもないリヨカだったが、その場の雰囲気というか、それ以外に思いつかない。

「そう……。今も用心棒をしているの？」

「えと、今はどちらかという討伐専門です。でも、ちょっとサラボナのほうに用があつて……」

「サラボナに……。なら都合がいいわね。私はアルパカに行くのよ。ちよつとした商談があつてね。貴方、私のボディガードになりなさい」

「え？　でもアルパカじゃ船がないし」

「どうせサラボナ直行便はしばらく出ないわ。それにアルパカの西のレヌール港があるわ。そこからポートセルミに行けばいいでしょ？」

ラインハットで見せてもらった世界地図では、ポートセルミとサラボナは陸続きとなっている。途中山脈を越えての旅路で、陸商隊も多い。護衛の仕事を請けながらのんびりいくことも可能だろう。

「はい、決まり！　やっぱり私はついてるわ！　こんなところでリヨカに会えるなんて！」

「はあ……」

女性はフレッドと呼ばれた老人からシルクの手袋を受け取り身につける。

「ふふ、それじゃあ旅の門出を祝って祝杯ね。さ、行きましょう」

「ですがお嬢様、その前に……」

「……ごめんなさい、フレッド。あとよろしくね」

「お、お嬢様！」

女性は老人に申し訳なさそうに手を合わせるが、その後は何も無かったかのようにリヨカの手を引いてカジノを去る。騒ぎを聞きつけてようやくやってきた支配人は、老人と二言三言話していた……。

連れてこられたのはカジノの地下のビッブルーム。

大理石の重厚な壁と、調和のとれた照明、おくから聞こえてくるクラツシクといい、全てが階上のそれとは比べ物にならない。

靴越しに感じる絨毯の感触、そのしっとりとした光沢と品の良いワインレッド。せいぜい一角を切り取った程度でも、リヨカの全財産が吹っ飛ぶだろう。

リヨカはテーブルの席に案内され、対面に女性が座る。

彼女はなれた様子で「いつもの」といい、値段の書かれていないメニューを渡す。

「えっと、お酒は苦手で……」

「そう？　じゃあ私と同じなので……」

「畏まりました」

シックなスーツ姿の店員は軽くお辞儀をすると音も無く消える。

「あの、ここは？」

「ビッブルームよ？　ま、貴方みたいな人には縁がないと思うけどね。今日は特別よ」

「はあ……」

「でさ、なんで貴方、イカサマに気付いたの？」

「え？　ああ、それはこれ……」

リヨカは印を組み、手で筒を作ってそこに光の精霊を集める。

「レミアアっていうんだ。光の屈折を変えて遠くを見る魔法。太陽の精霊を使役するみたいなんだ。ほら、覗いてごらん」

手の筒を女性に差し出すと、彼女は興味深そうにそれを見る。

「へえ……。すごいわね。太陽の精霊なんてかなり古代の魔法じゃない？　よく知ってるわね？　いったいいくらしたの？」

魔法の習得には印を組む、詠唱や精霊文字などいくつかある。そのほとんどは口伝であったり、文書で知る必要があり、高位の魔法

や希少なものは秘匿され、高額で取引されることが多い。また、攻撃魔法などを年端もいかないものがみだりに唱えることの危険性から、初等火球魔法の使役ですら制限をつける国もある。

「これは友達に教えてもらっただ」

「友達？ その人って大魔道士とか？」

大魔道士とはかけ離れたイメージのヘンリーに、リヨカはぶつと笑ってしまう。

「何よ、人が真剣に言ってるのに……」

「いや、魔法を教えてくれたのはどっちかっていうと、やんちゃな人だから」

「でも光を操る魔法の文献って手に入りにくいだよ。私の妹がかなり魔法オタクで、そういうの集めるんだけど、太陽の魔法って東国からあんまり出てないみたいなのよね」

「へえ……」

世界を旅してきたリヨカにすれば、魔法にも地域が関わっていることは意外だった。もともと魔法使いの絶対数が少ないこともあったが、確かに寒い地方と熱い地方では、魔物の使うそれも変わってきたことを思い出す。

「ねえ、私も出来るかな？ さっきの」

「ええ、簡単ですよ……、印はこうして……」

リヨカは彼女の手を取り、印を組ませようとしてはっとする。

「すみません……。あの、詠唱のほうは……」

女性に対していきなり手を取るのには失礼だと気付き、真っ赤になつて手を離す。けれど彼女は余裕を持った笑いを浮かべる。

「印のほうがいいわね。便利そうだし、気付かれないように使えたほうがよさそうだし。ね、ほら教えてよ？」

女性は距離を詰め、リヨカにしなだれかかるようにして、彼の腕の中に入る。

「さ、どうするの？」

「え、えと……」

間近に感じる大人の色香を漂わせる彼女の雰囲気にはリヨカは呑まれていた。アップさせた髪と、小麦色のうなじ。日焼けがしづらいせいとお酒のせいでほんのり桜色に染まっており、汗でじっとりと湿っている。

先ほどは気にならなかったが、間近で見るとかなり大きなおっぱいにリヨカは生唾を飲む。しかも、彼女が印を組もうとするたびにふる、ふるつと揺れて、あわよくば見えてしまいそうになる。

「あ、あの、僕はそっちで教えますから、だから……」
おっぱいが気になってなどといえない純情なリヨカは彼女の手を払い、身体を離そうとする。

「あん……」
甘えた様子の彼女に手を引かれ、そのままソファに寝転がってしまふ。

「あ、あの……ごめんなさい……」

「なんで謝るの？」

「だって、こういうことしちゃ……」

男女の關係に疎いリヨカでもこの状況が清くないことはわかってる。そして、下半身に集まる血液と、それが彼女の膝を突くことも……。

「リヨカ……、すごいたくましい……」

見た目こそ中肉中背の彼だが、その下地は屈強そのもの。女性はその胸板を服越しに指先で円をかくようになぞる。

「あ、あの……」

「何？」

半眼で見つめる彼女に、リヨカは何も言えなくなる。

流し目で彼の挙動を制し、リップで大きくみせようとしている唇が何かモノ欲しげに開き、赤い舌で上唇を舐める。服のほつれから小指の爪を差し入れ、彼を引っ掻く。

「ん……」

それは痛みと一緒にじんわりとした刺激があった。脳裏を掠める

足掻きに、リヨカの視界がぼやける。

「ありがとう……」

音もなくやってきた店員に女性は礼を述べてグラスを受け取る。そして口に含み、その喉を鳴らす。

「ねえリヨカ……、貴方は……」

「あ、あの……」

にじり寄られるリヨカ。さっき見つめられたときよりずっと近くで見る彼女。赤く、濡れた瞳を見つめているとかなしばりにでもあったかのように動けなくなる。

以前にも似たようなことがあった気がするが、鼻の呼吸が辛くて頭が回らない。

ふーふー言いながら彼女から目を離せず、かといって行動にも出られない。

女性はもう一度グラスを口に含むと、リヨカの両頬に手を当て、そのままキスをする。

「ん……んう……」

リヨカは彼女の目配せに目を閉じる。代わりに口を開き、喉を鳴らして乾きを癒す。

「く……」

「んふ！」

強気な彼女の柔らかな微笑みに、リヨカはぼかんと呆気にとられる。

「どうしたの？」

「いえ……。貴女みたいな綺麗な人、初めて見ました……」

女性を口説くスキルの乏しいリヨカの素直な言葉に、女は一瞬目を丸くして、にっこりと笑う。

「よいしょっと……、はい、立って」

おもむろに起き上がると、リヨカにも立つように促す。

「はい……」

まだ恍惚が抜けないリヨカは彼女の真意がわからず半身を起こす。

「ふふ」

「あ、あの……」

胸が高鳴り、気持ちが逸る。彼女とは明らかに住む世界が違う。今こうして唇を重ねたのもきつと気まぐれにすぎないのだろう。それは理解している。けれど、理性でどうにもできないものがある。リヨカは彼女の手を握り締める。力強く握れば痛いはずなのに、彼女はそれを拒む素振りも見せず、代わりにもう一つのグラスを取り

……、

「わっ！」

リヨカの顔にかけた。

「私はアルマ。アルマールジュエルの女社長。覚えておきなさい」

「え？ あ、はい……」

アルマは先ほどとはうって変わって苛立った様子で立ち上がると、すたすたとその場を後にする。

いまひとつ状況がつかめないリヨカは、アルコール塗れの身体で、何が彼女の怒らせたのか、真剣に悩む。

「ほら、さっさとくる！」

「は、はい！」

またも逆らえない命令に、リヨカは自然と身体が動いていた……。

75 | 寄り道

オラクルベリーを出発し、アルパカを目指すアルマ一行。

ギルドから二人の従者と馬車を借りての往路、先頭に行くのは経験の深いリヨカだった。

豪華な馬車に荷物は少なく、大きな真鍮製の鞆がいくつも見えるだけで、ゆったりとしたスペースがある。

陸商隊の馬車なら零れるほどに積荷を抱え、中で寛ぐなどというスペースはなかった。もつとも、その隙間は雇い主のアルマとフレッドの場所である。

「……私はお嬢様の身を案じてのこと、けして愛想が尽きて申しているわけではありません。ですが、これからは何かを決める時は必ずこのフレッドに相談をして欲しいのです。今日までの十五年、お嬢様のオシメを取り替えたことも昨日のことのように覚えております。私は常にお嬢様のこと第一に考え、こうして粉骨砕身、誠心誠意仕えております。ええ、信頼は欠片一片たりとも揺らぎません。だからこそ、なんの相談もなかったことが悲しくて悔しくて……」

「はいはい、わかったわ……。もうフレッド、最近小言が長くなってきたわよ？ ……いい加減年かしら？」

今朝からアルマは、従者のフレッドに小言を言われていた。泣き落とし中心の彼の小言にうんざりといった様子の彼女。リヨカはまるでじゃんけんのようなものだと考えていた。

昨日はアルマの手配した豪華な宿で寝を取った。今朝もボリユームこそ少ないものの、味、栄養、バランスのよい朝食を用意される。もつともアルマは昨日から引き続き不機嫌で、気がつくとか何か言いたそうにリヨカの顔を睨んでいた。

「もう少しで平原を抜けます。ここを越えると林道になりますので、早めに休憩をしましょう。林道付近は魔物も多くなりますし、馬を休ませたいんです」

西の空を見上げるリョカ。暗い雲がまばらにあり、暫くすれば通り雨に遭遇するだろう。雨の中、林道を行きさらに魔物に遭遇する危険を避けたいリョカはそう提案する。

「ちよつと、何をのんびり言ってるのよ。私はさっさとアルパカに行きたいのよ!？」

「もう直ぐ雨が降りますので林道近くの大樹の下でやり過ごします。それに林道が湿った状態だと轍がぬかるみに取られます。遠回りになります。迂回を提案します」

「だーから、私は急いでるの! なんとかならないの?」

その提案に真っ向から反対するアルマに、リョカは被りを振る。

「急ぐからこそその遠回りです」

「お嬢様、ここはこの青年……リョカ殿の言うとおりですぞ。急いでてはことを仕損じる。この前の取引もお嬢様の短気のせい……」

「でも、その後の取引ではしつかりまとめたでしょ? 何事も速攻よ、スピード第一、慎重は二番」

ふうつと頬を撫でる西の風。リョカが空を見上げると、足の速い雲は既に林道の頭に差し掛かっている。

「皆さん、急ぎましょう。あの大樹の下まで早く……」

リョカはまだ言い合うアルマとフレッドを他所に二人の従者を促す。リョカのギルドでの経歴を知っている二人は頷くと、馬を急がせた……。

* * * * *

本降りになるまでに避難できた一行。五メートル先も見えない土砂降りを大樹の下で凌ぎながら、固めに焼いたパンと干物で早めの昼食を始めていた。

「さすが経験者は語るって奴ね……。まるでお天気お姉さんね。でもこの雨、いつ上がるのかしら?」

しみじみというアルマは従者達とは別にハニートーストを齧って

いた。

「アルパカ平野は通り雨が多いんです。ですが、一過性なんですぐにやみますよ。ただ、林道はあの通り無理ですけどね」

林の間の道では、雨垂れにうがたれて土が跳ねている。比較的軽いつとはいえ、馬車が行けばどうなるかは目に見えている。

「でも、草原だってべちよべちよじゃない？ それに結構生い茂ってるけど、車輪がとられちゃったりしないの？」

「草原は大地に根を張っているおかげでぬかるみになりにくいんです。それにこの馬車は車輪が太いので丈の深い草でも取られにくいです」

「へえ、良く知ってるのね」

「ええ、昔父さんと旅をしていたときに教えてもらいましたから」

「ふうん。で、お……、そのお父様は？」

「えと……」

リヨカは言いにくそうに頭を掻くと、丁度良く日が差し始める。すると先ほどまでの雨が嘘のように晴れ上がる。

「よし、行きましようか。アルマさん、急ぐんですよね？」

「え？ えつと……まあそうだけど」

「それじゃ行きましよう。明日の夕方までには着きたいですし……」

リヨカはパンくずを払いながら立ち上がり、馬車へと走る。その後ろでは、アルマがどうもはぐらかされたと、手を腰に当て、ふんと鼻を鳴らしていた……。

アルマ一向の旅は順調で、次の日の昼過ぎにアルパカへとたどり着いた。

街が見えてきたこともあって昼食を遅らせており、従者二人は馬車を繋ぐと食堂へと一目散に走った。

「それじゃあ僕も……」

リヨカは自分の荷物を小脇に抱えて食堂へ行こうとする。

「待ちなさい」

しかし、それはアルマによって止められる。

「貴方は私と一緒に来なさい」

「え？」

「フレッドは宿の手配に忙しいの。この鞆を持って」

「はあ……」

アルマの数少ない荷物である真鍮製の鞆を抱えるリヨカ。見た目の割りに重くなく、持った感じで中が空洞でないことがわかる。アルマはリヨカに社長と名乗っていたから、何か商売に関わる道具なのだろうと、振らないように丁寧に抱えることにした。

二人は街の外れにある鋳物工房へと向かった。

そこでは頭に手拭を巻きつけ、額から汗を振りまきながら炉に向かう青年がいる。炉の窓からは赤い火が揺らめいており、煙突からは煙がモクモクと出ている。

「ごきげんよう。ドルトン親方はおりました？」

アルマの声に青年はぱつと立ち上がり、直立してお辞儀する。

「お客様ですか？ 今、親方は留守にしておりますので、中でお待ちください」

「あら、親方さんは不在なの？ 予定より早かったかしら？」

アルマはバッグから手帳を取り出して頷く。

「そうね、でも……」

促された小屋の中はお世辞にも片付いているとはいえず、鋳物に使う道具や、材料となる鉱石やガラスの塊が散らばっている。

「お仕事のほう、見学させていただきますわ」

にっこり微笑むアルマに青年は見とれた様子でしばし呆然となり、目に染みた汗でようやく現実に戻る。

「は、はい、がんばります！」

容姿、スタイルともに抜群のアルマの穏やかな微笑みと優雅な態度だけを見れば、その青年の態度も頷けるというもの。リヨカは女性というものが少しわかったような気がした。

頭にタオルを乗せたドルトンがやってきたのは、その十数分後。

一仕事終えて、街の宿で風呂を借りていたらしい。

「初めまして、ドルトン親方。わたくし、アルマールジュエルのアルマ・エドガーと申します」

ワンピースドレスの裾を持って軽く会釈するアルマ。リヨカは変われば変わるものだど、感心してしまう。

「おお？ あんたはもしか……」

「ええ、アルマールジュエルは若輩ながら、いまや世界の宝石界の最先端を行いますから、お耳にされておりまして、光栄ですわ……」
アルマはドルトンの態度にプライドをくすぐられたらしく、嬉しそうに胸を張る。

「いやあ、懐かしい。リヨカ君だろ？ 何年ぶりだい？ 十年か？」
だが、ドルトンは彼女の脇をすりぬけてリヨカに歩み寄る。彼の手をとり、バンバンと背中を叩き、嬉しそうに笑う。

「親方、十年は言いすぎですよ。せいぜい四年です。それより元気そうで何よりです」

「ああ、あのくそったれラインハットの野郎達が村に来たときはび

びつちまったが、なんとかこうして逃げたのよ。今はちっこいながらもこうして工房作っただけだな」

がははと豪快に笑うドルトンに、リヨカはつられてわらう。

「……ちよつとリヨカ、貴方ドルトン親方と知り合いなの？ ならなんで最初に教えないのよ？」

まったく無視されたことと、旧知の間だと知らされていなかったことでアルマはご立腹らしい。

「アルマさんがドルトン親方に用があるなんて知らなかったから……。それに、ここに親方がいるなんて……。そうだ、親方はいつからここに？」

「うむ？ ああ、そうさな。一時は山奥の村で兄貴の世話になっていたんだけど、アイツとは創作の方向性が違うからな。ちくちく編み物なんてちまちましたことやっつてられねえっての。やっぱり俺は炎を前にしてとんでんかんこんやつてるほうが性に合うわけ。それに仕事道具ほっぽりだしとくのも気持ち悪いし、戻ってきたわけさ」

「へえ……」

「んで、パパスさんはどうした？ なんか色々変な噂があったけど……」

「ええ、父はその……、亡くなりました……」

「「ええ！？」」

リヨカの言葉に二人は声を揃える。

「僕を助けるために……」

パパスの死はラインハットでの政変に関わるものであり、リヨカ自身、旅人でしかない父がそれに巻き込まれたのか理解できずにおり、下手に話すことができない部分がある。

「そうだったの……」

「ふむ、パパス殿が……、惜しいことを……」

その口ごもりを「辛い記憶を話したくない」と解釈してくれたらしい二人に、リヨカは詳しい経緯を省く。

「ええ、今は父さんの遺言でサラボナに届け物をする必要があります」

す。そうしたら一度、父さんが住んでいた国に行こうかと思いき
て……」

「そうね。そういうのは大切よ。うん……」

「うむ。リヨカ君も立派な青年になってるし、こんな綺麗な嫁さん
連れてんだ。パパス殿だつて浮かばれるさ」

「嫁？」

「あ、あの、僕とアルマさんは……」

ドルトンの勘違いにアルマとリヨカは真っ赤になって聞き返す。

「違うのかい？ てつきり……」

「違いますわ。リヨカは私のただのボディガード。そうね、専属
で雇つてあげてもいいけど……」

ちらりとリヨカを見るアルマに、リヨカは頭を掻く。

「それはちよつと……」

「なによ。不満でもあるつての？」

「ええと……」

問い詰められると押し切られそうな雰囲気のあるアルマ。美人で
優雅な彼女を伴侶と間違われるのは男の自尊心をくすぐるものがあ
る。けれど、リヨカも自分がそれに不釣合いと自覚している。用心
棒、庸兵のような流れの旅人と女社長。あきらかに住む世界が違つ
のだ。

「それよりアルマさん。親方に用事というのは……」

「あ、そうだ！」

その言葉にアルマはぱんと手を合わせ、ドルトンに向き直る。

「ドルトン親方、わたくし、アルマーユジュエル社長のアルマと申
します。この度は親方の腕を見込みまして、ガラス細工のデザイン
をお願いしたくて……」

「ガラス細工？ あんたんとこ、ジュエルつてんだから宝石じゃな
いの？」

「ええ。ですが、最近お得意様から注文が入りまして、夏に相応し
い涼しげな花瓶を所望されました。私も商売がら信用第一、とび

きりの一級品こそ提示したいと思い、色々腕の立つ職人を探しておりました。そんな折、山奥の村で小さいながらも精巧なガラスの花瓶を見つけましたわ。ガラスに色をつける技法はいくらもありませんが、その濃淡をつけるのは作家の息遣いが成せる技。藍よりいでし青が徐々に夕日のような橙へと変わる様はまさに天才、神の領域でした。それを作ったのはかの天才織人ツルトンの弟、天才鑄職人ドルトンと聞き、私、居ても立っても居られず、こうしてサラボナの地より参りましたの……」

「よせやい、天才なんて……」

アルマの長口上に気を良くしたらしく、ドルトンは胸をはるどころか仰け反りながら照れ笑いをする。

「きつとドルトン親方様ならば、どんな目の肥えた鑑定士でも価値を付けられない、そんな至高の一品を作りえるでしょう。どうか、お力を……」

ふかぶかとお辞儀するアルマに、リヨカも雰囲気に吞まれてお辞儀する。

「ふむ。まあそうだな……。そんだけ言われて引き下がるったあ、職人の腕が武者震いってもんだ。しょうがねえ。いっちょわがままな姉ちゃんのために一つ作ってやるうか？」

「はい！」

アルマは満面の笑顔でドルトンの手を握ると、リヨカから鞆を受け取る。

「問題の花瓶なのですが、依頼主様の希望の模型を作ってまいりまして……」

切り株に腰掛け、膝の上で鞆を開けるアルマ。粘土で出来た花瓶を取り出し、ドルトンに渡す。

その花瓶は粘土細工にしてはかなり細やかな出来であり、ドルトンも「ほお」と感心した様子で頷く。

「ふむ。この宝石は？」

粘土細工に一際光を放つようにカッティングされたダイヤが埋め

込まれていることに気付き、ドルトンはアルマに尋ねる。

「ええ、依頼主様の誕生石であるダイヤを埋め込む予定でして、親方様にイメージしていただくためのイミテーションです」

「こりやまた成金趣味だ。となると、宝石が嫌味にならない程度にしあげろってことか……。たかが石ころの紛い物のガラスでそんなもん作れとか、こりやかなりの仕事になりそうだ……。あんだ、払えるのかい？」

にっとドルトンはアルマを見る。彼女は一切笑いを含まない真剣な顔でメモに数字を書き、見せる。

「はい、非情に難しいお仕事ですので、報酬もそれなりに勉強させていただきます。この程度を予定しておりますが……」

渡された紙に目を通すドルトンは頷き、腕を組む。弟子もひよいと顔を出してそれを覗き込むが、驚いた様子で指折り計算をしだす。「う……うむ。まあいいだろう。この程度の仕事だ。まあ、それなりに……うむ……」

明らかに動揺しているドルトンだが、弟子と小娘を前に鷹揚に構えたらしい。リヨカはその様子を見て噴き出しそうになったが、それを悟ったアルマにお尻をきゅっと抓られた……。

「ふふ、ドルトン親方ったら無理しちゃって……」

宿への帰り道、リヨカは噴き出していた。

二人を見送る親方と弟子の態度は、普段使わない敬語がちくはぐに使われた愉快なもの。それだけアルマの提示した金額が彼らにとって破格であったのだろう。リヨカは二人の小心ぶりに堪えることができなかった。

「あら？ 私は親方の顔を立てたのよ？ 感謝してもらいたいわ」

「でも、一体いくらなんです？」

「んー、十万ゴールドかしらね？」

「じ、十万!？」

とはいえ、リヨカの脳内ソロバンも庶民仕様。オラクルベリーの
二等地なら家が土地ごと建つ値段に唾然としてしまう。

かつてヘンリーから「サラボナの通貨単位はオンス」と言われた
ことを思い出す。

「ガラス細工つていつでもそれなりにするのよ？ あのドルトンさ
んの作品……つていうか、あの兄弟の作品つてどれも伝説的な価値
があるし、美術館にも飾られているわ。てっきりもつと吹っかけら
れると思ってたけど、安くついちゃった」

媚びるように首を傾げてにこつと笑うアルマ。その少女っぽい仕
草の彼女もまた、万単位でゴールドを動かす程度の力があるわけだ。
リヨカはその笑顔に恐怖に近いものを覚えた……。

77 | 身分違い

豪華な馬車の式台に寝転がり、空を見上げるリヨカ。

フレッドの手配した二等寢室を断つたのは、なにも二人部屋だからではない。かつての淡い恋と、最近失った気持ち故。

リヨカは意外とセンチメンタルな自分に驚きつつ、毛布に包まる。「もう、せつかく宿を手配してあげたのに、どうしてこんなところにいるのよ」

月を遮り、顔を出したのはアルマ。リヨカは寝転がったままでは失礼と起き上がり、彼女の席を作る。

「ええ、この宿はちよつと辛い思い出があつて……」

「ああ、お父さんのこと？」

リヨカを気遣うように声のトーンを下げるアルマ。ゆつたりとしたネグリジエ姿で、彼に手を引かれて荷台に上る。

「そうじゃないけど……」

「じゃあ失恋とか？」

「え？　なんで……」

「嘘、ホント？」

図星を突かれたリヨカと、冗談のつもりだったアルマ。互いに目を見合わせたあと、くすつと笑い合う。

「ま、そういうこともあるでしょ。うんうん」

「ひどいな。結構傷ついたんですよ、これでも」

「失恋は新たな出会いのチャンス。きつとステキな出会いがあるから、元気出さないよ」

「はは……もしかしてアルマさんとの出会いが、そのステキな出会いかもね……」

「え！？」

リヨカも返す言葉の冗談のつもりで言ったのだが、アルマは股も驚いた様子で口で手を覆う。

「あはは、冗談ですよ。僕みたいな旅人と宝石会社の社長さんじゃ身分が違いすぎますよ」

「ええと……」

「あはは……」

膝を抱えて足の爪を弄るアルマ。彼女は赤が好きらしく、マニキュアは深みのある赤で統一されていた。

細く長く綺麗な指はいつも手袋をしているせいか、肌よりずっと白く見える。変に節くれだち、タコのようなものもみえる。

「イタツ！」

板のささくれたところが彼女の指先を刺し、赤い点を作る。

「いったい……もう……」

ぺろっと舐めるアルマだが、リヨカはその手を取り、簡易の詠唱を施す。

「ちよつとリヨカ、そんな大げさな……」

「じつとして、棘が刺さってるかもしれないから……」

リヨカは自分のリュックから爪きりを取り出し、手に当てる。ぐつと押し当て、細く見えにくい棘を抜く。

「ありがと……。別に舐めておけば治ると思うけど……」

照れくさそうにいうアルマだが、指先を見つめて満足そう。

「アルマさんは手が重要な仕事をしてるんでしょ？ 棘が刺さったままだと気になりますよね」

「へえ、よくわかったわね。あそっか、宝石商っていつてるしね。

デザインとかカットもしてるわ」

「ええ。それに手袋いつもしてましたよね。それに見慣れないタコが手に出来てましたし……」

「そうなのよ。これ嫌になるわ！」

リヨカの指摘に彼女は手を広げて、唯一醜くみせる人差し指の付け根を見る。

「ね、リヨカはこういう手、嫌い？」

「え？」

「やっぱり女の人の手って綺麗なほうがいいの？」

一般論で言えばそうなのかもしれないが、これまで共に暮らしてきたマリアの手はそうはいえなかった。奴隷の日々もそうだが、パン屋の受付と実際の悪いリヨカと代わっての水仕事でかなりあれていた。日々リヨカを支えてくれたその手を、当然彼が嫌いになれるはずがなかった。

「何かを一生懸命しているってことはすばらしいと思います。僕はただ綺麗な手よりも、こういう手のほうが……」

かつてを懐かしむには華奢で綺麗な細指だが、自らの経営する宝石店を背負う過酷な指先に、リヨカはしみじみと眺めていた。

「そう……、そう……」

アルマはその答えに満足そうに頷き、リヨカに自分のあまり好きではない、それでも誇れる指先を見せていた。

「あ、ごめんなさい。なんか僕、本当に失礼ですね……」

リヨカは彼女の手を取り、握っていたことに気付き、手を離す。またこの前のようなことになってはかなわない。

「んーん、別に……」

アルマはリヨカの手を握り返し、そつと視線を落とす。その弱い力を受け、リヨカは自然と握り返してしまう。

黙す彼女の思うがままということを理解したうえで、どうしてか握り返したくあり、彼女が何も言わないのをいいことに、そつと距離を詰める。

あの日、アルマがどうして怒ったのかわからないが、何か失礼なことを言ったのかもしれない。

不思議なのは、彼女からのキス。酔っ払っての一夜のお遊びにしては、彼女の瞳が雄弁だった。過信、自惚れではなく、リヨカという個人を求めているような強い眼差し。

もしかしたら本当に彼女との出会いは運命なのかもしれない。

「ね、リヨカはサラボナに行ったらどうするの？ グランバニアに行つて、その後は？」

「まだ全然決めていません。でも、父さんは僕に母さんを探して欲しいって……」

「お母様？」

「ええ、僕が小さい頃に魔物に攫われたって……」

「そう、かわいそうに……」

「でも、僕はお母さんのこと、あんまり覚えていないんです。だから、実感が湧かなくて……」

「かわいそうに、リヨカ……」

アルマは手を解き、リヨカの肩を抱き寄せる。彼をその豊満な胸で受け、そつと背中を撫でる。

「アルマさん？」

「私も孤児だったけど、私を愛してくれる父さん、母さん、それに口やかましい妹がいるからね。だから平気。でも、リヨカはお父様もお母様も……」

「僕は……」

平気と言いたい。けれど、何も言えない。父を失い、知らない母は何処、幼心の恋も、青年に宿る苦い気持ちも全て失い、リヨカの中には寂寥感のみが満ちている。

アルマの柔らかさと甘い香りを感じながら、リヨカはこのまま彼女にうずまりたい気持ちがあった。

「アルマさん……」

彼女の手が彼の首筋をくすぐったとき、押え切れない気持ちから、リヨカはアルマを押し倒していた。

「リヨカ……」

さりとして驚いた様子もなく、彼の好きなようにさせるアルマ。手を彼の胸にあて、抵抗するわけではなく、そのたくましさを楽しむように弄る。

「アルマさん……」

アルマを見下ろすリヨカは、ごくりと唾を飲み、そしてゆっくり彼女の唇を目指す。アルマもそつと目を閉じ、唇を突き出し……。

「うおっほん！」

ばつと身体を離す二人。アルマは手近にあつた毛布で身体を覆い、リヨカは何も持つていないにも関わらず、手を後ろに隠す。

「お嬢様が居ないと思つて来てみれば……。まったく婚前のうら若き乙女が夜遅くに殿方の寝所を尋ねるとはどういう見ですか！？」

それにリヨカ殿！ 貴方も出会つて間もない女性を押し倒すなどとなんと破廉恥な！ 私は職業差別をするつもりはありませんが、せめて段取りを踏んでからになさい。お嬢様とお付き合ひがしたいのなら、小さくとも居城を持ち、安定した収入と財産の構築、人徳、教養の修士に相応の品位、マナーを持つていただかないと……」

「もう、フレッドつたら最近いつもこうなのよ。この前だつてわんさかお見合い写真もつてきてさ……。どれも金持ちのぼんぼんばかりで嫌になつちゃう」

アルマはまたこれだとばかりに両手を挙げて舌を出す。

「リヨカ殿。貴方の武勲は私も聞いております。かのラインハットの内紛にてアルベルトと共に邪悪を制した英雄。確かにすばらしい。失礼ながら立ち聞きさせていただきました。貴方は未だ旅の途中にある。こう申し上げるのは少々恥ずかしいことではありますが、お嬢様はとても難しい、じゃじゃ馬でございます。よく言えば行動力の塊でして、おそらく伴侶として男性に尽くす女性にありません。きつと貴方の目的を果たす上で枷になるでしょう。それはお父上にもお嬢様にも片手間な状態となりませんか？ もし、貴方が本当にお嬢様を欲するのであれば、まずはお父上との約束を果たし、居城を構え、財貨をなし、私を納得させ、さらには旦那様の了承を受けるのが筋でございますよう」

フレッドの長話にリヨカは啞然としながら、ただただ頷く。先ほどは勢いで彼女を求めてしまったが、もし本当に彼女を欲するのであれば、前途多難といえるだろう。もしかしたら母を捜すことよりも、この老人に認められることのほうが難しいかもしれない。

「それにお嬢様。本当に私は情けない。お二方姉妹のお世話をさせ

ていただきましたが、どうしてここまで違うのか不思議でなりません。妹君は本当にしとやかで教養に富み、淑女としてのマナーを普段から心がけ、許婚のアンディ様とも仲良くなさっております。それに対し、お嬢様は冒険だ探検だと連れ出し、許婚であったリベル様からもご破談を申し入れられ、本当に悔しくて、情けなくてなりません」

「だって、私ああいうキザったらしい人嫌いなのよ。それに一日お家に帰れない程度で泣いちゃうような人じゃ、私には釣り合わないわ」

「だまらっしゃい。たしかに彼ではお嬢様の伴侶は務まらないかもしれせん。けれど、お嬢様が振られるような屈辱、わたくしに耐えられましようか？」

「そうはいつでも、この前の商談だって結構馬鹿にされてたじゃない。女なんかと仕事ができるかってさ」

「けれど、最後はお嬢様のすばらしさをご理解いただけました。そもそもお嬢様の普段の態度が先方の不信感を煽ったわけでして、やはりここはお嬢様に自重をしていただかないといけません。つきましては今回のお仕事の完了後、今一度海辺の修道院にて花嫁修業を再履修していただきます。旦那様からもそのことに関して、しっかり許可をいただいておりますゆえ……」

「ちょ、それは困るわ！ あんな退屈なところに押し込められるなんてまっぴらよ。それだけは勘弁して……」

「でしたら……」

にやりと笑うフレッドに、アルマは拝み倒す。

「わかったわよ。ちゃんと振舞うから……いま少し猶予を頂戴。ね？」

どうやら老人のほづが一枚上手ならしく、アルマはリヨカの手を名残惜しそうに握ったあと、小さく「ゴメンね」と言い、宿に戻った。

リヨカは暫く、彼女のぬくもりが残る手を胸に当て、高まる気持

ちを抱いて目を閉じた……。

78 たかまる気持ち

翌日、仕事を終えた従者の二人はフレッドから賃金を受け取り、次の仕事を求めてギルドへと向かった。

アルマとフレッドはドルトンの仕事の進捗如何でアルパカに留まるつもりらしい。

「さてと……」

リヨカはというと、サラボナを目指すべく、レヌール西の港への出発準備をしていた。

「あら、リヨカ、そんな準備なんかしちゃって、どこか行くの？」
すると、朝食を終えたアルマが地味なパンツルックでやってくる。普段は上流階級らしく煌びやかなドレス姿だが、アルパカのような田舎町では浮いてしまいがち。もともとおしとやかな性格でもらいく、今の姿のほうがずっと自然な雰囲気だった。

「はい、僕はこれからレヌール西の港へ向かって、それからポートセルミへ……」

今回の仕事はアルパカまでの護衛。リヨカとしては心残りがいくばくかあるものの、剣の不思議な重さに父の遺言の重さを重ねてしまふ。

「そう？ ふうん……」

「アルマさん、その……、昨日はごめんなさい。あんなことをして……。アルマさんを診ていたら我慢ができなくて、いえ、こないだ訳をしてもしょうがないですけど、不思議と気持ちが抑えられなくなっ……」

「決めた！」

昨日の暴拳を恥じるリヨカ。出発までに一言謝っておきたかった彼は、とつとつと話しだす……。が、思いついたアルマはポンと手を叩き、それを遮る。

「はい？」

「私もポートセルミに行くわ」

「え？」

「さつきドルトンさんに工程を聞いたんだけどね、結構かかるみたい。かなり難しい形状だから、いくつかサンプル作ってみないと満足いくものが作れないからってさ……。その間この街にいてもやることないし、一度事務所に戻って色々整理したいことあるし。リヨカが護衛についてくれるなら安心でしょ？」

「え？ え？ え？」

アルマの提案にリヨカは驚きを隠せない。気持ち、嬉しい反面、昨日のことを彼女が胸捉えているのかはかりかねてしまう。そして、自分自身、どうしたいのか、どうするべきなのか、それがわからなかった。

「いけません、お嬢様！」

さらに遮るのがフレッドの一喝。

「わがまま放題を多少は見逃してきましたが、今日という今日は許しませんぞ。お嬢様には縁談、お見合い、数多と申し込まれているのです。私としてもお嬢様がステキな伴侶を見つけるまで、死ぬに死ねません。この機会にどうかサラボナへ戻り、お見合いをですね……」

「そうは言われてもフレッド、私も忙しい身分だし、今度何時ポートセルミに寄れるか判らないわ。確かお孫さん二才になるそうね……。可愛い盛りだと思っけど、次に会う時はきつと口も達者なフレッドみたいになってるかもよ？」

「私の孫に限ってそのようなことはありません……」

「どうかしら？ でも、きつと会いたがってると思うわ。フレッドおじいちゃん、だーいすきなんて言っていたり、さびしいなあなんて……」

幼子の声色を使うアルマに、フレッドはしばし考え込む。

「わかりました。ですが、お見合い冊子にだけは目を通していただきますぞ……」

さつと取り出す辞典と思えるほどの冊子に、リヨカもアルマも一歩退いてしまう。

「いい……、あはは、わかったわよ。船で暇つぶしがてら、見させてもらおう……」

そうこうしているうちに、リヨカの護衛任務の延長が、なし崩し的に決まっていた……。

レヌール港を出発して二日と半日揺られたら、そこはポートセルミ。今も荷物持ちと化したリヨカは真鍮製の鞆を片手にアルマについていく。

西国へくるのは久しぶりで、東国のやぼったい田舎な雰囲気と違い、町並、人波、どれをとっても洗練されたようにみえた。

レンガ造りの道を行き、路地をいくつか曲がってたどり着いたのは、小さなお店。ショーウィンドウにはクローズとあり、並べられたイミテーションには布が被せられていた。

「ここよ」

「え？ ここ？」

想像していたというか、アルマの不遜な態度からするとかなり小さいせいか、リヨカは交互に彼女とお店を見つめてしまう。

「そうよ。意外？ もっと大きいと思っただ？」

「え、ええ……」

「ふふ。そうよね……」

アルマはリヨカの反応を楽しそうに笑った後、裏口のドアから入る。

裏口のドアを潜ると、表の店の規模よりずっと広く、何に使うのかわからない工具が並んでいた。

「え？ え？」

再び驚くりヨカ。宝石店というからにはもっと小奇麗で整ったも

のを想像していたが、実際はいかつい工具の溢れる場所であり、素人目にもかつて見たドルトンの工房の数倍の設備が見える。

「ウチは基本店売りしていないの。表の店はオマケみたいなものね。普段は直接お得意様から依頼を受けて、ここでこうしてとんでんか
ん……」

アルマの手にあつた不自然なタコは、ここでの作業のせいだろう。煌びやかな表の雰囲気の中で、研磨剤の油に塗れた仕事をしていると思うと、ただわがままなだけではないと思えてくる。

「今回の依頼は私だけじゃ無理だったからドルトン親方に頼んだんだけどね」

舌を見せて笑う彼女に、リヨカは昨日とは違う、暖かなざわめきが胸に起こる。

「アルマさん……」

リヨカは荷物を抱えながら彼女に歩み寄り、ふと手を差し出していた。

「ん？ なに？」

「あ、いえ……、荷物、どこに置けば……」

「えっと、そうね、また直ぐに旅に出ると思うし、ひとまず入り口脇に置いて」

「はい……」

リヨカは言われるままに入り口に荷物を置く。しかし、その心境は荒波がごとく揺れ動いていた。もし彼女がそっけなく応えなかつたら、リヨカは胸中の気持ちを理解せず、それに流されて求めていたかもしれない……。

夕暮れ時、ポートセルミの酒場のカウンター席で、リヨカは珍しくアルコールを頼んでいた。

アルマが仕事を始めたのをみて、リヨカは今日の宿屋を探しに街に出ていた。今後の旅銀を考えて外れの寂れた宿屋にチェックインしたあと、ものめずらしさに誘われて街のバーへ来たのだ。

わがままなお嬢様の護衛も今日でおしまい。明日にはギルドで陸商隊でサラボナ行きの仕事をお願いする予定。航路が海路に変わっただけのこと。

けれど、彼女と過ごした数日間、リヨカは心残りを感じていた。それを細かく分析していくと、最後には必ずアルマと別れたくないという気持ちになる。

正直なところ、リヨカは彼女をよく知らない。どんな女性で、何を好み、何を楽しみ、何を求めているのか、何に笑い、何を愛するのか、どれもわからない。

それを知りたい。そう思った。マリアを失ったせい、心の隙間を無理やり埋めたいという失礼な感情かもしれない。

初めて出会った日に迫られ、キスをした。

唇の感覚はかつて金髪の女性としたそれを上書きし、夜を眺めた頃から彼女の寂しそうな笑顔が忘れられない。

とはいえ、彼女には彼女の世界がある。おおよそリヨカのような庶政どころか出自もわからぬ旅人が踏み入れられる世界ではない。いわゆる身分の違いだ。

他にも彼女と釣り合わぬ理由もありそうだが、その悔しさからか、リヨカは慣れないアルコールを頼んでいた。

ポートセルミの地ビールは、そのコクの強さのせい、まだ半分も呑めていない。

「カシスオレンジ」

燐とした女性の声がした。見上げれば、にこりと笑うアルマが居た。

「やあ、アルマ……」

「やあじゃないわよ。もう、どこに行ってたのよ。宿ぐらいウチの二階に泊めてあげるわよ」

「でも、フレッドさんが怒るし」

「そのフレッドも今頃はお孫さん見て鼻の下伸ばしてるわ」

くすつと笑うアルマに、リヨカも愛想笑いを返す。しかし、その心中は穏やかにあらず、彼女の笑顔を見るのが辛かった。またしても失恋が待っていることが、純粹に怖いのだ。

「どうしたの？　なんか元気ないみたいだけど……」

「アルマが元気なんだよ。僕はあんまり船が得意じゃないのかもね。そついえば、一回酷い目に遭ったし……」

「へえ、どんな？」

「うん、詳しくはいえないんだけど、嵐の中樽に乗って荒波に打ち出されて……」

「もう、嘘ばかり。樽なんて壊れちゃうわよ」

「本当さ」

リヨカは素早く印を組むと、コースターに大地の精霊を宿す。

「折り曲げられる？」

「ん？　ん……、無理……」

「防壁魔法。樽を強化してなんとかね。着いた先は修道院ってわけさ……」

今頃、修道院にはマリアが居るのだろう。そんな苦い記憶にも関わらずべらべらと話すのは、アルコールのせいだろう。

「でも、楽しい思い出もなかった？　例えば、貴方は旅をしていたって言ったわよね。小さい頃も船に乗ったの？」

「そつだね……。そついえば、一度だけ大きな船に乗せてもらったっけ……。サント……、サント……」

「サントフィリップ号」

「そう、それだ。よく知ってるね」

「ええ。世界を巡る豪華客船だもの。で？ その船旅には思い出は無いの？」

「そうだね……。そういえば確か、とつてもわがままな女の子がいたっけ。つり目でちよつと怖い感じでさ。僕のこと、いつつも魚顔魚顔って言うんだ」

「ふうん……」

アルマは頷きながら眉間に皺を寄せる。

「お化けが怖くて夜中にトイレに付き添いに行ったり、レモンテイーを頼まれたり、なんか僕、ボーイみたいなことしてたっけ……」

「へえ……」

さらに顎に手を当て、リヨカを睨むが、彼は気付かず上機嫌で話す。

「あんな子のボーイフレンドになるなんて大変だろうね」

「ほう……」

とんとグラスを置いて、リヨカに向き直るアルマ。

「でも、僕はその子に悪いことしちゃったんだ」

「え？」

リヨカが声のトーンを落とすと、アルマは目を丸くする。

「その子のことを夜に連れ出しちゃって、とても怖い、危ない目に遭わせた。旅の人に助けってもらったけど、もしその人達が居なかったら……」

「ん……」

リヨカに背を向け、頬を掻くアルマ。

「あれから僕も強くなったつもりさ。もし、次に同じようなことがあっても、僕は守ってみせる」

「そう……」

その誓いに、アルマはリヨカを上目遣いに見つめ、すつと距離を狭める。

「どうしたの？ アルマ……」

「ん？ んふふ……。そうね……」

彼に身を預けるアルマに、リヨカはそつと肩を抱く。彼女の甘い体臭を胸いっぱい吸い込み、ふうと鼻で息を吐く。もう交わることの無い運命に、リヨカはこのまま時が止まればとすら願った。

「ぼ、暴力はやめてくれ」

そんな二人の雰囲気をぶち壊すのは、雑巾を引き裂く男の声。

「おいおい、何が暴力だよ。俺らは仕事を引き受けるって言ってるわけだろ？ だからその礼金をよこせって言ってるのさ」

酒場の一角で見るからに田舎モノ風情の男性が、曲刀を持った用心棒崩れの二人に絡まれていた。

「だ、だからあんたらには頼まんとよ。あんたら強いかもしれんけどど、あの怪物倒せるとは思えんとよ」

「こいつぁ心外だなあ。なあ兄弟。俺達がそんなに弱そうに見えるのかい？」

「あ、あんたらじゃ、無理とよ」

「ああん！」

荒くれ者は震える男を威嚇しようと、剣を振るい、床にドスンと刺す。

「ひい！」

その様子に、酒場は一時騒然としたが、誰もがその暴力を前に見守るほかに手立てが無い……。

「いいからよこせつての！」

荒くれ者は男が大事に抱える袋を掴むと、強引に奪う。

「なんだよ、どれもじゃり銭ばっかじゃねーか」

つまらなそうに言う男だが、それでも金は金と背負う。

「それは、用心棒を雇うためにみんなで貯めた金で！ 子供らのお小遣いも含まれてるから……」

「はん、羽の生えたキラーパンサーなんているわけねーだろうが。

これはお前が俺らを侮辱したことへの慰謝料だ。ありがたくいだだ

くぜ……」

「ちよ、ちよつと」

しりもちを着いたままの男を他所に、荒くれ者二人はさつさと店を出ようとす。周りの客も火の粉が降りかかつては大変と、背中を向けてグラスを煽る。

「何あれ、赦せないわ!」

アルマは熱しやすい性格らしく、今にも駆け出しそうな氣勢で席を立つ。

「僕に任せて」

それを留めるリヨカの手。多少のアルコールは入ったものの、そこは百戦錬磨のリヨカ。鋼の昆を片手に二人の前に先回りする。

「ん? なんだお前……」

「そのお金、返してあげてください」

「ああ? 聞こえないね……」

リヨカの物腰柔らかかな容貌に男達は鼻で笑いながら肩を突き飛ばそうとする。しかし、リヨカは余裕を持ってそれをかわし、石突で手首を強打する。

「ぐわっ!」

「すみません。酔っ払って力加減が出来なくて……。お金さえ返してくれたらホイミをしますんで……」

腕を押えて蹲る男にリヨカはすまなそうに声を掛ける。

「な、このヤロウ!」

もう一人はそれを挑発と捉えたらしく、リヨカに向かってこんぼうを振りかぶる。

「おっと、危ない……」

リヨカはそれを軽くなぎ払い、そのまま石突を彼の喉元に突きつける。

「僕も乱暴はしたくないんです。どうか、お金を返してあげてくだ

さい」

「く、く……」

力量差を見切った男は、悔し紛れに金の入った袋を床に叩きつける。

「うわっと……」

リヨカは慌てて小銭が散らばらないようにと袋を押えるが、それをチャンスと見た男は再びこんぼうを振りかぶる。

「危ないリヨカ！」

「え？」

アルマの悲鳴にリヨカは顔を上げる。不意打ちはちょうど彼の後頭部に振り下ろされようとした、その時……、ドアが開いて革靴が男の胸を直撃……！

「翼の生えたキラーパンサーか……。その話、詳しく聞かせてもらえないかな？」

酒場の入り口には青を基調とした旅人の服を纏う銀髪の、赤い瞳の男性が立っていた……。

「……はい、終わりました……」

「……ありがとよ……」

リヨカに手首を強打された荒くれ者は、その原因である彼の治癒魔法を受けていた。手首が動くのを確認すると一応の感謝を捨て台詞に去っていった。

「もう、あんなの自業自得なんだからほっとけばいいのに……」

律儀なリヨカにアルマは呆れたように呟く。

「そうはいつでも利き手がかえないままだと、トイレに行くのも大変だしさ……」

「まったく……」

無邪気に笑うリヨカに、アルマはその頭をポンと叩く。

「もし彼が来なかったら、今頃貴方も大変だったのよ？」

「いや、それは無いな……。コブもできたかどうかだろう。なぜな

らその男は防壁魔法で身体を覆っていたからな」

銀髪の男は氷の浮いたウオツカを飲みながら呟く。

「へえ、そうなの？」

「ええ……。僕も酔っていたし、殴られても痛くないようになって……。よくわかりましたね」

「まあな……」

純度の高いそれを三口で飲み干した銀髪の男は、銭勘定をしている田舎者に向き直る。

「それで、その翼の生えたキラーパンサーというのは？」

「え？ ああはい、あんのな、うちの村、カボチ村っていうんだけつだよ。最近夜明け前になるとキラーパンサーがうるつくのよ。こっちら辺はキラーパンサー多いんだけつだよ、翼が生えたつてのは珍しくつてよ。もしそいつが村さ来たら大変あんのさ。だから、ちよちよつと退治してほしいとよ」

「へえ……」

「ふうん……」

「なるほどな……」

「嘘だと思ってる？ なあ、思ってる？ ほんとだわさ。朝の早い時間に出るのよ。んで、西の洞窟の辺りでよ、なんか襲われた旅人が居てよ。こりゃ大変だから、んだから、なんとかしてほしいとよ」

「旅人が襲われてるんですか……それは確かに大変ですね」

「んだから、お願いしますだ。あんたらすごい強いみたいだし、ちよつくら頼まれてくれんかの？」

まるでお使いのように言う田舎者にリョカは苦笑い。もし翼の生えたキラーパンサーが居るのであれば、元々の敏捷性や空からの機動力で戦闘能力が格段に違ってくる。

ギルドにも魔物退治の依頼は来るが、この手の突然変異には戦闘に長けたパーティを組むのが常道だった。おそらくこのカボチ村の青年はそういう常識を知らないであろう。

「ふむ。面白い。一見の価値はありそうだな。よいだろう。引き受

ける」

「本当ですかい？ いや良かった！ で、そつちのお兄さんは？」

「え？ 僕も？」

「んだ。こつちの兄さんが失敗したときのためにも、もう一人予備で雇っておきたいんだ」

「……」

「……」

銀髪の男はふんと鼻で笑い、リヨカとアルマは顔を見合わせる。

「（ねえ、この人、ちよつと失礼じゃない？）」

「（うん。そうだね……。でも、それだけ大変なことになってるかもしれないし、ちよつと気になるんだ……）」

「（んゝそうね。リヨカ、ちよつと引き受けてあげなさいよ）」

「（？ うん、わかったよ）」

「わかりました。僕でよければ引き受けます」

「そうか、えがった。んじゃこの金は手付け金な。二人で分けてくれや。んじゃ、俺はもう寝るから、明日またここで……」

「はあ……」

マイペースに言いたいことを言うと、青年は上機嫌で酒場を後にする。残されたリヨカ達三人は袋にたんまり入った小銭を見てうんざりする。

「まったく、持ち逃げされるとか思わないのかしら？ 抜けてるんだから……」

「さてと……」

銀髪の男は空のグラスを置くと、荷物を持ち直して席を立つ。

「あ、あのお金は？」

「そんな小銭、持っていたら重くなるだけだ。貴様にくれてやる。

それよりも、俺の仕事を邪魔するな。キラーパンサーの亜種は俺がいただく」

「はあ……」

やる気を見せる男はリヨカを一瞥したあと、悠然と酒場を後にし

た。

「何？ あの男……。ちょっとイケメンだからっていい気になって……」

「アルマはああいう人を格好いいと思うの？」

「そりゃいいんじゃないの？ でもああいうわがままそうで俺様な男って苦手。絶対に喧嘩するわね」

「はは……そう」

リョカはその答えに安心しつつ、かといって埋まらぬ溝に気を落とす、それを残りのアルコールで無理やりに流した……。

その日、アルマとわかれたリョカは、安宿にて例の田舎者と銀髪の若者と同室で夜を過ごすこととなった……。

80 | 有翼のキラーパーサー

カボチ村はポートセルミの南にある農村だ。かつてはサラボナの台所とされていたが、ポートセルミ港とレヌール西の港が開設されてからはすっかり寂れてしまい、ほそぼそと自給自足の生活をしている。

家父長の権限が強く、特に長老の言葉は絶対であり、そのためか新しい風が入りにくく、生活レベルはあまり高くない。

都市部に出稼ぎに出る若者は、毎年何割かがそのまま村を捨ててしまつことも多かつた。

「お前さん達が用心棒けえ？ なんちゃら、ひよろひよろしてて頼りねえごたあ……」

カボチ村、長老宅に通されたリヨカ一行を出迎えたのは、白髪交じりの老人。青年もそうだが、この村の人々は言葉をオブラートに包むということが苦手らしい。

「んでな、早速だつけどよ。最近ちよくちよくみかける翼の生えたキラーパーサーってのをなんとかしてほしいとよ。あんな、最近も傷だらけのぼんろぼろになった旅人がおつてさ、まーず困つてんとよ」

「はあ……」

長老のぶしつけな態度にアルマも銀髪の青年もそつと後ずさり、必然的にリヨカが交渉の矢面に立つ構図。その柔らかな物腰のせい、長老の舌はよく周り、いつのまにか怪物のことから、村を出る若者への不満へと展開される。

「あ、あの、皆さんお困りのようですし、直ぐに取り掛かりますね。それじゃあ！」

その愚痴がポートセルミの港へ向いた頃、リヨカは強引に話を遮つて部屋を出た。

「……なんとなくだけど、村を出たくなる気持ちもわかるわ」

「あはは……、そうだね」

これ以上長老の無駄話に付き合っては居られないと、村長の家を出た一行。目的地を確認すべく、周辺の地図を見せてもらっていた。「でも、なんでアルマまで？ お店はいいの？」

「ん、フレッドにも少しお休みをあげたいし、いつも開店休業中だからね。それに、こんな面白そうなこと、私を連れて行かないつもり？」

「だけど、もし本当にそんな怪物がいたら危ないよ」

しなやかなワニ革の鞭をきゅつきゅと締め、防御面を向上させた厚めのドレスを纏うアルマはやる気十分。先ほどから熱心に呪文の本を読み、詠唱と印の組み方を練習している。

「平気よ。それでも前よりは強くなったんだから。それに、ほんちにピンチのときはリョカが守ってくれるでしょ？」

「でも……」

「リョカは私と一緒に居たくないの？」

なおも不安を醸すリョカを遮り、アルマはじつと彼を見る。その傲慢ともいえる問いかけに、リョカは複雑だった。

もし、彼女が危険に晒されたら、その時は本当に守れるのだろうか？

この世の中には未知の魔物、凶悪なモノがひしめいている。特に討伐依頼を出されるようなものなら、それは覚悟を決めて取り組む必要がある。

そんなところに彼女のような、せいぜい中級魔法の印すら覚えていない見習魔法使いがいたらどうなるか？ 経験からすれば、足を引く張るだけの存在といえる。

「アルマ、僕はかつてキラーパンサーを討ったことがある。その時

は十五人くらいの庸兵と一緒にだった。結局生き残れたのは、僕を含めて八人。半数近くが殺され。入り組んだ地形で上下左右、どこからでも襲い掛かってくるキラパンサーが相手じゃ、僕も君を守りきれない」

「リヨカ？」

「それにね、そのキラパンサーも、本当は子供を守る為に戦っていただけの、悲しいことだったんだ。アルマの思うような冒険じゃない、とても辛くて悲しいことではない。僕は君を危険な目に遭わせたくないし、もし今回の討伐依頼が前みたいなことだとしたら、やっぱり君にそんな想いをさせたくない」

かつての記憶を思い出すリヨカの瞳は悲哀が籠り、それでいて何か強い意志も見えた。

「けど、それじゃあ貴方はどうして行くの？」

「僕は、昔キラパンサーと一緒に居たんだ。でも、ある事件をきっかけに離ればなれになった。もしかしたらそのキラパンサーが人を襲っているのかもしれない。そう思うと、どうにも見過ごせないんだ」

「ん〜……わかったわよ……。しょうがないわね……。でも、そうね、せめて入り口までいいでしょ？ 商売柄、こっちのほうの鉱石とかみておきたいのよ」

「絶対だよ」

小指を差し出すアルマに、リヨカはなんのことだろうと小首をかしげるので、彼女はそつと彼の小指を取り、結ばせる。

「絶対だからね。必ず無事で戻りなさいよ……」

「うん」

「ふっ……」

そのやり取りを終始眺めていた銀髪の男は、軽く鼻で笑う。

「むっ！ ちょっと、お兄さん？ もう……、貴方も大概辛気臭い

わね……。ねえ、名前ぐらい教えてくれてもいいんじゃないの？」

「なぜ？」

「何故って、怪物退治に行くんでしょ？ それぐらいいいじゃない」
「一緒ねえ……。俺の目的はあくまでも翼の生えたキラーパンサーの確保。デートを楽しみたいのなら邪魔をするつもりはない」
「ふんだ！ ちょっと格好いいからっていい気になって……」
アルマはふんと口を尖らせると、再び本に没頭する。

「あ、もしかして貴方は魔物使いですか？」

そのやり取りにリョカは慌てて執り成すように口を開く。

「ああ……」

「僕も昔ある人から魔物使いの素養があるって言われたんですけど、なんだかそういうのがわからなくて……、どうすれば魔物達と仲良くなれるんでしょうか？ コツがあるんですか？」

「仲良く？」

その言葉に銀髪の青年は面喰らったようにリョカを見返す。

「仲良くか……。いや、信頼を築くという点ではあながち間違ってもいないか……。だが、友達感覚というわけではないぞ」

「信頼関係……ですか……」

「貴様は違うのか？」

「ええ、僕は捕まえたってわけじゃないんですけど、ベビーパンサーが懐いていて……」

「ほお、ベビーパンサーを手懐けたのか……」

今度の驚きは素直な感心というもので、リョカも思わず照れてしまふ。

「えと、手なずけるっていつでも、子供ですから、刷り込みとかのほうに近いかもしれませんが」

「いや、それにしてもだ。ふむ。これは面倒なことになりそうだな」
「え？」

「こんな辺鄙な田舎で魔物使いと鉢合わせるとはな……。お前と俺、どちらが先に確保するかな？」

「えっと、別に僕は……」

「テリー」

「はい？」

「俺はテリーだ」

「あ、はい。僕はリヨカ、リヨカ・ハイヴアニアです」

そつと手を差し出すテリーに、リヨカは慌てて両手で握り返し、ぺこぺこ頭を下げる。

「私はアルマ……。アルマルジュエルの女社長。覚えておいて損はないわよ」

蚊帳の外に置かれたアルマは不機嫌そうに言い、ふいっとそつぽを向く。

テリーはふつとニヒルに笑うと、森に向かって右手を振っていた……。

岩場が目立ったところで馬車を待たせる一行。立て札には「丁寧に」「この先魔物の棲家」と示していた。

「さて、行くとするか……」

テリーは背負っていた荷物から布に包まれた剣を取り出す。

平べったく太い刀身で、まるでのこぎりのような形状。黒く輝き、刃先がざらりと光る一品、それは遠目にもわかるほどの業物で、びりびりと威圧感がしてくる。

「あれミスリル銀でしょ？ 魔法剣かしらね……」

簡易の魔法を宿したものというのには一般にも多い。例えば高熱への急な対処として氷結魔法を宿した額当てや、閃光魔法を施した護符を懐炉代わりにするなどだ。それらは錆びたり劣化することも多く、基本的に使い捨て。そのため安い金属などの媒体が使われる。

一方で伝説的と呼ばれる武具、道具には、不変とされる金属が使われていることが多い。純度の高い金やミスリル銀、メタル鉄鋼などだ。特にミスリル銀やメタル鉄鋼は硬度から武具としても有用であり、神話の時代の武器にも使われているとのこと。

また、純金のように武具に適さないものでも、その不変性で高位の魔法を永続させることが可能であり、高名な杖に重宝される。

「ほお、博識だな。並の武器屋ならせいぜい黒鉄鋼とほざくがな…

…」

「こつみえても金属、鉱石は好物なのよ。鉱物だけに……ね」

胸を張るアルマだが、リヨカもテリーも複雑な顔になる。

「こほん……。それはそれとして、リヨカ、こんな仏頂面イケメンなんかに負けちゃだめよ。なんとしても私達で羽キラーパンサーを捕まえるのよ！ さ、行くわよ」

駄洒落のすべり具合を恥じてなのか、アルマはリヨカの腕を掴むと、急いで洞窟へと向かう。

残されたテリーはやはり鼻で笑う。

そしておもむろに右手を上げると……、

「もう出てきていいぞ」

少し離れたところからのそつと緑の竜が……。

81 | 自己矛盾

洞窟の中は意外と明るかった。人工的な作りが見られ、窓らしき穴が高い場所にいくつかあり、そこから明かりが差し込んでいる。切り立った崖を壁伝いに歩き、軋む縄の橋をゆっくり渡る。

魔物の棲家ということもあり、訪問者を威嚇する気配がまばらにあるが、あまり好戦的というわけではないらしく、リヨカ達を妨げる者は少ない。

「なんか思ったより広いのね」

リヨカに手を取られながら、アルマは言う。

「うん。でも、一体ここはなんなんだろうね。魔物が作ったにしては手が込んでるし……」

上を見上げ、差し込む光を手で遮る。

「そうね。なんかいろいろ落ちてるし……」

アルマはふとリヨカの足元に光るものを見つけ、それを拾う。

「小さなメダルだ。うふふ。これ集めてるんだ。パジャマぐらいならもらえるかしら？」

「集めてるの？ そういえば僕もこの前もらったっけ……。アルマにあげるよ」

リヨカは財布にしまっておいた二枚のメダルを取り出すと、アルマに向ける。

「ありがと！ って、ちょうだいよ」

しかし、アルマがそれを受け取るうとしたとき、それを上に上げる。

「もう、上に上げたとかなしよ！」

「アルマ、もういいでしょ？ さ、入り口で待っていてよ……」

「だって、だって……。もう少しいいじゃない……」

「聞き分けがないのは困るよ。約束したでしょ？」

「ふんだ、リヨカのケチ……」

アルマはリヨカの持つメダルを諦め、他に無いかと地面を探す。すると、今度は白くて硬いものがあり……。

「なんだろ、これ？ ……きゃあ！」

それが古びた骨であるとみるや、アルマは骨を放り投げる。

「わ、大丈夫？ アルマ……」

「え？ ええ……、ちよつと驚いちゃって……」

瞬間のことにアルマはリヨカの胸に飛び込んでいた。その硬い胸板に抱きとめられていることに気付き、頬が赤らむのがわかる。

「アルマ、やっぱり君には無理だよ。ね。悪いことは言わないから外へ出よう」

「嫌よ、ここまで来て……」

「怪物なら捕まえた後に絵を描いて見せてあげるから、だから……」
リヨカは彼女を諭すように言い、その武器を握るには非力な指を見る。

「お願いだよ。君が傷つくところを見たくないんだ。それに、危ない目にも遭わせたくない」

まっすぐな瞳に見つめられ、アルマはこれまで必死に耐えてきたことが押えられなくなる。

「リヨカ……、あのね、私本当は……」

「ん！？」

二人の戸惑いの最中、住処を荒らされたと憤る住人が怒りを示す。鋭い一撃がすんでのところでリヨカの居たあたりを掠めた。

「伏せたまま……。そこだ！」

リヨカは気配のほうへ鋭い風の刃を飛ばす。

「ぎい〜！」

こうもりの変種であるドラキーがひらひらと逃げ惑う姿を見て、リヨカはそつと立ち上がる。

「ふう……大丈夫だよ」

「あ、うん……」

胸の中でまだ蹲ろうとするアルマに、リヨカは暫くそうしていた

いと思うが、次は威嚇で終りそうにない状況に、彼女を無理やり立たせる。

「さ、もう遊びは終わりだ。アルマ、僕の言うことを聞いてね……」
「は……はい……」

凄みを利かせたりヨカの声にアルマは素直に頷く。そして彼に促されるままに橋を渡り、来た道を戻る。

しかし……。

「ぎい、ぎい！」

「ふう、はっ！」

群れを成してやってきたドラキーにメタルライダー達。

ドラキーはアルマの行く手を阻むように彼女の頭の上を飛び回り、メタルスライムの亜種に跨るライダーがめちやくちやに剣を振り回す。

「くっ！ はっ！」

リヨカはそれを捌きながら、アルマを庇う。しかし、狭い足場では思うように動けず、防戦一方。

「……ふっふっふ……、わたらの住まいを荒らそうなんざ十年早いってばよお……。さっさと帰らないと、もっと怖い目に遭わせるでえ……」

「だから、帰ろうにも邪魔してるんでしょうが！」

どこからともなく聞こえてくる声に、アルマが言い返す。

「ええい、もう！ 闇を切り裂く閃光、輝き唸れ、ベギラマ！」

詠唱と印を組んででの中級閃光魔法。しかし、アルマ自身の魔力が低いせいか、勢いは弱く、ドラキーの尻尾の辺りを焦がすだけ。

「もう、なんで私ってばこんなに魔法が下手なのよ……」

その威力にがっかりしながら、怒ったドラキー達の翼でぺちぺちと叩かれる。

「くっ、この……」

リヨカは昆を奮いながら、メタルライダーの剣を弾く。素手になった者は後ろの下がり、次の魔物と交代する。その統制の取れた動

きに驚きつつ、一方でその攻撃が弱いことに気付く。どうやらこの魔物達は強くない。そして、本気で襲ってきていないのだと。

「……さあて、そろそろ懲りただろう……。ほな皆さん、勘弁したれや……」

その声に導かれてか、ドラキーがふわっと上空へと逃げる。メタルライダー達もそろそろと後ずさりを始める。

「……ほなさいなら……」

「なっ！ 待ちなさいよ！ 貴方達がカボチ村を襲ったんでしょ！？」

まるで潮が引くように消えていく魔物の群れに、アルマは悪態をつく。しかし、虚空の声は無視を決め込む……。が、

「そこだ！ 唸れ、雷神！」

ゴオオオオッ！ と凄まじい唸り声と一緒に炎が上空より放たれる。その一瞬の光が辺りを照らし、一瞬だが金色の大きな翼を持った魔物が見えた。

「まさか、あれがキラパンサー！？」

翼の魔物は炎をすんでのところであわし、お返しにビョオオウウウつと吹雪を放つ。

「ちよ、一体なんなのよ、絶対おかしいわ！」

リョカに庇われながら、アルマは必死に叫ぶ。

「こい、ラルゴ！」

テリーの声にどすどすと現れる緑の竜。二メートルを優に越すその巨体はハーケンを構えている。

「なに？ 魔物！？」

アルマの悲鳴もどこ吹く風、ラルゴと呼ばれた竜は壁に向かってハーケンを投げると、壁にめり込む。テリーはそこを足場に跳躍し、さらに炎を巻き起こす。その間も竜はせつせと足場を作り、さらには炎を放ち、辺りを照らす。

「テリーさん、そんなことをしちゃ駄目だ！ ここには幼い魔物がたくさん居る！」

先ほどのドラキーたちは無事に避難できただろうか？ 逃げ遅れたメタルライダーは隅っこで震えている。リヨカは怯える彼らを立たせると、比較的安全な方へと導く。

「そらそら、どうした！」

「へえ、人間のクセにやるねえ〜！」

火の玉をいくつも吐き出す翼の魔物。それはテリーの攻撃を相殺するのが目的らしく、炎はぶつかりあい、空中で四散する。その一部が逃げ遅れたメタルライダーに向かう。

「危ない！」

リヨカはそのメタルライダー庇おうと走り、真空魔法でそれを相殺する。

その間もテリーは攻撃の手を緩める様子がなく、さらに雷撃をあびせようと剣を振りかぶる。

「そこだ！」

リヨカは道具袋からブーメランを取り出すと、魔力を凝集していた剣に向かって投げつける。

「なに！？」

今まさに奮わんとしていたそれは横槍をいれられ、バチバチと火花を散らしながら霧散する。

「貴様、邪魔をするな！」

「そっちこそめちやくちやをするな！」

テリーはリヨカに剣を構えると、壁を蹴り向かってくる。

「だあああああ！」

「なんの！」

急降下とテリーの膂力の加わった一撃を、リヨカは昆で受け止める。両足を踏ん張ることでの一撃を凌ぎ、逆に押し返す。

「ふん、大したものだな」

振り払われる昆をひらりとかわし、リヨカを見つめるテリー。その表情はどこか楽しむ様子があった。

「有翼キラーパンサーの前に、まずは貴様を大人しくさせる必要が

あるようだな……」

「僕が言いたいのは、もつと周りを見ろって言ってるんだ。貴方も魔物使いなら、魔物を無闇に傷付けることをするな！」

「ふぶん、瑣末なこと……！　いくぞ！」

「くっ！」

上段から振り下ろされる剣を受けるリヨカ。一撃に重みがあり、昆を構える両手に痺れに似た痛みを感じる。しかし、休んでいる暇はなく、次々と襲い掛かるテリーの連撃。

どれも重みがあり、受ける昆もだんだんとささくれ立つ部分が見えてくる。

「どうした？　さっきの威勢はどこへいった？」

「僕は！　貴方のやり方が赦せない！」

防戦一方になりかけるリヨカだが、つま先で泥を抉り、テリーに向けて蹴上げる。

「くっ！」

予想していない泥つぶてに怯むテリー。リヨカは石突で彼の左肩を突き、よろめいたところで振りかぶる。

「貴様！」

テリーはそれを剣の腹で受けようとしたが、昆は途中で折れ曲がった。旅用の昆は収納しやすい二節のもので、リヨカの手元でそれを操作できる。

受けるつもりで振り上げた剣はそのまま弧を描き、がら空きになった身体に、リヨカの蹴りが飛ぶ。不意を突かれた蹴りによるめくテリー。

「やるな、お坊ちゃんかと思ったが、なかなかどうして……」

リヨカの道場武術ではない泥臭い戦い方に、テリーは悔しがるところか、感心した様子で彼を見る。

「テリーさん、貴方の目的はあくまでもキラーパンサーでしょう？」

徒に魔物を怯えさせては、彼らもまた人間に憎悪を抱く」

「ふぶん、魔物とは元来そういうものだ」

「なら、あのドラゴンはどうして貴方に従うのさ？ 信頼されてるからじゃないのか？」

「生憎、博愛主義ではないんでな」

そう言つとテリーは再び剣を構える。その口元から笑いが消え、瞳が赤く光る。

「ぐ……」

雰囲気の変つたテリーにリョカは気圧され、自然とあつさりをしてにに気付く。

先ほどまでなら互角かりョカがやや上。けれど、今こうして対峙するに、佇まいだけで圧倒されてしまふ。テリーからは底知れない、圧倒される力が感じられた。

「ん……？ 仲間割れかいな？」

それを打ち破つたのは例の声。声の主は見えない、風の塊のようなものをぶつけてくる。

「くっ！ メラミ！」

テリーはリョカへの攻撃の手を休め、声の主へ中級火炎魔法を放つ。

「どうも好戦的でよろしくないねえ」

炎の塊が辺りを照らす。一瞬見えた声の主はドラゴンキッズよりは大きく、キラーパンサーよりは小さい程度のモノだった。だが、その実力は中々のものであるようで、向けられた炎を吹き飛ばすほどの炎を吐き出し、さらには吹雪を吐き出した。

「く、多芸だな？」

虚を突かれたテリーは壁へと跳躍し、ハーケンの足場で体勢を整える。

「君は言葉を喋れるのかい？ なら、頼みがあるんだ。カボチ村を襲う魔物のことを教えてほしいんだ。僕らはその魔物にだけ用があるんだ」

「かぼちゃ？ 知らんね。つか、ここまでこいつらの家荒らしにおいて、それはないんじゃないん？」

翼竜は未だ剣を収めぬテリーを警戒しているらしく、奈落を旋回している。

「ふん、有翼キラーパンサーも魅力だが、貴様も中々のようだな。ぜび、従魔として傳かせたいものだな？」

呼吸を整えたテリーは足場を蹴ると、一瞬見えた声の主へと飛び掛る。

「やめるんだ！ テリーさん！」

リヨカはそれを止めようとしたが、激しい戦闘のせいで足場が崩れ、そのままリヨカは奈落へと誘われた。

「リヨカ！」

アルマの叫びもむなしく響き、頭上ではいまだに銀髪の剣士と翼の魔物が戦いを繰り返していた……。

82 | 竜の正体

落下の間に行えること。防壁魔法を唱え、できるだけ壁に身体を当て、勢いを殺す。

人生二度目の落下に複雑な気持ちになりながら、リヨカは五体無事で着地ができた。

足をくじく程度であり、中級治癒魔法でそれを癒す。それが終ると、今度はレミールで光を集めた。確かな印でないとため光は弱い、歩く程度には申し分ない。

上を見上げると、かすかに光が見える程度に収まっており、先ほどまでの明滅もやんでいた。

リヨカはテリーの周りを顧みず戦う姿勢に苛立ち、一方である不思議な声に違和感を覚えた。

「とりあえずアルマのもとへ戻らないと……」

そうは呟いたものの、壁を登ることは不可能だろう。またドラキに邪魔をされても困る。

ひとしきり周囲を伺ったあと、ふと思い出す。ここが人の手が入っているということに。

もしかしたらここも人が来ることを想定しているのかもしれない。だとすれば、脱出のために階段が用意されているかもしれない。

リヨカはさらに光を集めることにした……。

周囲を探ることしばし、階段の代わりに小屋のような洞窟が見えた。

「すみません……」

誰がいるわけでもないだろうけれど、リヨカはそっと入り口らしき穴を潜る。

「ぐるぐる……」

するとそこには金と黒のまだら模様の毛皮、返り血を連想させる赤い鬘のキラパンサーが居た。

「く、こいつが!」

リヨカは昆を構え、防壁魔法を唱える。

「ぐるるるる……」

威嚇。

リヨカはキラパンサーを睨み、その投足を見守る。

用心棒時代、キラパンサーと対峙することはあった。

彼らは生粋のハンターであり、勝機を見出すやいなや喉元目掛けて鋭い牙を唸らせ、何人もの用心棒を屠った。

目の前のソレはまだ成獣ではないらしく、これまでに見たものよりも一回り小さい。けれど、階上での幼い魔物とは違う迫力があり、気を抜けば餌食となりえる。

「ぐる……るる……」

油汗が額をすべり、目に入る。反射的に目を閉じたとき、リヨカは死を覚悟して身を強張らせたが、慌てて目を開いたとき、そのキラパンサーは尻尾を向けて奥へと消えた。

「え?」

そしてリヨカが来ないのを寂しそうに振り返り、尻尾を揺らす。

「何で……?」

リヨカは意外な展開に呆気にとられながら、警戒を解く。

「なおおん……」

そして寂しそうな声。

「もしかして、来いつてこと?」

リヨカは昆を構えながら、その後が続いた……。

「くっ! 逃がしたか!」

いつの間にか翼の魔物は姿を消し、テリーもその戦闘で息を切ら

していた。

「逃がしたかじゃないでしょ！ リヨカが落っこちちゃったじゃない！」

アルマは銀髪的青年に抗議するが、一瞥を返すだけで居に返さない。

「ちよつと！ ふざけないでよ！ ほら、リヨカを探しに行くわよ！」

「ふん。奴がマヌケというだけだ……」

ラルゴの手渡すタオルで顔を拭くテリー。無造作に返すと、剣をしまう。

「おい、ラルゴ、行くぞ」

「あう……」

テリーは自然な様子で崖から先へ歩を進めると、そのままヒューッと落っこちる。

ラルゴはというとアルマにぺこりとお辞儀をするので、思わず彼女も「あ、どうも」と返す。そしてやはり崖下へと落下した。

アルマはその様子を見ながらごくりと息を飲む。かつて彼女が草原でちゃんばらをしていた頃など、本当に子供の頃のお遊びではないと思いつた……。

「よいせつと……、ふう、しんど……」

すると、代わりにひよっこり顔を出す者が一人。

その声は先ほどの不思議な声であり、おそらくは銀髪青年とやりあっていた翼の……。

キラパンサーについていくと、そこには一振りの剣があった。鞘に収まったそれは砂や埃で汚れているが、かなりの名品だとわかる。

「これは……？」

キラールパンサーはリヨカを導くと行儀良く座り込み、動作を見守っている。

リヨカはそれを手にとり、鞘から抜く。型が合っていないせいで抜きにくいだが、それはずっしりと重く、鋭い刃。吸い込まれるような雰囲気があり、思わず触れた指先から赤い雫が落ちる。

そして思い出される憧憬。

火にゆらめく向こう側、彼を優しく見守る穏やかな瞳……。

「もしかして父さんの……」

鞘は剣とは別物らしく、そこにはP・Gと印されている。

父の手紙にはパパス・グランバニアとあり、そのイニシャルだろう。リヨカは鞘を握り締めると、暫く声を上げずに泣いた……。

「まったくかなわんなあ……。最近変なの多いし、もうここも潮時かいな……」

金色の翼を持つそれは崖に腰を掛けると、持っていた薬草をばりばり齧る。

「あの、貴方……?」

敵意こそ示さぬものの、脅威であるには変わりないと、アルマは警戒しながら話しかける。

「ん? お前……どこかで見たことあるけど、俺のファン?」

「は?」

「冗談やて……。つか、ここはあいつらの家なんやから荒さんといてな。まったく……」

「え? え?」

害意を示さぬ竜に別の意味の混乱を来たすアルマ。ひとまず地面に丸を三つ書いた後、もう一度話しかける。

「あの、貴方、魔物でしょ? カボチ村を荒らすっていう……」

「かぼちゃ? 知らんがな。そんな田舎の村荒らすよか、ポートセ

ルミのねーちゃんたち見てたほうがずっと楽しいわ。つか、俺は魔物じゃないで？俺にはちゃんとシドレーっつう立派な名前があるんじゃないかな」

なははと笑うシドレーに、アルマは目を丸くさせる。

「シドレーって、貴方まさか!？」

「ん？俺のこと知ってるって、やっぱり俺のファン?」

「アホかい!」

アルマは握りこぶしをシドレーの頭にお見舞いした……。

「それよりリヨカよ、さつき落ちちゃったのよ！なんとかならない?」

「ん？リヨカ？懐かしい名前じゃの。あれはもう十年前のことだが、草原で一人の坊主が……」

「せいぜい四年前でしょ！ふざけてないで……」

「もしかして、さつきそこですれ違ったやつ？あいつなら大丈夫だと思っで？スカラを唱えてたし、落下慣れてるっつのも変やけど、崖に身体ぶつけながら落ちてたし、まあ、毛が生えてるから怪我もせんってな」

「ぶ……、んもう、この大変なときに何を冗談言ってるのよ!」

「いや、これぐらいで笑わなくてええと思っけど……。ま、もし本当にあのリヨカやったらあれやし、ちよいと見てくるな……」

そっつうと黄金に輝く竜は奈落へと身を投じた。

アルマは祈るような気持ちで、それを見ていた。

83 父の形見

「君はガロンだったのか！ よかった……。生きていたんだね……。全然昔と違って、立派になったねえ……」

「じろろくん……」

リヨカはキラーパーンサーに歩み寄り、その懐かしい名前を告げる。ガロンはようやく会えた主人に従属の意志を見せようとしたのか、それともたんに甘えたいのか、お腹を見せてごろごろ転がる。

「ふふ……。ガロン……。よかった……。ね、君が無事なら彼も無事かな？」

くちさがない同行人を思い出すリヨカ。彼らと過ごした幼少の日々、冒険の日々。胸に渡来するのは、熱い気持ちと嗚咽。リヨカはガロンのふさふさの毛皮にうずまり、涙していた。

「そのキラーパーンサーはお前のか……」

「え？ あ、テリーさん……」

いつの間にか追ってきたテリーに、リヨカは慌てて涙を拭い、昆を拾う。

「気張るな。どうしようというつもりは無いそれよりも……」

テリーは彼に目もくれず、ガロンに近づくと、その頭を撫でる。

ガロンは唸ることはせず、かといって靡くようすもなく、彼を不思議そうに見ていた。

「まだ子供だが、強いな。それによくお前に馴れている」

「わかるんですか？」

「目を見ればな……」

「あの、あなたは魔物使いのなのに魔物を傷付けることが平気なんですか？」

「さつきも言っただろ？ 瑣末なことだ」

「けど……。僕は……。僕は昔キラーパーンサーの母親を殺した。人を襲ったからって、だから……。でも、ガロンだって同じキラーパーンサー」

ンサーなのに、そうしない。これって変じゃないのかな……。もしガロンが人を傷付けたら、僕はどうするのか……」

ガロンに出会えた喜びと、胸に引つかかるかつての咎。それを口にするので、リヨカの睨みが熱く、重くなる。

「ふん。やや子の相手をするつもりは無い」

リヨカの中に渦巻く葛藤。かつて手にかけてきたキラールパンサーの母親。今頃、その子供はどうしているのだろうか？ 依頼。人を襲った魔物の駆除。リヨカの立場からすれば、それは敵である。一方、母親として子を守るのは必然。あの時、リヨカ達が無理に奥へ行かなければ、キラールパンサーも襲つてこなかったかもしれない。

それは推測の域を出ないが、未だ心に引つかかる気持ちであり、ガロンを前にして揺らぐものがあつた。

「降りかかる火の粉を払うことに疑問を感じたところで、考えている間に消し炭になるだろうな。まるでフェアゴだ」

つまらなそうに言い放つテリーは、どこか寂しそうな表情をしたあと、フンと鼻を鳴らす。

「おまえの言うキラールパンサーはわが子を守る為に戦つた。そして、お前もまた力無きものを守る為に戦つた。互いに覚悟を持ち合わせて戦つた結果なら受け入れる。そもそも、お前が出会つたのはせいぜい数えられる程度のキラールパンサーだろうに。その程度で知つた気になり、種族とどう付き合うなど考えて、一体どこまで傲慢なんだ？」

「目の前の……」

リヨカはガロンを見つめながら呟く。

ガロンも不思議そうにリヨカを見返していた。

「お前は甚だしい勘違いをしているが、どの一つも独立した個であり、存在だ。これから先、貴様と牙を交えるもの、ともに手を取る者がいるだろう。それは魔物に限らず、人間も同じこと。それを、過去に牙を交えた者だけモノサシにして判断するのは、目の前のその一つの気持ちをないがしろにすることにつながらないのか？ それ

が貴様の言う信頼なのか？」

「独立した個……信頼……ガロンは僕を……」

ガロンは彼を信頼しているのか、それとも親代わりに甘えたいのか、そのどちらかなのはわからない。

ただ、自分を認めていることに代わりが無いと気付いたとき、リヨカはその手を握っていた。肉キユウのぷにっとした感触と、爪の食い込む痛み。不思議そうに無くガロンの瞳。どれも自分に向けられていたものだど、感じたとき、リヨカは少しだけ、心の重みが薄れた気がした。

「ガロンというんだっただな。このキラーパーンサーは貴様に良く慣れている。いや、甘ったれていっているというべきかもしれんが、貴様に懐いているのなら、それを受け止めてやれ。貴様に出来るのはその程度だ」

ふさふさした鬘をなでると、遠い昔の記憶が蘇る。草原で日向ぼっこをしたこと、妖精の国を救ったこと、ともに襲い来る魔物と戦ったこと。絵に描いたことも、それを台無しにされたこともあった。

本当に大切なのは、貴方が傍にいてくれること。

かつてのマリアの手紙に記された一文が反芻される。

リヨカは自分の中の傲慢な気持ちを恥じ、代わりに少し我俣になるべきかもしれないと思った。

「すみません。テリーさん。こんなことに相談に乗ってもらって……。けど、少しわかつたきがします。僕は、あんまり学がなくて……」

ガロンを自由にさせると、腕で顔を拭う。それでもウサギのような瞳は隠せず、テリーには鼻で笑われる。

「それと、僕はやっぱり貴方のやり方は間違っていると思います」

「そう思うならそうすればいい。わざわざ許可を求めずにな」

「はい。次はそうします」

リヨカの真摯な顔つきに、テリーは頷きつつ「手ごわいな」と呟く。

背後から遅れてやって来た緑の竜の足音がしたので、テリーは左手を翳す。きつと彼らの信頼関係から成す業なのだろう。

「興が冷めた……。大方あの田舎者どもは、このキラパンサーを見てあることないことぶっつけたんだろう。とんだ時間の無駄だった」

テリーはガロンの頭をもう一度ポンと叩くと、小屋を出る。

「行くぞ、ラルゴ……」

彼は子供の竜を従えようと、光を集め、そして、すっと空へと引張られるようにして消えていった。

「脱出魔法か、さすがだな。……そうだ！ 僕も出ないと！ ねえ、ガロン、ここから出る方法知らない！？」

「がっ？」

言葉は通じるはずもなく、ガロンは首を傾げて泣く。きつと何かの遊びと勘違いしているのだろう、ぐるぐると喉を鳴らしていた。

「おーい、リヨカ」

すると、テリーと入れ違いで声がして……。

「その声……やっぱり！」

リヨカは声の方へと走り……。

「ふう、まさか生きとったとはな……」

「お互い様だよ。シドレー……」

小屋を出たところで上空から降りてきたシドレー。かつての羽の生えた緑のトカゲとは違い、今は金色の小柄な竜といえる大きさ。とはいえ、アルマを一人背中に乗せるのが関の山らしく、彼女をおろすと肩をこりこりと鳴らす。

「目が覚めたとき、お前だけでなくのうなってたし、その……親父さんのな……。で、せめて剣だけでもと思っただけな。ガロンも幼いし、しやーないから俺が面倒見ようってさ……」

「ありがとうシドレー……」

「よせやい、もっと恩に着ろ。つか、坊主もすっかり立派になったな。もう十年ぐらいか？」

「せいぜい四年だよ」

「そうだっけ？ まあ、あれだ、つもる話もあるだろうし、いつちよこの辛気臭いところ出るか？」

「うん……」

「よし、そんなら捕まらんでそこで待ってる。先にあのワガママ姉ちゃん連れてくから……」

シドレーは翼を広げると、ゆっくりと上昇していった……。

カボチ村、西の洞窟とは、親を失った魔物達の住処だった。かつては人が使っていたらしいが、地殻変動と崩落で埋まり、そのまま廃墟と化していた。

シドレーはガロンをつれ、いつときはサンタローズに身を寄せていた。ラインハットの侵略に遭い、さらに西へと逃れ、レヌール港の積荷に紛れてポートセルミに来たそうだ。その後は人里離れて歩き回り、ここへたどり着いたという。

そして弱い魔物達に自衛できる程度の訓練をし、迷い込んだ旅人をカボチ村近辺に運んでいた。カボチ村の住民が西の洞窟を恐れたのは、おそらく旅人から聞いたガロンの姿ゆえだろう。

カボチ村にはアルマが詳しく説明をすることでなんとか誤解を解くことが出来た。また、西の洞窟はただの廃墟であり、魔物こそ弱いが、道が崩落していたりと危険だからと注意を促した。

話を終えてみれば、全ては言葉の行き違いと独り歩きだろう。

* * * * *

「ふう、なんだかせわしい冒険だったわね……」

「うん……」

ふたたびポートセルミに戻ってきたりヨカ達。アルマは台所へ行き、買い置き干し肉を外でちょこんと座っているガロンに投げる。ガロンはそれを啜ると、一声お礼のように鳴き、がじがじと齧る。

「ウチのガロンさんはお上品さまですよ」

一方シドレーはというと、土足で闊歩し、残りの干し肉を勝手に齧る。

「まったく、爪の垢でも煎じて飲めば？」

「まあ、なんだ。それよかりヨカ、お前、どうするん？」

「僕は、僕は父さんのお使いを頼まれて……」

「へえ、そんならそっちの姉ちゃんに……。まあいろいろめんどくさい事情があるの？ そんならいいけど……」

シドレーはリヨカとアルマを交互に見ながら、ふいとそっぽを向く。

「俺も暇やし、暫くついて行っただいいか？」

「うん。僕も一人旅は寂しいし、シドレーが居るくらいが丁度よいよ……」

「そうかしら？ こいつだと煩すぎると思うけど……」

「うっさいなあ……」

シドレーはワインのボトルを掴み、たすき掛けの鞆に入れる。

「ちよつと……」

その傍若ぶりにアルマは咎めるよりも苦笑い。

「まあええやろ。邪魔者は暫く退散してやるんやし、これぐらいの駄賃……」

「もう、どつという意味よ……」

今度は顔を真っ赤にさせて怒るが、その頃には外へ出てガロンを掴んで空へ飛び去ってしまう。

「まったく、このセクハラ親父！」

アルマは遠い空に消えるシドレーに悪態をついていた……。

ポートセルミ、海が見えるレストランに二人は訪れた。

契約もこれで満了。明日にはこの街を出るつもりのリヨカを労いたいと、アルマが強引に誘ったのだ。

彼女は食前酒に白ワインを頼み、リヨカに勧める。

「僕はいいです。アルマさんにまた失礼なことしたら大変だしね……」

……

オラクルベリーでグラスを掛けられたことはまだ記憶に新しい。
当のアルマはそんなこともあったかしらと涼しい顔。

「で？ リヨカはこれからサラボナのルドマンさんのところへ行くのよね？」

「ええ。まさかそこまでついて行くなんていいませんよね？」

「来て欲しい？」

「そうだね。君みたいな綺麗な人と一緒だと、楽しいと思うよ」

「冗談めいた口調で言うアルマに、リヨカは素直にそう応える。途端彼女は目を丸くして頬を染めるが、夕焼けのせいでそれも目立たない。二人は視線を海へと向け、ぽちゃんと跳ねる魚を見る。

「もう、リヨカだったらからかって……」

「本気ですよ……。でも……」

「でも？」

「フレッドさんが赦さないと思いますけど」

「そうなのよね。今頃お孫さんと一緒にのんびりしてるんでしょうけど……。うふふ。フレッドって息子さんと私には厳しいくせに、なぜか孫には優しいのよ。これって不公平だと思わない？」

「はは……。そういうのってあるかもしれませぬ」

雑談もその辺に前菜が運ばれてくる。リヨカはどのスプーンから使えば良いかわからず、アルマに笑われながら外側のフォークを取る。

初めて食べる上品な料理の数々に、リヨカはどれを食べても「美味しい」と声に出し、周りの客からも「いつもより美味しいね」と笑われていた……。

「もうリヨカだったら……。恥かっちゃったじゃないの」

帰り道、アルマはポーチをくるくる回しながら上機嫌で彼を叱る。

「ゴメン。ああいう席って本当に初めてだから、そういうマナーと

か知らなくて……」

リヨカは彼女の後姿に頭を垂れる。一時は覆った二人の関係だが、やはりこの形に帰着してしまうらしい。

「うふふ。まったく、これじゃあ先が思いやられるわね」

「え？」

「ん？ なんでもないわ。それよりここでいいわ」

リヨカの宿泊している宿の前で彼女は振り返る。アルマールジュエルの事務所はまだ先で、街灯こそ点されているものの、道も暗くなっている。

「送っていくよ」

「いいわ。すぐ近くだし」

彼女はくすつと笑いながら舌を出す。くるつとそのままターンをしようとするが、レンガの溝にヒールが嵌り、カッンと高い音を立てる。

「ほら、危ないよ……」

リヨカは倒れる前に彼女を抱き寄せる。過剰なまでに身体を密着させるリヨカに、アルマは彼の顔を見て、すぐに顔を逸らす。

「もう、最悪……。このパンプス気に入ってたのに……」

「アルマ……。送っていくけど、いいよね？」

その力強い声に、アルマは彼を見ずに首を振る。

「わがまま言わないで。靴も穿かずにこんな石造りの道を歩かせるほど、僕だって野暮じゃないよ……」

「十分野暮よ……」

「どうして？」

「帰りたくないって言わないとダメ？」

「え？」

「私、ちよつとお酒に酔ったみたい……」

アルマは彼の胸にもたれかかり、ふうと長く息を吐く。

彼女の甘い体臭、皮膚をくすぐる髪、布越しに伝わる柔らかな感覚に、自然と腕に力が入り……。

「部屋で少し休む？」

「ええ。邪魔者も居ないし……」

顔を見せないアルマを抱きかかえ、リョカは自分のチェックインしている部屋へと向かった……。

85 | 逃した獲物

朝も早い時間、アルマは彼女を抱きしめて離そうとしないリヨカからそつと抜け出す。

バスルームで汲み置きの水を浴び、昨日の愛の残り香を流す。

鏡に映るリヨカのキスマークを寂しく見つめ、そつと部屋を抜け出した。

井戸の近くでもう一度顔を洗う。朝のひんやりした空気を胸いっぱい吸いながら、まだ身体の内側に残る彼を思う。

下腹部に手を当てるとまざまざと思い浮かぶ昨日の記憶。リヨカを求め、求められ、深みに溺れていく二人。もう二度と離れたくないと願い、今もそう思っている。けれど、彼には目的があり、その足枷になりたくない。そして……、

「お？ じょうちゃん、早いな……」

霧の向こうからのっしのっしとやってくる不思議な影。大きめの四足と翼。ガロンの背中ではシドレーが手綱を引いていた。

「あなた……、なにしてんの？」

「ウチのガロンちゃん朝早いぞますからね。散歩は毎日の日課ぞますのよ。おほほのほ」

手で欠伸を隠しながら笑うシドレー。一体なんのまねなのかはさておき、アルマの中で残っていたピースが嵌る。

カボチ村近辺に現れた翼の生えたキラーパーンサーというのは、シドレーによるガロンの朝の散歩が原因。朝もやの中ではそれを見間違えるのも無理はないだろう。

「あれ？ リヨカは？」

「まだ寝てる」

タオルで顔を拭きながら、それが失言であったと真っ赤になるアルマ。

もつともシドレーは気に留める様子もなくガロンの背中から降りると、鞆から干し肉を取り出して与える。彼が一体どうやってお金を稼ぎ、どこでそれを買っているのか、アルマは首を傾げてしまう。「んで、どうすん？ お前は……」

「私はお前なんて名前じゃありませんよ」

「はいはい……。デボラはんも来るんじやる？ リヨカはもすつかりその気じゃろうしな」

「あら、覚えてたの？ 鳥頭つてわけじゃないのね？」

「俺の知り合いつて言ったら数える程度しか居ないしな。きつめでわがまま、赤毛の姉ちゃん……。そしたらデボラはん以外に居ないつてわけよん」

「まったく、リヨカもそれぐらい覚えておけつていうのよね。私もリヨカとせつかく再会できたんだし、本当は別れたくないけど、そこだけちよつと不満なのよね……」

「まあ……。あのちんちくりんがこんなポインキュッポインな姉ちゃんになるなんて思わないわな、リヨカもそういうの疎い奴だから勘弁してやれや」

「いや！ 私は四年も待つたのよ？ そりゃ、あそこまでたくましくて格好良くて、強くて優しくなるなんて思わなかつたけどさ……。あの魚顔、肝心なところで鈍感だし……」

「前も思つたけど、その魚顔つて褒めてるん？」

「だから、今度は私を探しにきてもらおうかな……。そしたら一緒になつてあげてもいいかな？」

目をきらきらさせて祈るように手を合わせるデボラ。彼女の中ではリヨカが必死の思いで探し当て、跪き、手にキスをしているのだらう。

「はいはい。ま、リヨカには黙つておいてやるけど、あんまり夢見てるのがっかりするで？ あいつ結構もてるしな……」

シドレーは井戸の縁に座つてつまらなそうに空を見る。

かつてリヨカの周りに居た女の子を指折り数え、自分の周りには

ガロン一匹ということ踏まえ、シドレーは嫉妬交じりのため息をついた。

昼頃、ようやく目を覚ましたリヨカは、隣に居たはずの彼女の姿がないことに愕然としていた。

身の程知らずの恋が成就したと思った矢先、ベッドからは彼女のぬくもりは消えていた。

またしても手の隙間から漏れた気持ちに寂しさを覚えたが、もともと彼女とは身分が違うと醒めた笑いを浮かべるリヨカ。

彼女には自分のような風来坊ではなく、もつと相応しい人が居る。負け癖の付き始めたリヨカの寂しい決断が彼に表面的な明るさを与え、晴れやかな笑顔を繕わせる。

食い違いを見せる解釈もそこに、彼らは次の目的地としてサラボナ ポートセルミ間を繋ぐ洞窟を目指した……。

86 | ルラフェン

ポートセルミ西の街、ルラフェン。月に一番近いとされている。満月を模して作られた黄身餡の団子、ルラムーンはこの銘菓。かつてはルラムーン草と呼ばれる不思議な魔力を秘めた草の生産をしていたが、神話の時代が神話となつてからは、取引が禁止されるようになった。

もともと生育の難しい草であり、またポートセルミ港の発達に合わせ、栽培が容易でよりお金に結びつきやすい野菜の生産へとシフトしていった。

もつとも、それらはルラムーン草を必要とする、ある魔法を封印する必要があつたから。それを知るのは、ごく一部の富豪や王族、領主とされる者だけだつた……。

激しい雨に曝されながら宿へと駆け込む一人と一匹と一翼。一匹はその容貌から雨を凌げる馬屋に向かい、一人と一翼は軒先に向かう。

「ふい〜、まったく酷い雨やな……」

シドレーは麻袋から向日葵の種を取り出し、ぼりぼりと齧る。

「だから一休みしようつて言つたんだ」

小腹の空いていたリヨカは、差し出されたそれを掴み、口に運ぶ。香ばしい香りと苦味と渋みに、ささやかな甘味のある向日葵の種。まるで自分がリスにでもなつたような感覚になりながら、その素朴な味を楽しんでいた。

「せやけど、荷物の期限が迫つてたやろ？　しゃーないやん……ぼりぼり」

「それだつてシドレーが無理に引き受けたからだろ？　旅馴れてない地方なんだから、ほいほい引き受けるもんじゃないよ……ぱくぱく」

「困ってる人を助けるのは義人の常やろうが。いつからそんな冷たい子になったの？ ばりばり」

「報酬に釣られたくせに……もぐもぐ……」

「まあええやる。こうして荷物も無事に届いたんやし……あ、もう空やわ」

「おかげで遠回りになったじゃないか……そういえばこの向日葵の種、どうしたの？」

「ん？ 積荷ん中から拝借したで？」

「積荷って、シドレー、今から届けるやつじゃないか！」

「せやかて、自分も食べてたやる？ 大丈夫大丈夫、一つくらい減つてもわからへんって……」

「もつ……」

「それよか、今日の宿をなんとかしたほうがええんでないの？」

ため息交じりに宿の受付に行くリヨカ。外では馬屋で丸くなるガロンに、受付のおじさんは、馬が食われないかと冷や冷やしていた。「あの子は大人しい子だから平気ですよ。それと、僕と……。このドラゴンキッズの大きいのが泊まっても平気な部屋ってありますか？」

大きいキッズという言葉に首を傾げながら、リヨカの人当たりの良さそうな笑顔に頷く受付のおじさん。

「あんた魔物使い？ へえ……初めて見たよ。あんなに行儀の良いキラーパンサーは……」

「ウチのガロンさんはそこいらの下品なのとは違っんざます」
器用にタオルで背中を拭くシドレーに、受付はさらに目を丸くする。

「驚いた。このドラゴンキッズ、喋れるんだ。ベネットさんに教えてら喜ぶかもな」

「ベネットさん？ 良かった。僕らその人に届け物を預ってるんです。どこに住んでいるんでしょうか……？」

「ん？ ああ……、ベネットさんならこの街の入り口を左の壁伝い

に進み、突き当たりを右に曲がって三番目の十字路を左に曲がり、さらにトンネル潜って井戸の隣かな？」

「え？ え？」

「まあ、そんなずぶぬれで慣れない街うるつくのはよくないよ。そんじゃあ今日は二人と一匹、ご案内つと……」

どうにも狐に抓まれた気分になりながら、リヨカは案内された部屋へと荷物を置きに行った……。

* * * * *

ガロンは馬屋で、シドレーは部屋で寝ている。リヨカは一人、降りしきる雨の中、傘と簡易の地図を頼りに街を歩いていた。

慣れないだけならともかく、おかしな具合に入り組んだ街の作りにリヨカは頭を抱えていた。先ほどから何度か庸兵らしき人とすれ違ったが、彼もまた道に迷っているらしく、お互い役に立たない。おまけに雨で視界も遮られ、途方にくれてしまう。

「あら……？」

リヨカが振り向くと、そこにはピンクの傘をさした一人の女性がいた。

青いストレートの髪は腰にかけ、雨に濡れないようにピンクのリボンでまとめられている。

ぱっちり丸い目はリヨカを見つめると「やっぱり」と言いたそうに笑顔に閉じる。

その笑いをはにかむように手で隠し、軽く会釈する彼女。

薄黄色のチュニックは七部袖の涼しげなもの。膝の近くでリボン結びされた活動的なパンツルック。見た目こそ地味だが、本人のもつ華やかな雰囲気は隠せそうにない。

一瞬リヨカは見とれてしまい、我に返ると慌てて頭を下げる。

「えと、どこかでお会いしましたっけ……？」

その問いかけに女性は驚いたように目を丸くしたが、直ぐに笑顔

で答える。

「ええ。一回目はお船の上で、二回目は妖精の国で……」
「妖精？」

「はい。お久しぶりですわね。リョカさん……」

その笑顔の裏には氷の女王を氷漬けにする稀代の魔法使い、フロ
ーラ・レイク・ゴルドスミスがいることを忘れてはいない……。

86 「ルラフェン」(後書き)

掲載日時が変更されたよ！

みんな、がんばってついてきてくれよな！

87 フローラの花嫁修業

「まあ、リヨカさんがお届け物を……。ベネットさんのお家は初めての人にわかりづらいところにありますし、困っていたでしょう？ 私ですか？ ええ……。その、花嫁修業のついでにベネットさんの研究を見学させてもらっております。なんでも古代の魔法を復活させたいとか……。うふふ、そういうのって興味を惹かれませんか？ 古代、歴史、伝説の……。考えるだけでも感動で震えます。ねえ、リヨカさんもそう思うでしょ？ ああ、わたくし、そんな時、そんな場所に立ち会えるなんて、本当に幸せですわ……」

うつとりと空を見るフローラに、リヨカは愛想笑いを返す。彼は正直、それほど興味もなく、過ぎた力を呼び起こしかねない行為については懐疑的でもある。

「さ、着きましたわ」

「はあ……」

入り組んだ街並を越えてたどり着いたのは、二階建ての大きなお家。煙突からは黒い煙がわっかをつくっていた。

「ベネットさん、フローラです。お荷物が届きましたよ」

「ほいほい、届きおったかい！ いやあ良かった。ささ、雨に濡れるといかん。入ってくれ」

ドアがどんと開くと笑顔満面のおじいさんが顔を出す。ケイン老人と同じかそれ以上の老齢であり、禿げ上がった頭はきらりと光る。ベネットは荷物を持ったリヨカを家へと押し上げる。

「あ、あの、僕は……」

「ああ、その荷物をこっちに運んでくれ。ほらほら、フローラちゃんも早く」

「はい！ さ、リヨカさん！」

今回も流されるままに流され、リヨカはベネットの研究所へと導かれていった……。

部屋へ入ると、むっとした空気がリヨカを出迎える。

部屋の真ん中にある大きな釜は、まるで魔女の怪しげな儀式を連想させるもの。初見のリヨカは一步退いてしまう。

干した雑草の青々しい臭い。思わず鼻をつまみたくなるほど。よく見るとベネットとフローラはしっかりとマスクを着用していた。

「さて、とりいだしたるはこの向日葵。これを使えば「お天気お姉さん」ラナが司る天候の精霊を起こすことができる。さすれば古代の魔法、ラナ系が使えるわけじゃない」

意気揚々と語る老人と、同じく感動に手を合わせるフローラ。

「気候？ ラナ？ お天気お姉さん？」

リヨカだけがついていけず、おろおろと二人を見る。

天候魔法は文字通り天候を操るもの。かなりの魔力を必要とし、広域使用の際には多数の魔法使い、魔道士を集める必要がある。

もともとラナ系の扱いは非常に難しく、かつてラナリオンで雨雲を呼んだ際、貯水池を満たすどころか村一つ水没させたことすらある。対を成すラナファインも雨雲を蹴散らすどころか日照りを呼び寄せ、一時的に土地を干からびさせたとも……。

これらの魔法はみだりに使われてならないと、ルビス正教会の日曜礼拝の賛美歌で眠りに誘われている。

現状、もしそれを使おうとするなら、彼らを起こす必要がある。

それはザメハのような覚醒魔法ではなく、「お天気お姉さん」ラナの好んだ向日葵など特別なモノが必要となる。

今、ベネットの実験が成功すれば、目覚めた精霊達は自分達に覚醒をもたらした者を主とし、その問いかけに応えるようになる。これも精霊との契約の一種だ。

部屋の中央にある大きな炉で向日葵の種が炒られ、独特な臭いが部屋に充満します。

すると、だんだんと室内に白い煙が立ち込める。それが天候の精霊であることに気付いたのは、リヨカにばかりそれが漂うから。

「ぶはっ、なにこれ……」

せき込みながら身体にまとわりつく白い粉を振り払うリヨカ。モノトーンな世界で異質なほどに色彩豊かな輪郭を見せるベネットとフローラにリヨカは首を傾げる。

「あれ？　なんで二人とも平気なの？」

白い煙を払いながらリヨカは咳き込む。どうやら白い粉はリヨカにだけまとわりついているようで、二人にはなんら被害が見えない。「ベネットさん、この白いのが……」

「うむ。これが天候を司る精霊じゃろうな……。いや、ここまで大量なのは初めて見たぞい。分量を間違えたかの？　そして……、なんでお前にだけ向かうんじゃない？　というか、お前誰じゃ？　さてはワシの研究を盗みに来たのか？　こわっばめ」

「え？　え？」

招き入れられただけのはずが、いつの間にかスパイ容疑を掛けられるリヨカ。次第に薄れていく白いモヤを見送りながら、どういい訳したものかと困り始めていた……。

「ふむ、お前さん、リヨカというのか？　ああ、荷物を届けに来てくれたんじゃないな。なるほどなるほど。そんで、フローラちゃんに道案内されてきたわけじゃな？　やっぱり魔法に興味がおありで？　見たところ、それなりの素養が見受けられるの。まあ、フローラちゃんのような逸材からすれば見劣りするが、鍛えればそれなりになるの」

実験を終えて居間で寛ぐ三人。ベネットはリヨカをしげしげと見つめ、ひび割れたコップを彼に向ける。

「ためしにこのコップにスカラを唱えてみんしゃい……」

「ええ……」

リヨカは印もそこそこに土の精霊を呼び出し、コップを強化する。ベネットは硬質化したコップで机をトントンと叩き、その精度を見る。

「ふむ……。独力でこれだとすると、中々のもんじゃな。魔力は高いが、方向が一定でなく、それが互いに相殺しているといったところじゃ……」

ベネットは人差し指をコップに当て、つうと線を引く。すると精霊が互いに向き合い始め、コップを覆う青紫の光が薄れて消えていく。

「うそ。僕の魔法、消されたの？」

強制的に霧散させられる防壁魔法。いくら簡易の印と無詠唱とはいえ、ただ指を走らせた動作だけで無力化させられたことは驚きだった。

「ベネットさんは魔法の根幹を理解なさっておりますの。そうすわね。たとえ私の全力でも、正面からなら、ああしていなされますわ」

こそつと呟くフローラの言葉にリヨカは驚きを隠せない。大魔道士と呼ぶに相応しい彼女の魔法すら無力化されるほどの実力が、目の前の老人にあるのだろうか？

「その分、魔力はからつきしじゃがな。多分、お主よりも魔力は弱いぞ。知識があるのと力があるのは別じゃからな」

コップを戻すベネットは笑いながらそういう。

「さてと、それじゃ始めるか……。お主、リヨカ君はまず水を汲んだバケツを用意してくれ」

「はい？」

「リヨカさん、バケツはこちらですわ」

「え？」

フローラはベネットに頷くと立ち上がり、井戸へと向かう。わけもわからずリヨカはそれに従い、水を汲んで戻ってくる。

「魔法とは精霊を使役することじゃ。そのためには魔力を使えばよいが、実はそう単純なことではない。そうだな。じょうろに水を汲んでも出口が大きすぎれば水の勢いは弱い。逆に出口を小さくすれば勢いは強くなるが、一度に出る量は少なくなる。それを解決することは……まあ無理じゃが、目的に合ったじょうろを学ぶことに意味がある。お主程度の魔力なら上位の魔法もかろうじて使えるはずだ。バギクロスにベギラゴン……まあそこら辺か。イオナズンやメラゾーマとなると、やはり素養というか、資質が足りないと言える。それは別にお前が劣っているというわけではない。向きが違っただけやよ。そうじゃな。フローラちゃんは特別じゃからな……」

ベネットは水面を見つめ、先ほどと同じようにひとさし指を立てる。そして水面をすーっとなびかせると、波紋が一方へと流れだす。「へ？」

「コーラルレイン。本来は海上に嵐を呼び寄せる魔法だが、バケツの中で嵐を起こされても困るので、かなり弱めになっている。まあ、ワシ程度じゃバケツをひっくり返すのが精一杯じゃがの」

「はあ……」

「印と詠唱を教える。まずは精霊を使役し、その向きを自在に操ることから学んでもらおう」

「僕が？」

いつものまにやら始まったレッスンにリョカは自分を指差し、裏返った声で聞き返す。だが、ベネットは当然といったようすで頷き、反論を許さない。

「フローラちゃんるときは大変だったぞい？ バケツが激しく渦を成して辺り一面水浸し……」

「もう、ベネットさんったら……」

照れたように笑うフローラだが、バケツの水程度が集める水の精霊で嵐を巻き起こす彼女はやはり只者ではないのだろう。幼少の頃から氷の魔物を氷に閉じ込めるような荒業を成すのも頷ける。

リョカはフローラから付箋の挟まれた魔道書を受け取り、水の頂

目を引く。

「とはいえ、魔力のある限り放出するのは魔法使いとして滑稽なわけじゃ。それに精霊が求めるだけ魔力を放つては、どちらが使役されているのかわからんからな」

ほっほと笑うベネットにフローラは顎に手を当て、そっぽを見る。「さて、それじゃあフローラちゃんには次のレッスンと行こうかの……」

ベネットはこっそりとフローラのお尻に手を回すが、「いけませんわね」とペシンと叩かれる。

「じゃありヨカさん。がんばってくださいね」

「あ、はい……」

なし崩し的とはいえ、魔法とその奥深さを学ぶには良い機会と、リヨカは早速練習を始めた。

88 青い髪のお子

リヨカがコーラルレインを覚えたのは、魔法入門書を手にしてから十分後のこと。最初はバケツの水を波立て、部屋に水を撒いてしまふ。どうせ濡れているのだしと外へ出てバケツと格闘するリヨカ。その集中力は目を見張るものがあり、不自然な波紋を作る程度までに上達した。

そのうちに雨も上がり、今度はふわりと影が映る。

「リヨカ、お〜い！」

空を見上げるとシドレーが舞っていた。

「あ、シドレー、ここだよ〜」

リヨカが手を振ると、彼も気付いたようではさつと降りてくる。

「荷物届けたん？ なんならなんでこんなところで油売ってるん？」

「うん、ちよつと魔法の練習してるんだ。流れというか、なんかそんな感じでね」

「魔法ねえ……。まあ、お前の印とか詠唱とか粗いからな。いいとおもうで？」

「やっぱり下手かな……」

シドレーの指摘にリヨカはふふつと笑う。このあけすけもの言う友人が居てくれたことに、もやの中にあるリヨカの心にも明かりが差していた。

「ま、下手かしらね？」

「「え？」」

すると、ベネットのお家、角の陰から顔を出す子が一人。

青い髪を後ろでアップさせていて、ポニーテールのようにさらつとしたものではなく、ふわつと広がったもの。気の強そうな瞳とへの字に結んだ、ルージュすら引かれていない唇に勝気な美少女という雰囲気がある。

青い胸当てと白いマントを翻し、腰には柄に宝石を散りばめられ

た剣を帯びている。

「お前……確かアンだっけ？」

かつてラインハットの宿屋で出会った女の子。その時は何が不機嫌なのか、名前すら名乗らずに去っていったが、

「そうね。確かそうだったわ。そう呼べば？」

今回はそれに頷いた。

「えと、僕の絵？ 最近はあるり描いてないんだけど……」

「別にいいわ。サンタローズであらかたもらってきたし」

腰に手をあて偉丈に振舞う彼女。幼い雰囲気の『アン』とは違いつげとげしい嫌悪が感じられる。

「この修行でしょ？ 私もお母様に何度かやらされたわ」

アンはリヨカの前につかつかと歩み寄ると、指先に青白い光を集めだす。

「海獣よ、戯れるままに荒波を示せ……、コーラルレイン……」

指先が水面に触れると、途端に水柱が立ち渦を成す。

「うわ！」

細かい水飛沫を上げるも、あくまでもバケツに留まる小規模な嵐。

リヨカは驚き、声も出ない。

「ふふん、どうかしら？」

「すごい……」

得意気に胸を張る彼女。魔力、そして使役のどちらもリヨカの遙か上を行くであろうアンに、彼は素直に拍手をする。

「そんなん……」

すると、びゅうと冷気が横から吹き、その水柱を氷柱に変える。

二人の視線の先には腰に手をあて胸を張るシドレーがいた。

「まったく負けず嫌いな奴ね……」

アンは氷柱に指先で触れ、今度は光と熱を集める。すると勢いよく氷柱は溶け始め、バケツへびちゃびちゃと音を立てる。

「で？ 今度は何の用？ またリヨカさんをご指名ですか？ リヨカさんには大切な人がおるんじゃないから、横恋慕は止してくださいね」

毎度嫌味つたらしく言うシドレーにアンはフンと鼻でならず。リヨカは思い当たる節に真つ赤になるが、シドレーはどこ吹く風。「なんで私がこんな浮気者なんか……。女と見ればだれでもかれでも泣きついてさ……。あーやだやだ……。」「かれでもってのはさすがに無いと思うけどな……。まあ、坊主が女だったらするのは否定せんぞ。うんうん」「ちよつとシドレー、それって……」

心底嫌そうに腕を抱くアンと、その件に関しては同意とばかりに頷くシドレー。リヨカは自分がそんなに女性にだらしないのかと、過去を振り返る。

指折り数えて脳裏で微笑む女性達は、彼の前から去っていった。ふがいないと頭ではわかっているが、彼なりの後ろめたさが密かにある。もし、剣を届けたら、あるいは、それを埋める旅に出ることも本気で考えていたから……。

「それより貴方の持っている剣、ほら、ルドマンさんに渡すはずのアレ。今すぐにフローラに渡しなさい」

「え？　なんでアンさんが父さんの剣を知ってるの？　フローラさんの知り合いなの？」

「なんでもいいでしょ？　とにかく、貴方の仕事はここで終わり。さっさとその決まった相手でも追いかけていればいいわ。そうすれば皆幸せになれるの」

「皆幸せ……？」

リヨカは「皆幸せ」という言葉を反芻する。

マリア、ヘンリー、エマ……そして自分。

皆が願う結末を迎えることもなく、波止場で挨拶もできずに別れた過去、自分だけがそれを追ってよいのか迷う。

そして、父の願い。父は彼に自分の人生を生きてほしいと願った。だが、今際の際に残した願いはその間逆。どちらも願いであり、どちらも父の言葉。

せめてできうる全てをしてからでも……。そんな妥協点で終らせ

ようとする自分が、とても卑怯に思っていた。

「そうよ。貴方はこれ以上余計な旅をしないでいいの。貴方も、その大切な人も幸せになれる。貴方さえ来なければね」

「アンさん……。僕には君の言いたいことが見えないんだ。とにかく大切なところを隠しながら言われても、僕だって頷くわけにはいかないよ」

「話せるならとつくに話してるわ。私は貴方だけは赦さない。私のお父さんを奪った貴方だけはね！」

「僕が、アンさんのお父さんを……？」

まったく見覚えが無いことにリヨカは言葉が告げない。彼女の見た目からするに、自分とそう年齢も離れていないだろう。もし彼女の父を奪うとして、幼少期のリヨカにソレができるだろうか？

幼い旅路、そういった場面に出くわしたこともなく、ただただ困惑するリヨカだが、アンはいたって真面目らしく、涙を浮かべながらリヨカを睨む。

「お、おい……。リヨカがお前の親父奪うって、こいつみたいな青二才に物騒な依頼する奴なんていないやろ？」

話の流れのおかしさにシドレーが間に入る。だが、彼もまたアンの真剣な表情に嘘を言っているとは思えず、その矛盾に近い言葉に困惑する。

「どうかありませんでしたの〜？」

すると、ぱたぱたと駆け出してくるフローラののんきな声があった。笑顔で手を振るフローラにアンは「やばっ」と小声で呟き、さっと翻す。

フローラほっと一息つくくと、アンを見つめて何かを思い出すように視線を斜めに向ける。

「貴女は確か……妖精の国でお会いしましたよね？ ベネットさんのところでお勉強をなさるおつもりで？」

「ええと、そのまあ、そういうわけではありません……」

フローラを前にして冷や汗を浮かべながら丁寧というか、しどろ

もどろになるアン。その様子をシドレーの半眼に晒されると、彼女はリヨカに向き直り、刺々しく言い切る。

「と、とにかく、リヨカ、あの剣はフローラに渡しなさい。いいわね？ 絶対だからね！」

そう叫ぶとアンは走り出し、角を曲がったところで光が跳ねた。

「まったく忙しい奴じゃな……。んでも、あの剣つてあれじゃる？

お前の親父が見つけたっていうごてごての剣……」

「うん。多分それしかないと思うけど……。一体あの剣はなんなんだろうね……？」

「ああ、別に装飾以外におかしいところもないし、魔法が込められてる程度じゃからな……」

「え？」

「ほい？」

その言葉にリヨカは彼を見る。シドレーも何かおかしなことを言ったかと、彼を見返す。

「シドレー、他にも何かおかしなことがなかった？」

「いや？ なんか呪われてるとか？」

「そうじゃなくて、すごく重いとか……」

「俺からすれば重いけど、剣としては普通じゃとおもつで？ ただ、持っていると頭がちくちくする。なんつうか、ぼーっとして、前にも似たようなことがあったんだけど、忘れちゃったわ……」

「君、あの剣をもてたの？」

「そりゃこの手だつてそれくらいできるで？ 東国の箬かて俺様自由在」

小さな手をわきわきと動かす。その手に合う箬があるかといえはそれが一番の謎だが、彼でも棒を掴む程度のことはでき、そしておそらくはあの剣を掴むこともできるはず。ならば、あの不自然な重さ、扱いにくさを感じていないのは何故だろう？

「もしかして……魔物用の武器？」

魔物専用の武器の存在はそこまで珍しいものでも無い。魔物使い

が増えるにしたがつて、その武装や装飾に凝る者も多い。ただ、巨大な魔物や四足の装飾ならともかく、まったく人が扱えないように施す必要もなく、疑問は残る。

「リヨカさん……、どうしましたの？」

一人話しの外に置かれていたフローラが首を傾げる。

「実はフローラさんのお父さんに渡すように頼まれていたものがあった……」

アンに言われたからではなく、この腑に落ちない不思議な矛盾を解消するためにも、第三者の意見を求めたのだ……。

宿屋に戻ったりリヨカは、例の不思議な剣をフローラに見せる。本来ならみだりに見せるべき代物ではないが、彼女はルドマンの娘であり、目にしたとしてもそれは遅いか早いかの違いでしかない。

緑を基調とした柄には威嚇をするかのような竜の頭が裝飾され、大きな宝石を掴むかのようにはめ込まれている。そしてひんやりとした不思議な空気を醸していた。

「これをお父様に……？」

フローラは剣を手にとると、柄を握る。

「あ、危ない」

鞘や刀身を持つには申し分ないが、柄を握ると途端に重くなるおかしな仕様。リヨカは慌てて支えようとするが、フローラは軽々というほどではないが、すんなりと鞘から抜く。

「あれ？」

リヨカは目の前の光景にマヌケな声を上げる。かつてマリアと共に見つけたとき、その剣は不自然なほどの重さを見せ、呪いの仕業かと二人を怯えさせた。けれど、今フローラはその柄を握り、涼しい顔を刀身に写している。

「不思議な剣……。魔力が吸い込まれるというか、とても寒々しい力を帯びていますわ……」

「ねえ、フローラさん、重くないの？」

「重いですけど、両手なら……」

「そうじゃなくて、持てるの？」

「ええ、現にこうして……」

「そう、そう……」

リヨカは自分のほうがおかしかったのかと頷き、鞘を渡す。

「おいおいどうしたリヨカ？ 剣をしまってやらないなんて……」

剣の扱いにフローラは慣れておらず、横からシドレーが手を伸ば

してそれをしまう。

「二人とも、その剣、重くないんだ……。僕が握ったときは、普通に扱うなんて無理なぐらい、すごく重かったから……」

「これが？ そうは思えんけどな」

シドレーは剣を持ちながらぶんぶんと円を描く。その様子は確かに重いものを振り回す所作には見えなかった。

「そういえば前にお父様が古道具屋からこれと似た雰囲気のを買ってありましたわ。この緑の色がよく似ておりまして、あとこの宝石も……。姉さんならこういうのに詳しいんですけどね……」

「へえ……」

シドレーはリヨカを見ながら笑いを堪えていたが、鈍い彼は気付かない。

「そういえばこの不思議な剣、御伽噺にありましたわ。なんでも竜の神様がお空のお城に居たころ、翼の折れた天女様がお空に帰るために探し当てたとか……」

「なんじゃそりゃ。その剣は通行手形か何かなんかい？」

「ええ。そして、もしその伝承が本当なら、この剣もまた、その可能性が高いかと……。なんてね。そんな子供じみた話、退屈ですよね？」

くすつと笑うフロラ。彼女にとっては同じ伝承でも魔法のほうに興味深いらしい。

「で、これをお父様に渡せばよいのですか？ 私が預って大丈夫ですけど……」

「いえ。これは父さんが僕にするようになって言いましたし、それに父さんがどうしてこの剣を見つけたのか、ルドマンさんに聞いてみたいので、これは僕が渡します」

「そうですね……。わかりました……。それではリヨカさん。また明日」

「うん。また明日……？ あれ？」

いつの間にか明日もベネットの修行が決定したことに、リヨカは

自分の主体性の無さを本気で心配し始めていた……。

朝早くからベネットの家を訪ねるリヨカ。シドレーはガロンの散歩に出ており、今は一人でバケツと向き合っている。

波紋の形状が不自然な波を成し、それがだんだんと一本の線になる。水の精霊は比較的穏やかで、ベネットが食後のコーヒーを飲むころにはやり終えた。

「ほほう。使役するのは上出来みたいじゃな。フローラちゃんはそれだけするのに一日かかったからな。鷹と鳶の違いはあるが、やはりお主にもそれなりの才能があるの」

ベネットは満足そうに頷くと、手招きをする。

続いて向かったのは裏庭で、丸太がいくつもある。

「魔力の方向を学んだら、続いて集中させる方法を学ぶ。水の精霊だと弾けてしまつてコツが掴みにくいから、今度は風の精霊で学ぶ。バギは使えるな？」

「ええ」

リヨカは指先に魔力をイメージすると、そつと回し、ふわつと風を起こす。

「ふむ。それでこの丸太を切ってもらう。ただし……」

ベネットは親指と人差し指を開き、薪にするには大きいそれに翳し、気合を込める。

空間が切れるかのような錯覚と共に、丸太が割れる。

小刀程度の風刃で丸太を切る技術に目を見張る。普段リヨカが奮う真空魔法は大振りで、相手を殺傷させない為もあるが、面積で威力を稼ぐもの。

自称魔力の乏しい老人だが、魔法の扱いは確かなモノだと再確認させられる。

「こんな感じでじゃ。無駄に切り裂くことなく、必要最低限の範囲

に集中させる技術はかなり難しいぞ。心してかかれ」

「はい……」

いつの間にか呑まれ始めたリヨカは、丸太を前に老人の真似をして指を翳し、風の精霊を使役する。しかし、イメージの定まらない彼の風刃は、本来の小刀程度の威力で表面を削ると、むなしく霧散していった……。

夕暮れ時になっても上手くいかず、途中書物を読み直して印と詠唱を正しく学びなおすリヨカ。丸太を前に数センチ程度ずつだが、徐々に切れ込みを深くしていった。

魔力の遣い過ぎで心労からその場に倒れ込むリヨカ。額の汗を拭い、詠唱のせいで乾いた喉を癒そうと唾を飲む。

「使役の方に力を入れすぎて、威力を殺しているな。簡単に言えばじょうろの口を閉じて、ついでに水もあまり汲んでいないということじゃ」

様子を見に来たベネットは、切れ込みを見ながらそう呟く。

「あ、ベネットさん……」

リヨカは起き上がり、彼に向き直る。

「まあ、フローラちゃんみたいに切り株だらけにされても困るがな。最初はそんなもんじゃ。とりあえず、ほい」

ベネットは斧をリヨカに向け、切り株を指さす。

「今日の風呂を沸かすのに使うんじゃ。授業料とすれば安いもんじやぞ」

「はい……」

斧を受け取ると、手ごろな大きさのそれを取り、薪割りを始めた……。

90 | 精霊を統べる者

「さて、今日は魔法についての基礎を学んでもらおうと思う」
その日は生憎の雨で、修行は一時お休み。代わりにベネットによる魔法についての講釈が始まった。

フローラは生真面目な黒淵眼鏡を掛け、どこから持ってきたのか古い辞書をいくつもテーブルに置き、ペンを握ってベネットの一言一言に頷いている。

特別に列席を許されたシドレーは、だれた様子で欠伸をしており、対照的であった。

魔法とは精霊にはたらきかけることで得られる結果である。

はたらきかける際、差し出すものは己の魔力であったり、精霊の好むもの、もしくは、動作、言葉であったりする。

詠唱。精霊に言葉で呼びかける方法で、魔力が乗りやすい枕詞を選ぶ必要がある。一般的にも広く伝わっている方法で、言葉によっては口にもすることも禁止されるものがある。例えば精霊を司る者の名前なんかがそうじゃな。

もちろん魔法使いの口伝通りにそれを口にすれば使えるというものでもない。暴発を防ぐためなのか、精霊と何かしらの方法で契約してからでないと思えないことが多い。

元々の才能、生まれ、育ち、あるいは儀式などがそれにあたるわけじゃ。

続いて印。精霊とのコミュニケーションの取り方は何も言葉だけではない。動作もまた精霊にはたらきかける方法じゃ。これも詠唱と同じで、精霊と契約をし、そのつもりで組んでいると示す必要がある。

他に精霊文字。これは魔法が使えることが前提になる。己の魔力で物、空間を問わず意志を伝える文字を示し、精霊を使役する。こ

れを応用したのが魔法を秘めた道具。

精霊の好む素材によって込めやすさが変わってくる。例えば、ルカニヤスカラなどは土の魔法だから、焼き物などに込めやすい。他にも炎や光はルビーのような赤い宝石が適しているなどな。これらは素材の質により、持続性が変わってくる。

各種魔法について。

精霊の種類は知っているかの？

身近なところだと、炎、風、水、土、雷。

異質なものが、時、天候、運命。

怪獣と呼べるものが、空、海、地。

不明な点が多いのが、太陽、月。

精霊には各々司る存在が居る。

それらは精霊を使役する際にも意味を持ち、特に司る者を枕詞に添える場合、効果も格段に上がる。その分魔力の消費も激しくなるため、諸刃とも呼べる。

精霊を司る存在。意識して名を呼ぶことは、精霊を強く刺激することになるから、控えねばならない。

炎邪、フェーゴ。

風来坊、ナード。

水妖、マール。

地母、ガイア。

電刃娘、アーノ。

時の眠り子、ルビス。

お天気お姉さん、ラナ。

運命神、ダーマ。

怪鳥、ラーミア。

海獣、グラコス。
壊力、ブオーン。

太陽の子、レム。
月の猫、ネス。

彼らには好むものがあり、それに囲まれる者は、その系統の精霊に好まれることが多い。

例えば、この前、リョカ君に天候の精霊が集まったのには訳がある。

お天気お姉さんのラナはキラールパンサーを好み、ついでは向日葵も好きだという。聞けばリョカ君は、そのトカゲと一緒に積荷の向日葵の種を食べていたというではないか？ おそらく、それが原因じゃろうな。

そしてリョカ君は長く旅をしていると聞く。おそらくそういった経緯から、風の精霊に好かれ、地母の恩恵を受けるのじゃろう。

フローラちゃんは、そのヒラヒラした服や宝石、どちらも水妖マールの好むものであり、ヒヤド系が得意なのはそれが理由じゃろう。

ふむ、今日はこんなところかの。

フローラちゃんには退屈だったかの？ ふふん、そっちのトカゲはバカ面で居眠りか……。

ザメハ……。

その夜、宿の布団で丸くなるリョカを尻目に、シドレーは目を充血させながら外を見ていた。

「あのくそじじい……」

昼間に寝すぎたというよりは、魔法の第一人者ともいえるべくべ

ネットの覚醒魔法のせいか、彼はちっとも眠ることができずにいた。

9-1 | 複合魔法

リヨカの最近の日課は、日中は魔法の集中を学び、夕暮れごろから薪割り、水汲みと目白押し。

最初は丸太を切るのも一苦勞で、おがくずばかりに咽る日々が続く。

それも一週間が過ぎた頃には、手斧要らずで薪を作れる程度になった。

夕方頃になるとシドレーがやってきて、風呂釜を自前の火で沸かす。その際、やたらと薪を持って行つては、小銭を数える彼の後姿が見えた。

今日もいつものように薪割りを終えたりヨカは、台所の分を運び込む。

すると、居間のソファではフローラが額に氷嚢を当てながら横になつていた。

ベネットに見込まれている彼女は、リヨカとは別に上級魔法の修練を行っている。その手始めとして比較的簡単とされるのが閃熱系上位とされるベギラゴン。

街の外れにある石造りの部屋から荒野に向かって放たれる熱は、日に日に周囲の空間を歪ませる度合いを強めるが、まだ完全に自分の物にしていないせいも、必要以上に魔力を精霊にもぎ取られ、修行の途中に倒れることもあるという。

「すみません、こんな格好で……。あの、お夕飯の支度なら私が……」

彼女はリヨカを見てゆっくり起き上がり、台所へとやってくる。

魔法教育の一環に調理がある。魔力の強壮に良い食材選び、精霊が忌避するものと好むものを選ぶなど、学ぶことが多い。ルビス教会の僧侶も治癒などの御勤めをする場合、数日前から生ものを拒む。特に上位の魔法を使う場合は献立から注意する必要がある。

富豪の娘、フローラでも、ベネットのもとで魔法を学ぶ以上、調理は必須科目。もつとも、始めた当初はベネットのほうに苦行だったともこぼしていた。

「大丈夫だよ、これぐらい。それよりフローラさんは寝ていて」「すみません。それでは甘えさせてもらいます……」

リヨカの言葉に安堵するのはなにもフローラだけではなく、ベネツトも一緒であった……。

いつもならシドレーが風呂を沸かすのだが、その日は「やば用」らしくガロンを連れてまだ戻らない。妙に膨らんだ財布はきつとりヨカの薪の対価だろう。もつとも、ガロンを連れて行くことでおおよその見当はついている。きつとカボチ村、西の洞窟だろう。

リヨカは口の割りに面倒見の良い同行者のそっけない仕草が照れ隠しなのだろうと思いつつ、くすつと笑う。

「おーいリヨカ君。もつと熱くてきんかの？」

「あ、はい。今すぐ……」

ベネツトの声が聞こえたので、リヨカは新たに薪をくべ、竹の筒で息を吹き込む。

「ごおつと燃え上がる炎に、すぐにベネツトの鼻歌が聞こえてきた。ようやく魔法を凝集させることになれたリヨカは、比較的大きな薪に刃を放つ。それを二、三回繰り返して、不器用な木彫りの動物を作る。犬にも馬にも見えるそれを炎にくべると、パチッと火花が飛んだ。」

明日からは放出を学ぶ予定。魔法を放つ際に、必要以上に魔力を奪われるのは浪費でしかない。魔力も体力同様無限ではなく、心労として疲弊する以上、それを節約するのは重要な技術。

リヨカこの数日で魔法の奥深さをしみじみと体感していた。

さてと、もう大丈夫かな？

あまり炎を強め過ぎても熱くなりすぎるといけないので、薪をくべる手を止める。

「ベネットさん、温度大丈夫ですか？」

換気用の窓をガラスと開けて尋ねるリョカ。しかし、そこにいたのは一糸纏わぬ姿のフローラ。

青い髪をタオルでまとめ、さあ湯船に浸かろうという最中、いきなり開いた窓を凝視するフローラ。その姿勢のせい、リョカの角度からだと全てが見える。

手に収まる程度の小ぶりなおっぱいは形がよく、スベスベしていてさわり心地がよさそう。その中央にピンクの突起があり、互いにそっぱを向いている。

お腹周りは彼の知る裸体と比べるとやや肉がついているが、女性らしい丸みを帯びている。

すっかり手入れのされている股に余計な陰毛はなく、ピンクの割れ目と恥ずかしそうに……。

「きゃー！」

ごく自然な反応に、見とれていたリョカはようやく我に返る。しかし、その刹那、彼女の翳した手のひらに光が集まりだし、それが彼へと放たれる。

それは光、水、炎、風、熱、大地の精霊を幾重にも従えた恐るべし光弾であり、風呂の壁などあつてないものとはかりにぶち破り、ついでにリョカを数キロ先の荒野までぶっ飛ばす。

不幸中の幸といえるかは別として、リョカの脳裏には可愛らしく頬を染めて恥ずかしさで泣き出しそうになるフローラの裸がしっかりと残っていた。

あくる日の朝、台所ですれ違ったフローラは彼に目もくれない。そしてベネットからは、修行の代わりに大工道具を渡された……。

92 | 古い話

魔法の修行は一時休止、風穴どころか壁ごと崩れた風呂を見ながら、リヨカは大工仕事に従事していた。

修行のおかげで木材加工はお手の物。幸か不幸か奴隷時代に培った建設知識のおかげで組木にもそう手間取らなかった。

「……おいリヨカ〜！」

リヨカが汗水垂らしながら木材と格闘していると上空から声がした。そして、どさつと金色の毛皮の塊が降ってきて、ついで黄金の翼竜が舞い降りる。

「ふにゃ〜ん」

ガロンはリヨカを見つけると嬉しそうに頬ずりをし、リヨカもガロンの首を撫でる。

「ただいまつと……。あれ？ おま、何してんの？」

たすき掛けの鞆を直しながらシドレーがきよるきよると辺りを見る。昨日までは風呂のかまどと壁があったはずが、修復途中の無残な姿が見えたのだから当然だろう。

「ちよつとね……」

誤解に基づく不名誉な事実にはリヨカは言葉を濁すが、シドレーは手を顎にあて、半眼で彼のつま先から天辺まで見つめ、呟く。

「ふうん。おおかた坊主がねーちゃん風呂覗いて魔法でぶっ飛ばされたのかと思ったが、違うのか？」

「え？ なんでわかったの？」

シドレーの鋭い指摘にリヨカは目を丸くして振り返る。すると逆にシドレーも驚きを返し、ふうとため息をつく。

「いや、お前がぼろださなきやわからんかったで。しかし、こりやまたすげー魔法もあったもんだ……。みてみい、この切り口。火炎や閃熱じゃないし、風でもないな。なんつうか、魔力で思い切りぶん殴って壊したって感じじゃな……」

破片を手にしめてしみじみ呟くシドレー。切り口のささくれかたにつむじのような捻れがあり、力で大きくへこんでいるようにも見える。

「あかんわ……。これは売り物にならん……。…」

そういつてぽいと捨てるシドレー。他のまだ形を成しているものを抱えると、風の精霊を集めて整える。

彼は見よう見真似ながら魔法の練習をしているらしく、リヨカのそれと比べてもずつと鮮やかであった。

「で？ お前、修行のほうは終わったん？」

「まずは修理からだつてさ………」

「はあ……。しゃーないな。俺も手伝うから、さつさと終わらせるぞ………」

そういうとシドレーは比較的丸い丸太をガロンのほうへ転がす。

ガロンがそれで遊んでいる間に、戸板となりそうなものを運び、組み始めた……。

昨日はリヨカの予想通り西の洞窟へ行っていたらしい。ルラフェンの街で売りさばいた薪でルラムーンをお土産に買い、幼き魔物達に餞別として配ったとのこと。

あまつた一個は特別にリヨカにくれてやるとのことだが、元を正せばリヨカの作った薪の対価。一応のお礼を述べながら、複雑な気持ちでそれを口にする。

リヨカが彼を面倒見が良いと彼を褒めると、照れくさそうに頬を掻きながらそつぽを向く。そしてふと冷静な顔になると思案気に眉を顰めていた。

それは照れではなく、純粋な困惑からのようで、コメカミをとんと叩きながら「思い出せない」と呟くのが印象的であった。

そうこうしている間に何とか壁の修復も終わる。とはいえ、その

頃にはもう夕暮れ時。リヨカ達は修理の報告をしたあと、宿へと戻ることにした……。

「放出の修行は閃熱系や集光魔法で行うのが適している。どちらも目視しやすいからじゃな。さて、リヨカ君はすでにレミールを覚えているようじゃから、集光魔法で行おうと思う。この個室……。まあ平たく言えば倉庫じゃな。ここに籠り、レミールを持続させながら本を一冊読むことが第一かの。本は好きなものを読むといい。魔法に関するものも多いから、損することもないぞ。もし暇だったら掃除しててもいいしな」

天窓一つしかない四畳半程度の倉庫を指差しながら、ベネットは放出の修行について説明をしていた。切れ込みから光が差し込むものの、本を読める程もない。

リヨカは頷き、倉庫に入ると早速光の精霊を集め、レミールを唱える。すると外側からかちゃんと言葉の掛かる音がした。

「昼になったら一度見に来る」

「はあ……」

開錠魔法を覚えているリヨカにとって門程度ならあって無い物。とはいえ魔法に詳しいベネットといえど、旅の青年が禁魔法の類を知るなどと予想するはずもない。

「さてと……」

ひとまずリヨカは本棚にあった一冊の本を手を取った。

メダルと王様

メダルの王様はメダルが大好き。

王様は神話の時代からずっとメダルを集めてるんだ。持ってきた人には褒美を与えるんだって。

でもね、もし王様のメダルに粗相をすると大変なんだよ？

昔ね、僕の知り合いのお姉さんの友達のお母さんの従姉妹の娘さんがメダル王のところで侍女をしていたんだって。

メダルの勘定と金庫にしまっただけど、あんなパジャマのボタンみたいなものを大層に扱っなんてばかばかしいよね。

ある日、旅の若者がメダルを五枚持ってきたんだ。

六枚あれば奇跡の剣と交換できたのさ。

若者は剣が欲しくて欲しくてたまらなかった。いったいどの殺人鬼だろうね？

だけど王様、一枚足りないからと突っぱねた。

メダル王のお家って結構大変なところにあっつてさ、四方を海に囲まれて、タコの怪物ダゴンや、イカじゃ釣れない地獄のザリガニとか魔物がわんさかいるんだ。行くのも帰るのも大変なのさ。

侍女の子はすごく気の毒に思ったらしく、どうせ一枚と高をくくって褒美と交換しちゃったんだって……。

そしたらその夜王様がカンカンになっつて怒つてさ。

小さなメダルが一枚足りないっつて喚いて、家来一人ひとりに聞いて回ったのさ。

隠し通せることもなく、侍女の子が犯人ってわかってね、王様、彼女にメダルを数えさせたのさ。

一枚、二枚、三枚、四枚……。

何回数えても一枚足りない。

侍女の子は泣いて謝ったけど、王様の怒りは収まらない。

泣いてる侍女の子を抱え上げると、井戸に放り投げて、誰が作ったか大きなメダルでフタをしたんだって……。

それから毎日、夜になると……。

子供だましの怪談だと笑いながら、リヨカは本を閉じようとする。すると……。

「一枚、二枚、三枚……、一枚たりんわ〜」

何かを数える不審な声に、今まさに読んだ内容が被り、ぞくつと背筋が震える。

「……シドレー？」

「ん？ 何？ 今忙しいんだけど、後にしてくれる？」

天井では人騒がせな翼竜が銭勘定をしていた様子。

「もう……」

これではサントフィリップ号の赤毛の女の子を笑えないと思いなから、リヨカは別の本を手にする。

*
*

みんな消えた

お忍びで世界を見て回っていたお姫様。

教育係のじいやを連れて、今日もどこかで大活躍。

女の子を食べちゃう悪い魔物をぶっ飛ばし、誘拐犯をふんじばる。

エルフの秘密のお薬拾って、東国の力試して五人抜き！

けれど、ある日お家に戻ったら、そこには誰も居りません……。

「誰かいないの？」

けれど、お返事ありません……。

「これは奇怪な……」

じいやにお返事ありません……。

「ミ〜居ないの？」

名前を呼んでも返事はなし……。

みーんなどどこかへ消えました。

王様どこかへ消えました。

姫様のこして、消えました……。
じいやを残して消えました……。

「リヨカ、居るか？」

「！？」

再び聞こえてきた迷惑な同行人の声に、リヨカはまたも背筋をぞくりとさせる。

「脅かさないでよ、シドレー……」

「何が？」

「怖い本読んで……。それで、シドレーの言う事がいちいちないようにフィットして……」

「ほう、それは雰囲気が出てよかったな。俺ちよつとガロンの散歩に行ってくるけど、ちゃんと修行せいよ」

「はいはい、わかったよ……」

「はいは一回でええで」

翼の羽ばたく音がしたあと、集中が切れたせいか光が弱くなる。

「おっと……」

リヨカは慌てて印を結び、光を先ほどより強くさせる。それは怪談のせいかもしれない。

シドレーの気配が消えるとなると一気に静かになる。もともとベネットのお家自体町外れにあることもあり、昼間であるにも関わらず、リヨカは不思議と怖くなっていた。

これ以上怪談の類を読むのもいやになり、気を紛らわせるためにも別の本を取る。

その本には表紙に竜の絵が描かれており、例の不思議な剣の柄に良く似ていた……。

92 「古い話（後書き）」

ドラクエ4と5はつながっているわけですが、彷徨いし者ではいろいろおかしな展開がでてきます。

予定は未定ですが、1234も書きたいなあとおもっております。

93「アンの怒るワケ

天女と少年

少年は探していた。石化した両親を元に戻す方法を。

強い魔力による呪いで石となった両親を助けるため、少年は村を出た。

村の外には魔物がたくさんいるが、それでも少年は挫けない。

なぜなら彼には不思議な特技があったから。

少年は魔物と心を通わせることが出来るのだ。

彼に平伏した魔物は、彼と共に歩み、そして彼の率いるサーカスに参加した。

手にした本はあまりにも子供じみていた。ただ、表紙に絵が描かれていた剣が竜に良く似ていることからか、気になった。もしかしたら、この本もまた例の剣に関わるものかもしれない。魔法好きなベネットが子供向けの冒険譚を集めるのにも理由があるだろうと、リヨカは捲り始める。

少年を見つめる赤い目の青年。銀の髪を風になびかせ、剣を巡って対峙した。

青年は目的のために少年の持つ剣を欲していた。

少年もまた両親を救うため、退くことはできない。

……アと……アは彼らを見つめ、どうしてよいかわからず、ただ成り行きを見守っていた。

緊迫した二人の間に踏み込む燐とした声。
女は二人を交互に見つめた後、連れ立った青年に被りを振る。
女は青年に退くようにいい、剣は少年こそが持つべきという。
青年はそれを運命の呪かと問うも、女は予言と答えるのみ。

滲んだ箇所がいくつもあり、捲るたびにページが解けそうになる
本に悪戦苦闘する。

内容はどうやら竜の神がまだ天空に居たとされる神話の時代の物
語らしい。

かつてラインハット城でデールに連れられて読んだ内容に似てお
り、これは物語色を強めたものだろう。

ただ、呪という言葉にまたも背中がぞくりとしてみまい、続きを
読むべきか悩んでしまう。

カツン……。

不意に天井から物音がした。リヨカはぱつと上を見上げる。

天窓はご丁寧に黒の布で覆われており、誰がいるかは見えない。

もつとも、天井に自在に上がれるのは、翼を持った彼ぐらいだろう。

「……まったく、さっさと渡せって言ったのに、どこにいるのかし
ら……。」

そしてまたも本の内容に関わることで自分を驚かせようとする声
に対し、さすがのリヨカもむつとする。

「シドレー、いい加減に……。」

リヨカは本棚に足を掛け、天窓に手を掛ける。

「してよねー！」

そして一気に開くと、そこには青い布と白い素足が二本、その付
け根にはピンクの布地があり、白いレースのふわふわが縁取ってい
るのが見えた。

「え？」

「きゃ！ この変態！」

何が目の前にあるのかわからないリョカだが、青い布が無理やり翻ったと思うと、それがそのまま彼の顔面に落ちてきて……、

「わわ……」

柔らかで、すっぱい臭いのするそれを押し当てられると、そのまま自由落下を始める。

魔法で防御するには、不埒な幸せが頭にちらつきそれどころではなく、彼の後頭部は……。

「この変態……」

「だって、アンさんが窓の上に居たなんてわからないよ……」

天窓の上に居たのはシドレーではなくアンだった。彼女はリョカを探していたらしく、部屋の天井近くから飛び立つシドレーを見ていたらしい。

「見たでしょ？」

「え？ なにを？」

「しらばつくないでよ、私のパンツよ！」

「パンツ？ ああ……ごめんなさい……」

「もう！ 信じられない！ この変態！ そんなにパンツ見たいの？ 女とあればなんでもいいのね！」

「いや、だから……」

真っ赤になつて喚き散らすアンに反論は無意味と、リョカは下手に反論はしない。

「まったく、ファーストキスは奪われるし、やっぱり貴方ロリコンなの？」

「ロリコンって……。アンさんはそんなに幼くないでしょ？」

キスの思い出から算出するに今は十六、十七辺りだろうか？ だが、不思議とリョカやフローラより若く見える気もする。

「ん、まあそうかもね」

「あれは事故みたいなものだし……」

「あのねえ、貴方、人の大切なファーストキスを事故で奪う気？」

「えと……」

「本当に最低ね……」

「ご立腹な様子のアンは腕を組んで唇を尖らせる。リヨカはどうしてよいものかわからず、頭を掻きながら……」。

「僕はアンさんのこと、可愛いと思ってる」

「そう応えた。」

「はあ！？ あのねえ、貴方ねえ……」

するとアンは真つ赤になってリヨカを指さすが、二の句が続かないらしくもごもごとなる。

「アンさん、怒ってばかりだけど、笑ったほうがきつと可愛いよ。ほら、昔妖精の国で会ったとき、すごく可愛いと思っただけ……」

リヨカは天窓を閉めると、レミールを唱えなおす。ぼつと明かりが彼の手のひらから周囲へ広がり、二人を映し出す。その頃にはアンも落ち着きを取り戻し、やや拗ねた様子でリヨカを見ていた。

「ねえ、アンさん、教えてくれないかな。僕は君にどんな酷いことをしたの？ 君のお父さん、僕が原因で……」

「ん……、それは私もよくわかってないのよ。ただ、貴方も大きく関わってることだから……」

「僕が大きく関わる？ 今までにそんなことあったかな……」

「違うの。これからよ」

「これから？ まるで予言だね……」

リヨカは先ほど読んだ話を思い出す。銀髪の男が呪と言い、別の女性がそれを予言という。そこには矛盾というほど乖離もなく、ただ、同一というには言葉の含みが違う。リヨカとアンの見解の違いに似ているかもしれない。

「予言……。そうかもしれないわ。私がこうしてこの世界を旅するのも、それを赦されるのも、全ては予言がさせること……」

「で、その予言で君のお父さんは……？」

おそらくはリヨカが関係し、もしくは起因し、アンの父親を害するのだろう。それが目の前の少女を悲しませる結果になるのなら、リヨカとしても看過する気にならない。特に父親という点が、この胡散臭い話を見過ごさせなかった。

「それをさせないためにも、貴方にサラボナへ行かせたくないの」

「僕がサラボナに行くと、君のお父さんが死んじゃうの？」

「多分……」

「ん……。僕は暗殺みたいな危険な仕事を請けたわけじゃないし、ただ剣を届けるつもりなんだけど……」

頬を掻きながら苦笑いするリヨカだが、アンは思いつめた形相で唇を噛む。

「そうか……。でも僕も父さんと約束がある。だからこうしよう。

僕は剣を届けたらすぐに街を出る。絶対に余計なことに首を突っ込まない。ああ、ちょっとだけルドマンさんに父さんのことを聞くつもりだけど、そこはいいでしょ？ 他に手がかりがないんだ」

「ん、できればルドマンさんに会ってほしくないんだけど……」

「そこは譲れない約束だから……。けど、サラボナに知り合いなんていないし、長く滞在することも無いよ。だから、できるだけそういういざごときには首を突っ込まないって約束する。アンさんのお父さんが危ないんでしょ？ よく事情はわからないけど、君が嘘を言っているとは思えないし、大切な人を失う辛さはわかってるつもりさ」

悲しそうに笑うリヨカにアンは驚いた様子で彼を見る。

「そっか、貴方も……。うん、ありがとう……」

唇の端をにと上げて微笑むアンは、かつて妖精の国で見たときの素直な笑顔を浮かべていた。

「んーん。誰にでも言いたくないことはあると思うし、アンさんの頼みなら断れないよ」

「あら、なんで？ 私が可愛い女の子だから？」

「それもあるけど、僕の絵を欲しいって言うってくれる人だもん。そういうのって嬉しいよ」

「あ……、そうね。私、貴方の絵だけは嫌いじゃないから……」
ふうと軽く息を着き、膝を深く抱えるアン。

「ね、また描かないの？」

「最近はあるまり暇がなくて……」

「そう？ でも……また貴方は描くと思うけど……」

「うん。そのうちね。それじゃあ僕はまだ修行があるから、アンさんは……」

天井を見上げ、本棚を梯子代わりにさせるのも淑女に失礼と扉に向かう。そしてドアに手を掛け、鍵が掛けられていたことに気付く。

「ああ、そうだ。鍵、掛かってたんだっけ……」

リヨカは開錠魔法の印を組み、ドアを開けようとする……が、

「大地に眠る悪戯な精霊よ、我が囁きに応えて開け、アバカム……」
アンは彼に構わず印を組むと、大地の精霊を呼び起こし、かちやりと鍵を解く。

「え？ アガムじゃなくて、アバカム？」

「あ……」

驚くりヨカと、しまったとばかりに眉を顰めるアン。

「一体どこで？ 妖精の国？ でも、デルトン親方は僕にしか教えてないし、それにアガムを見つけるだけでも大変だったみたいだし……」

「ええと、あの……、これは……だから……」

純粹な疑問を掲げるリヨカの視線に対し、アンはどもってしまふ。アガムは元々アバカムの効果を落としたもの。複雑なものや魔法鍵の掛けられた物には通用しないというこそ泥レベル。

対しアバカムはこの世の全ての扉を開くとされる物。そして、現在は禁魔法として詠唱法や印の組み方などは封印されている。

「おや？ お主だれじゃ？」

するとリヨカの様子を見に来たベネットと、額にタオルを当てた

フローラがやってくる。

「あ、あの……えと……」

アンはベネットよりもフローラが居たことに驚いているらしく、リヨカの背後に隠れようとする。

「こちらはアンさんです。僕の知り合いで、絵を取りに来ていたんですよ」

「絵を？ お主、画家かなんかか？」

「いえ、そういうわけじゃないんですけど、恩人と約束をして、彼女に絵を渡してって言われていまして、今日がその日だったんです。すっかり忘れていて、しょうがないから鍵を開けてもらって……すみません、修行の途中だったのに……」

リヨカはすらすらと嘘を並べ立て、肩掛け鞆から真っ白な画用紙を取り出し、二人に見えないように丸めてアンに渡す。

「はい、これが今回の分。アニスさんよろしくね」

「あ、どうも……」

リヨカのウインクにアンはきよろきよろしながら頷くと、ベネットに軽く会釈して出て行く。

「ふむ、あの子の相当な素質をもっておるの。もし良かったらウチで修行をしてみてもどうかかな？」

ベネットは顎髭を撫でながらアンの去っていったほうを見る。

「あら、私はてつきりベネットさんのよろしくないクセかと思いましたが……」

そういつてフローラは腰に回されたベネットの手を軽く抓った。

「あいちち……。フローラちゃんはほんと鉄壁じゃの……」

ベネットは手のひらを軽く吹きながら、リヨカに向き直る。

「で？ 本はどれぐらい読めた？」

「えと、この本とこの本……ですね。そういえばベネットさん、この竜の紋章って何かご存知ですか？」

リヨカは気になっていた天女と少年の本を取り出し、ベネットに見せる。

「うむ？ ああ、これは確か、竜の神様の話じゃな。そうじゃな。いわゆる神話の時代か……。ま、御伽噺みたいなもんじゃ。今のお主が読むには丁度良いかもしれんな……。ほっほっほ」

まるでリヨカの魔法の腕前を子供扱いするベネットに、リヨカはまだまだ未熟なのかと一息ついた。

一方、フローラは二人のことよりも鍵の周りを丹念に調べていた。

94 フローラはオカムリ

夕方頃、リヨカは薪割りを終えて風呂を沸かすべく、かまどに薪をくべていた。

いつもならシドレーが代わりにやってくれるのだが、今日は気分が乗らないといい、屋根の上で丸くなっていた。

リヨカは指先をくるくる回して風の精霊を呼び寄せ、そしてそよ風を炎に向かって吹かせる。それが火の勢いを消さない程度に維持すること十数分、熱さとは別にリヨカの額に汗が零れた。

自分の魔力から考えればこの程度の量、問題もないはず。けれど、まだ互いに反発し合って相殺される威力があり、必要以上のそれを奪われている。

集光魔法のようにただ放つだけならともかく、いざ実践となるとまだ応用が利かなかった。

そんなこんなでおでこを拭くと、突然、視界が冷たいモノで覆われる。

「え？ え？」

「くすす、だーれだ……」

リヨカの反応を面白がるように笑うのはフローラの声。リヨカはそつと彼女の手を取り、向き直る。

「フローラさん、どうしたの？」

「え？ リヨカさんが根を詰めすぎてないか心配になって……」

「そうですか？ 僕は割とのんきですから……」

「そう？ うふふ……」

にこりと笑う彼女からはまるで花が零れるかのようで、リヨカもつられて笑ってしまう。ただ、頭を過ぎるのは彼女の昨日の態度。どんなに謝ろうにも見向きもしてくれなかったことを考えると、この態度の変え方に裏がありそうに思えてならない。

「どうかしました？」

どうやらそれが顔に出たらしく、素直なリヨカ笑顔も一転引きつり始める。

「ええ、その……昨日のこと、ちゃんと謝りたくて……」

「ええ、すっかり怒ってますわ。沐浴覗く不埒者、天が見逃せど悪は悪、エッチな犯罪赦しません」

「うっ……」

笑顔のフローラにリヨカはぱつと頭を下げる。それは謝りたいという感情よりも、彼女の顔が怖くて見られないということ……。

「まったくリヨカさんたら……。見ないうちにすっかりスケベな殿方になられて……」

ふうとため息をつくフローラに、リヨカは内心どきまぎしている。もし昨日の魔法弾を至近距離から受ければ、風呂の外壁のような緩衝材も無し、物理防御魔法も効果があるかわからず、かなりまずいことになりかねない。

「ごめんなさい……」

「うふふ。本当に悪いとお思いに？」

「ええ、はい。赦してほしいです」

「赦す？」

「なんでもします……」

「なんでも？」

「ええ……」

「そう……なら……」

「なら？」

「今日来た女の子……」

「え？ えと、アレはアンさんっていつて……、昔、オラクルベリ―で助けてもらった人の知り合いなんだ……」

「それは聞きました。私が聞きたいのは、彼女の使った魔法ですわ

……」

「魔法？」

「ええ、アガム……にしては大地の精霊のあらぶり方が違いました。

あれは貴方の仕業ではありませんわよね？」

「ええと、フローラさんの考え過ぎじゃない？」

「リヨカさん……。なんでもすると、さっき仰いましたよね？」

「うん……」

「なら、正直に答えてくださいますか？」

「えと……、はい……」

「やっぱり……」

リヨカの答えに満足したのか、フローラは真剣な表情で考え込む。魔法に対して強い思いのある彼女だけに、アンが禁魔法を使っていたことに興味があるのだろうか、リヨカには伺いしれない重い空気が彼女を中心に渦巻いており、彼はいまだに顔を上げられない。

「あの、フローラさん？」

「あ、はい？」

「えと……」

「何ですか？」

「赦してもらえ……」

「ません」

フローラは笑顔でそう、きっぱりと答えた……。

95 | 赤いツキ

赤い月の夜は出歩いてはいけない。それがルラフェンの街のルール。

その一つの理由が、ルラフェンでは満月の日近くになるとルビス正教会の人々がポートセルミで講習を受けるためだ。

もし、大怪我をしたり、毒や魔物の呪を受けたとして、それを癒す手立てが一時的になくなるため、皆満月の日には出歩かない。

とはいえもともと自活のできる街でもあり、外へ出る人も少ないためか、最近では子供のしつけのためにお化けが出ると様変わりしていた。

だが……。

その日、リヨカはなかなか寝付けなかった。一番の理由はガロンの遠吠え。空に浮かぶ赤い満月に興奮したのか、彼はしきりに吼えていた。

「うーん、おかしいな……。いつもはこんなに遠吠えなんかしないのに……。リヨカ、ガロンさんの散歩行ってきた……」

ベッドの上で丸くなるシドレーが瞼を擦りながら言う。

「うん。しょうがないね。これじゃあ皆に迷惑だし……」

リヨカはしょうがなく起き上がると、旅人の服に着替え、用心のために鎖帷子を上から羽織る。新調した鋼の昆を手にした。

もっとも、地獄の殺し屋とされるキラーパーンサーに牙を向く命知らずも少ないけれど。

「あれ、シドレーは？」

「鳥目だから夜は無理……」

「そう、それじゃあ……」

リヨカはシドレーに手を振り、一人宿を出た。

「行くよ、ガロン……」

「ふがあ」……」

リヨカの姿にガロンがぴよんと飛んでくる。リヨカの腰に擦り寄ると背中に乗るようにしゃがみ込む。

「どうしたの？ いったい……」

リヨカは不思議に思いながらガロンに跨ると、ガロンは大地を蹴って、早々に風になった……。

ルラフェンの街を飛び出したガロンとリヨカ。

風を切る速度に追いつける魔物など居らず、リヨカは帽子が飛ばされないようにしつかりと掴む。

「一体どこへ行くんだい？ ガロン……」

鬣を撫でながらガロンに尋ねるリヨカ。

途中ガロンは何度か立ち止まり、何かを探るかのように鼻を鳴らして、そしてまた走り出す。

荒野を走り、小高い丘を駆け、滝を越えて一路、西へ……。

そして見えてきたのは泥の小鬼達と、その中心で光を放つ何か……。

「あれは!?!」

一層スピードを出すガロンに、リヨカは深く掴まる。そして、スモールグールの一人目掛けて不意打ちの脳天割り!

「ぎゃごえ!」

リヨカの一撃に泥の小鬼は見るも無残に砂に帰る。

「バギマ!」

そして誰かを囲む集団を蹴散らすべく、真空の刃が放たれる。

ベネットのところでの修行が功を成したのか、鋭さを増した真空刃はスモールグールの身体を真っ二つにしては、その砂を吹き飛ば

す。

「バギマ！ バギマ！」

修行のおかげか、連発をするもそれに耐えるだけの余裕が備わっており、包囲の一角を崩す。

「大丈夫ですか！？」

リヨカは中心に居た人物に駆け寄り、守るように立つ。

「ええ、あ、リヨカさん」

「フローラさん？ なんでこんなところに？」

なんと魔物に襲われていたのは、あのフローラ。何故ここにいるのかもそうだが、彼女レベルの魔法使い、いや魔道士と呼べる存在がどうしてこんな小鬼達に遅れを取るのかわからない。

「すみません、パペットマンに魔力を四散させられて……」

「パペットマン？」

よくみるとスモールグールに紛れていくつか木の人形が居り、不思議な踊りで精霊達を追い払っていた。

これではいくらフローラが精霊を使役しようとも、凝集させる頃には霧散してしまう。さらに威力こそ弱いものの、分裂を繰り返し無限に増えると噂されるスモールグールに囲まれ、ジリ貧になるだろう。

「ガロン、フローラさんに乗せて走れるかい？」

リヨカの問いかけにガロンは唸り、魔物達を睨む。先ほど壊した包囲網もすでに修復が完了しており、フローラの放つ中級火炎魔法も協力して小鬼達がブロックする。

そして徐々に包囲網を狭めてくる。

西国の不思議な敵。殴った手ごたえをみれば、それがそれほど脅威なものではない。けれど、集団をなすことで魔法、物理を無力化するその戦い方には舌を巻く。

「リヨカさん、私がベギラゴンを貯めますから、その間……」

「いや、四方からの攻撃となると、大技を放つのは無意味だ。せめてシドレーが居てくれたらいいんだけど……」

迫り来るスモールグールを毘でなぎ払うも、分断されたところから小ぶりな二体に分かれる。それを繰り返せばいつかは無力化できるかもしれないが、ここそと逃げ去っていったそれは頃合を見計らって合体する。行動不可能になるまで分散させるには真空魔法や爆発魔法を使用するのが効果的に見えるが、不思議な踊りのせいでそれもできない。

「何か……そうですわ……。近くに湖があります。そこならコーラルレインで……」

スモールグールが砂の魔物ならば、おおよそ弱点は水だろう。比較的近くに湖があり、その規模ならばたとえ不思議な踊りでも精霊達を四散させることはできない。

だが、そうはさせまいと見事に立ちふさがれ、万事休すに思えた。

96 「フローラの思惑」

「コーラルレイン……？ そうだ……！」

リヨカは着ていた鎖帷子を脱ぐと、縦に長く引き裂き、パペットマン達に投げる。

パペットマン達は鎖帷子が絡みつき、不思議な踊りが踊れなくなる。だが、包囲網自体はどんどん狭くなり、突破できるようにも見えない。しかし、リヨカはある印を組み始め……、

「大空を翔る奔放なる精霊達よ、その気まぐれな瞳を濡らせ……、ラナリオン！」

ルラフェンを訪れて成り行きで覚えてしまった例の天候魔法、雨雲を呼び寄せるとされるラナリオン。リヨカの呼びかけに白い精霊達が集まりだし、その上空に黒い雲を造り、赤い月を隠す。

そして、しとしと霧雨が舞い始める。

その霧のせいでスモールグルグル達は動きが鈍くなりだし、パペットマン達の間接がいきいきいと高い音を立てて軋み始める。

「よし！ いまだ、フローラさん！」

「うふふふ……、よくもやってくれましたわね、小鬼さん達……。おかげでヅルトン親方に編んでいただいたケープが砂だらけ……。サラボナの青きサファイア、知識の守人にして稀代の魔道士のわたくしにこのような辱め……、いかにして雪いでくれましょうか……？」

ふつつつと怒りのオーラを纏うフローラに、魔物だけでなくリヨカもガロンも退いてしまう。

不意に左手を掲げると、青い光を放ち、周囲にばらつく小雨を徐々に大粒のものへと変えていき……。

「水妖マールよ、うちに秘めた情熱を艶やかに舞え……メイルシュトロム……！」

静かな詠唱の後、ふわつと風が彼女を中心に波状的に吹き、小鬼

や木偶人形を怯ませる。そして、次の瞬間、まるで大時化がごとく嵐が巻き起こり、魔物達に水の柱で閉じ込める。

「きぎぎい〜！」

「きしきしきしきし……」

激しい雨にさらされ、徐々に身体が崩れていくスモールグール達。水が体内にしみこみ、重さで膝を着くパペットマン。

「ほほほほ……、どう？ 挑む相手を間違えたのではなくて？

でも後悔しても遅いですわ……。私の怒り、この程度では収まりませんの……！」

さらに右手を掲げ、交差させるフローラ。締めなのだろうか、雨粒の大きさ、嵐の勢いが大きくなりだす。

「もう十分だよ。フローラさん」

リヨカは彼女の手を取ると、小波魔法とも呼ばれるマホトーンを唱える。リヨカの技術程度では彼女の魔法を四散させることはできないが、それが弱くなるのはみえる。

その際に動けるスモールグールはパペットマンを担いで逃げ出す。

「邪魔をしないでリヨカさん、今いいところなの……」

自らの操る高位魔法の威力に酔いしれるフローラは、きりきり舞いになるパペットマンや、身体が崩れていくスモールグールを前にして興奮気味にリヨカを睨む。

だが、リヨカはそれに動じず、天候の精霊達を解く。次第に雨足は薄まり、それにつられて水の精霊も勢いを殺がれ、次第に散り散りに消えていく。

「なっ！ せっかく魔法を試すいい機会でしたのに……」

「フローラ！」

興奮冷めやらぬ彼女をぴしゃりとしかりつけるリヨカの怒声。フローラはきよんとした様子で彼を見上げる。

「フローラさん……。貴女の魔法がすばらしいのはよくわかってい

る。けど、それで徒に傷付けるのは、良くないことだと思うんだ」

リヨカは地面に散らばった木片を拾い上げ、癒しの精霊を呼び寄せる。彼らは木片を持ち主であろう木偶のもとへと運び去っていく。

「たとえ物質生命の魔物でも、感情はある。きっとフローラさんに怯えていたと思うよ」

「当然ですわ。私のことをここまで……」

「身を守るために力を使うのは悪いことじゃない。僕だってこれまでにいくつもの魔物の命を奪ってきたし、それは否定できない。けど、脅威が去ったのなら、もうそこで終わりにしないといけない」

「ですけど……」

「それに、ベネットさんは言うてました。請われるままに魔法を詠唱するのでは、どちらが使役されているかわからないって……」

「私はちゃんと……使役してましたわ……」

「精霊はね……。でも、冷静で居られた？ 違うよね。昔、僕がデボラさんを危険な目に遭わせたとき、それと一緒に。自分ではできると思って過信して、そして無用な結果を招く……。フローラさんのケープ、汚れちゃったけど、だからといってここに住む小鬼達を八つ裂きにしたかったの？」

「それは……」

スモールグールは砂を纏った悪戯な精霊が正体。もちろん集団となれば人を害することもあり、油断はできない。ただ、本来は自分達の縄張りで泥遊びを作っては仲間を増やす程度であり、それはパペットマン達も似たようなもの。キラーパーンサーや山賊ウルフなどに比べれば有害さも劣る。

リヨカはケープの砂を軽く払い、「ね？」と微笑みかける。

彼女も自身の行動を省み、その穏やかな微笑みに頬を赤く染めて恥じ入る。

「すみません……」

「んーん。フローラさんだって怖かったと思うし、仕方ないよ。で

も、もし今度魔物達が戦意を失って逃げたとしたら、それを追っ
てはいけないよ」

「はい。かわいそうですからね……」

「ええと、それだけじゃないんですけど……」

リヨカの真意としては、手負いの魔物が凶暴化してキャラバンを
襲うということを心配してのこと。

また、人間に手ひどくやられた魔物は、酷く憎むことがあり、特
殊な魔物の場合、呪となってやってくることもある。それは特に物
質系や悪魔系に多い。

ただ、この大魔道士の卵からすれば、確かに「可哀想」なのかも
しれないと、リヨカは変に納得してしまう。

「で、一体どうしてこんなところに？ 今みたいのは特別としても、
フローラさんの格好だと、こちら辺は歩き難いでしょ？」

街で再会したときは別の青のワンピース。肌寒さをカバーする
ためのケープに意味深な宝石の散りばめられたサンダルのみ。足元
は露で湿っており、ところどころ緑の線が入ってしまったている。

「それは……」

「ガロンに乗ってください。街まで送ります」

「いや……」

「フローラさん、わがままを言わないで……」

「お願いですの。あと少しでいいの。西に、行って欲しいのです…
…」

「西に？ 何かあるんですか？」

「はい……」

「それは一体？」

「それは……。聞かないでください……」

こんな夜遅くにわざわざ街のはずれの遠いところまで来るのなら、
何か理由があるのだらう。それに加えて短い付き合いながら彼女が
意外と頑固なのは知っている。それが才能故なのか、お金持ちの子
女なのかは別として、リヨカは頷くことにした。

「わかりました。けど、もし危なくなったら、たとえどんなことがあっても引き返しますからね？ それと……」

先頭を切って西に向かうリョカにフローラは手を叩いて喜ぶ。

「いい加減、おとこのことを赦してくれませんか？」

「さあ……。どうしまししょうかね？」

フローラはよつやくくすりと笑うと、ガロンの背中に腰掛けた……。

97 | 月夜の晩に

ルラフェン西にある海岸沿いの平地。ここにはある不思議な草が生育するという。

そして、それは神話の時代が神話になる頃から封じられた、ある魔法に必要とされるのであった……。

赤い月が天の真上に来た頃、ようやく優しい、静かな淡い金色で大地を照らし始めた。

そして、それに応えるかのように、草むらに一輪、不思議な草が青白い光を放って空を向いていた……。

二人と一匹は草原の中ほどで光を放つ、不思議な草を見つめていた。

よく目を凝らすと、あまり例を見ない精霊らしき光がたゆたっており、それが異質なものであるとわかる。

「これが、ルラムーン草……」

「フローラさん、知ってるの？」

「ええ……。私が妖精の村で借りてきた古代の魔道書にあった、魔法の草ですわ……。本当に目にする事ができるなんて、光栄の至りですわ……」

うつとりとした様子で見つめるフローラ。嬉々と目を輝かせる彼女はまだ幼い少女の瞳であり、先ほどまでの高圧的な魔法使いの面影などない。

むしろリヨカには彼女の横顔こそが神秘的に見え、自然と唾を飲み込んでいた。

「この花を……」

フローラはハンカチを取り出し、そっと手折る。そして薔薇に似た花びらから香るように息を吸うと、そっと口に傾け、雫を飲む。

「ん……」

上質のワインを味わうかのように目を瞑り、すうっと鼻で呼吸をすると、軽く息を吐く。

「これで私も……」

見たところ何も代わっていない様子だが、次第に彼女の足元に精霊が集まり始め、だんだんと身体を上り始める。

「え？ あっ……」

それはどうやら彼女の魔力を吸い上げているらしく、フローラは眠そうに瞼を半分閉じ、眩暈を起こしたようにふらつき始める。

「危ない！」

リヨカは咄嗟に彼女を抱きかかえる。

「へ、平気ですわ……。ただ、ちよつと精霊さんを集めすぎたみたいで……」

その間もどんどんとフローラの身体から魔力が放出されつつあり、いくら魔力の高い彼女とて、それはかなりの負担となりえるだろう。

「どうということなんだい？ フローラさんの魔力が……」

「時の精霊はルラムーン草の雫が大好きですの。だからそれを横取りした私に怒ってるのですわ。代わりに魔力を奪おうって……」

弱々しい笑顔の彼女は、こんなときでも魔法と精霊の研究に余念が無いらしく、それがリヨカの怒りを誘う。

「フローラさん、こんなことをしてはいけません……。自分を危険に曝すような実験なんて赦せないよ。僕は君を危険な目に遭わせる為にここまでつれてきたわけじゃないんだ」

「ごめんなさい。けれど、どうしても知りたかったのですわ……。あの時、あの光を集めた魔法を……」

彼女の言う魔法が何を示すのかいまひとつピンとこないリヨカだが、その衰弱振りを見るに、何か手立てがないのか焦りが募る。

魔法のことならベネットを頼るのが一番だが、今からへ戻るのでは、時間がかかりすぎる。魔力が枯渇しそうならばそれを補えばよいのだが、魔法の聖水や祈りの指輪のような魔具の類も無い。

このままでは昏倒しかねない状況で、フローラの瞼がすつと閉じる。

「フローラ！」

光の精霊達はその間も彼女の身体を這い上がり、そして口へと移動する。

「この精霊達が居なくなれば……」

もし自分がパペットマンなら不思議な踊りでも踊ればよいのだろうか？ 魔封魔法で四散させようにも、精霊ごとに四散させるための印が異なり、禁魔法を多く司る時の精霊の印などは一般的な魔法書に記載されるはずもない。

悩むリヨカは彼女を見る。すると、彼女の唇から零れ落ちる雫に光が集まっているのがみえた。

「そうだ……」

時の精霊達がルラムーン草の雫を求めるといふのなら、一つだけ方法がある。それは……。

リヨカはフローラの顎にそつと指で持ち上げ、唇を重ねる。

彼女のあいたままの唇に舌を差し入れ、品が無いと思いつつ、ずじゅつと唾液を吸い上げる。

これはあくまでも緊急的な措置。そう頭ではわかっているものの、先ほど見た神秘的な横顔と、屈託なく笑う少女の微笑みを思うと、軽い眩暈が訪れる。

それはきつと時の精霊の仕業と偽りつつ、リヨカは彼女の唇を吸った。

「んちゅ……ちゅ……ずじゅつつ……んふう……」

次第に時の精霊が自分にもまとわりつき始める。そして、身体に沸き起こる倦怠感。かなりの魔力を奪うらしく、リヨカも気を失わないように気を張る。

「んう……」

負担が減ったせいか、フローラの瞼がかすかに動き、そしてかつと開かれる。

「ん、リヨカさん、なにを……んう……ちゅ……はむ……」
「だまつて、フローラ……」

リヨカは疲労のせいか、それとも彼女を見つめることが辛いのか、重い瞼に抗わずに彼女を見つめる。

「だつて、あ……んちゅ……」

そつと差し出される手はリヨカの胸元に添えられ、弱々しくも抗うかのように動く。けれど、舌先が何度か触れ合ったあと、彼を頼るかのように爪を立てた。

「ん……んうふ……ちゅ……ちゅ……」

「ちゅ……んふ……ちゅっちゅ……」

乾いた唇同士の探りあいから粘着質な混ざり合いに変わるころ、互いに目を閉じ、ただ唇だけで互いを求めていた……。

「んふ……はあはあ……」

リヨカが薄目を開けた頃には時の精霊も四散しており、キスの理由もなくなっていた。けれど、その柔らかさに未練を感じるリヨカはもう一度フローラの顎に手を掛け、そして強引に求めた。

「ん……」

緊急性を失ったキスに頑なに閉じられるフローラの唇。けれど、舌先の逢瀬を望むのは彼だけではない。

「ちゅ……」

舌先が軽く触れ合ったとき、フローラはそつと顎を引き、リヨカの頬を叩いた……。

「フローラ？」

「わたくし、初めてでしたの……」

「ごめん……」

俯くフローラにリヨカは愚かにも繰り返す。

「ゴメンなんて……いわないでください……」

そしてフローラも……。

青い月を背にし、帰路につく二人。ガロンに乗るフローラと、その手を取るリョカ。

彼女の手には急激にしおれていく白い花があり、それが茶色くしなびた頃、そつと草原に放った。

彼女の一夜の煩いもまた、その花のごとく……。

フローラがサラボナに戻ると決めたのは、あくる日の朝のことだった。

話によると、海辺の修道院での花嫁修業を終えた女性達を送る陸商隊が近く来ているらしく、フローラもそれに便乗して帰るとのこと。

リョカはせめて近くまで送ると申し出たが、まだ修行の途中だからと断られた。

その時の他人行儀なフローラの微笑みが、リョカの心に涼しい風を吹かせた……。

97 | 月夜の晩に（後書き）

リヨカは女運が無いのでしょうか？
さて、ここから先は初公開となります。
読んで後悔なされるな・・・ナンチテ

98 | サラボナ

夏の終わりを告げる涼しげな風。荒野の緑に黄色や赤が混ざる中、大隊といえるほどの馬車の群れがサラボナを目指していた。

豪華な数人乗りの馬車は馬三頭で引いており、金具の一つにいたる全てに装飾が施されている。

内装もそれに比例したつくりであり、座席にはふつくらしたクッション、談笑用に折りたたみ式のテーブル、日差しを遮るカーテンにと、至れり尽くせりだった。

席に着く者ももれなく上品な女子。彼女らは皆サラボナ・カレッジの学生で、バカンス兼花嫁修業の為に海辺の修道院で夏を過ごしていた。

皆、ひと夏の思い出と卒業を控えた近況に話題が尽きず、談笑に興じていた。

「……そういえば、フローラさん、お姉様はどうでしたか？」

そんな中、一人その輪に外れて外を見つめていたのがフローラ・レイク・ゴルドスミスだった。

「ええ。姉さんは相変わらずで、今はドルトン親方に花瓶を作ってもらったって、張り切っていましたわ……」

「まあ……。さすがデボラ様ですわね。在校生として誇りに思いますわ」

フローラの姉であるデボラもまたサラボナ・カレッジの卒業生であり、今はルドマンのバックアップの元、宝石商として商売をしている。

「じゃあ、フローラがゴルドスミス家を継ぐの？」

「はい？」

窮屈な馬車の中、隣の子を押し退けて口を挟むイレエヌ・バルドーに、フローラは穏やかに返す。

「だって、フローラの家ってサラボナ永久名誉市民の家柄でしょ？」

あの言い伝えだと……」

赤毛を二つに結った少女は強気な青い眼差しでフローラを見る。それは好奇心というよりは、ある種敵対心に近いものがある。

「まあイレー又さんたら……。そんな言い伝えを本気で信じていらつしやるの？ うふふ」

だが、フローラはそんな彼女の問いかけを絵本の中のことと笑い飛ばし、隣の子女に話題を振っていた。

イレー又は今日も彼女に袖にされたと、むっとしていた。

++

サラボナ永久名誉市民。

かつてサラボナ地方を襲ったとされる巨大な魔獣。

天空の城から竜の神が現れる前から存在した、あるいはそれより以前からとされる三大怪獣の一匹だ。

ポートセルミの灯台よりも大きな身体、両翼、そして鋭い蹄を持ち、三つの目で地上を這う者を見下ろしていた。

ソレは自身の力を誇示することだけに生きがいを感じているのか、はたまた存在が赦されたことでの自由を謳歌したいのか、傍若無人に振る舞い、目に付くもの、生物、無生物拘らず、破壊し、喰らった。

人、魔物、魔族、エルフ、ホビット、動物が、その存在に恐怖し、一時は手を組み挑み、そして敗れた。

絶望の中、サラボナに住む青年が、ある真道具を見つける。

それは一見ただの壺にしか見えないものだが、『力』を封印できるといふ不思議な道具だった。

対象となる力とは魔力、筋力、財力、知力……、平たく言えば能力の絶対値であり、一度口を開くと『力』が一定量封じ込められるまでは止まらないという諸刃の道具だった。

巨大な魔獣とて大人しく壺に封ぜられるはずもないだろう。かと

いって、巨大な魔獣を足止めできるような力はなく、もしあったとしても壺に封印されかねないので、なり手が居ない。

その時は、失敗かに思えた……。

そこへ銀髪の魔物使いが現れた。彼は緑の竜を従えながら巨大な魔獣についての情報を聞きまわり、あわよくば、アレを使役するとまで言い放った。

さすがの与太話に村人は笑ったが、彼の抜いた黒光りする剣を見て、指先どころか毛先まで痺れる圧力に息を呑んだ。

この青年とともに戦えば、もしかしたら巨大な魔獣を足止めできるかもしれない。もし無理であっても、今死ぬか後で死ぬかの違い、それならば……。

村人達は彼に協力を申し入れ、巨大な魔獣に挑んだ。

結果は彼が足止めに成功している間に壺に封印し、周りの魔物や戦士ごと封印する結果となったが、勝利となった。

宴は一晩中続けられたが、銀髪の青年はぴくりとも笑わず、こう告げた。

『今回はしてやられたが、次はきつと俺が捕まえる。その時は決して邪魔をするな……』

英雄的存在の銀髪の青年だが、その不穏な一言に、皆彼を胡乱じた。

結果、彼の名は時間とともに伝承から消えてしまった……。

そして、壺を見つけてきた青年はサラボナ地方を救った英雄とされ、永久名誉市民としてサラボナの地に根を下ろした。

それを受け継いだのが現代の当主、ハルマ・ゴルドスミスだ。

ゴルドスミス家には一つのしきたりがあり、永久名誉市民という立場において、サラボナを守るという使命がある。そして、家名を続けるにあたって、ある試練がある。その試練を潜り抜けることが出来た者こそ、永久名誉市民としてサラボナの一等地の居住が赦されるのだ。

現当主のハルマを射止めたルドマン・アーシエルは、持ち前の商才を生かし、巨万の富を持ってして試練をクリアした。

彼のやり方にいささかの不満を持つものも居たが、伝承によれば巨大な魔獣を足止めするために軍隊の力を借りたこともあり、経済が力というサラボナの昨今の風潮において、受け入れられた。

そのルドマンの娘であるフローラとデボラは、家系上、婿を迎え入れる必要がある。

特に家督を継ぐ娘の婿の条件は力を示すこと。かつての厄災からサラボナを守った市民のごとく、力を示す必要があった。

本来なら、それはデボラの婿にこそ求められる役割なのだが、彼女がサラボナの豪邸に納まる性格ではない。今もどこかで鉱石や寶石、希少石を見てニヤニヤしているらしく、フローラが家督を継ぐのがもつぱらの噂。また、能動的な美女、悪くいえばじゃじゃ馬なデボラでは婿が来るとも思えず、かつて許婚とされたリベル・バーナードも、名誉と彼女を天秤にかけたうえで辞退したとされるほど。一方のフローラは、表面的には慎ましく、しとやかで、花よ鳥よと、深窓の令嬢を体現しており、彼女を求める者は下心と美貌を求めていたりもする。

そして、それがフローラが一番の悩みであった。

「ねえねえ、フローラさんはどなたを選ぶの？ やっぱリアンディ？ それともリベル？」

「アンディはそこそただけど、やっぱリベルのほうが良くない？」

「アンディは優しいそうだし、いい旦那さんになると思うけどなあ」

「そうかしら？ 私はやっぱリベルくらいがつがつしていたほうが、頼りがいがあった方がいいと思うなあ……」

「他にも對抗馬は多いわよね。ラインハットの英雄が来るとか聞いたわよ？ ほら、修道院にも何度か来たでしょ？ きつとフローラさん目当てよ」

「うそ！ うわゝ、なんかよりどりみどりで羨ましいわ……。一人

わけてもらいたい」

フローラの婿の話題で盛り上がる馬車の一団。ここ数ヶ月の禁欲生活のおかげか、たとえ他人の恋話であっても、いや、むしろだからこそ楽しいのか、花を咲かせていた。

内心を探ろうとする言葉に愛想笑いを返し、そっと窓辺を見つめてため息を着く。

少女達はそれを来の伴侶に対する憂いと取るのだろうか？

もう、皆さんったら……。私には心に決めた人がおりますのに、勝手なことばかり……。

サラボナで彼女を待つ大切な人。アンディ・ラーズのやさしげな横顔を思い出し、フローラはそっと瞳を閉じる。

けれど……、

98 | サラボナ（後書き）

ドラクエ5の最大のイベントというべくサラボナ……！
溶岩魔人に酷い目に遭わされた人も多いと思います。

実はピエールにスカラと熱耐性装備をつければ一体で安定するとい
う畷です。

ここからはさらにオリジナル要素が増えます。

「おお、フローラ、戻ったのか。ささ、母さんも会いたがっていたぞ！」

ゴルドスミス邸では門から玄関まで侍女に執事に召使と並んでおり、ルドマンが禿げ上がった額を光らせながらやってくる。

「ええお父様、ごきげんよう」

「フローラ、修道院はどうでしたか？」

ルドマンの後からやってくるハルマは、久しぶりに見る娘に優雅でかつ、優しい笑顔を向ける。

「ええ、とても素晴らしいところで、教育係のマリアさんも本当によくしていただいて、とても貴重な経験をしてきましたわ……」

朝、東の空に日が昇るより早く早く起きての床磨き。ベッドメイクからシーツの交換洗濯、食事の準備。

昼になったらオラクルベリーのルビス教会で賛美歌を歌い、午後は干した洗濯物を取り込み、お風呂を沸かしたり夕食の準備をしたり。しかも、夕食のときは必ず聖書の音読があり、そのおかげでいつも冷や飯を食べることに……。

普段は召使に任せることであり、最初の数日は珍しさになんとかこなしたが、二週間経った頃には根を上げ、不自然に届いた姉からの「仕事を手伝って欲しい」という手紙にほいほいと乗ったのだ。

デボラ曰く「二週間がんばったんだから、わたしより偉い」らしい。

助け舟を出したデボラに感謝しつつ、前よりも落ち着いた雰囲気のある姉を不思議に思ったりもした。

その後はルラフェンにて魔法研究家のベネットに会い、修行をさせてもらっていた。

そのおかげで上位閃光魔法であるベギラゴンを扱えるようになり、さらには禁止魔法の類である精霊の使役方法を学べた。もちろんそ

れは秘密だが、あの黒髪の青年だけはそれを知っているだろう。

あの方、一体何者なのかしら？

マナーも知らない田舎臭いところがあるが、根本的な品格が無いわけでもなく、穏やかな雰囲気と、鋭い感覚を持った不思議な人。

立場、家柄のようなステータスこそ珍しくないが、これまで出て来た人とは存在において一線を画しており、その激に触れたとき、不覚にも従ってしまった。

私に命令するなんて、ゆるせません……。

あの場面でリヨカの言葉が正しいことは、時間が経つにつれて理解ができた。冒険家としての勘、経験と、単純な力を振るうだけの自分。彼のほうが冷静に状況を把握していた。

そして、その後も……。

「！？」

フォークが皿と嫌な音を立てる。マナー違反な行為にハルマは愛娘を不思議そうに見る。これがデボラならきつく叱るのだが……。

「すみません。長旅のせいか、疲れが出て……」

「そうか。それは悪いことをしたな。先に風呂を準備させよう。うん、積もる話は明日でも明後日でも、ゆっくり聞かせてもらえばいいからな」

そつと頭を下げるフローラに、ルドマンは優しくいう。

「いいえ、お父様。私たくさんお話したいことがありますの」

フローラは熱くなる頬を隠しながら、フォークを置き、ナプキンで口元を拭く。

「お姉さまなんですけど、相変わらずフレッドさんに……」

「まったく、デボラの奴め……。あいつも職人気質だから……」

「うふふ、そういえばフローラ、この前アンディ君がフェンシングの大会で……」

「まあアンディが？ ぜひ見たかったですわ……」

あの時、唇を奪った青年の瞳と、二度目を受け入れたことを思い出し、それを自分に誤魔化すためにも、フローラは必死に話題を探

していた……。

++

帳が下りてリントブルムが舞う頃、窓の外には望月が輝いていた。キス。

フローラは夕食の時に演じた失態と、あの日のことを思い出していた。

初めて触れた強い人。それは恐れではなく、頼りがいのあるという意味。

彼と初めて出会ったのはサントフィリップ号で。

姉の小間使い程度の彼にそれほどの興味はなかった。けれど、夜のオラクルベリーで見せた勇敢な態度。結果だけを言えば、幼さとヒロイズムの暴走だが、それをいまだに引きずっている自分と比べても、ずっと凛々しい。

そして、妖精の国での出来事。地獄の殺し屋と人語を話す羽トカゲを連れる彼に、自分には無い才能を感じていた。

戦いは単純な力だけでは勝てない。

そんな話をした記憶があるが、それは何も彼を勇気付けるためではなく、むしろ自分を戒めるためだったのかもしれない。

そして三度目の出会いでは、実力で劣る彼に従い、さらに唇を奪われた。

そつと触れた彼の胸板は厚く、指先だけでもその熱さが伝わってきた。

同級生の希望に満ちた瞳ではなく、深い悲しみの籠った瞳。全てを吸い込みそうで、一点の曇りもないそれは、見つめているだけで涙が零れた。

この数年間に彼に何があったのだろう。陰りのある彼の大きな背中に興味を持つのは、身近な子に無い雰囲気に惹かれての気の迷い。そして、キス。

たかが唇の触れ合い。

恋人同士の愛を確かめる行為。

あの場合の緊急行為。キスではない。

だが、欲望の具体化。

二回目のキスも彼からだが、受け入れたのは自分。

それは、最愛の人への裏切りなのかもしれない。

気の迷い。もしくは夏の夜の火遊び。

そんな便利な言葉を思いながら、フローラは窓を閉めた。

ラインハット城の一室、安楽椅子の背もたれに限界まで寄りかかりながら、ヘンリーは窓の外を見ていた。

東国の平定後も思った以上に難題が多かった。

神話の時代に遡れば、ボンモール、エンドール、ブランカはどこも勇者を迎えたことのある由緒正しき主権国家。それらが、たかが田舎町が群れを成して国となったラインハットごときに併呑されたのだ。特権階級や知識層がそう簡単に頷くはずもない。

そして、不満の中にはラインハット国民のものも少なからずある。それがなんなのか、ヘンリーは自身の行き過ぎたヒロイズムと、民衆の持つ現実感の隔たりのせいでもあると認識していた。

「さて、どうしたものか……」
何度目となるかわからない独り言に、急に椅子が後ろに傾き始める。

「わわ！」

そのまま倒れそうになったところで、何も無い空間がそれを押し留める。

「エマか……」

「ぼつつとして、変よ。最近の貴方……」

光が集まると、ピンクのショートヘアに長い耳、強気で切れ長な赤い瞳の女性が姿を見せた。

「うむ。そうだな……」

いつもなら、これまでなら彼女の言葉に何かしら反発を見せる彼なのだが、最近はこの調子。顎に手をあて、深く考え込むようにして無言になる。

「しゃきつとしてよ。貴方は世界の王者になれる人なのよ？ なのに、最近はずーんぜん。前みたいにぎらぎらした貴方はどこへ行ったのかしら？」

水差から冷えたハーブティを二人分注ぎ、エマは彼の対面に腰掛ける。

彼女の目的は、おおまかには「ヘンリーを世界の王にする」ということ。なのだが、最近のヘンリーには覇気が薄れているというか、一国の王すら務まらない雰囲気だった。

「もし……」

「え？」

「もし、俺を見限るのなら、それも不思議ではない。客観的に見なくとも、今の俺が腑抜けているのはよくわかるから……」

「ヘンリー？」

「まさかここまでとは思わなかった……」

「貴方、まさか……まだマリアのことを？」

沈痛そうに頭を振るヘンリーに、エマは気になっていたことを口にした。

「悔るな。マリアのことは確かに辛い、悔しいが、俺は一国の王だぞ？ たかが女の一人に袖にされた程度で沈むわけにはいかない。

俺の背中には百万の民の幸せがあるのだからな」

そつとハーブティを啜りながら、エマを眺めるヘンリー。

「怒らないでよ、ヘンリー……」

「いや、怒ってはいない。ただ意外だと思ってな。お前がそんなセシチなことを心配してくれるとは思ってなかった」

「意外？ あのねえ、私だって木の股から生まれたわけじゃないのよ？ そういう感情だってそれなりに……」

いいかけて真っ赤になるエマ。彼女の少女らしい仕草にヘンリーは笑いを堪えられず、噴出してしまふ。

「はっはっは……。まあなんだ……。お前の不安もわかる。今の俺は腑抜けだ。とても世界の王になる器ではない」

「なら……」

「東国の平定が思う以上に行き過ぎて万能になった気分だが、そうではなかった。王の立場になって初めてわかる。そして、今、俺が

どうすべきかもな」

マントを翻し、窓を開け放つヘンリー。それに驚いた鳥達が、彼の意気込みを祝福するかのように空へと飛び立つ。

自信満々に語るヘンリーならきつと次の手も考えているのだろう。かつての東国での戦でみせた物語がこれからも紡がれるかと思ひ、エマは自身の考え過ぎだろうと胸を撫で下ろす。彼はあの地獄から、自分の一人の力で抜け出せたのだからと……。

++

日曜の朝はルビス教会の鐘の音が響く。光の教団に圧されていた頃はラインハットにて鳴らされることはなかったが、ヘンリー凱旋と教団の排斥に伴い、復活した。

眠い目を擦り、朝の支度をしようとしてベッドを出たエマは、鏡の前ではさみを振るうヘンリーを見て驚愕の声を上げる。

彼は肩に届くさらさらの緑の髪を紺色に染め、さらにじよぎじよぎと切っていた。

「ちよ、ちよつと貴方！ 何しているの！」

扉の開く気配もなくそこにいた彼女に、ヘンリーは驚きの声を上げ、その拍子に前髪を斜めに切る。

「うお！ 何時からそこに居た？ まあ、良い。後ろの髪を揃えてくれ。見えない部分はどうも上手くできない」

「見えない部分以外も全部へたつびよ！ もう、せつかく整っていったのに……。それにこの安物の染髪料……。ただでさえ馬鹿なのに、もっと馬鹿になるわ！」

「なんだか教育ママのような言い方だな。まあいい。ついでにこの傷を隠してくれるか？」

ヘンリーは額に走る傷を指し、エマを見る。

「いいけど、いいの？」

「うむ。いろいろと不都合があるからな」

「不都合？」

エマの指先に光が集まり、それがヘンリーの額の傷にふれると、おしろいのように粉が撒かれ、それを目立たなくする。

「俺の顔の傷と髪の色は西国にも随分触れ回ってあるからな」

「西国って、まさかお忍びで旅行でもする気？」

「お忍び？ まさか……」

「そうよね……。せっかく王様になれたんですもの、いくらバカでも国を捨てるようなまねはしないわよね……」

「うむ。国ならリックとケインがしっかり運営してくれるだろう」

「は？ はあ！ ちょっと、貴方！」

出奔の宣言とも取れる言葉にエマの指先が彼の唇にちゅぽつと嵌る。

「うお、おい！ 何をする」

「何をつて、貴方バカじゃないの！ 貴方は世界の王になるんですよ？ なのに、どうして国を捨てるのよ！」

ぺつと指先を吐き出し、エマに向き直るヘンリー。彼は立ち上がり、腕を組んで鷹揚に応える。

「国を捨てるのではない。そうだな、むしろ俺が捨てられたといったほうが真実に近いな」

「それが意味わかんないのよ！ どうして？ 貴方は英雄でしょ？ それなのに、どうして捨てられるのよ！」

混乱と憤りで彼につつかかるエマ。ヘンリーもそれに怯む様子はなく、彼女にずいとあゆみより、たじろがせる。

「確かに俺は英雄だ。だが、それはあくまでも戦争があつたからこそのこと。今回の東国の戦争は広くはラインハット王家が引き金とされている。たとえ真実が光の教団の差し金にあらうとも、誰も真実を知ろうとはしない」

「けど、だからといって！」

突然の論戦に言葉の用意の無いエマは二の句が告げず、また人の噂がそうそう真実を好むとも思えない。

「それに、今必要なのは俺のような戦場上がりの王ではなく、リック王のようなものだ。彼なら国交の断絶しかねないグランバニアやオラクルベリー、西国とも交渉が出来る。はつきり言って俺に無い才能だ。それ以前に今の俺の風格には血が付きまとう。国民はそれを敏感に嗅ぎ取っているよ。またいつか戦争にならないかと、明日しかみえない視野の狭い日々を送っている」

「だからって……、だからって……、貴方は王を諦めるの？」

最後の譲れない部分、彼女の目的にして、彼に付きまとう理由の一つである、王という言葉。だがエマの瞳には憤りはなく、悲しそうに、祈るように彼を見つめていた。

「俺が何時王になることをあきらめたと言った？ 歴史上、王を罷免されながら、それに帰り着いた例などいくらでもある。俺が言っているのは、あくまでも『今』だ。今は俺を必要としていない。そして、俺もそれだけの器にない。だが、俺の勘だと、必ず俺を必要とする時代が来る。それもそう遠くないうちにな。それまでの間、俺は世界を見て回ろうと思う。強欲な西国の商人、雅な砂漠の貴族、痩せた大地の貧民も未開の地の伝説の民も全てをな」

問い詰めるはずが逆に追い詰められ、壁に足止めをさせられ、横に抜けようにも手首を取られる。

「残念だったな。昨日までなら自由になれたぞ？ お前は機会を逸したのだ」

「ん、ふふ……あはは……」

ヘンリーの冗談めいた言い方に、エマは堪えきれずに笑い出す。

けれど、それは彼の言葉に対してではない。

「心配して損したわ。貴方は王者になれる運命の人。なら、それを眺めさせてもらおうかしら？」

「うむ。それなんだが、そうもいかん。これからはお前にも協力してもらおうと思う」

「へえ？ 私に協力を求めるの？ これで二度目ね。じゃあ、観念して下僕になってもらおうかしら？」

挑戦的に、上からものを言うエマに、ヘンリーは錆びた鎖を取り出す。

「これに見覚えがあるか？」

「うっ……え？」

エマは鋭利な刃物で切断されたような切り口には見覚えが無い。あの時は急いでいてそれどころではなかったから。

「力でひしゃげたのならこんな切り口にはならないはずだ。実に不思議だ」

「そ、そうね……」

真空魔法で断じた鎖。あの日、ポートセルミの浜辺でヘンリーが調べていたのは、鎖の切断面。

「剣」

「ぐ……」

「不思議だなあ？ 実に不思議だ……、何故お前はそれを知っていたのだろうか？」

ふふんと鼻で笑うヘンリーは、彼女を壁へと追い詰める。

その猫が獲物を執拗にいたぶる尋問に、エマは降参とばかりにもる手を挙げる。

「はいはい、その通りよ。貴方の想像通り……。まったく、本当に抜け目の無い人だね……」

エマは水差しを手に取ると、乾いた唇を湿らせる。

「お前は俺とリヨカ、マリアを分断し、あたかも自分が助けたかのようにしたわけだ。ま、その裏で二人を監視……、いや見守っていたというべきか？」

「そんな優しいエルフに見えて？」

「ああ。少なくとも罪悪感はあるだろうか？ そのまま見捨てることができずに修道院まで送った。そうだろうか？」

「乗りかかった船というか、手を出してしまったもの。でも、そのつもりだったけど、リヨカは自分の力だけで修道院までたどり着いた。貴方と一緒に彼も運命の強い男だね。ま、その後が全然違うけ

ど……」

正直に告白しだすエマだが、はっと気づいてその後は口を濁す。

二人がオラクルベリーでどう過ごしていたのかは、監視こそしていないものの想像もできる。そして、それが彼にとって面白くない話でしかない。

「黙っていたのは悪かったけど……というか、貴方だって知っていて私を泳がせていたのでしょう？ お相子よ」

無茶な理屈でご立腹の彼女にヘンリーは苦笑い。

「お前の目的というのがおぼろげにしか見えてなくてな。ま、今回のことで大体わかった。お前は光の教団に敵意を抱いている。そうだろう？」

「ええ」

カップを握るエマの手が振るえ、置くときにかちやかちやと音を立てる。

「それは俺も同じだ。友の父を亡き者にし、国を退廃させ、さらには俺に辛酸を舐めさせた。いや、そもそもが奴らは人に非ず、魔族だろう。その目的はわからんが、我々にとって有益であるはずがない。となれば、衝突は時間の問題。それまでに敵の概要なり、協力する勢力を見ておきたい。協力してくれるな？」

朝の穏やかな空気にそぐわないヘンリーの静かな問いかけに、エマは頷く。

彼女はその赤い瞳を揺らしながら、口元を歪ませていた。

「何も言うな。それぐらいは察してやれる」

ヘンリーは彼女の頭をそっと抱き寄せると、暫く、エマの好きなようにさせていた。

幸い、日曜の朝は従者も昼頃までやってこないことになっていたのもあって……。

100 | 放浪王子（後書き）

ヘンリーもこれから出番があります。

再び名前を変え、変装したりといろいろ忙しい人です。

ヘンリーだけにヘンソーなわけですが、彼の新たな偽名の元ネタに
気づけるか？

小春3からの挑戦です。

ちなみにアルベルトの元ネタありません。適当です。

101 | ビアンカ

ビアンカがアルパカの街を出たのは、母の急逝と父の病が芳しくないためだ。宿を手放したお金でサラボナ地方にある山奥の村へ、父娘の二人、移り住んだ。

サラボナ地方、北方にある山奥の村。南から続く火山帯の影響で山奥の村には古くから温泉が湧いており、一時期は湯治のブームで賑わいだものだった。

普段は農耕を主とし、村人で物資を出し合い、それを外貨に変えて外から日用雑貨を仕入れ配給している。特に温泉での観光資源とツルトン親方の工芸が二本柱であった。

最近は新たな源泉が発見され、元々道が険しいこともあり、人足も遠のいていった。

そしてそれが本格的に崩れ始めたのは、村に奇病が流行ってからのこと。

土気色の斑点が腕や足、背中などいたるところに浮かびあがり、倦怠感と眩暈、吐き気に襲われた。その病はルビス教会ですら手を上げており、羅患した者は皆、病床のままにいた。

そのうちにおかしな噂が立った。

この病はあの父娘が原因ではないか？

ビアンカと父、ダンカンがこの村にやってきてから流行りだした病であり、恨む者を欲していた村人達にはよそ者であることも相成って、確証もなくそれが断定された。

日に強まる風中に、ビアンカの気持ちは沈んでいった。

そんなある日、村に救いの手が差し伸べられた。

光の教団を名乗る一味が村の病人を見て回り、薬と魔法による治療を施してくれたのだ。

一日目に上半身を起こすことができるようになり、二日目に眩暈が消える。三日目には田畑に立てる程度となり、老人を除いて皆快

方に至った。

教団は村に教会を建設し、入信者を募り始めた。

ルビス教会ですらサジを投げた病、それらを救ってくれた光の教団こそが真の神の加護を授かる者。

教養の薄い村人達は、現世利益にいと簡単に騙されていった……。

+ +

山奥の村の奥まった場所、かつて村を出た者が残した家屋があり、現在はルード一家が住んでいる。

流行り病による流言で一時は村八分の扱いを受けた父娘は、今もそれほど暮らしが改善したわけではない。

病の原因が究明されていないのもさることながら、村八分にしたことでの罪悪感を被らないためにも、それを正当化していた。

とはいえ少なからず良心を持つものもあり、物々交換に色をつけてくれる者もいる。

ピアンカはその小さな心遣いに、これまでの扱いを批難することもなく、恨み言を言うでもなく笑顔で応えていた。

まだ日の出していない早朝、ルード家の扉がきいと小さな音を出して開く。病床の父を起こさぬようにとの気遣いから、こっそりと家を出る女性のシルエツトが一つ。女性は家の直ぐ近くにある石碑に深く拝みこむ。

艶やかなブロンドの髪は肩まで届いたところで一つにまとめられており、ツルトン親方特製の髪留めでまとまっている。伝説的名工兄弟作の髪留めに負けていないその髪は、光沢、質感ともに良好で、サラボナの婦人からウィッグの材料にしたいと願われたほどだ。

緑のオーバーオールは若い女性に似つかわしくなく、野良仕事で焼けないようにと長袖を着込んでいる彼女だが、十八の誕生日を近

くに、女性的な身体つきに磨きがかかっていた。

それは、お尻周りがしゃがむときにデニムのズ巨大な魔獣で窮屈になるだけと、悩みの種。

そうでなくとも胸元に合うサイズの長袖がないので、常に第二ボタンまで開ける必要がある。

本人はそのつもりはなくとも、青年諸君は彼女の胸元を注視するものが多く、女性に限ってはそれを「誘っている」と陰口を叩くことも多い。

悩みは今も尽きない。

今日が昨日より良い日でありますように……、母さん、ルビス様と一緒に見守っていてね……。

急逝した母を思うピアノカ。父、ダンカンと比べてずっと元気なはずの母が、あっけなく逝ったときは、悲しみと同じくらい驚きが強かった。

墓石の下に眠るのは母の黒髪。自分とは似ても似つかないそれは、父も同じ。

母が亡くなった日のこと、父は彼女の出生について語ろうとした。病でこの先も希望のない自分とともに暮らす必要はないと考えた末のこと。けれど、彼女はそれを遮り、父の療養のためにこの村を選んだ。

今、彼女は毎日の野良仕事と、ツルトン親方のところでは刺繍の勉強をしており、生活ができる程度の収入がある。だが、最近の異常な天候のせい、畑の収穫が安定しない。そして、最近の村の出来事で心無い仕打ちを受けたせい、父の病状も悪化した。

ピアノカはこれから冬が来るといって、自分の髪を撫でながら切ろうかと考え始めていた……。

ルビス教会の運営は寄付と村、街、国からの寄付に頼っている。

解毒や解呪、治療などは山奥の村のような安穏とした場所では需要もなく、最近では光の教団の構える支部が割合を占め、さらに教会を圧迫していった。

特に流行り病に匙を投げたことで、村の中でも大分意見が偏り始め、寄り合いのたびに不要論が出る。

ルビス教会の日曜礼拝に参加しているのはビアンカと元村長ぐらいで、それ以外は皆、光の教団員として活動しており、現村長のホセロ・マートンは、ルビス教会の撤退を口にしていた。そして、村人に教団への帰依を必須とし、それに違反するものは温泉使用、農地使用、配給に制限が課せられる。

寄り合いでは大した反対もなく、肅々と廃ルビス教会へと進んでいった。

++

その日、ビアンカが割り当てられていた田畑へと行くと、収穫間際であったはずの稲が根こそぎ刈り取られていた。

「なにこれ、酷い……」

呆然と立ち尽くすビアンカに、朝も早いというのに現村長のホセロと取り巻きがにやにやしながらやってくる。

「ルードさん。すまないが、ここは昨日から割り当てが変わったんだ。悪いけど、君は奥の奥に移ってくれないか？」

「だって、今年までの分は私が育てたんですよ？　なのに、収穫だけ奪うなんて酷いじゃないですか！」

「いやいや、しょうがないじゃないか。ルードさんが村の規則に従わないんだもの。それにもともと余所者のルードさん一家に田畑の

割り当てをしてあげたんです。それだけでも感謝していただかないと……」

ほっほと横柄な高笑いをする村長は、最近羽振りが良いらしく、質の良さそうな毛皮のコートを羽織っていた。ただ、その下に着るものが依然オーバーオールのため、センスが良いとはいえない。

「けど、何の通達もなしに……」

「それどころか疫病神だしね」

なおも食い下がるビアンカに、取り巻きの一人がいやらしい笑いを浮かべながら言う。

時期が重なっただけだというのに、一度張られたレツテルは訂正されず、今も彼女達を恨む村人はいた。

「とにかく、貴女も早く教団に帰依してください。私たちと共に光の道を歩むために」

これまでは「おら」が一人称だったはずのホセロは、取り巻き達を引きつれて去っていく。どうやらかなり待っていたらしく、薄着な取り巻きたちは身震いしながらそれについていった。

「なんで……だろ……」

ビアンカは肩を落とし、冬の訪れを教える風に前髪を揺らされ、そつと襟を立てた。

+ +

「早いね……、収穫じゃなかったのかい？」

「ええ……」

昼前に家に戻ってきたビアンカを、ダンカンは不思議そうに見つめていた。

収穫の日は普段よりかかるのが相場で、当然ながら荷物も多いはず。

「ゴメン、ちょっと予定より稲の生育が悪かったみたい。だから……」

……

「そうか……。それは残念だったね……」

ビアンカの陰りのある笑顔に、それ以上の説明をさせるのも苦労だろうと、ダンカンが話を遮る。

空になった食器を片付け、ダンカンは部屋へと戻ろうとする。

「お父さん、まだ……」

まだ鍋には粥が残っており、ほとんど食べていない様子なので、ビアンカは慌ててお代わりを用意しようとする。

「いいんだ。最近は食欲がなくてね。はは、あいつが寂しがってるかもしれないしな……」

「もう、お父さんがいなくなったら私が寂しいでしょ？」

消え入りそうな父の笑顔に、ビアンカはむっとしながら言う。けれど、父はお代わりを食べるつもりがないらしく、いつもより足早に部屋へと戻った。

「お父さん……」

それが彼の強がりなのは見てわかる。ただ、本来のあるはずの収穫がまったくなくなってしまったことは、ルード家にとって非常に辛いこと。ツルトン親方の奉公である程度の蓄えもあるが、ホセロの態度如何によってはそれも何時までもつか？ ビアンカはふうとため息を着いた。

++

「そうかい……。それは困ったなあ……」

いつもより早めに仕事にやってきたビアンカが暗い顔をしていたので、ツルトンは不思議に思い訳を聞いた。

村の光の教団化により、ルビス信徒や無信徒の立場が厳しくなっているのはツルトンも知っている。

それならば彼女も帰依をすれば良いのだが、彼女の母はルビス教徒であり、その墓石にもルビスの文言が記されている。もし彼女が光の教団に帰依するとなれば、ルビス教との一切の関わりを疎まれ、

場合によっては墓石の撤去まで求められる。

村人の中にも先祖の墓から墓石を取り除いた者や、墓を捨てる決意をしたものもいた。

だが、年老いて病床にあり、母の遺髪と共に墓に入りたいという父に勧めることもできず、彼女は悩んでいた。

「もし、俺にできることがあるなら……」

ホビット族の彼は、同族が旅で怪我をしたり、病、呪に倒れたときのためにルビス教会への寄付をしているが、特に信教はない。また、村で一番の収入があることや、外の世界に名声があるためか、彼に対してはホセロも頭が上がらない。

もともと遊んで暮らす一族でもないためか、倉庫には嵩張らないようにとまとめた金の延べ棒がいくつも転がっており、ルード一家を養う程度は痛くもない。

「うふふ、大丈夫ですよ、親方。少し愚痴を言いたかっただけだし……。それに、親方からのお給料もあるし、今年ぐらいなんとかなります」

そう言って機織を始めるピアンカに、ツルトンは低く唸る。

健気に振舞う彼女と、父親に対する病的な献身。一見美しい話に思えるが、それは人に倫理が有るから。

工芸的美術センスこそ持ち合わせているものの、合理的な生き物であるホビットのツルトンは、彼女に危ういものを感じていた。

+ +

夕方頃、家に戻ったピアンカは、室内に漂う異臭に気付く。

食べ物の腐った匂いでもなく、汚物の類でもない。

普段嗅ぎなれないはずのもので、瞬時に判断が出来なかった。

「父さん？」

ピアンカは父の部屋を叩き、そっとドアを開ける。

父はドアと逆のほうを向いて寝ているが、掛け布団に違和感があ

る。

「父さん？」

駆け寄り、間近でそれを見ると、カバーが剥がされていた。

「ああ、ビアンカかい？ うん……。すまんね。ちよっと眠っていたみたいで……」

「それはいいけど、カバーは？」

「ちよっと汚してしまっただけ。剥がしておいたんだ」

「そう」

嘔吐をしたのだるかと思うも、彼の口元には髭にこびり付く赤いものがあつた。

「父さん、もしかして吐血したの？」

「ん？ いや、これは……」

慌てて手で隠そうとするダンカンだが、その手には、洗いきれなかったらしい赤があり、爪の間にも痛々しく残っていた。

「お父さん、今教会の人を呼んでくるから！」

「ビアンカ、いいんだ……」

「よくない！ 絶対に良くないんだから！」

ビアンカは制止する父の声を振り切り、街のはずれにあるルビス教会を目指した。

教会の片付けをしていたロウラン・イナセは、血相を変えて飛び込んだ。来たピアノカに驚いた。

父が危ないという彼女に手を引かれ、老体に鞭を打ちながら何とか彼女の家へと辿り着き、酷くやせ衰えたダンカンに再び驚かされた。

触診、脈拍を測り、白目を見る。喉を見て、もう一度脈拍を調べ、二度頷く。

「うむ、ちよいと肺を患っておるな。吐血は気管支が傷ついているからじゃ。薬を出すから、栄養を取って安静にしていれば、暫くすれば治る」

「そうですか……良かった……」

「すみません。こんな時間に往診してもらいました……」

衣服を正し、深くお礼をするダンカンに、ロウランはニコリと首を振る。

「ああ、それじゃあピアノカさん、薬の説明もせんといかんから、そっちの部屋でな。ダンカン殿はしっかり寝ているんじゃないぞ？」

「はい……」

「さ、お父さん」

ダンカンは娘に促され、ベッドに横になる。

それを見守ったあと、ピアノカは隣の部屋で待つロウランを追った。

「すまんが、おそらくワシの手には負えそうにないの。さっきはあ言ったが、多分重度の肺炎じゃろう。それに栄養不足も重なっておるし、前に流行った原因不明のアレ、その予兆も出とる」

ロウランは渋い顔つきでそういうと、出されたお茶で喉の渴きを

潤す。

「肺炎だけならばなんとかなるが、ビアンカさんも知っていると思うが、あの病はワシらルビス教会の知識ではどうにもならんのじゃ。いかなる精霊の治療方法を試しても上手くいかない、本当に奇病なんじゃ」

「そんな、お父さんは……」

「うむ。おそらくはもう長くないだろう。ただ……」

「ただ？」

「光の教団に治療を求めれば、なんとかなるかもしれん」

「教団に？」

「うむ。ワシとてルビス教会神父としてそれを勧めるのはおかしいと思う。治療如何によつてはなんとかなるじやろうし、その、お主の母の事情は知っているが、生きている者の幸せこそ大事じゃろ？ 正直苦しい立場じゃが、ワシとて人の子。不幸を見守れるほど、宗教に殉じておらんのじゃよ」

「でも……」

もし父に教団への帰依を勧めるとして、納得するだろうか？ それは母との死後の時も別離を意味し、最悪墓石の撤去も命じられるかもしれない。

「父さんは……」

だが、所詮は死後の世界。死の淵に苦しみ抜いて終焉に意味があるのかといえば、それほど交渉な哲学者でもなく、せめて穏やかな老衰こそが望ましい。

ビアンカは言葉を飲み込み、深く頷く。

「すまんの。ワシももう直ぐこの村からお役ゴメンじゃし、肺炎の薬だけなら処方できる。気休め程度にしかできず、申し訳ないの……」

…

「いえ、いいんです……」

彼女の頷きにロウランは複雑な思いを抱きながら、生薬の処方をすると言い帰路についた。

ビアンカは暗くなる部屋で、明かりも付けず、しばしうなだれた後、家を出た……。

+ +

新村長の家は村の入り口にある比較的大きな屋敷。

かつてサラボナの富豪が使っていたところを安く譲ってもらったそうだ。

内装は品の良いシックな造りなのだが、ホセロが買い揃えたごてごてした調度品がところ狭しと置かれており、まるで物置のようにも見えた。

「旦那様は今お仕事で、暫くしたら来るように仰います。なので、待っていてくださいませ」

ビアンカが屋敷を訪れたとき、垢抜けない侍女が用法のおかしい丁寧語で居間へと案内すると、ボタンと音を立てて扉を閉める。

嫌われているのかも思ったが、ただの礼儀知らずなのだろう。

ビアンカは出された金ぴかのカップのお茶を見つめていた。

父には内緒でここへ来た。どうせ話したところで反対されるだろう。

必要なのはルビスの教えではなく、父を侵す病を治す手立て。それは教団にあり、村の有力者にして教団に口利きのできる彼以外にそれを頼める人はいない。

教団に帰依していない父を救って欲しい。かつてはそれを無償で行ったのだ。いま一度その奇跡に肖りたいビアンカは藁にもすがる思いでここへきた。

「ああ、よく来たね。ルードさん。いや、ビアンカさん……。して今日はどのような用で？ 畑の件ならもうお話しは済んでおりますので、あしからず」

頬を赤くさせ、ツンとした妙な匂いを漂わせながら、ホセロがやってくる。彼はこれまた質の良さそうなガウンを着ており、その隙

間から金の刺繍のされたおかしな寝巻きが見えた。

まだ夕食時であろう時間にも関わらず、もう就寝なのだろうかと訝りながら、ビアンカは立ち上がり礼をする。

「うむ、まあ座りなさい」

ホセロは彼女の態度に満足そうに鼻を鳴らし、どかっと腰を下ろし、じろじろと眺める。

農作業のときのようなオーバーオールではなく、街行きの服装だった。

深緑のワンピースは広く胸元が出るもので、サイズがやや小さいせいか、胸元を締め付けている。数ヶ月前まではそれほど気にならなかったのだが、まだ成長しているらしく、オレンジのスカーフを肩口から巻いて隠す。ブローチは前に一緒に仕事をしたドルトン親方からもらったもの。派手さはないが、品のよくまとまった格好だった。

「さて、それでは？ 一体なんの御用で？」

「はい、その父のことなんですが……」

「ええ、確か病に倒れているダンカンさんですね？ それが？」

「どうも流行り病に感染したらしく……」

「それは大変だ……。ですが……。貴女の父上は、ルビス信徒でしたね？ となると、教団の御力は……」

「それなんです！ どうか、父の病気を見てもらえませんか！ お願ひします……」

ビアンカはソファを降りると、床にひれ伏し土下座をする。

「ふふ、困りましたね。そうは言われなくても、教団の方はルビス教に相容れぬ教義の持ち主ですし、二君に仕えると言うのも変ですが、神様同士ケンカされても困りますからねえ……」

「ですが、前にこの村に病が訪れたとき、ルビス教徒である人も救われたではありませんか、どうか、私の父も……」

「それはそれ、これはこれ。今は大分事情が違いますし、そうですね……。お父上に教団に帰依する意思はないのですか？」

「父には話しておりません。ですが、きっと母のこともありますし、帰依はしないとします」

「困りましたね……。ならば……」

勿体つけるホセ口は、跪く彼女を……、特に丸みを帯びたお尻を見つめながら舌なめずりをする。

「ビアンカさんだけでも帰依なさいませんか？」

「私だけ……？ それで父を救ってくれるのですか？」

「ええ。貴女だけでも帰依なされば、あるいはそれもありがと……。そうですね、はい……」

「本当にそれだけで？」

「ええ……。教団もそれほど老人は必要としていませんし……。あ、いえ、失言でした。その、なんといいですか、古い先短い老人ほど頑固なものもありませんでしょうし、無理に帰依を勧めても無駄でしょう」

父の死を予期する言葉にビアンカは齒噛みする。けれど、ここで彼の機嫌を損ねてもいけないと、ぐっと耐える。

「ただ、ビアンカさんには特例を認めるわけですから、それなりの奉仕活動をお願いしますよ？ 教団の人も本来は他信徒の方との交流が禁止されておりますゆえ……」

「はい！ なんなりと……」

ビアンカは救いが差し伸べられたことに、感激の声を上げる。

涙を拭いながら彼を見るビアンカと、満足そうに笑うホセ口。口の端で舌なめずりをされたのは不快だが、父の治療の目処が立ったことに、それは瑣末なこと……。

「お世話になりました」

サラボナの街の入り口にあるアーチの下で、リヨカはベネットに深くお辞儀をしていた。

「うむ。こちらも色々力仕事を手伝ってもらって助かったわい。リヨカ君に旅がなければもうしばらく助手代理見習補佐をしてもらいたいのがな」

ほっほっほと笑うベネットにシドレーは「それってたんなる小間使いじゃ」と呟く。

フローラを見送ってから二週間、修行を続けていたリヨカはベネットの研究に必要なものを近くの海岸、草原や洞穴で採取していた。砂を数キロザルに入れて、特別な石や金を取り出す作業や、子供ほどもある岩を砕いて希少鉱物を取り出したり、独特な根っこを持つ不思議な植物を探したりと、様々だった。

その間に魔法の詠唱方法を学び、行きがかり上覚えてしまった天候の魔法についても師事を受けることができた。

最近は霧雨のようなモヤを放つ、天候の精霊による幻惑魔法マヌーサを覚えた。さらに強めることで、魔法を完全に遮断できる古代の魔法が使えるようだが、まだ暫く時間がかかりそうだった。

「ほな、いきましょか」

サラボナへ行くにあたってギルドでまたも仕事を請けてきたシドレーは、麻袋を二つガロンの背中に乗せ、リヨカと自分のたすきがけの鞆にも鉱物を詰めていた。

話によれば、サラボナの街で、コネが無くとも鉱物を高く買ってくれる奇妙な商人がいるそうだ。聞きかじった話を真に受けたシドレーは、リヨカが割った薪の売上をそれに全てつぎ込んだそうだ。

「うん。それではベネットさんに良い日が訪れますように……」

リヨカはかつて父がそうしたような挨拶を真似、ルラフェンを後

にした。

急ぐ旅にあらず。リヨカは軽い足取りで、ポートセルミ・サラボナ間の洞窟を目指した……。

* *

旅を始めてから二日後、サラボ山脈を抜けるための洞窟近くの休憩所へとたどり着いた一行。その宿では洞窟越えを前に、もしくは終えて一休みする旅の商人や一行で賑わいでいた。

「泊まれるかな？ 夜風が防げればベッドじゃなくてもいいんだけど……」

リヨカは受付に並ぶ人達を見て野宿を覚悟していた。

「なんや、これやつたら無理しても超えたらどうなんや？ 話し聞く分には歩いて数時間の直線じゃろ？」

「ん、どうだろう。ガロンは疲れてない？」

荷物をおろして丸くなっていたガロンは、たかが二日の野宿で疲れるはずもない。いくらリヨカとともに平穏な日々を暮らせど、根は地獄の殺し屋なのだ。

「シドレーは大丈夫？」

「俺は疲れたらガロンさんの背中に乗るから」

「たはは……。まあ、僕もそんなには疲れてないし……」

彼の後ろには大荷物を抱えた行商人が居り、さらにはうら若き女性とその従者がいる。

リヨカが列から抜けたところで彼らにベッドが回るわけでもないが、まだ余力のあることを踏まえ、宿を出ることにした。

「さて、今夜中に洞窟を抜けられるかな？」

「おう……」

シドレーはそれに頷き、ガロンに荷物を背負わせる。ガロンは欠伸をしながら、のそりと立ち上がり、二人のあとに続いた。

「ん？」

リヨカが出口を潜ろうとしたとき、青い髪の男性と肩をぶつけてしまう。

「あ、失礼しました」

「いや……こちらこそ」

男性はリヨカの顔をまじまじと見つめ、驚いた様子だったが、隣にいた赤い髪の女性に促され、受付の列に並ぶ。

「どしたん？ 知り合い？」

「いや、別に……」

「ふうん……けつたいなカップルやけどな……」

「そう？ 普通じゃない？」

「あ、いやそうじゃなくて……ま、ええか」

赤い髪の女性の後姿を見つめるシドレーは、言葉を飲み込み、パタパタと空へと飛び出した……。

サラボ山脈を潜る洞窟は、かつてポートセルミに現れた大怪獣が、サラボナへ向かう途中に山脈の岩盤を踏み碎いて出来た谷であった。それを東への道筋に利用するうちに、雨風により劣化を防ぐためにサラボナの民が新たに屋根を構えた。

ようするに人工の洞窟で、現在はポートセルミとサラボナを結ぶ大動脈となっている。

かつてポートセルミに恐怖を撒き散らした大怪獣も、足跡がそんなふうに使われるとは想つてもいなかったであろう。

薄暗くなる頃にはドラキーやリントブルムがねぐらに利用することもあるが、魔物と人間が衝突することも少ない安全な道であった。

道なりに進むリヨカ一行。明かりは洞窟脇に枯れ捨てられていた枝を束ねた即席の松明。あまり火の付きがよくないので、シドレーがたまに火を吹きかけていた。

「おもつたよりへっちゃらだな」

「そうだね。魔物も静かだし」

彼らを怖がるように避けるドラキーや、シンとするリントブルム。リヨカ達も徒に彼らを刺激せず、ずんずん進む。

固い岩盤が強い圧力でしっかりと固められているおかげで歩きやすく、中腹と書かれた看板まであつという間であった。

「な、ちよつと早いけど飯にしようか？」

「うん。こちら辺は広いし、邪魔にならないかな？」

「こんな時間に通るやつなんておらんやろ？ 居ても山賊か俺らみたいなアホぐらいやて」

「あはは……」

アホな一行は休憩の準備を始める。脂身の塩漬けを鉄板の枠に三切れ乗せ、シドレーの炎で軽くあぶる。溶け出した脂を固く焼かれ

たパンにしみこませ、脂身を乗せて二人分にする。シドレーはそれを受け取ると、「贅沢はいえんわな」と食べていた。

リヨカはガロンには骨付き肉の干物を与えてふと思う。魔物、特に分類は魔獣とされるガロンは獰猛な動物と同じく肉食である。対して翼竜であるシドレーは自分と同じものを食べることを。不思議といえは不思議であり、一方で雀も雑食であることを思い、そういうものかと頷いてしまう。

「どつたの？」

そんな思いが顔に出たのか、シドレーは不思議そうに聞いてくる。「あ、いや、別に……。ね、君ってなんでも食べるんだなって思ってた……」

「ん？ ああ、そうやなあ……。ま、マッドプラントの蔦だけは食べたくないけどな」

「へえ、どうして？」

「あれを食べると暫く笑いが止まらなくなって困るんや。前にお前と別れたとき、空腹のあまりちよいと拝借してな……」

「はは、それはそれは……」

マッドプラントは植物の魔物であり、葉音がけらけらと笑い声のように聞こえるのが特徴だ。似た植物の魔物には甘い実をつけるデビルプラントが居り、そちらは果実を狙ってやってきたモノを捕食するというもの。たまに市場にも出回り、高値で取引されている。

「ふう、食後に一杯お茶でも欲しいんやけど、洞窟やししゃーないな」

「うん」

やはり不思議なのは、お茶も飲むこと。

動物や魔物にもお酒を好むモノは多い。特に猿や人型で乱暴な魔物はアルコールを好む傾向にある。

また、魔物の中にもお茶や煙草などの嗜好品を口にするものは居る。けれどそれは精霊の好むものを習慣付けることで魔法効果を高めることが目的であり、「好きだから」というのはごく稀である。

しかし、目の前のシドレーは、そのような高尚な存在とも荒くれモノとも思えず、リヨカと同年代ぐらいの青年の嗜好。時にお酒を飲み、お茶を飲み、食べ物に注文をつける。魔物や動物というのは、ちよつと違う感じだった。

「どつたの？」

「いや、そういえばサラボナのほうのお茶は美味しいって聞いてたからさ……」

「そうだな。あっちのほうはやっぱり貴族が多いからな。ま、なんとかカンタ式ドリップ珈琲に比べたらそうでもないんじゃない？　コクというか、甘味が違うからな。香りの」

「へえ、シドレーは色々知ってるね」

「まな」

フンと鼻息を憤らして威張るシドレーだが、リヨカとしては彼が珈琲を飲むことに驚いていた。

「さて、行くか」

貧しい食事を終えたところで鞆を直すシドレー。リヨカも頷き立ち上がる。すると、

「ぐるる……」

低く唸りを上げるガロン。魔物だろうか？　来た道を睨み、威嚇をしていた。

「魔物かい？　ガロン……」

明かりが見えた。それも一つや二つではなく、集団で。

「人？　にしては……ぶっそうな……」

炎が反射して光が見えた。抜き身の槍の穂先だ。

「おいおい、物騒すぎやで……」

先頭に行くものが足を速める。続くものもソレに倣う。それはリヨカが彼らを視認したのをきっかけとしたものだ。

「な、なんだろう……」

荷物を取るリヨカは、彼らをやり過ぎすか、それとも先に行くか迷う。しかし、その逡巡の際に彼らはリヨカ達の居る中腹へとやっ

てくる。

「あ、あの……」

ローブ姿の一段はリョカ達を囲むようにすると、抜き身の獲物を控える様子もなく、包囲する。

「があああ!!」

そんな時、ガロンがローブ姿の一人に襲い掛かった。

「ガロン、ダメだ。人を襲っては!」

脳裏に浮かぶ過去の記憶。一度は同じ魔物使いと語り合うことで暗闇に光を見たが、もしここで人を襲うようでは、それは再び……。

「はあ!!」

「ごおおつと唸る炎。ローブ姿の一向に燃え盛る火炎を放つシドレ」。

「ちよつと君まで! 相手は人間……」

「いや、ちゃうで、こいつら人間やない。つか、ヤバイ類の奴らだ！」

シドレーはさらに氷の息を吐きかける。

奇襲を仕掛けるはずがカウンターにあったローブ姿の一行は一旦怯むも、倒れた味方を踏みながら槍を突き出してくる。

「なっ！」

リヨカは持っていた昆を地面に突き立てると、そのままひらりとジャンプしてそれをかわす。

リヨカの驚きは、彼らが自分達に刃を向けたこともさることながら、まだ動く味方を踏みつけながら攻撃に移ったこと。

「あ、貴方達は何を！ というか、味方を踏んでまで……」

リヨカの困惑というか怒りの声に、ローブ姿の一団は無表情を貫く。

「くっ！」

剣を振るってきた一人に、昆を二つ折りにして片方で受け止め、もう片方で頭を掠めるようにして威嚇する。その一人は怯む様子もなく、コメカミの辺りで昆を受け止める。

「え！？」

普通の人間、魔物でも頭部は急所が多い。そこを打たれて怯まないのは、むしろ怯めない状態である場合が多く、それはいわゆる……

「リビングゲデッド？」

ローブが風に揺れたときに見えたそいつの顔には、気がなかった。

「お前は鼻が悪いからわからないやろうけど、ガロンさんには臭くてたまらんとと思うで？ こいつらの死臭」

「ごおつと炎を吐くシドレー。燃えあがることで怯むわけではない

が、筋肉が硬くなることで動けなくなる。

「シドレーはわかるの？」

リヨカは遅いくるリビングゲッドの間接を強く打ち抜くことで歩けなくする。

「俺は無理」

この手の死霊的な存在を相手にするのは、普通の魔物と同じにしてはいけない。

死体に潜む悪質な存在をニフラムなどの魔法で退げないかぎり、何度倒してもきりが無い。

「そう。でもどうしてわかったの？」

「俺の中に眠る正義の血潮が教えてくれたのよん」

どちらかというときこい小悪党な彼に首を傾げつつ、振るわれる槍や剣を交わす。ここでされるがままに殺されるいわれもない。そして敵は元人に巣くう魔物。

「やあ！」

力任せになぎ払い、集団の足を止める。

一体ずつの力はしれたもの。けれど、休みなく向かってくる彼らには、さすがに体力を削られてしまうのは目に見えている。せめて彼らの目的がわかれば、対処のしようもあるのだが？

リヨカが後ずさりをし、荷物を置いたときのことだった。数人を除いてリビングゲッドが荷物へと向かいだす。

「え？」

突然のことに対応が遅れるリヨカ。剣を受身で防御しつつ、その成り行きを見る。

まさかリビングゲッドの目的はシドレーが買った鉱物なのだろうか？ そんなことを考えていたとき、荷物から例の剣が奪われる。

「テ、ンクウ……ケン……」

例の寒々しい力を放つ剣を掲げるローブ姿のリビングゲッドたち。「それは！」

パパスの残した剣こそが彼らの目的らしく、剣を抱えた一体がの

そのもと来た道を戻る。

「だめだ！ それは渡せない！」

リヨカは目の前の一体を蹴り飛ばし、立ちふさがる一体を蹴散らす。

「く、どけ！」

しかし、圧倒的物量と、倒れたリビンググデッドも抵抗を続けるせいで思うように進めない。

「それは父さんの！」

シドレーが追うも槍に突かれ上手くとべず、ガロンも痛みや怪我を恐れずスクラムを組む死体の壁に阻まれる。

「くそ……、それは……」

リヨカはそれでも抵抗を続ける。剣を持つ一体の歩はそれほど早くないが、リヨカが進むのはもつと遅い。ナメクジが牛の歩を眺めるかのような遅々として進めない状況に悔しさが募る。

「ふん、なにごとかと思えば、なんだこの群れは……」

来た道のほうから何かが走る。それは剣に撒きつき、力任せに奪い取る。

リビングゲッドは呻くような音を発しながら剣を追うが、白刃に八つ裂きにされる。

「これは貴様らのものではないだろうに。力づくで奪うとは感心せんな……」

明かりに照らされるのは、青い髪の男性で、さきほどリヨカが肩をぶつけた人だった。

「おいそこの。この死体共を振り払うぞ。この剣が目的とあれば、追ってくるだろう。ここは人の行く場所だ。死者はおとなしくガイアに抱かれて眠ってもらおう」

「あ、はい！」

リヨカは頷くと、彼の為に道を作ろうとリビングゲッドの群れを蹴散らす。

「よし、走るぞ！」

青い髪の男性は剣をリヨカに返すと、そのまま走る。

リヨカもガロンとシドレーを促し、その場を後にする。

なだらかな道のおかげと、あらかたなぎ倒したおかげか、追いつかる者はすぐに見えなくなった……。

洞窟を抜け出たところで、彼らを出迎えるのは欠け始めた月明かり。

肩で息をするリヨカと、ぺたりとへたり込む男性。リヨカほどは体力がないらしい。

「はあはあ……せいぜい……ふ、ふむ、なんとか……はあはあ……なつたようだな……」

「ええ、おかげで助かりました。あの、僕はリヨカ、リヨカ・ハイヴアニアと申します。大したお礼も出来ませんが……」

薬草と気付けクスリを取り出すリヨカだが、男性はそれを制す。

「いや、いい。俺はアイツらが嫌いなんでね……」

ニヒルに笑い格好つけようとする男性だが、まだ疲れているらしく、せいぜいと息が荒い。

「そういえば、あれは一体……」

「ああ、あのローブは光の教団のものだ。あの趣味の悪い紫は二度と忘れられない」

「光？ 光の教団……」

光の教団という言葉にリヨカの顔が陰しくなる。

かつて父を奪い、自分と親友を奴隷に落とし、さらには東の国に圧政を強いた黒幕。

気持ちの上では正面きつて叩きたいのだが、街に溶け込む彼らは一つの宗教として確立されている。どちらがお尋ね者になりかねないことを出来るほど、リヨカもバカではない。

「あ、あの、せめてお名前は……」

「名前？ 名前か……ツムじゃ格好悪いな……」
「バカ」

呆れた様子で呟く赤い髪の女性は、息もほとんど上がっていない。

「うむ、俺はインディだ。親しいヤツは俺をインディと呼ぶ」

「インディさんですか。ありがとございました……」

「初耳なんですけどね……」

親しいであろう赤い髪の女性は呟きながらそっぽを向く。こちら

はあまりリヨカに興味が無いらしく、視線を合わせることもない。
「それじゃあ俺は旅を急ぐ。また機会があったらどこかで会おう。
さらばだ、リヨカよ！」

たからかに別れの言葉を語るインディだが、まだ膝が笑っている
らしく、立てそうにない。

「……な、リヨカ……」

それを悟ったシドレーはそっとリヨカの袖を引っ張る。

「何？ シドレー」

「行ってあげなさい。それが礼儀や……」

「う、うん。それじゃあよい旅を……」

何度かお辞儀に振り返るリヨカ。しかしインディは暫く立ち上が
らず、せいぜいと息を切らしていた……。

++

リヨカの姿が見えなくなったところで、ようやく立ち上がったイ
ンディ。ふらふらするのを赤い髪の女性は支えてあげ、ついでに額
の汗を拭う。

悪戯な水の精霊が役割を終えると、青い髪は緑に代わり、赤い髪
はピンクへと変わる。そして特徴的な耳がショートヘアからはみ出
る。

「アルベルトの次はインディ？ 今度はどこのお話から持ってきた
の？ というかツム・ヘンソーはどうしたの？」

先の宿屋で記帳したときはそんな偽名を書いていた。けれど、新
たに思いついた偽名に満足しているらしいインディはにやりと笑う。
「ふふ、冒険野郎で鞭を使うといったらインディしかないだろう？

エマ、お前も俺を呼ぶときはインディと呼ぶがいい。親しいヤツ
は皆そう呼ぶ」

「はいはい、インディインディ……これで満足かしら？」

呆れた様子で呟く彼女だが、親しいヤツという言葉と、そう呼べ

とつ言葉に類がゆるくなる。それは放浪にある王子の知らないところ。

107 | インディ (後書き)

ジョーンズではありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1676x/>

彷徨いし者達

2012年1月6日16時51分発行